岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第484集

松山前（まつやまえ）遺跡発掘調査報告書

大船渡広田陸前高田線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

2006

岩手県大船渡地方振興局土木部
(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第484集

松山前遺跡発掘調査報告書　正誤表

頁	行	誤	正
例言	30	宇部保則	宇部則保
107	7	第71図	第72図
107	9	第71図	第72図
107	キャプション	第71図　遺構外出土遺物(3)	第72図　遺構外出土遺物(3)

松山前遺跡発掘調査報告書

大船渡広田陸前高田線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

航空写真　南から

航空写真　西から

調査区全景

ＳＩ04

ＳＩ04カマド

出土遺物

板状土製品（ＳＩ04出土）

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、大船渡広田陸前高田線緊急地方道路整備事業に関連して平成16年度に発掘調査された陸前高田市松山前遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査では、奈良時代の竪穴住居跡群が見つかったことから、当時の集落の一部であったことが明らかになりました。本県沿岸南部ではこれまでこの時期の調査例は少なく、地域の歴史に新たな一ページを書き加えることができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県大船渡地方振興局土木部、陸前高田市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成18年２月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長　　合　田　　武

例　　言

1　本報告書は岩手県陸前高田市小友町茗荷128-2～西ノ坊12-1ほかに所在する松山前遺跡発掘調査結果を収録したものである。

2　本遺跡の発掘調査は、大船渡広田陸前高田線緊急地方道路整備工事関連事業に伴い、岩手県教育委員会生涯学習文化課・岩手県大船渡地方振興局土木部の協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(以下埋文センターと略称)が記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。

3　今回の発掘調査による成果は平成16年度の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第469集「平成16年度発掘調査報告書」・現地説明会(平成16年８月28日)にて公表している。上記の刊行物との違いがある場合は、本書が優先する。

4　岩手県遺跡登録台帳番号と調査時の遺跡略号は、以下のとおりである。

遺跡登録台帳番号……ＮＦ68－2270　　遺跡略号……ＭＹＭ－04

5　野外の調査期間・調査面積と調査担当者は、以下のとおりである。

調査期間　平成16年４月13日～９月３日　　調査面積　6,640㎡

担当者　　島原弘征・菅野　梢

6　調査の室内整理期間と整理担当者は、以下のとおりである。

整理期間　平成16年11月１日～平成17年３月31日　担当者　島原弘征

平成17年１月４日～３月31日　　担当者　菅野　梢

7　本報告書の原稿執筆はⅠを岩手県大船渡地方振興局土木部、Ⅵを分析担当者、他を島原が行った。編集は島原が行った。

8　座標原点の測量および空中写真撮影は、次の機関に委託した。

座標原点の測量……中井測量設計

空中写真……東邦航空㈱

9　自然科学関連の分析鑑定は、次の機関に委託した。

石質鑑定……花崗岩研究会

炭化材同定……岩手県木炭協会

種子同定・樹種同定……パリノ・サーヴェイ

炭化材同定……古環境研究所

10　本報告書の作成にあたり、次の方々ならびに機関からご指導とご協力をいただいた。(敬称略・順不同)

浅田智晴、宇部保則、太田代一彦、葛城和穂、工藤雅樹、熊谷賢、小針大志、佐藤敏幸、佐藤正彦、佐藤良和、新海和広、鈴木琢也、高橋誠明、丹治篤嘉、遠野いずみ、陸前高田市教育委員会

11　野外調査では、陸前高田市の作業員27名にご協力をいただいた。

室内整理作業は、当埋文センター期限付職員２名で行った。

12　土層観察の土色は、『新版標準土色帳』(小山正忠・竹原秀雄：1992)によった。

13　本報告書で使用した地形図は、国土地理院発行のものであり、図中に図幅名と縮尺を記している。

14　本遺跡から出土の遺物および調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管・管理している。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 1

1　遺跡の位置と立地 …… 1

2　周辺の遺跡 …… 6

Ⅲ　調査の概要と整理方法 …… 8

1　調査経過 …… 8

2　野外調査の方法 …… 9

3　整理経過 …… 10

4　室内整理の方法 …… 11

Ⅳ　基本層序 …… 12

Ⅴ　検出遺構と出土遺物 …… 14

1　概　　要 …… 14

2　古代の遺構 …… 14

3　近世の遺構 …… 36

4　その他の遺構 …… 56

5　遺構外出土遺物 …… 94

Ⅵ　自然科学分析 …… 115

1　松山前遺跡における樹種同定 …… 115

2　松山前遺跡における種実同定 …… 116

3　松山前遺跡における種実・樹種同定 …… 118

Ⅶ　ま　と　め …… 125

1　奈良時代の遺構 …… 125

2　近世の遺構 …… 126

3　その他の遺構 …… 126

4　縄文時代の遺物 …… 127

5　奈良時代の遺物 …… 127

6　近世の遺物 …… 130

7　ま　と　め …… 131

報告書抄録

図版目次

第１図　岩手県全図 …… 2
第２図　遺跡の位置図 …… 3
第３図　周辺の地形と調査範囲 …… 4
第４図　地形分類図 …… 5
第５図　周辺の遺跡分布図 …… 6
第６図　遺構配置図 …… 12
第７図　基本土層柱状図 …… 13
第８図　ＳＩ01竪穴住居跡（１） …… 14
第９図　ＳＩ01竪穴住居跡（２） …… 15
第10図　ＳＩ01竪穴住居跡出土遺物 …… 16
第11図　ＳＩ02竪穴住居跡（１） …… 17
第12図　ＳＩ02竪穴住居跡（２） …… 18
第13図　ＳＩ02竪穴住居跡出土遺物 …… 19
第14図　ＳＩ03竪穴住居跡、出土遺物 …… 20
第15図　ＳＩ04竪穴住居跡（１） …… 22
第16図　ＳＩ04竪穴住居跡（２） …… 23
第17図　ＳＩ04竪穴住居跡出土遺物（１） …… 24
第18図　ＳＩ04竪穴住居跡出土遺物（２） ……25
第19図　ＳＩ06Ａ・Ｂ（１）竪穴住居跡 …… 27
第20図　ＳＩ06Ａ竪穴住居跡出土遺物 …… 28
第21図　ＳＩ06Ｂ竪穴住居跡（２）、出土遺物 …… 30
第22図　ＳＩ07竪穴住居跡、出土遺物 …… 31
第23図　ＳＩ10竪穴住居跡 …… 32
第24図　ＳＮ01炉跡、出土遺物 …… 33
第25図　近世墓遺構配置図（１） …… 34
第26図　近世墓遺構配置図（２） …… 35
第27図　ＳＫ29・49墓壙、出土遺物 …… 37
第28図　ＳＫ37墓壙、出土遺物 …… 38
第29図　ＳＫ38墓壙 …… 39
第30図　ＳＫ39墓壙、出土遺物 …… 40
第31図　ＳＫ40墓壙、出土遺物 …… 41
第32図　ＳＫ41・42・50墓壙（１） …… 43
第33図　ＳＫ41墓壙出土遺物（１） …… 44
第34図　ＳＫ41墓壙出土遺物（２） …… 45
第35図　ＳＫ42墓壙（２）、出土遺物 …… 46
第36図　ＳＫ43墓壙 …… 47
第37図　ＳＫ45墓壙、出土遺物 …… 49
第38図　ＳＫ47墓壙、出土遺物 …… 50
第39図　ＳＫ48Ａ・Ｂ墓壙（１）、出土遺物 …… 50
第40図　ＳＫ48Ｂ墓壙、出土遺物 …… 51
第41図　ＳＫ48Ｃ墓壙、出土遺物 …… 52
第42図　ＳＫ48Ｄ墓壙 …… 53
第43図　ＳＫ48Ｅ墓壙、出土遺物 …… 54
第44図　ＳＫ50墓壙、出土遺物 …… 56
第45図　ＳＫＩ01竪穴状遺構、出土遺物 …… 56
第46図　ＳＫＩ03Ａ・Ｂ竪穴状遺構・ＳＫ85、出土47物 …… 58
第47図　ＳＫＩ04竪穴状遺構、出土遺物 …… 60
第48図　ＳＫＩ11竪穴状遺構、出土遺物 …… 61
第49図　ＳＡ01～03柱穴列 …… 63
第50図　ＳＷ01・02炭窯、出土遺物 …… 64
第51図　ＳＫ01・02・05～07・09・10・12土坑 … 66
第52図　ＳＫ14・15・17・20・24・26～28・31土坑 …… 70
第53図　ＳＫ32・33・35・36Ａ・36Ｂ・46・53・54・56土坑 …… 76
第54図　ＳＫ61・63・69・70・72・76・80・81土坑78
第55図　ＳＫ82～84・86土坑、出土遺物 …… 81
第56図　溝跡・柱穴状土坑割付図（第57・59～68図） …… 87
第57図　ＳＤ48～50溝跡（１） …… 88
第58図　ＳＤ48～50溝跡（２） …… 89
第59図　柱穴状土坑（１） …… 92
第60図　柱穴状土坑（２） …… 93
第61図　柱穴状土坑（３） …… 94
第62図　ＳＤ36溝跡・柱穴状土坑（４） …… 95
第63図　柱穴状土坑（５） …… 96
第64図　ＳＤ43～45溝跡・柱穴状土坑（６） …… 97
第65図　ＳＤ07・08・13・15・18・19・23溝跡、柱穴状土坑（７） …… 98
第66図　柱穴状土坑（８） …… 99
第67図　ＳＤ42溝跡・柱穴状土坑（９） …… 100
第68図　柱穴状土坑(10) …… 101
第69図　ＳＤ07・08・13・15・18・19・23・36・43～45溝跡 …… 102
第70図　ＳＤ43溝跡・遺構外出土遺物（１） …… 105
第71図　遺構外出土遺物（２） …… 106
第72図　遺構外出土遺物（３） …… 107

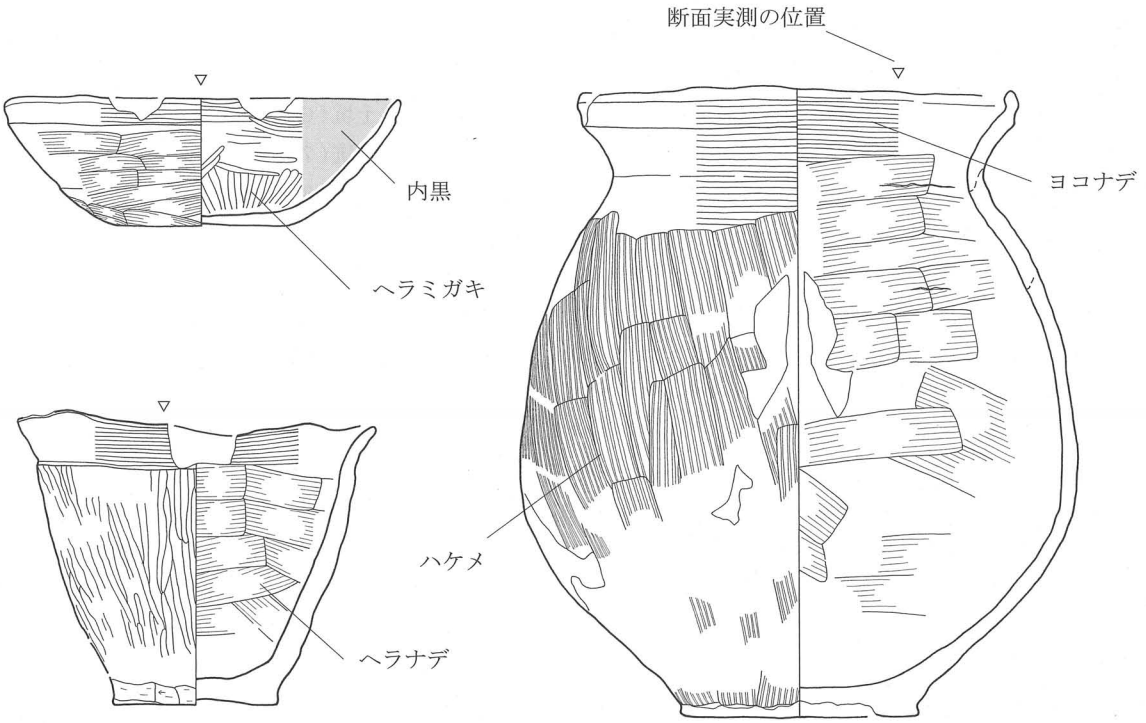
写真図版目次

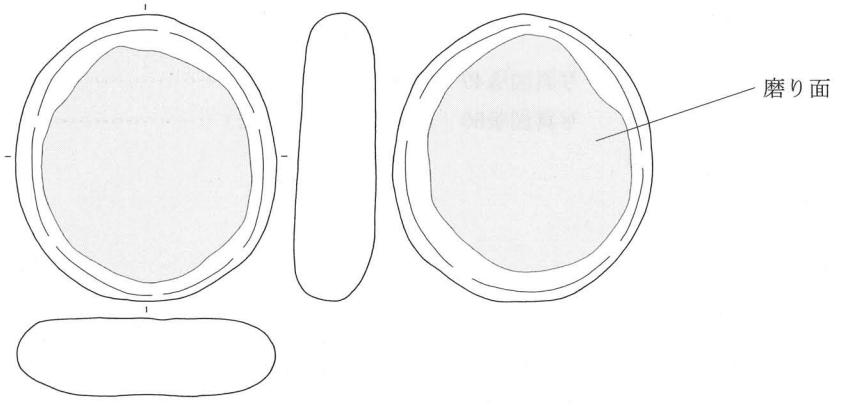
写真図版１　航空写真 …… 134
写真図版２　調査区全景・遠景、調査前風景 …… 135
写真図版３　ＳＩ01竪穴住居跡（１） …… 136
写真図版４　ＳＩ01竪穴住居跡（２） …… 137
写真図版５　ＳＩ02竪穴住居跡（１） …… 138
写真図版６　ＳＩ02（２）・03竪穴住居跡 …… 139
写真図版７　ＳＩ04竪穴住居跡（１） …… 140
写真図版８　ＳＩ04竪穴住居跡（２） …… 141
写真図版９　ＳＩ06Ａ竪穴住居跡（１） …… 142
写真図版10　ＳＩ06Ａ竪穴住居跡（２） …… 143
写真図版11　ＳＩ06Ａ竪穴住居跡（３） …… 144
写真図版12　ＳＩ06Ｂ竪穴住居跡 …… 145
写真図版13　ＳＩ07・10竪穴住居跡 …… 146
写真図版14　ＳＮ01炉跡・墓壙（１） …… 147
写真図版15　墓壙（２） …… 148
写真図版16　墓壙（３） …… 149
写真図版17　墓壙（４） …… 150
写真図版18　墓壙（５） …… 151
写真図版19　墓壙（６） …… 152
写真図版20　墓壙（７） …… 153
写真図版21　ＳＫＩ01竪穴状遺構 …… 154
写真図版22　ＳＫＩ03Ａ竪穴状遺構 …… 155
写真図版23　ＳＫＩ03Ｂ竪穴状遺構 …… 156
写真図版24　ＳＫＩ04・11竪穴状遺構 …… 157
写真図版25　炭窯 …… 158
写真図版26　土坑（１） …… 159
写真図版27　土坑（２） …… 160
写真図版28　土坑（３） …… 161
写真図版29　土坑（４） …… 162
写真図版30　土坑（５） …… 163
写真図版31　土坑（６） …… 164
写真図版32　土坑（７） …… 165
写真図版33　土坑（８）・溝跡（１） …… 166
写真図版34　溝跡（２） …… 167
写真図版35　溝跡（３） …… 168
写真図版36　溝跡（４） …… 169
写真図版37　溝跡（５）・柱穴列 …… 170
写真図版38　溝跡（６） …… 171
写真図版39　溝跡（７） …… 172
写真図版40　現地説明会・作業風景 …… 173
写真図版41　ＳＩ01～03竪穴住居跡出土遺物 …… 174
写真図版42　ＳＩ04竪穴住居跡出土遺物 …… 175
写真図版43　ＳＩ06Ａ・Ｂ・07竪穴住居跡・
ＳＮ01炉跡出土遺物 …… 176
写真図版44　ＳＫ29・37～40墓壙出土遺物 …… 177
写真図版45　ＳＫ41墓壙（１）出土遺物 …… 178
写真図版46　ＳＫ41(2)・42・45(1)墓壙出土遺物 179
写真図版47　ＳＫ43・45（１）・47・48Ａ・48Ｂ
墓壙出土遺物 …… 180
写真図版48　ＳＫ48Ｃ・48Ｄ・48Ｅ・50墓壙・
竪穴状遺構・土坑出土遺物 …… 181
写真図版49　遺構外出土遺物（１） …… 182
写真図版50　遺構外出土遺物（２） …… 183

表　目　次

第１表　柱穴状土坑観察表 …… 103
第２表　土器観察表 …… 108
第３表　金属製品観察表 …… 110
第４表　銭貨観察表 …… 110
第５表　陶磁器観察表 …… 114
第６表　石器観察表 …… 114
第７表　土製品観察表 …… 114
第８表　木製品観察表 …… 114

凡　　例





焼土　　炭化物範囲　　貼床範囲　　骨細片範囲

Ⅰ　調査に至る経緯

小友地区道路改良事業は、陸前高田市米崎町の国道45号から同市小友町字雲南地内の主要地方道大船広田陸前高田線へ接続する道路改良工事であり、既存の県道は、幅員狭小のため車両のすれ違いが困難なこと、歩道も未設置のため歩行者等の通行に危険なこと、及び高潮等に対する防災機能、広田半島など観光やレクリエーション施設へのアクセス向上のため、平成９年度から着手している事業（Ｈ９～地方特定道路整備事業、H11緊急地方道路整備事業）である。

これにかかる埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、岩手県大船渡地方振興局と岩手県教育委員会との間で協議がなされた。協議の経緯は、平成10年８月６日付「大地土第881号」により岩手県大船渡地方振興局長から岩手県教育委員会文化課長あて当該道路計画にかかる遺跡の分布調査について依頼があり、岩手県教育委員会は平成10年９月18日に分布調査を実施し、当該計画地内には５箇所の埋蔵文化財包蔵地が存在することが判明した。

岩手県教育委員会では、岩手県大船渡地方振興局からの試掘調査依頼を受け、平成13年２月16日、同11月16～17日、同12月13日に４箇所について試掘調査を実施したが、３箇所については発掘調査が必要である旨回答し協議を重ねた。この遺跡については、陸前高田市教育委員会において平成14年度及び平成15年度発掘調査実施中である。

その後、平成15年６月26日付「大地土第475号」により岩手県大船渡地方振興局長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あて当該遺跡の試掘調査について依頼があり、岩手県教育委員会は平成15年７月30日に試掘調査を実施し、平成15年８月12日付「教生第809号」により岩手県大船渡地方振興局に対して松山前遺跡の発掘調査が必要である旨回答し協議を重ねた。

その結果、松山前遺跡の調査は岩手県文化振興事業団の受託事業とした。

（岩手県大船渡地方振興局土木部）

Ⅱ　遺跡の位置と環境

１　遺跡の位置と立地

（１）遺跡の位置

松山前遺跡は、岩手県陸前高田市小友町茗荷128-2～西ノ坊12-1ほかに所在する。ＪＲ大船渡線小友駅の北西約２ｋｍ、北緯39度00分02～03秒、東経141度41分22～25秒付近に位置する。

本遺跡の所在する陸前高田市は岩手県の東南部、太平洋岸の最南端に位置する。北は気仙郡住田町、東は大船渡市、南は東磐井郡室根村（現一関市）、宮城県気仙沼市、宮城県本吉郡唐桑町、西は東磐井郡大東町（現一関市）と接している。面積は232.23平方km、人口は25,726人である（平成17年６月末現在）。市域の大半が山地で、北上山地の縁辺部が海岸まで広がっている。市の北には氷上山（874.7m）、東には箱根山（446.8m）、南東には仁田山（254m）、西は小坪山（679.4m）、天南山（456.9m）が広がり市域を囲んでいる。

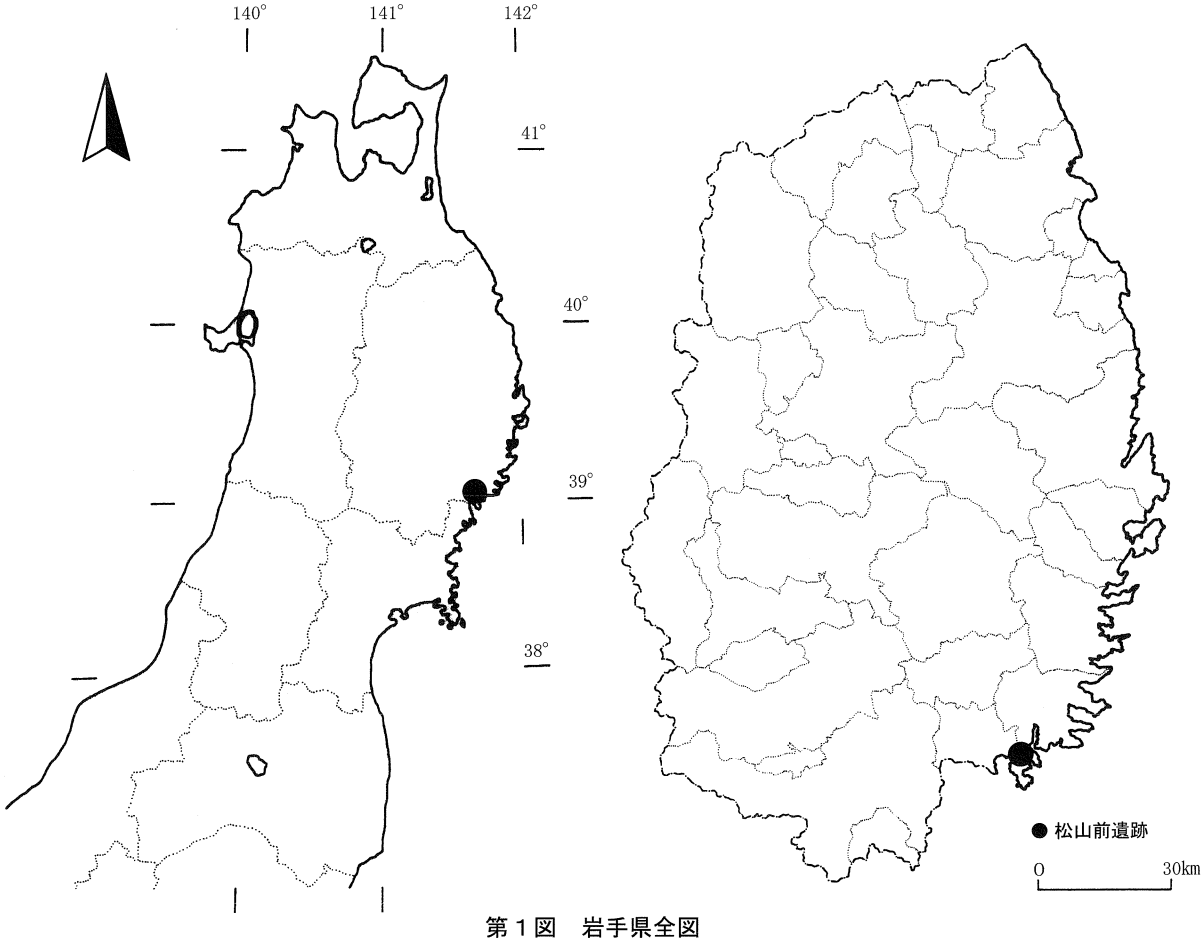
遺跡が所在する陸前高田市小友町は市の東側に位置する。北は箱根山、東は門之浜湾、南は広田半島、西は小友浦が広がり、箱根山と広田半島に挟まされた氾濫平野上にある。その箱根山から南東側には傾斜の緩やかな丘陵が広がっており、遺跡はその丘陵縁辺部に位置する。標高は61～71m前後を

測る。調査前現況は畑で、約20年前までは果樹園として土地利用されていた。

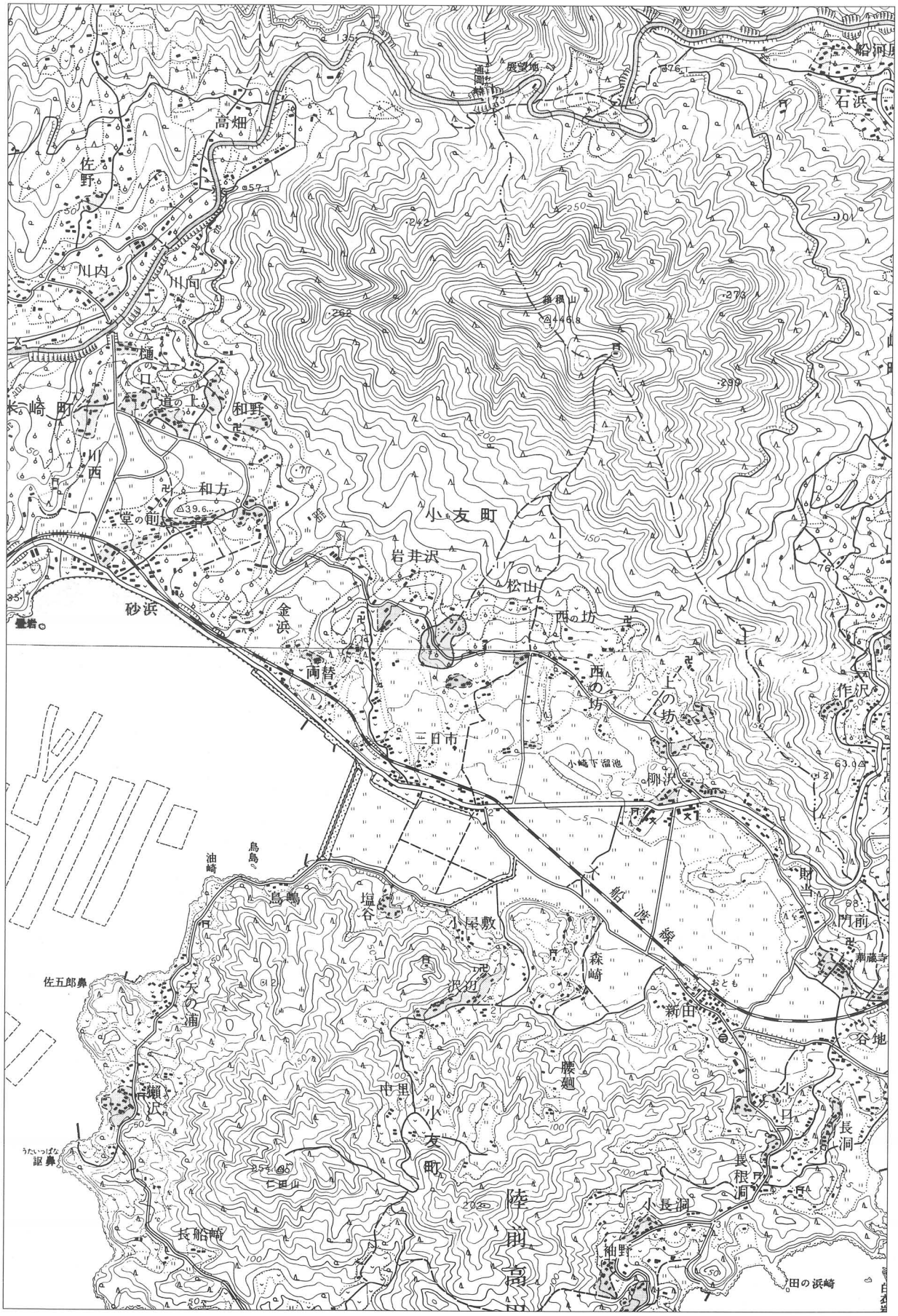
（2）地形・地質

四国四県に匹敵する広大な面積を有する岩手県は、東に北上山地、西に奥羽脊梁山脈が南北に延びている。高清水山(1,013.9m)に端を発する気仙川は南西流しながら桧山川、火の土川、大股川をあわせて住田町の中心部を南流し、陸前高田市域に入る。陸前高田市内では氷上山(874.7m)の西側山麓縁辺部を南流し、広田湾にて太平洋に注ぐ。気仙川は延長44km、流域面積520平方kmの二級河川である。

北上山地東側は河川の流路が短い上に、その河川が中・古生代の堅い硬岩を浸食している影響で、排出される土砂量が少なく、一般的に平野の発達は不良である。それでも比較的流域面積の大きい川が流れる久慈・宮古・大船渡・広田・気仙沼湾には小規模な沖積平野が発達する。比較的湾の幅が広い広田湾（幅約3.5km）の奥には陸前高田平野が発達し、現在市街地となっている。その陸前高田平野の北側には氷上山がある。山頂から南側に広がる斜面は標高200m以上では急峻であるが、200m以下では傾斜が緩くなっている。氷上山の南東尾根沿いには箱根山(446.8m)がある。その南側斜面には傾斜の緩やかな丘陵が広がる。南西側丘陵の一部(米崎町付近)は海岸線まで到達し、米ヶ崎を形成している。南東側丘陵は小友町付近の氾濫平野と接している。市の(南)東部、箱根山の南側に位置する広田半島は太平洋に対して南東に突出している。半島の付け根には西から小友浦が入り込み、標高10m以下の氾濫平野が広がる。縄文海進期にはこの部分は海となり広田半島は島となっていたものと思われる。

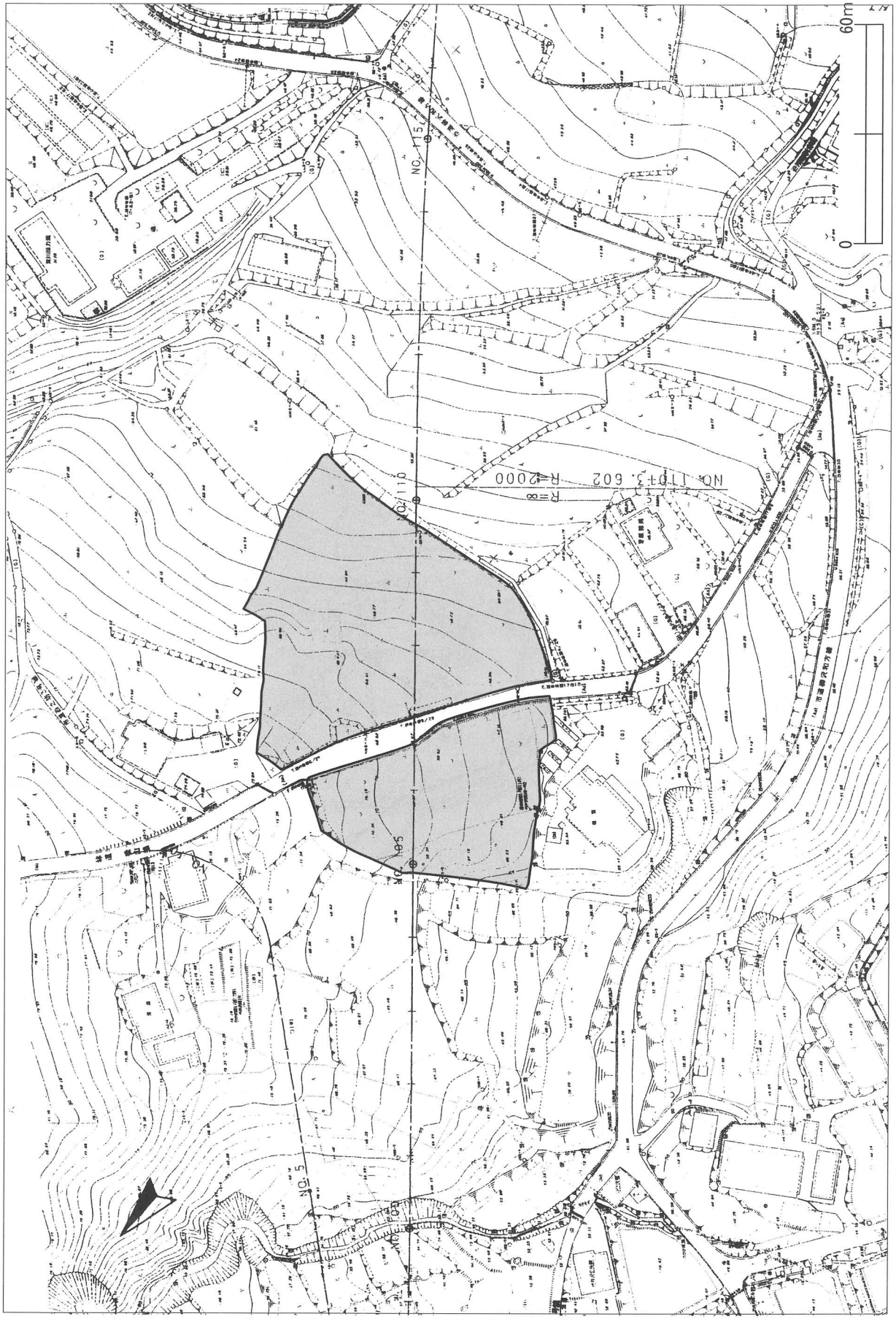


第１図　岩手県全図

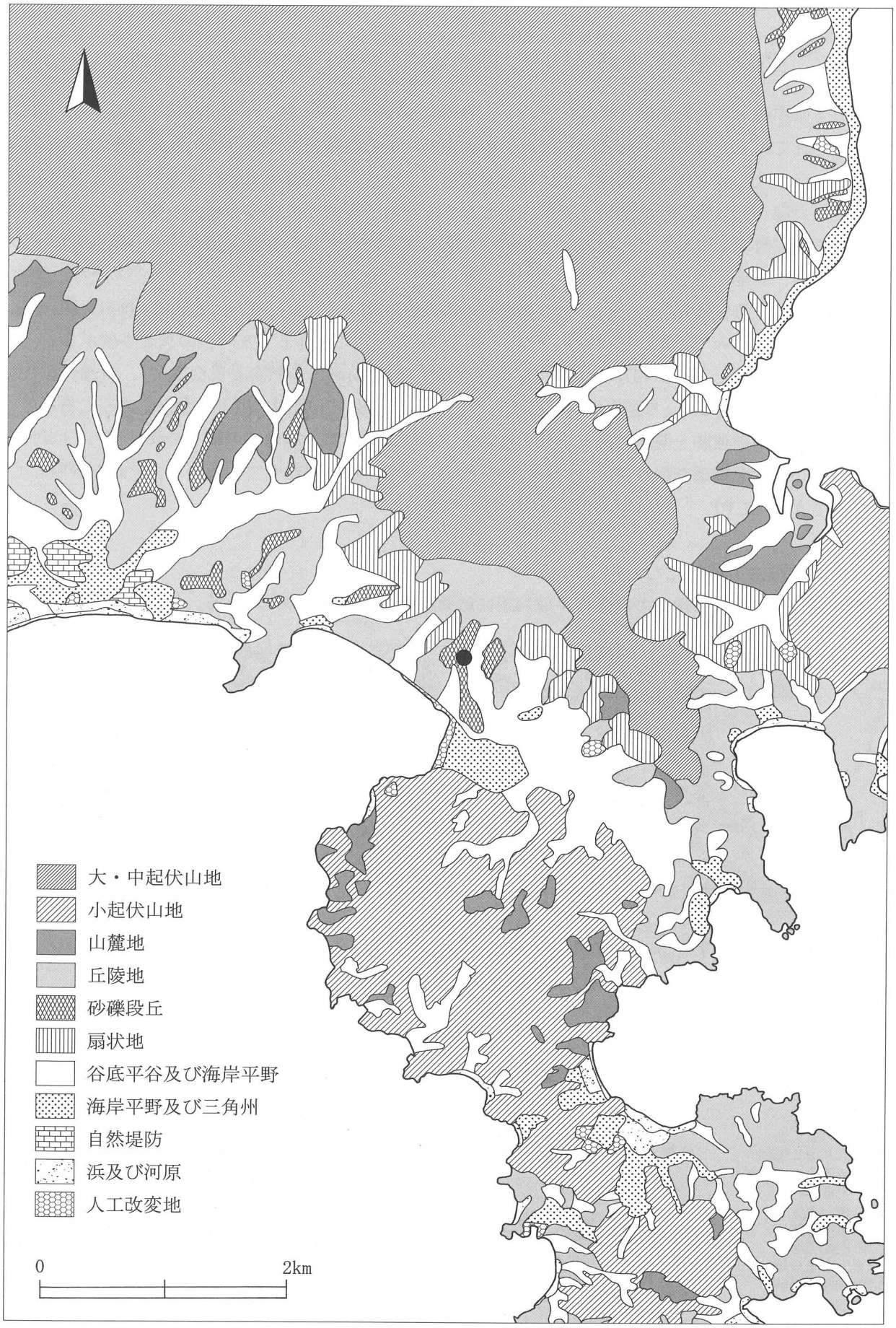


25,000分の１　大船渡・陸前高田

第２図　遺跡の位置図



第３図　周辺の地形と調査範囲


大・中起伏山地
小起伏山地
山麓地
丘陵地
砂礫段丘
扇状地
谷底平谷及び海岸平野
海岸平野及び三角州
自然堤防
浜及び河原
人工改変地
0
2km

第４図　地形分類図

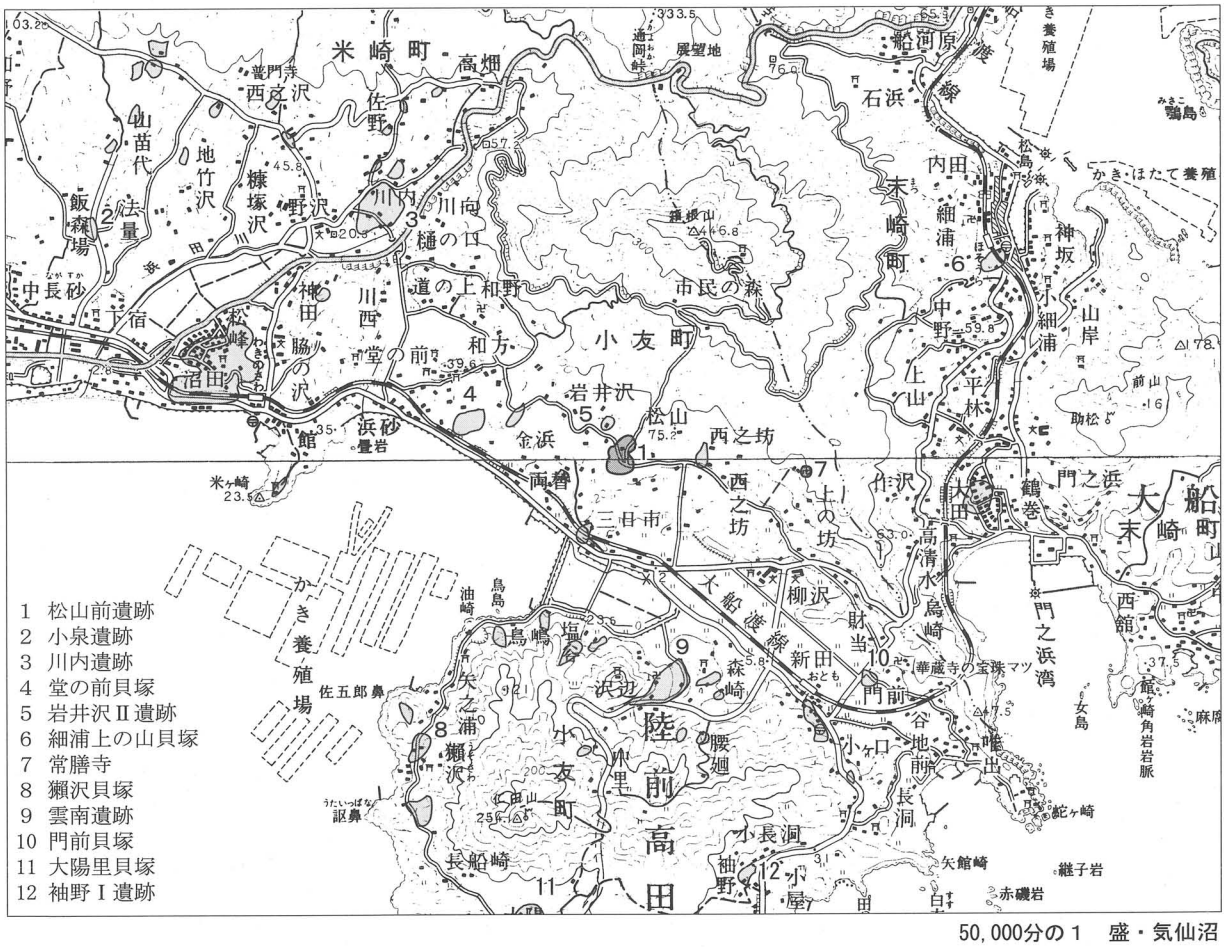
2　周辺の遺跡

『岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧』によると、陸前高田市内で255ヶ所、大船渡市内で180ヶ所の遺跡が確認されている。このうち第５図には過去に調査例のある遺跡と古代～近世の遺跡を中心に陸前高田市46ヶ所、大船渡市２ヶ所図示した。陸前高田市内では古くから貝塚が分布していることが知られていた。貝塚からは良好な状態で人骨が出土したことから、研究者に注目され、人種・民俗学的観点からの調査が数多く行われた。戦後は分布調査や個人住宅建設にかかる緊急調査や学術調査等が行われているが、立地・地形による影響からか縄文期の遺跡の調査が多く行われている。そのため、陸前高田市内における古代(奈良・平安時代)の遺跡の本調査は相川Ⅰ、友沼Ⅲ、貝畑貝塚、牧田貝塚、小泉遺跡等を数えるのみで、多いとはいえない。しかも、報告を見てみると平安時代の調査事例が多く、奈良時代は少ない。わずかに相川Ⅰ遺跡で竪穴住居跡１棟(陸前高田市教育委員会2002)、貝畑貝塚(佐藤正彦氏のご教示による)で竪穴住居跡２棟を検出、小泉遺跡で土師器の出土を数えるのみである。

ここでは松山前遺跡と関連のある古代の遺跡を中心に概観する。本地域の縄文時代については村上拓が『牧田貝塚発掘調査報告書』(岩埋文1996)内で貝塚を中心に概説しているので、それを参照していただきたい(註１)。

(１) 過去の調査について

松山前遺跡における過去の調査は平成14年に試掘調査が行われたのみである。その際に竪穴住居跡



第５図　周辺の遺跡分布図

が検出され、土師器が出土している。今回の調査は遺跡範囲の中央より北側に位置している。調査前現況は畑で。地元の古老の話によると約20年前までは果樹園として土地利用されていたという。なお、元地権者である山田定雄氏が昭和40年代後半ごろ撮影された調査区付近の航空写真を所蔵していた。ご厚意により見せていただいたが、確かに調査区付近はリンゴないしモモの木が整然と並ぶ果樹園が広がっていた。

なお、『陸前高田市史』において松山前遺跡は、同一遺跡コードは松山Ⅱ遺跡、今回の調査区付近は松山Ⅰ遺跡と記載とされている。ちなみに松山Ⅰ遺跡の詳細は調査が行われていないため不明。松山Ⅱ遺跡は土師器が出土していることから、古代の集落跡として認識されていた。

（2）周辺の遺跡

本地区の古代の主な遺跡としては小泉（1）、岩井沢Ⅱ（5）遺跡、図中に含まれていないが相川Ⅰ遺跡、貝畑貝塚、友沼Ⅲ遺跡等がある。

＜小泉遺跡＞陸前高田市（以下省略）高田町字法量地内に位置する。平成11年に調査が行われた。調査面積は42㎡と小規模であったため、遺構は確認されなかったが、土器がコンテナ19箱分出土している。「厨」字を含む墨書土器が112点が出土した。「厨」字を含む墨書土器は官衙・寺院遺跡に多く出土することから、気仙郡衙が小泉遺跡周辺に存在する可能性が指摘されている（註２）。

＜貝畑貝塚＞高田町字中和野地内に位置する。昭和58・59、平成９年に発掘調査が行われた。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡24棟、古代の竪穴住居跡10棟、住居状遺構１棟、配石２基、ピット約130基、炉跡２基、工房跡２基が検出された。古代の竪穴住居跡の時期は大部分が平安期（９世紀後半～10世紀前半）であるが、２棟ほど奈良時代の住居がある（法政大学国際日本学研究センター2003）。

＜友沼Ⅲ遺跡＞横田町字友沼地内、氾濫原に面した傾斜地に位置する。平成元年に発掘調査が行われ、古代（９世紀後半～10世紀前半）の竪穴住居跡６棟が検出された（陸前高田市教育委員会1990）。

＜相川Ⅰ遺跡＞竹駒町字相川地内、氷上山から南西に延びる尾根の先端部に位置する。古代（奈良時代）の竪穴住居１棟、縄文期の竪穴住居跡１棟、同竪穴状を２棟、時期不明の掘立柱建物跡１棟、土坑９基が検出された（陸前高田市教育委員会2002）。

＜牧田貝塚＞気仙町字牧田地内に位置する。縄文時代前期の竪穴住居跡３棟、土坑20基が検出された。岩手県内では資料の少ない大木３～５式の土器がまとまって出土していることで知られているが、平安期の土師器が遺構外から出土している（岩手埋文1996）。

＜館貝塚＞米崎町字館、米ヶ崎の先端部に位置する。古代の貝塚？。製塩土器片が出土している（陸前高田市1994）。

＜大陽里遺跡＞広田町大陽里地内、仁田山から南西に延びる丘陵上に位置する。古代の製塩遺跡か？（陸前高田市1994）。

＜岩井沢Ⅱ遺跡＞小友町字岩井沢地内、箱根山から南に広がる丘陵上に位置する。松山前遺跡から西に約600ｍの離れた場所に位置する。昭和36年、台地の開墾中に蕨手刀が出土した。なお、市内ではこのほかに三本松遺跡、愛宕下遺跡から蕨手刀が各１振ずつ出土している。工事中の出土のものが多く出土状況の詳細は不明である（陸前高田市1994）。

＜釘の子遺跡＞横田町字釘の子地内に位置する。昭和57年に発掘調査が行われた。報告書が未刊行のため、詳細は不明であるが、『陸前高田市史』第二巻（陸前高田市1994）によると縄文・平安期の竪穴住居跡が各１棟検出された。

註

1．岩手埋文1996を参照。なお、縄文・中世・近世期の調査された遺跡では、山崎遺跡(陸前高田市教委1984)、門前貝塚(陸前高田市教委1992)、獺沢貝塚(陸前高田市教委1977)、中沢浜貝塚(陸前高田市教委2000ほか)、大陽台貝塚(陸前高田市教委1979)、袖野Ⅰ遺跡(陸前高田市1994)、川内遺跡(岩埋文1984)、打越遺跡・東角地遺跡・古館跡(岩埋文1988)、寺前Ⅰ・Ⅱ遺跡、片地家館(岩埋文1989)がある。前述した各遺跡の概要は『陸前高田市史』第二巻に佐藤正彦が概説している(陸前高田市1994)。

2．詳細は法政大学国際日本学サテライトシンポジウム『海の蝦夷－小泉遺跡が語りかけるもの－』資料集を参照していただきたい。資料集は『法政大学国際日本学研究所研究報告』第４集　(法政大学国際日本学研究センター2003)に収録されている。

参考文献（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターを岩埋文と表記する）

陸前高田市1994『陸前高田市史』第二巻

陸前高田市教育委員会1977『獺沢貝塚』

同　1979『大陽台貝塚』

同　1984『山崎遺跡発掘調査報告書』

同　1990『友沼Ⅲ遺跡』陸前高田市文化財調査報告第14集

同　1992『門前貝塚』陸前高田市文化財調査報告第16集

同　1999『堂の前貝塚発掘調査報告書』陸前高田市文化財調査報告第21集

同　2000『陸前高田市内遺跡発掘調査報告書－中沢浜貝塚－』陸前高田市文化財調査報告第22集

同　2002『相川Ⅰ遺跡発掘調査報告書』陸前高田市文化財調査報告第24集

同　2003『陸前高田市小友町雲南遺跡』第30回岩手考古学会研究大会資料

岩埋文1984『川内遺跡発掘調査報告書』岩手県立埋蔵文化財センター埋蔵文化財調査報告書第82集

1988『打越・東角地遺跡・古館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第131集

1989『寺前Ⅰ・Ⅱ遺跡・片地家館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第140集

1996『牧田貝塚遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第241集

春日真実2003「越後出土の円筒形土製品・板状土製品について」『蜃気楼』富山大学考古学研究室論集

八戸市教育委員会2001『酒美平遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第88集

福島県教育委員会2002『阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告２』福島県文化財調査報告書第401集

矢本町教育委員会2001『赤井遺跡Ⅰ』矢本町文化財調査報告書第14集

Ⅲ　調査の概要と整理方法

1　調　査　経　過

野外調査は４月13日から９月３日まで行った。４月13日午後に機材を搬入し担当者２名、作業員25名で作業を開始。４月19日重機を投入し表土除去と遺構検出を開始する(土捨の関係でＢ区から)。５月６日Ｂ区の表土除去が終了する。引き続きＡ区の表土除去を行う。５月12日ようやくＢ区の検出が終了する。５月13日Ａ区の検出を開始したが、同日には重機の表土除去は終了した。５月17日基準点設置。５月下旬に検出が終了し遺構数が確定したので、Ｂ区より精査を開始する。６月３日当埋文センター合田理事長の現地視察が行われる。６月23日北上市埋文職員30名現場見学。７月中旬になるとＢ区は竪穴住居と近世墓を除き精査が終了したのでＡ区の精査を開始する。８月28日現地説明会開催(参加者182名)。９月１日に終了確認が行われる。９月３日に機材を搬出して撤収した。

2　野外調査の方法

(1) グリッドの設定

調査区のグリッドは調査区域ならびに遺跡範囲全体をカバーできるように世界座標に合わせて、座

標設定及びグリッド設定を行うこととした。

遺跡の北西隅に位置するＸ＝-110100.000、Ｙ＝73800.000を起点とし、50×50ｍの大グリッドを設定し、さらに大グリッドの一辺を10等分して５×５ｍの小グリッドを設定した。大グリッドは西から東に向かってＡ、Ｂ、Ｃとアルファベットの大文字と、北から南に向かってⅠ、Ⅱ、Ⅲとローマ数字を組み合わせてＩＡのように表記した。小グリッドは西から東にａ～ｊとアルファベット小文字と、北から南に１～10とアラビア数字を組み合わせで１ａのように表記した。作業を行う際にはグリッドの北西隅の杭にグリッド名を記入し、ＩＡ１ａグリッドというような表記をした。

調査区が複数にかつ広範にわたっていたので、基準点は業者に委託して打設した。調査時にはその基準点を使用して調査区の区割り・グリッド設定を行った。各地区で使用した基準点の座標値は下の通りである。

	Ｘ（世界測地系）	Ｙ（世界測地系）	Ｘ（日本測地系）	Ｙ（日本測地系）	標　高（ｍ）	グリッド名
基１	－110250.000	73854.000	－110558.1314	74154.8346	67.466	－
基２	－110250.000	73890.000	－110558.1313	74190.8349	67.805	ⅣＢ１ｉ
補１	－110250.000	73870.000	－110558.1316	74170.8348	66.550	ⅣＢ１ｅ
補２	－110280.000	73890.000	－110588.1319	74190.8357	64.988	ⅣＢ７ｉ
補３	－110250.000	73930.000	－110558.1315	74230.8354	65.876	ⅣＣ１ｇ

（２）調査区割について

今回の調査区は、林道松山線が調査区中央を縦断しているため、調査区が大きく東西２箇所に分かれていたことから、林道松山線より西側をＡ区（西側調査区）、東側をＢ区（東側調査区）と命名し調査を行うこととした。

（３）粗掘と精査

＜粗堀＞平成15年度に行われた試掘結果をもとに、試掘トレンチの再掘ならびに新規に試掘トレンチを設定し、その土層断面を観察し層序の把握に努めた。その結果、遺物がほとんど見られないⅠ・Ⅱ層に関しては重機を使用して除去した。

＜精査＞基本的には竪穴住居・竪穴状遺構は４分法、土坑等は２分法による埋土の観察を行った。堀・溝に関しては適時ベルトを設定し埋土の観察を行った。竪穴住居跡はカマド以外の部分の完掘を優先し、カマド検出状況写真を撮影後にカマド・床面施設（柱穴等）の精査を行っている。カマドは基本的に燃焼部は４分法、煙道部は２分法による埋土の観察を行った。なお、焼失住居であるＳＩ06Ａに関しては、炭化材検出状況の記録を行ってから床面を検出した。また、作業の都合上柱穴状土坑に関しては埋土の堆積状況をパターン化し、各類の代表のみ断面記録を取った。

＜遺物の取り上げ＞遺構内に関しては遺構名と埋土層位を、遺構外に関してはグリッド名を袋に記入してから取り上げた。ただし、グリッド設定以前の遺構外出土遺物は調査区内のおおよその位置を袋に記入してから取り上げた。出土地点を実測した遺物に関しては取り上げ番号を記入した。

＜種実・樹種同定について＞竪穴住居跡内カマド燃焼部直上の５㎝の土を全て採取している。採取した土は乾燥後、水を入れたバケツに入れてかき混ぜ、浮いてきた炭化物・種実を茶こしフルイと１・３・５㎜メッシュを使用して採取した。この採取した炭化物・種実の樹種を特定し、食性・生業復元のための基礎資料蓄積を目的として分析を依頼した。その結果はⅥを参照していただきたい。

（4）遺構名について

遺構種類の略号はＳＡ：柱穴列、ＳＤ：溝跡、ＳＩ：竪穴住居跡、ＳＫ：土坑・墓壙、ＳＫＩ：竪穴状遺構、ＳＮ：炉跡である。この遺構略号に２桁の数字を組み合わせて遺構名とした。

＜重複遺構の遺構名について＞精査の過程で住居等の拡幅・建て替え等で重複が確認された場合には新しい方からＡ、Ｂ、Ｃと登録することにした。

＜遺構名の変更＞精査の過程ならびに室内整理段階で遺構の性格が当初想定していたものと異なった場合には、掲載時に遺構名を変更している。そのため、遺構名を変更した遺構の旧番号や、登録抹消した遺構の番号を詰めなかったので、連番になってない。

（5）遺構の記録

遺構の記録は実測図と写真撮影により、図面で表現できない所はデジタルカメラとフィールドカードに記録している。

＜図面＞遺構の平面形や焼土範囲、遺物出土状況を記録した平面図、ならびに遺構の断面形・埋土の堆積状況を記録した断面図を作成した。エレベーション図は必要に応じて作成している。作図は簡易遣り方測量を準用し、精査途中で随時作図記録している。縮尺は基本的には１/20を原則としたが、カマド・焼土などの微細図が必要な図面に関しては１/10で、遺構が長大なために遣り方測量をするには困難な堀・溝に関しては周辺地形が平坦な所は平板測量で、斜面部は光波トランシットを利用した平板測量で１/50で作図した。

＜写真＞遺構検出状況、埋土堆積状況、遺物出土状況、完掘状況といった具合に精査の各段階毎に必要に応じて撮影を行っている。フィルムは35㎜判のモノクロとリバーサル、モノクロに関しては６×７㎝版も使用している。また、状況に応じてデジタルカメラを使用してメモ的写真を撮影している。遺跡遠景と調査終了全景はセスナ機による空中撮影にて行った。

3　整　理　経　過

11月１日担当者１名(島原)、期限付職員１名で室内整理開始。当面は土器の洗い・注記・接合・復元を行う。同時に調査員が土器以外の遺物仕分けを行う。11月下旬には土器接合が終了。おおよその登録点数が確定したので、実測を開始する。１月４日、別の遺跡の整理をしていた担当者１名(菅野)、期限付職員１名が合流し、担当者２名・期限付職員２名体制となる。１月下旬、実測が終了。遺構トレースを開始する。２月下旬、遺構トレースが終了。遺物トレースを開始する。３月中旬、トレースが終了。図版組を開始した。３月31日に整理作業の一切が終了した。

4　室内整理の方法

図面点検・遺物の洗浄・写真整理は原則として現場で行うこととしたが、期間の後半は調査に追われ、一部は野外調査終了後に行っている。

（1）遺　構　図　面

遺構図面は点検後、第二原図を作成しトレースを行った。挿図中の縮尺は竪穴住居・竪穴状遺構・

掘立柱建物跡は1/60、カマドは1/20、土坑は1/40、堀・溝・柱穴状土坑の平面図は1/100、竪穴住居の床面施設・堀・溝・柱穴状土坑の断面図は1/40を原則とした。任意縮尺に関しては脇にスケールをつけている。

（2）遺　　物

遺物は洗浄後、出土遺物の全てを点検し、遺構内外と遺物の種別毎に仕分けを行った。仕分け後、注記・接合・復元と作業をすすめ、実測・採拓が必要なものを選んで登録した。登録後は実測・トレース・写真撮影・図版作成と作業を進めた。実際の作業は調査員が仕事の計画と指示・点検を、作業員が実際の仕事を行うといった具合に分担している。

掲載基準

＜土器＞完形品と接合復元したものの中で器形がおおよそ分かるものは全て掲載した。遺構内から出土した遺物が少ない遺構の土器に関しては口縁部・底部破片を選択した。類似した器形を持つものに関しては床面・底面出土のものを優先して選択した。

＜石器＞点数が少ないこともあり、出土したもの全点を登録・掲載した。

＜石製品＞形状が分かるものを中心に登録・掲載した。カマドの芯材に用いた礫は遺物からの転用もしくは使用痕があるものを除き、石質鑑定用サンプルを抽出した後、現場で遺棄している。墓壙から出土した礫も同様である。

＜金属製品＞煙管・毛抜・鋏・銭貨、釘などがある。すべて近世遺物である。煙管・毛抜・鋏に関しては形状が分かるものを中心にできうる限り登録・掲載するように努めた。銭貨は全点登録したが、材質により掲載方法が若干異なる。銅銭と銭名が分かる鉄銭に関しては全点掲載し、銭名の分からない鉄銭に関してはサシは重量計測の後写真掲載、それ以外は重量計測のみ行った。釘は全点登録したが、形状が類似しているものが多く認められ、全点掲載する意味が無いと考え、本文中で出土地点毎の重量を示し、一部を写真掲載し対応することにした。

＜陶器・陶磁器＞所属時期が近世のものがほとんどである。接合・復元したもののうち器形がおおよそ分かるものと、器形・染付がある程度わかる破片資料は掲載した。

＜木製品＞大半が近世墓の棺材である。全点登録し、形状な良好なものを写真掲載した。一部は樹種同定を行った。

挿図中の縮尺

土器・陶器・陶磁器は1/3、鉄製品・金属製品・石器・石製品は1/2、銭貨は原寸を原則とした。これらの原則と異なる縮尺の図面には脇にスケールをつけた。

（3）写　　真

野外調査中に撮影した写真は、モノクロはネガアルバム、リバーサルはスライドファイルに撮影順に整理して台帳に記入した。

遺物は当埋文センターの写真技師が登録した遺物を35㎜判フィルムで撮影した。現像終了後、種別毎に整理を行った。

（4）凡　　例

本書で使用したスクリーントーンの種類は凡例に示したとおりである。また、土器実測図の上に記した▽は断面実測の位置を示したものである。

観察表中で使用している法量の推定値は（　）、残存値は［　］、計測値はcmで表示している。住居の床面積はプラニメーターで住居下場のラインを３回計測した値の平均値を示した。

調整技法の表現について

土器の調整を以下の基準で分類し、実測した。なお、分類の際には「細谷地遺跡第８次発掘調査報告書」（岩埋文2004）を参考にした。

ハケメ　　：不定方向で断続的な細かい条線をもつもの。
ヘラナデ　：不定方向で断続的な明瞭な条線を持たないもの。弱い・細かいハケメ。
ヘラケズリ：不定方向で断続的な砂粒の動きが認められるもの。
ヘラミガキ：断続的に光沢のある細い単位の筋。
ヨコナデ　：横方向の連続的な粘土の動き。

実際にはこの分類に当てはまらないものもあるが、それに関しては観察表中に詳細な観察結果を記載することで補うこととした。調整の実測範囲は内外面ともに中央から半分にとどめたものが多い。

Ⅳ　基　本　層　序

Ⅰ層　表土層（黒褐色土）

Ａ区北半の一部では上位面で礫の人為堆積を施し、平坦部を形成している。

Ⅰ´層　盛土層（黒色土）

Ⅱ層起源の人為堆積土。Ａ区の各地に見られる。

Ⅱ層　旧表土層（黒色）

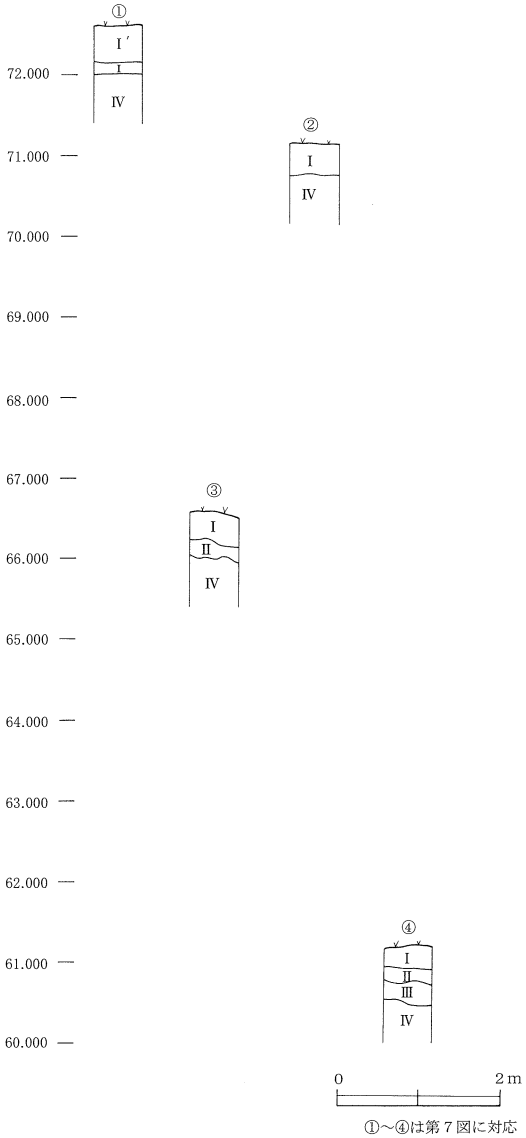
開拓以前の旧表土層。Ａ区南やＢ区南・東で部分的に確認。基本的には畑造成時の削平で消失。斜面上位から流れ込んだ遺物を包含。

Ⅲ層　自然堆積層（暗褐色土）

Ａ区南やＢ区南・東で部分的に確認。古代の遺構検出面。大半が畑造成時の削平で消失。

Ⅳ層　基盤層（褐色土）

部分的ににぶい黄褐色土粒を含み中にはφ１～５cm大のものもある。本層より上位層が畑造成時の削平で消失している。Ａ区北やＢ区北・中央・西などの遺構検出面。



①～④は第７図に対応

第６図　基本土層柱状図

Y=73,950
Y=73,900
Y=73,850
X=110,250
10m
(1/500)
近世墓群
(第25図)
SK46
SD45
SD44
SK32
SK33
SK31
SK104
SK26
SD43
SI04
SK35
SK24
SK27
SK28
SN01
SD36
SK20
SA02
SK86
SI02
SD23
SW01
SK17
SK15
SD17
SD18
SA01
SD15
SK85
SK103A・B
SA03
SK101
SK14
SD13
SK53
SK12
SK54
SD42
SI01
SK09
SK07
SK06
SK05
SK10
SD08
SI03
SD07
SK01
SK02
SW01
SK56
SD48
SK70
SK76
SI06A
SK72
SK61
SI06B
SK69
SD49
SD48
SD50
SK63
SK111
SI07
SK21
SK20
SI10
SK22
SK24
SK83
補1
補2
補3
基1
基2

第７図　遺構配置図

Ⅴ　検出遺構と出土遺物

1　概要

今回の調査では古代(奈良時代)の竪穴住居跡８棟、近世の墓壙18基、時期不明の竪穴状遺構５棟・柱穴列３列・炭窯２基・土坑39基・時期不明の溝跡15条・柱穴状土坑206個等を検出した。

検出された遺構の時期は奈良時代、近世、時期不明の３時期に分けられる。奈良時代はＡ・Ｂ区の標高64～71m付近、近世はＢ区中央付近、時期不明は調査区のほぼ全域に分布する様相を呈する。

本報告では、時期・遺構種別毎に記述を進める。遺物の記述に関しては出土量や出土地点等の記述にとどめ、詳細はⅦでまとめて述べる。

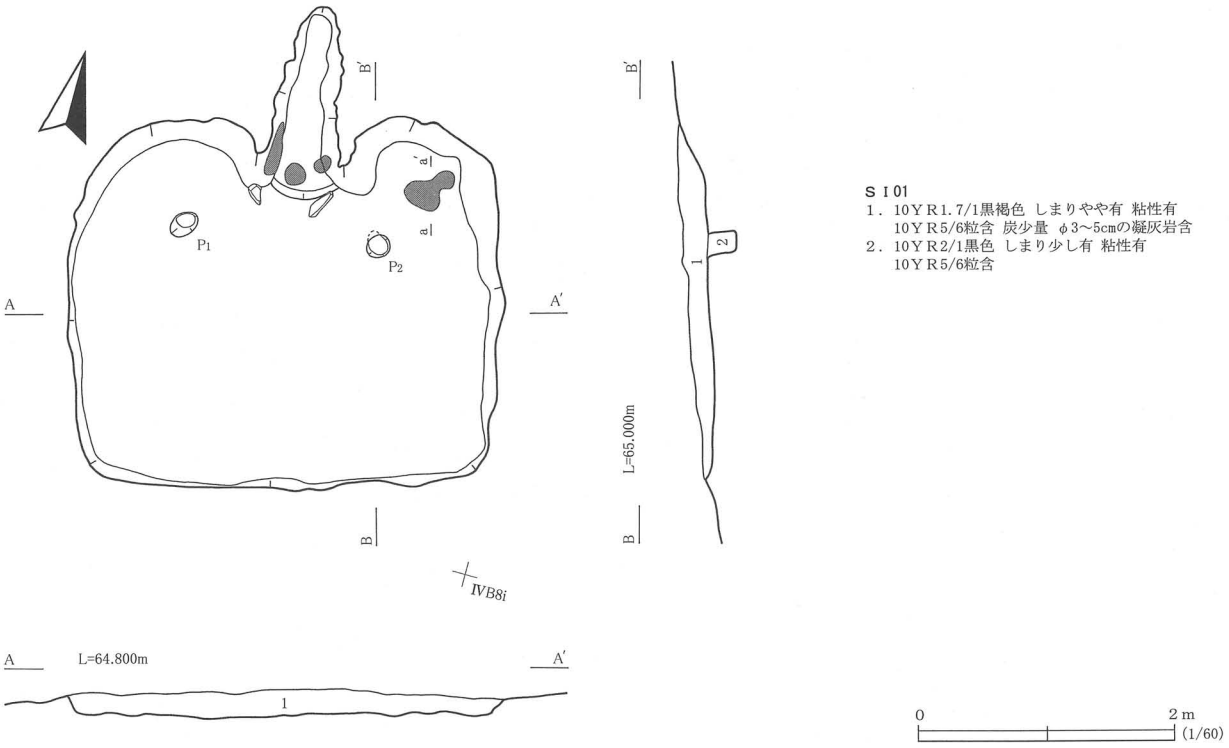
2　古代の遺構

(1) 竪穴住居跡

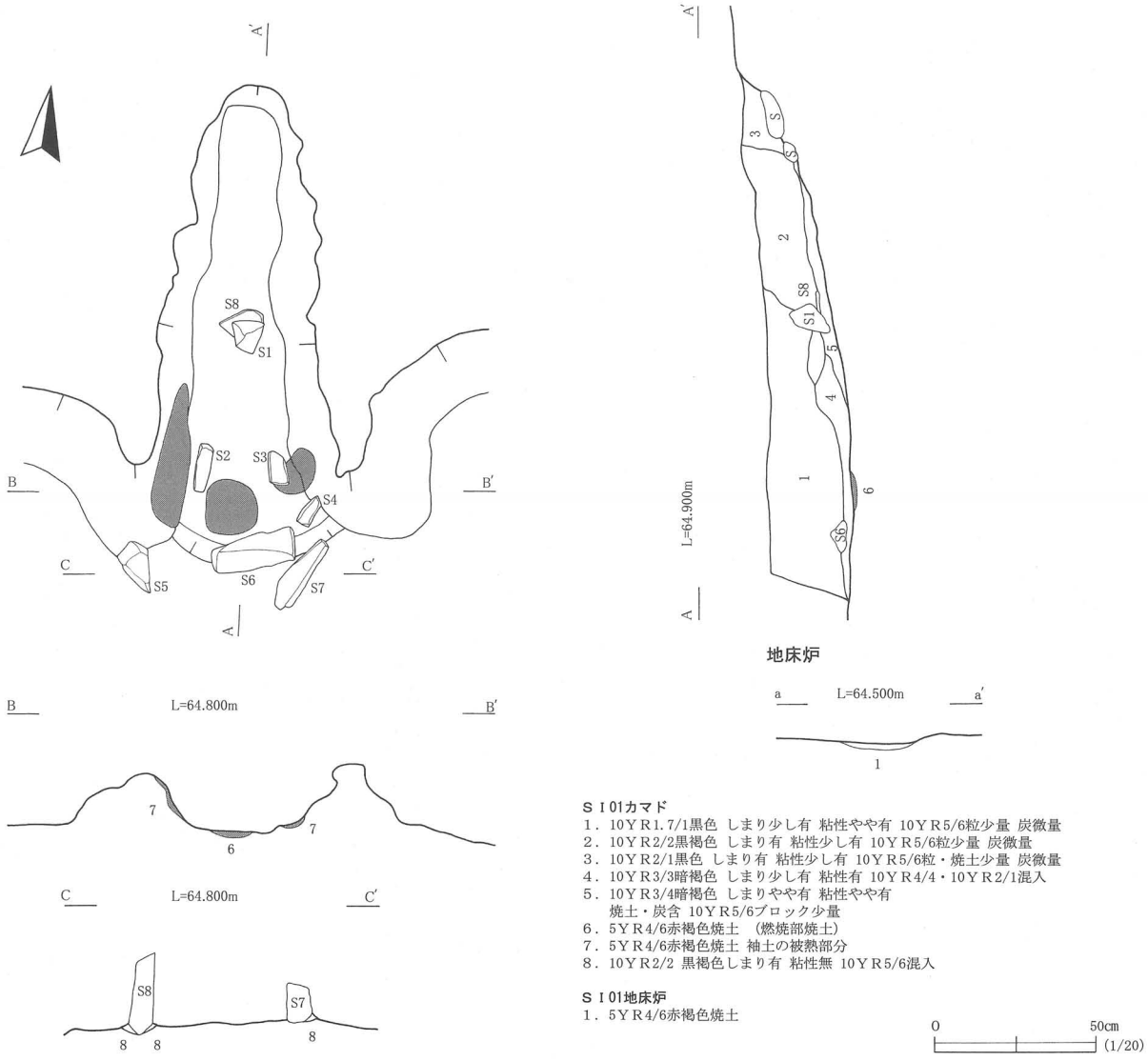
ＳＩ01竪穴住居跡

遺　構（第８・９図、写真図版３・４）

＜位置・検出状況＞Ｂ区西、ⅣＢ７ｈグリッドに位置する。検出面は標高64.4～64.7mのⅢ層上面で、床面付近でⅢ～Ⅳ層の漸移層に移行する。本遺構の周辺は北から南へ下る緩斜面であるが、ここより南東側斜面下は傾斜が急になっている。重複する遺構はない。東北東約7.5mにＳＫ12、北西約0.6mにＳＫ09、北西約5.2mにＳＫ05が位置する。



第８図　ＳＩ01竪穴住居跡(1)



第９図　ＳＩ01竪穴住居跡(2)

＜平面形・規模＞北壁が中央に設置されているカマドの影響で歪んでいるが、概ね隅丸方形状を呈する。規模は北壁長3.39m、東壁長2.92m、南壁長3.25m、西壁長2.85mを測る。検出面からの深さは最大26cmを測る。

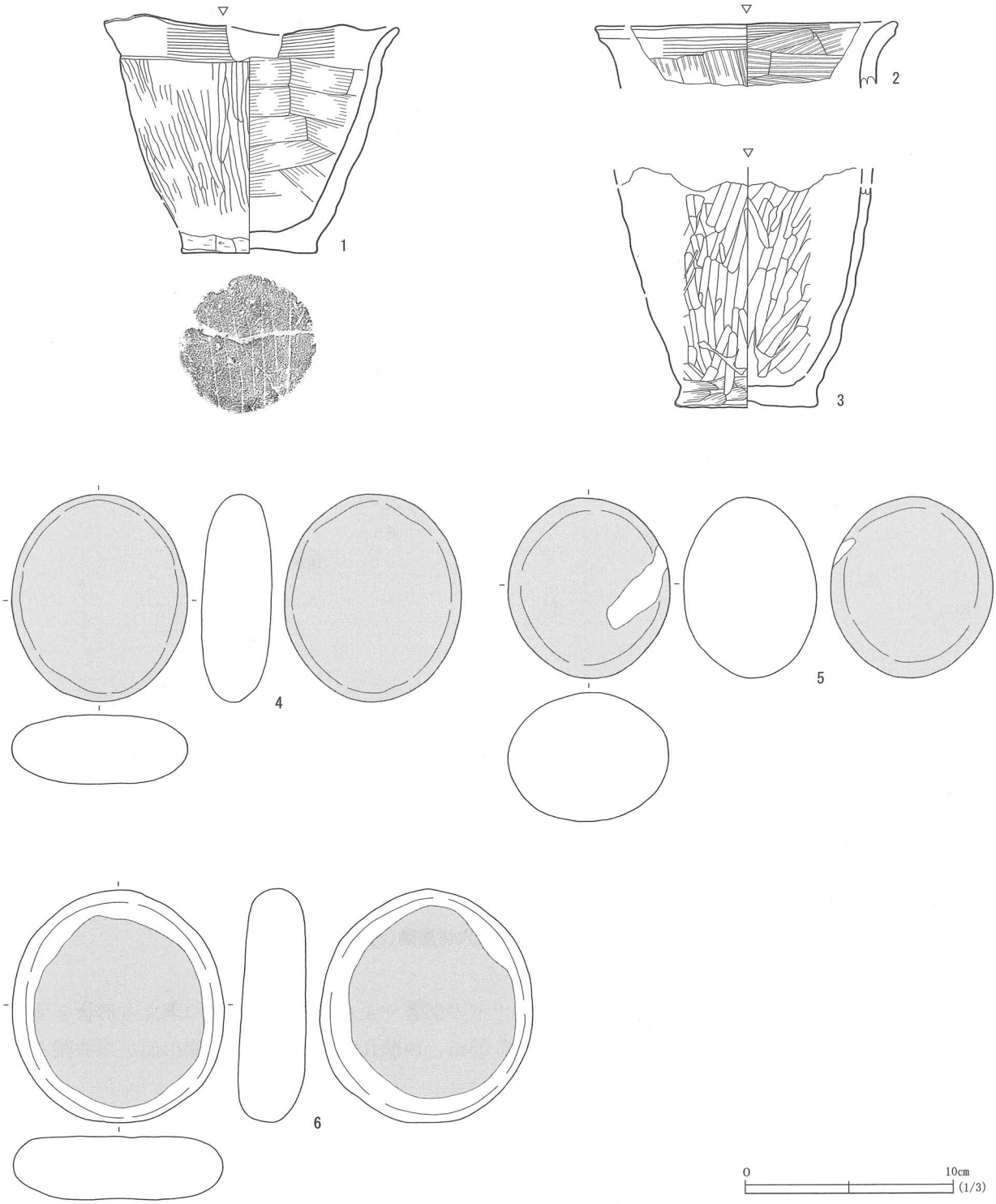
＜主軸方向・床面積＞東壁を基準とした主軸方向はN－14°－W、床面積は11.17㎡を測る。

＜埋土＞黒褐色土単層の自然堆積を呈する。

＜壁＞概ねⅢ層を壁としているが、掘り込み面がⅢ～Ⅳ層へ移行する漸移層であるために一様でなく、Ⅳ層を壁としているところもある。床面から外傾して立ち上がる。壁高は北壁20～26cm、南壁２～７cmを測り、北・南壁は西に、東・西壁は南に向かうにつれて低くなっていく。

＜床面＞概ね平坦で、Ⅲ・Ⅳ層を掘り込み床面としている。床面標高は64.3～64.5m。

＜床面施設＞北東コーナー付近から地床炉１基、北西・北東コーナーより中央に60～70cm程内側から柱穴を各１基(Ｐ１・２)検出した。地床炉は長軸41cm、短軸26cmの不整形状を呈し、厚さ２cmの赤褐色焼土が形成されている。Ｐ１・２は位置的に主柱穴になるものと思われる。



第10図　ＳＩ01竪穴住居出土遺物

＜カマド＞北壁中央で検出された。煙道方向はＮ－３°－Ｗ。本体部の残存状況は比較的良好である。袖は大部分をⅣ層土を削り出し、南側(手前側)を亜角礫とⅣ層起源の暗褐色土で構築している。本体部内からは礫・土器が少量出土している。出土状況からＳ６は天井石、Ｓ７は右袖の芯材に用いられたのが崩落した可能性が考えられる。燃焼部は長軸40cm、短軸30cmの楕円形状を呈する、深さ２cmの掘り込みの底部を中心に、径16×17cmの円形状を呈する、厚さ２cmの赤褐色焼土が形成されている。

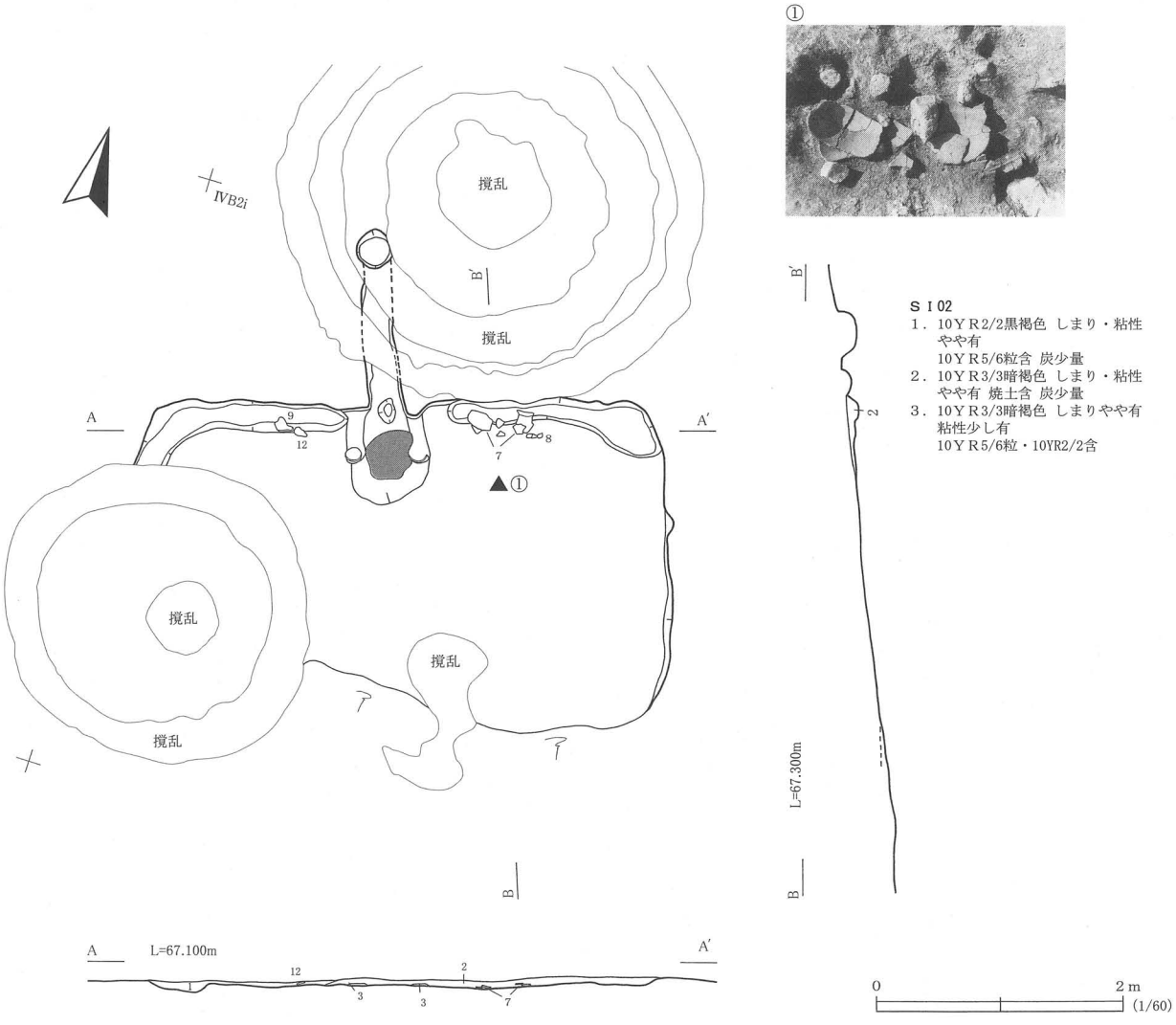
その奥に亜角礫が２個据えられており、位置関係から見て支脚として使用された可能性が高い。煙道部は上半部が削平されているため、掘り込み式か刳り抜き式かははっきりしない。長さ1.20m、幅20～28cmを測り、上り勾配で煙出し部へ続いている。中央付近で亜角礫が１個（Ｓ１）直立状態で出土している。断面図は石の主軸からはずれているためはっきりしないが、床面から若干浮いた状態で出土した。出土状況から煙道の天井を支える支柱的な性格があると思われる。煙道部と煙出し部との境界が明瞭でないために、煙出し部の規模ははっきりしないが、断面観察からみて径24cm前後、深さ13cmを測る。

遺　物（第10図、写真図版41）

カマド・床面・埋土から縄文土器22ｇ、土師器1,123ｇ、磨石３点（1,057ｇ）、鉄滓？８ｇが出土した。土師器の器種は全て甕で、坏類は含まれていない。埋土上位から出土した鉄滓？は、新しい時期のものであると思われる。このうち１～３の土師器甕、４～６磨石３点を掲載した。

＜土師器甕＞３点ともＧ類である。調整技法は１は外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。２は内外面ハケメ。３は内外面ヘラミガキとバラエティに富んでいる。

＜磨石＞３点ともにほぼ全面を磨られている。石質は４はひん岩、５は凝灰岩、６はハンレイ岩と様々である。



第11図　ＳＩ02竪穴住居跡（1）

ＳＩ02竪穴住居跡

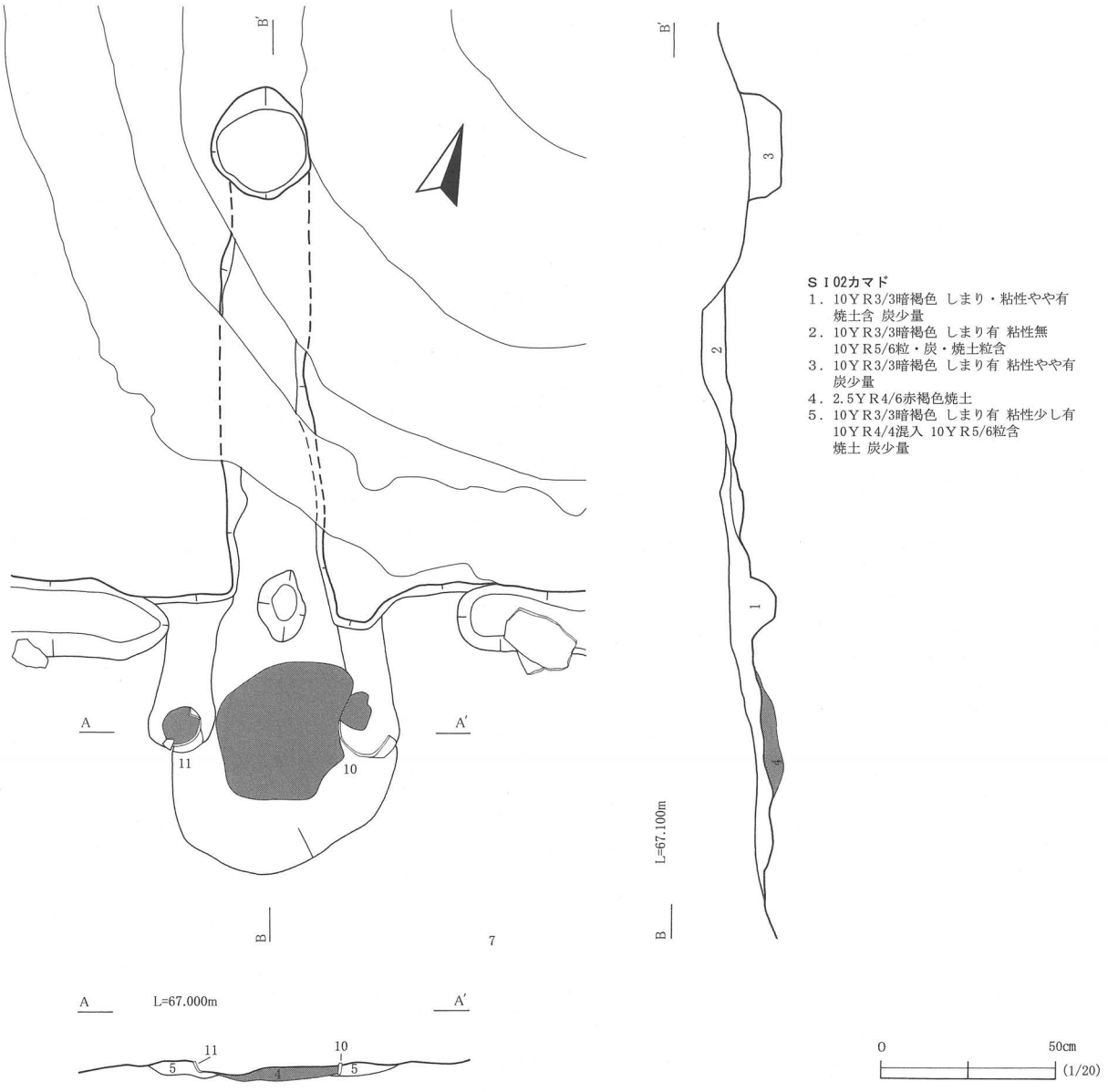
遺　構（第11・12図、写真図版５・６）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅣＢ２ｉグリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高66.7～67.0ｍのⅣ層上面である。重複する遺構はない。北約3.1ｍにＳＫ68、北東約５ｍにＳＮ01、北東約15ｍにＳＩ04、南約2.3ｍにＳＤ23、西南西約8.6ｍにＳＫ15、北西約2.5ｍにＳＫ17が位置する。畑造成時の削平と住居西側・カマド煙道部にある撹乱(植栽痕)に加え、斜面の崩落によって住居の南半分が消失し、全体的に残存状況は不良である。カマドと北・東壁、北・西・東壁際の周溝の残存状況から竪穴住居であると判断した。

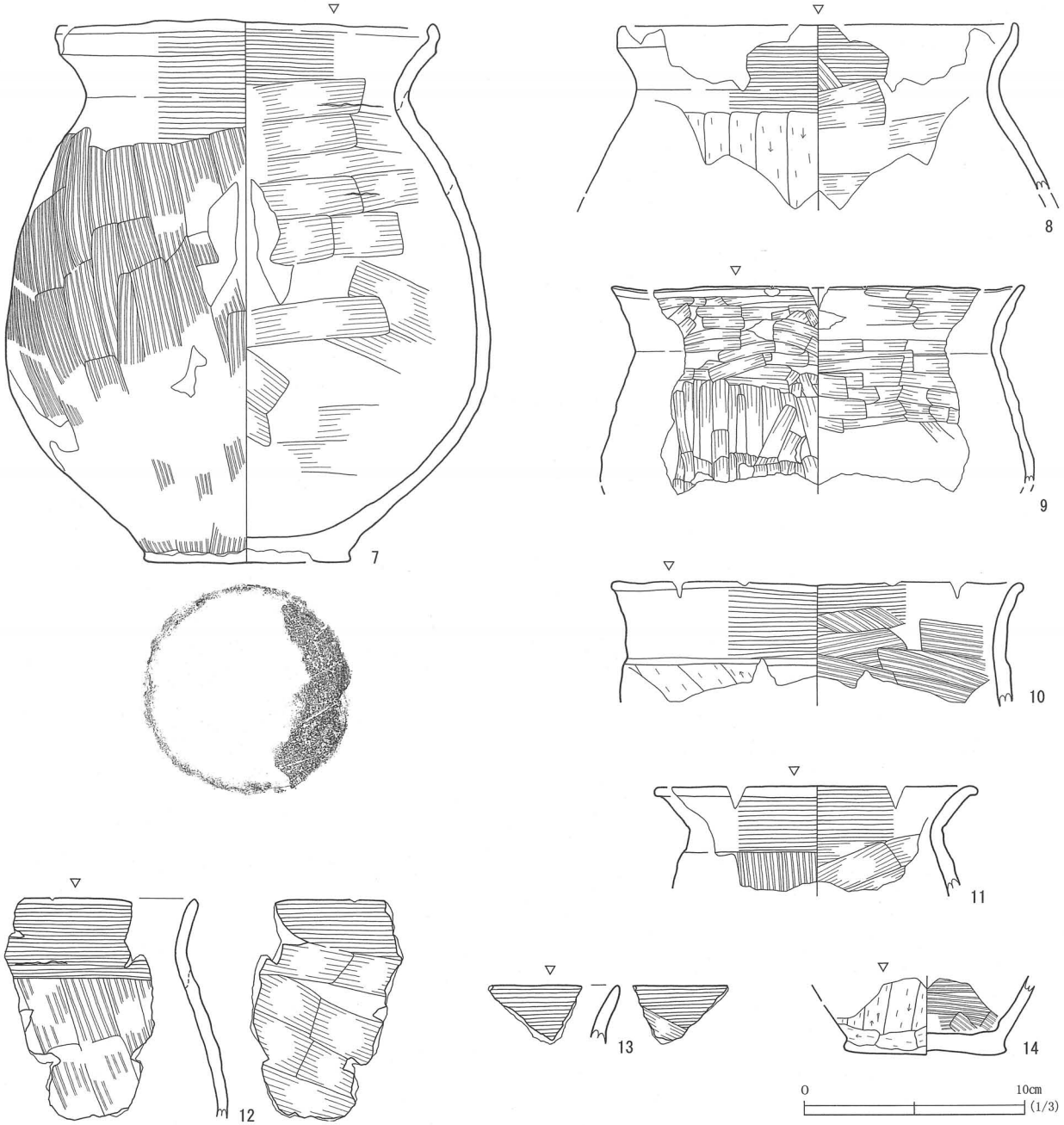
＜平面形・規模＞撹乱によって西壁が、斜面の崩落によって南壁が消失しているためはっきりしない。北壁は4.40ｍ遺存、東壁は2.54ｍ、西壁は0.53ｍ残存していることから一辺４～５ｍ前後の隅丸方形状を呈すると思われる。検出面からの深さは最大８㎝を測る。

＜主軸方向・床面積＞東壁を基準とした主軸方向はＮ－16°－Ｗ、床面積は残存部分で6.58㎡を測る。

＜埋土＞上位は黒褐色土(１層)、下位は暗褐色土(２・３層)に大別される自然堆積を呈し、３層に細



第12図　ＳＩ02竪穴住居跡(2)



第13図　ＳＩ02竪穴住居跡出土遺物

分した。

＜壁＞概ねⅣ層を壁としている。床面から外傾して立ち上がる。壁高は北壁３～８㎝、東壁４㎝、西壁４㎝を測る。

＜床＞概ね平坦で、Ⅳ層を掘り込み床面としている。標高は66.7～66.9ｍを測る。

＜床面施設＞カマドが設置されている中央付近を除く北壁際から周溝を検出した。便宜的にカマドより西を周溝１、東を周溝２とする。周溝１は北西コーナーから南が撹乱によって消失し、全容は不明だが、全長1.76ｍ、幅22～26㎝、深さ２～７㎝を測る。周溝２は全長1.78ｍ、幅22～42㎝、深さ３～４㎝を測る。

＜カマド＞北壁中央で検出した。煙道方向はＮ－21°－Ｗ。前述のような検出状況のため、本体部の残存状況は不良である。袖は土器を芯材として暗褐色粘土で構築されている。燃焼部は径65×63㎝の

楕円形状を呈する、深さ３cmの掘り込みの底部を中心に、径39×35cmの楕円形状を呈する、厚さ５cmの焼土が形成されている。その奥から径24×16cmの楕円形状を呈する、深さ６cmのピット１基を検出した。支脚の抜き取り穴の可能性も考えたが、位置関係から見てその可能性は低いと思われる。煙道部は上半部が削平され、撹乱によって寸断されているために、掘り込み式か刳り抜き式かは判然としない。残存部分から長さ1.08m、幅36cmを測り、上り勾配で煙出し部へ続いていると思われる。煙出し部は32×27cmの楕円形を呈し、深さ10cmを測る。

遺　物（第13図、写真図版41）

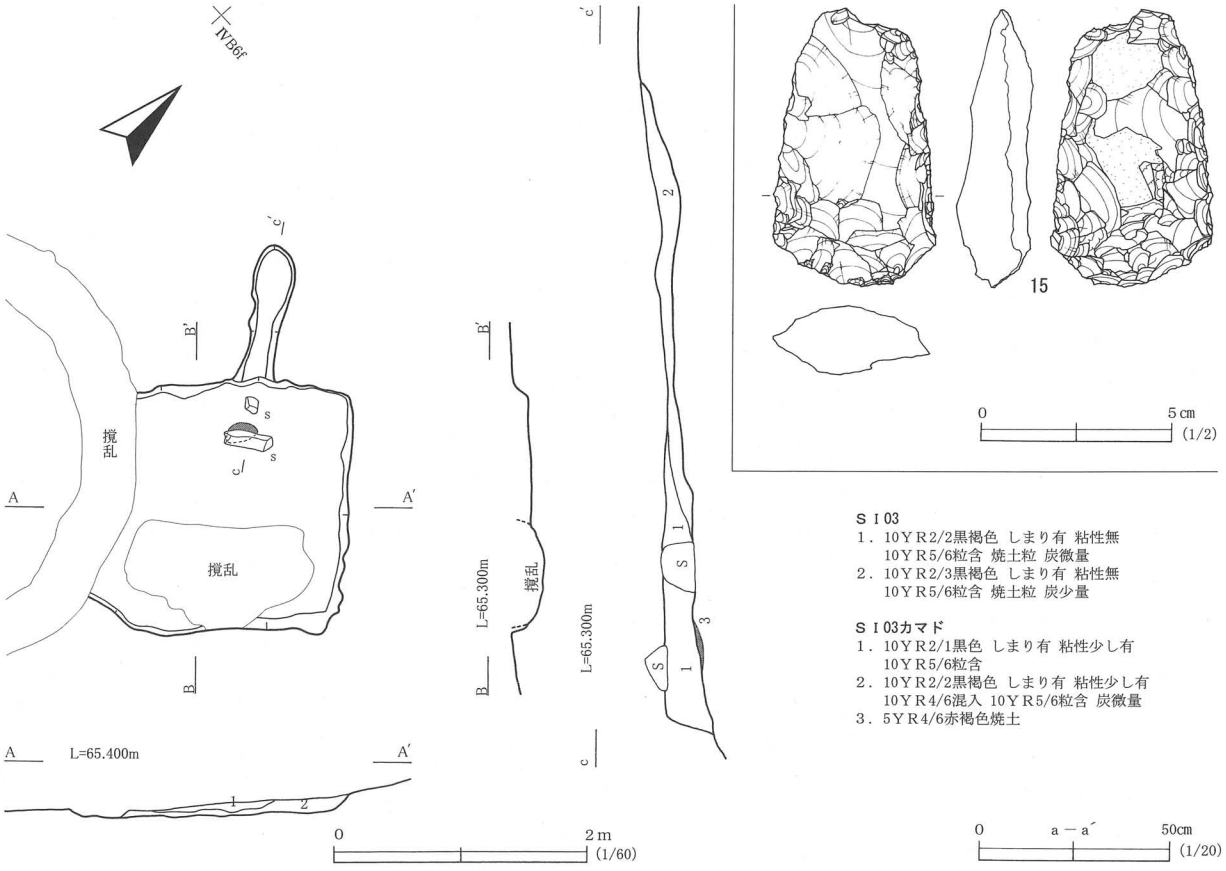
カマド・床面・埋土から土師器1,672ｇが出土した。カマド・床面からの出土が大半を占める。また、本遺構は埋土が非常に薄く、埋土出土としたものも限りなく床面に近い部分からの出土となる。このうち７～14の土師器甕を掲載した。

＜土師器＞坏は無く、甕のみの出土である。器種構成はＣ類３点、Ｄ類１点、Ｆ類１点、Ｉ類２点である。Ｄ類の10がカマド右袖、Ｆ類の11がカマド左袖の芯材に転用されていたことをあわせると、Ｃ・Ｄ・Ｉ類が主体といえる。調整技法は外面ハケメもしくはヘラケズリ、内面ヘラナデもしくはハケメ調整のものが主体を占めている。また、Ｉ類の胎土は他の種類の胎土に比べ緻密で雲母が含まれている傾向がある。

ＳＩ03竪穴住居跡

遺　構（第14図、写真図版６）

＜位置・検出状況＞Ｂ区西、ⅣＢ６ｆグリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜



第14図　ＳＩ03竪穴住居跡、出土遺物

面を呈する。検出面は標高65.0～65.2mのⅣ層上面である。重複する遺構はない。東約4.8mにＳＫ05、西約2.8mにＳＫ01、北西約2.8mにＳＤ07が位置する。住居南西壁、南東部を撹乱に切られ、畑造成時の削平で全体的に残存状況は不良である。

＜平面形・規模＞撹乱によって南西壁が消失し、はっきりしない。規模は北東壁は1.91m遺存、南東壁は2.04m、北西壁は1.67m残存していることから一辺２m前後。平面形は各辺が直線的というよりは中央部分が多少ふくらむ弧状ではあるが、概ね隅丸方形状を呈するものと思われる。検出面からの深さは最大14cmを測る。

＜主軸方向・床面積＞北東壁を基準とした主軸方向はＮ－45°－W、床面積は残存部分で3.07㎡を測る。

＜埋土＞黒褐色土主体の自然堆積を呈し、２層に細分した。

＜壁＞概ねⅢ層を壁としているが、掘り込み面がⅢ～Ⅳ層へ移行する漸移層であるため一様でなく、Ⅳ層を壁としているところもある。床面から外傾して立ち上がる。壁高は北東壁９～14cm、南東壁８～14cm、北西壁６～10cmを測り、北東壁は東に、南東・北西壁は南に向かうにつれて低くなっていく。

＜床＞概ね平坦で、Ⅲ・Ⅳ層を掘り込み床面としている。標高は64.9～65.1mを測る。

＜カマド＞北西壁中央で検出された。煙道方向はＮ－43°－W。本体部の残存状況は不良で、わずかに燃焼部焼土、支脚の可能性のある亜角礫が残るのみである。燃焼部は径26×15cmの楕円形状を呈する赤褐色焼土が形成されている。厚さ２cmを測り、下位のⅣ層に漸移的に移行する。その奥に径13cmの亜角礫を検出した。位置的に支脚の可能性がある。また燃焼部焼土上から長軸35cm、短軸13cmの角礫を検出した。位置的に天井石の可能性も考えたが、焼土面から浮いていることや本体部の残存状況が不良であることを勘案し、斜面上位から流れ込んだカマド構築材と判断した。煙道部は大半が削平されているため、底部付近のみを検出した。そのため掘り込み式か刳り抜き式かは判然としない。長さ1.05m、幅24～28cmを測り、上り勾配で煙出し部へ続いている。煙出し部の状況は残存状況が不良のため不明である。

遺　物（第14図、写真図版41）

カマド・埋土から土師器3.71ｇ、不定形石器１点(50.07ｇ)が出土した。このうち15の不定形石器を掲載した。

ＳＩ04竪穴住居跡

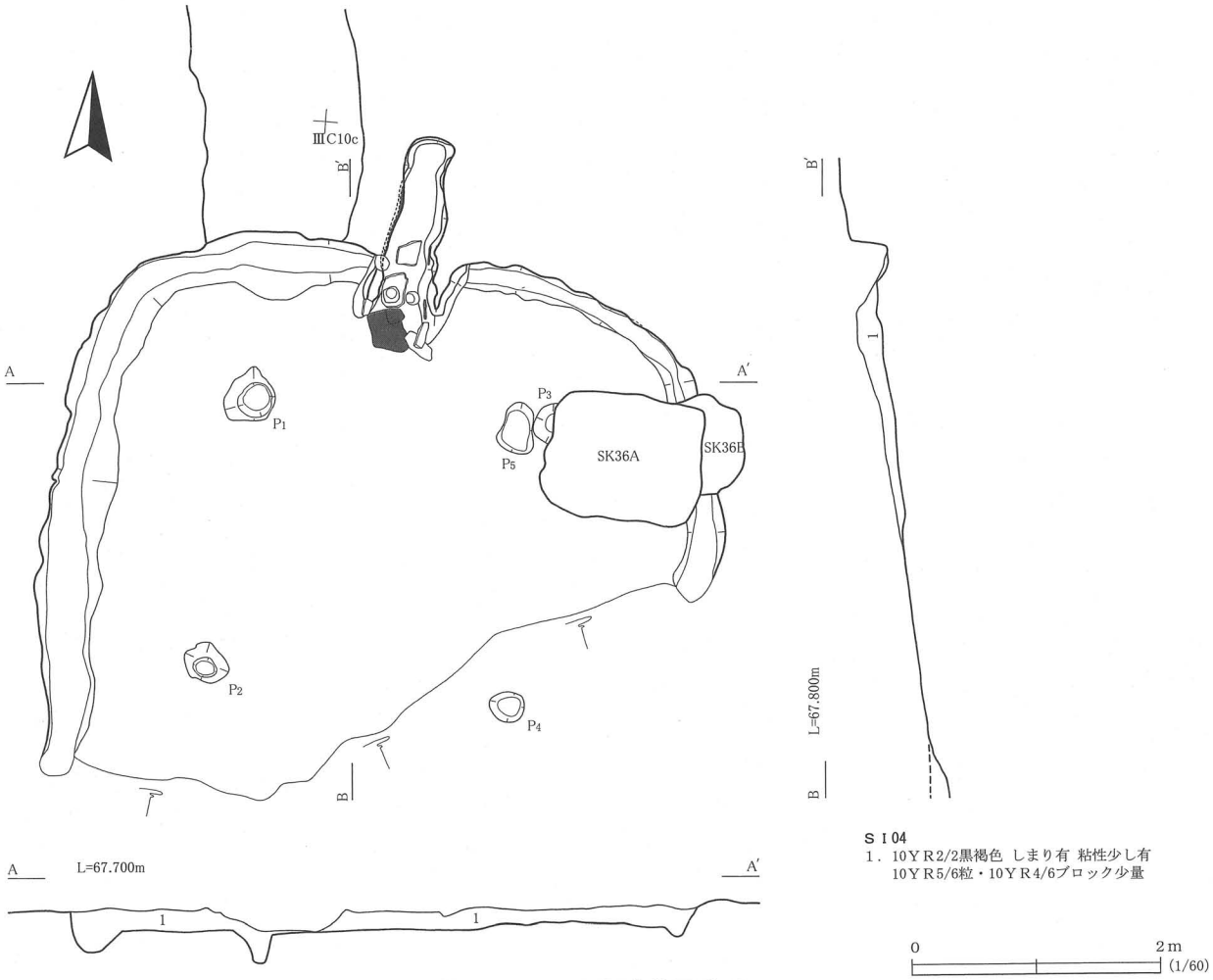
遺　構（第15・16図、写真図版７・８）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅢＣ10ｂ・10ｃグリッドに位置する。本遺構の周辺は北北西から南南東に下る緩斜面を呈する。本遺構より斜面下は畑造成時に大幅に削平されており崖状を呈する。検出面は標高67.1～67.6mのⅢ層上面である。床面に向かうにつれてⅣ層に移行する。北約1.2mにＳＤ43、北東約1.8mにＳＫ26、南西約15mにＳＩ02、北西約3.9mにＳＫ35、西約10.1mにＳＮ01、東側に墓壙群が位置する。斜面の崩落で住居の南半分が消失している。

＜重複＞住居東側をＳＫ36Ａ・Ｂに切られている。

＜平面形・規模＞斜面の崩落で南壁が消失し、平面形・規模ははっきりしない。規模は北壁が5.21m遺存、東壁は2.37m、西壁は4.57m残存していることから、一辺が５m前後。平面形は各辺が中央付近が外側に膨らむ弧状を呈し、住居コーナーが角張らず、なで肩状を呈するためはっきりしないが、概ね隅丸方形状を呈するものと思われる。検出面からの深さは最大39cmを測る。

＜主軸方向・床面積＞東壁を基準とした主軸方向はＮ－６°－Ｅ、床面積は14.63㎡を測る。



第15図　ＳＩ04竪穴住居跡(1)

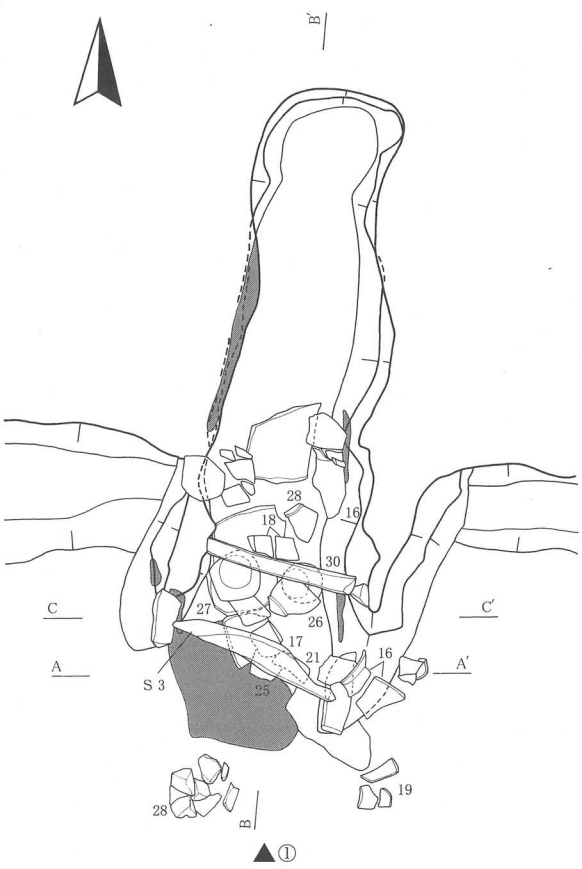
＜埋土＞黒褐色土単層の自然堆積を呈する。

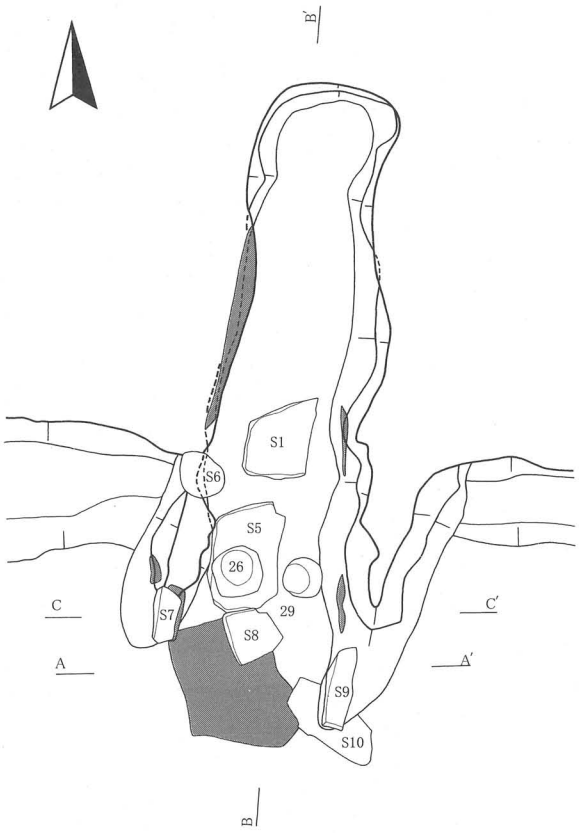
＜壁＞概ねⅣ層を壁としているが、掘り込み面がⅢ～Ⅳ層へ移行する漸移層であるために一様でなく、Ⅲ層を壁としているところもある。床面から鋭角的に立ち上がる。壁高は北壁28～39㎝、東壁は最大28㎝、西壁は最大39㎝を測る。北壁は東に、東・西壁は南に向かうにつれて低くなっていく。

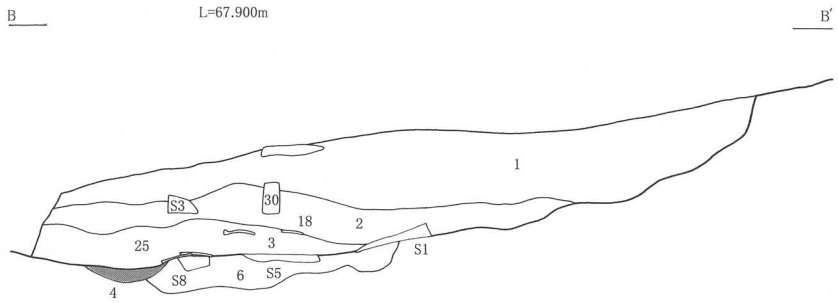
＜床＞概ね平坦で、Ⅲ・Ⅳ層を掘り込み、Ⅳ層起源の褐色土が混入したⅢ層起源の暗褐色土を貼床(掘り方埋土)にして床面としている。標高は67.1～67.3ｍを測る。

＜床面施設＞住居各コーナーより中央に約1.1～1.2ｍ内側の場所から柱穴を計５基(Ｐ１～５)、各壁の壁際から周溝を検出した。柱穴Ｐ１～Ｐ４は位置的に主柱穴になるものと思われる。周溝は幅16～56㎝、深さ４～20㎝を測り、カマドを含む各辺を巡っている。カマド付近に関しては後述するが、削り出しの袖部分はトンネルを掘り(写真図版８)、燃焼部付近は板状の花崗閃緑岩で蓋をして暗渠を構築し、両脇の周溝に直結している。周溝の底面レベルはおおよそ標高67.1～67.3ｍで、北壁中央のカマド付近が最も標高が高く、斜面下方に向かうにつれて低くなっていく。比高差は25㎝を測る。以上の状況から見て周溝は排水溝的な性格を持つものと思われる。

＜カマド＞北壁中央で検出された。煙道方位はＮ－４°－Ｅ。本体部の残存状況は比較的良好である。袖は大部分をⅣ層土を削り出して構築し、南側(手前側)は亜角礫とⅣ層起源の暗褐色土で構築している。天井の架構には板状土製品と花崗閃緑岩が各１個づつ用いられている。壁側には土製品、手前側

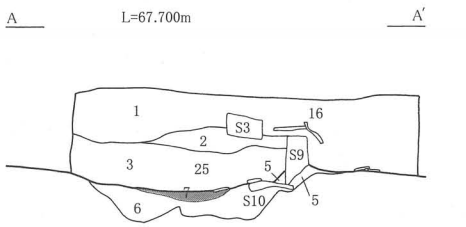


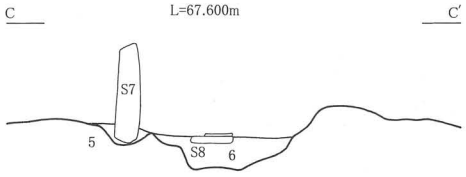




ＳＩ04カマド

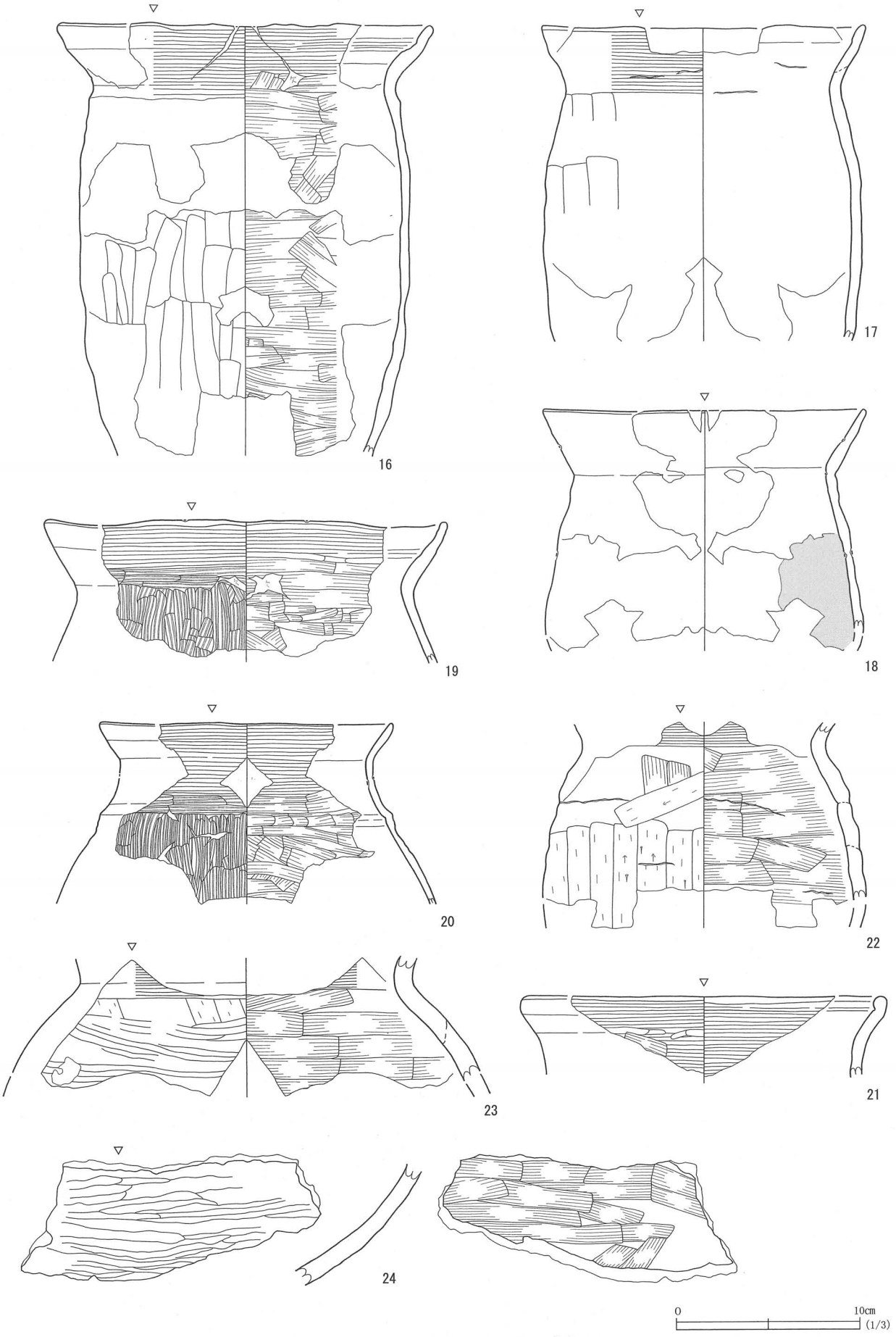
1．10ＹＲ2/2黒褐色 しまり有 粘性少し有
　10ＹＲ4/4・焼土ブロック含
2．10ＹＲ2/2黒褐色 しまり有 粘性無
　焼土微量
3．10ＹＲ2/3黒褐色 しまり有 粘性やや有
　10ＹＲ4/4・焼土粒少量
4．10ＹＲ3/4暗褐色 しまり有 粘性少し有
　10ＹＲ4/6含 炭少量
5．10ＹＲ3/3暗褐色 しまり有 粘性少し有
　10ＹＲ5/6混入 5ＹＲ4/6ブロック・炭含
6．10ＹＲ3/4暗褐色 しまり有 粘性少し有
　5ＹＲ4/6焼土ブロック含 炭少量
7．5ＹＲ4/6赤褐色焼土





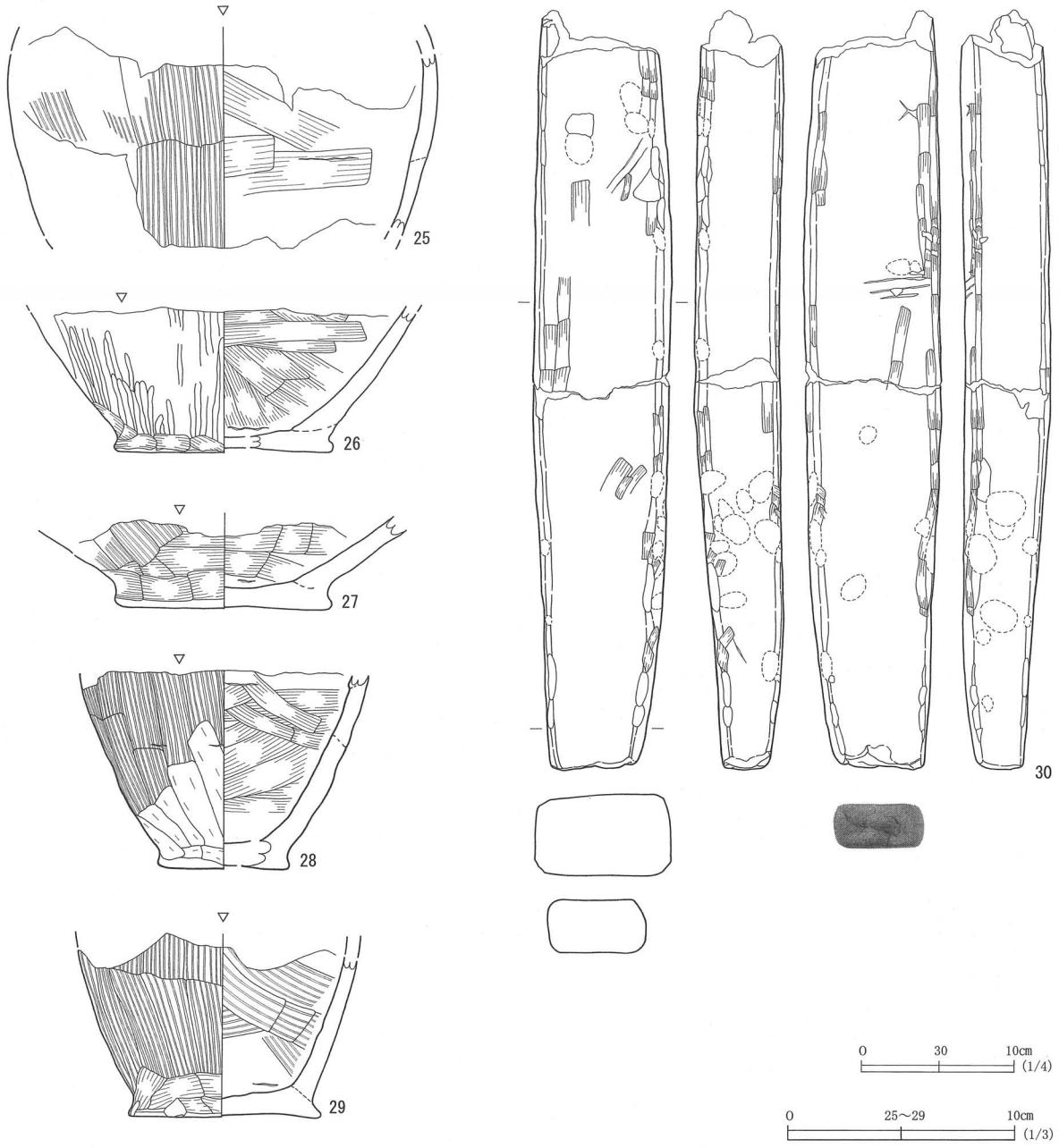
①

第16図　ＳＩ04竪穴住居跡(2)



第17図　ＳＩ04竪穴住居跡、出土遺物(1)

には花崗閃緑岩が架けられている。ただし、支脚との位置関係から両者とも埋没・堆積中に流入した土砂の影響で、斜面下方にずれて現位置は保っていないものと思われる。本体部内からは礫・土器片が多数出土している。状況から見て大半のものがカマド構築部材に使用されたものと思われる。また、天井石Ｓ３は人為的に平らに加工された痕跡が認められる。燃焼部は調査時の不手際で掘り込みの範囲を取り損ねているが、断面から長軸35cm、短軸31cm、深さ２cmの楕円もしくは不整形状を呈するものと思われる。掘り込みの中心には長軸35cm、短軸33cmの不整形状を呈する赤褐色焼土が形成されている。厚さ４cmを測り、下位のⅣ層に漸移的に移行する。焼土の北に隣接する扁平な花崗閃緑岩（Ｓ８）も被熱しており若干赤化している。その奥には土師器甕の底部が２個逆さまに据えられている(26・29)。状況から見て支脚に転用されたと思われる。支脚から煙道部入り口までは概ね平坦で、長さ12～



第18図　ＳＩ04竪穴住居跡、出土遺物(2)

27cmの薄い板状の花崗閃緑岩を底面に敷いている(Ｓ５)。この花崗閃緑岩は前述したが、幅23cm前後、深さ４cmほどの溝を覆うように置かれていた。覆われていない部分は暗褐色系粘土を用いて貼床にしていた。この溝は両袖下にトンネルを掘り込み周溝と直結している(写真図版８)。煙道部が上り勾配で雨水の流入を止める施設がないこと、周溝の標高はカマド付近が一番高いことからみて、この燃焼部付近の溝は排水溝的性格をもつものではないかと思われる。

煙道部は上半部が削平されているために、掘り込み式か刳り抜き式かは判然としない。長さ1.05m、幅25～30cmを測り、上り勾配で煙出し部へ続いている。煙道と煙出し部との境界が明瞭でないために、煙出し部の規模ははっきりしない。断面からみて径35cm前後、深さ15cmを測る。

遺　物（第17・18図、写真図版42）

カマド・床面・埋土から土師器4,461ｇ、石器11ｇ、板状土製品１点(2,338ｇ)が出土した。大半がカマドから出土している。このうち16～29の土師器甕、30の板状土製品を掲載した。

＜土師器＞坏はなく、甕のみの出土である。器種構成はＡ類４点、Ｃ・Ｉ類各３点である。調整技法はＩ類が外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ調整が施されているのを除くと、外面ハケメもしくはヘラケズリ、内面ヘラナデ調整が施されている。また、Ｉ類の胎土は他の種類の胎土に比べ緻密で雲母が含まれている傾向がある。

＜板状土製品＞カマド燃焼部に架構されていたものである。全体的に被熱による摩耗が著しく、調整技法は不明だがヘラナデ・指オサエの痕跡が確認できた。断面形状は角の取れた方形状を呈し、粘土が巻かれている状態が看取される。おそらく、板状の粘土を巻いて棒状に加工したものと推察される。角はナデで面取りされている。この板状土製品に類似した土製品は八戸市酒美平遺跡で出土している。同遺跡出土例はカマド袖の芯材として使用したようである。また、福島県本宮町高木遺跡では３本の粘土紐を束にして、ナデ調整で板状に成形した板状土製品が出土している。この土製品もカマド構築材として使用した可能性が指摘されている。類例は少ないが、本遺跡出土土製品は当初からカマド芯材(構築部材)にするために製作した可能性が想定される。

ＳＩ06Ａ・Ｂ竪穴住居跡

Ａ区北、ⅢＢ２ｅ～４ｅグリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る緩斜面を呈しており、ここから斜面下はより傾斜が急となる。検出面はおおよそ標高70.4～70.7m付近のⅣ層上面である。南東約7.1mにＳＫ70、南約0.5mにＳＫ61、南西約4.3mにＳＫ69、西約1.2mにＳＤ48、北西約０.５ｍにＳＫ72が位置する。畑造成時の削平で残存状況は不良である。斜面の崩落で南半部は消失している。検出当初は１棟の竪穴住居跡として精査を開始したが、同床面精査中に壁から0.2～1.0m程内側で周溝プランを検出し、断面観察・炭化材との切り合い関係からみて、２棟の竪穴住居跡が重複しているものと判断し、新しい方をＡ、古い方をＢとした。ＳＩ06Ａ・Ｂ双方の主軸線が同じであることや遺物から見て、ＡとＢは時間差があまり無く、Ｂを廃絶しＡ建て替えた可能性も考えられる。

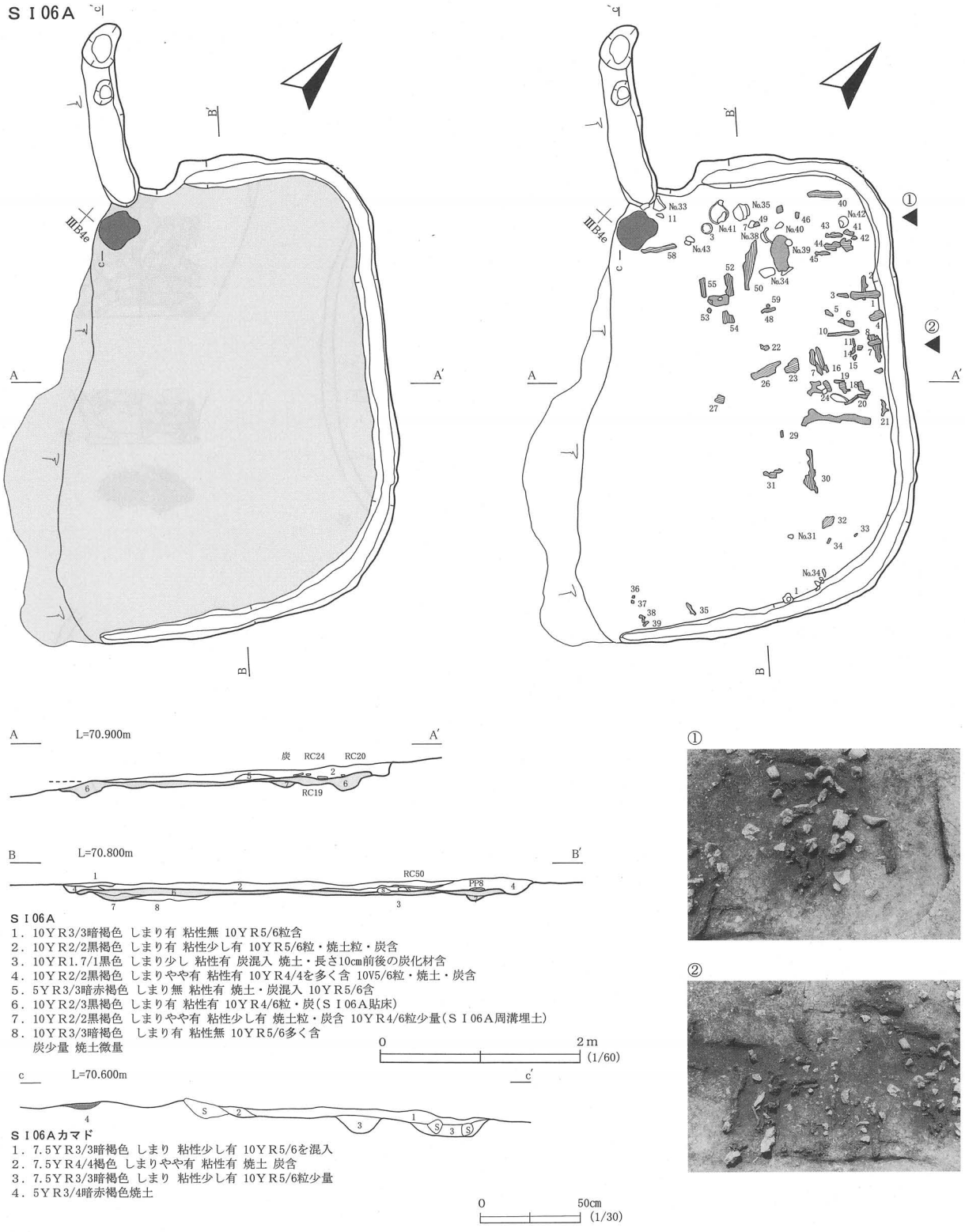
ＳＩ06Ａ

遺　構（第19・20図、写真図版９～11）

＜位置・検出状況＞上記の通り。

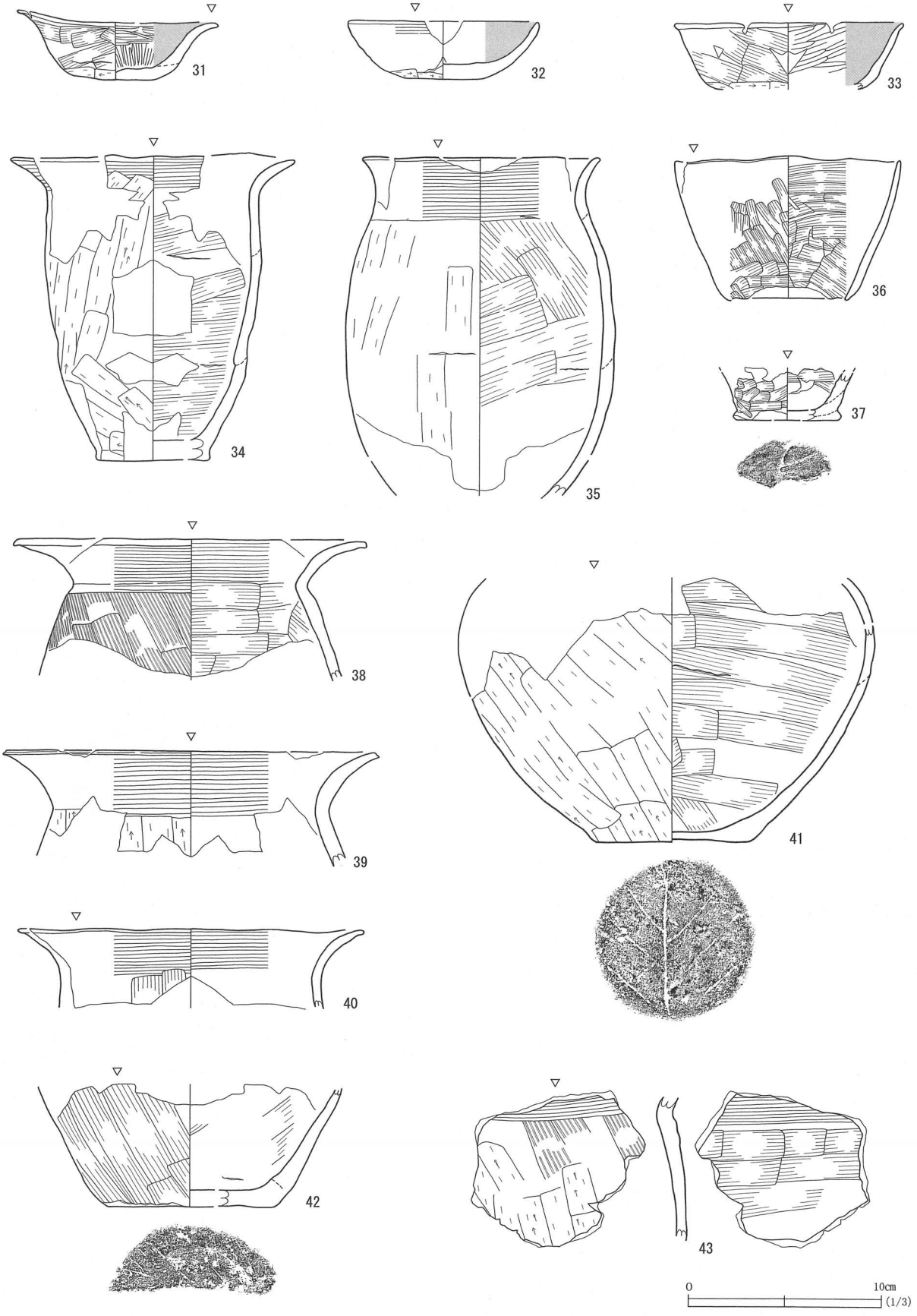
＜重複＞ＳＩ06Ｂより新しい。他の遺構との重複はない。

＜平面形・規模＞斜面の崩落で南半部が消失しているため平面形・規模ははっきりしない。北東壁は4.66m遺存、南東壁は3.09m、北西壁は2.31m残存していることと貼床の残存状況から、一辺が4.5



第19図　ＳＩ06Ａ・Ｂ(1)竪穴住居跡

～５ｍ前後。平面形は各辺が中央付近が若干外側に膨らむ緩い弧状を呈し、住居コーナーが角張らず、なで肩状を呈するためはっきりしないが、概ね隅丸方形状を呈するものと思われる。検出面からの深さは最大13cmを測る。



第20図　ＳＩ06Ａ竪穴住居跡出土遺物

＜主軸方向・床面積＞東壁を基準とした主軸方向はＮ－45°－Ｅ、床面積は残存部分で13.16㎡を測る。
＜埋土＞埋土は５層に細分され、上位は１層の暗褐色土、下位は２～５層の黒褐色土を主体とした自然堆積を呈する。住居北半を中心に多くの炭化材・炭・焼土が出土しており、状況から見て焼失住居であると思われる。炭化材は２・４層下位で多く検出され、３層は炭の層である。５層は住居中央から北東にかけて部分的に認められる。５層は焼土・炭が混入し、住居中央付近のみに層の広がりが限定されている。よって、５層は住居消失時に真っ先に落ちた住居上屋中央付近の部材で、２～４層は５層より縁辺部の部材で中央より後の時間帯に焼け落ちた可能性が考えられる。４層からは土器・礫が比較的多く出土している。検出した炭化材の樹種は大半がクリ材で、一部ケヤキ(１)、ナラ(17・49)、コナラ属クヌギ節(20)、ハンノキ属(39)が含まれる。クリ材以外の種類の炭化材は概ね小さな炭化材のため、上屋の部位と樹種の対応関係は確認できなかった。また、住居の残存状況が不良のため、炭化材の配置から上屋材構造まで復元できる情報は得られなかった。
＜壁＞概ねⅣ層を壁としている。床面から鋭角的、もしくは外傾して立ち上がる。壁高は北東壁８～13cm、南東壁は最大９cm、北西壁は最大12cmを測る。北東壁は東に、南東・北西壁は南に向かうにつれて低くなっていく。
＜床＞概ね平坦で、Ⅳ層を掘り込み、Ⅳ層起源の褐色土が混入したⅢ層起源の黒褐色土を貼床(掘り方埋土)にして床面としている。貼床は全面に広がる。標高は70.4～70.6ｍを測る。
＜床面施設＞各壁際から周溝を検出した。周溝は幅18～35cm、深さ３～７cmを測り、カマドを除く壁際を全周している。
＜カマド＞北西壁中央で検出された。煙道方位はＮ－45°－Ｗ。本体部の残存状況は不良で、僅かに燃焼部焼土が残存している。燃焼部は径42×38cmの楕円形状を呈する赤褐色焼土が形成されている。厚さ３cmを測り、下位のⅣ層に漸移的に移行する。煙道部は上半部が削平された上に、斜面の崩落で煙道南西部が消失し、掘り込み式か刳り抜き式かは判然としない。長さ1.36ｍを測り、幅は32cm残存し、燃焼部から下り勾配で煙出し部へ続く。煙出し部は46×33cmの楕円形を呈し、深さ10cmを測る。

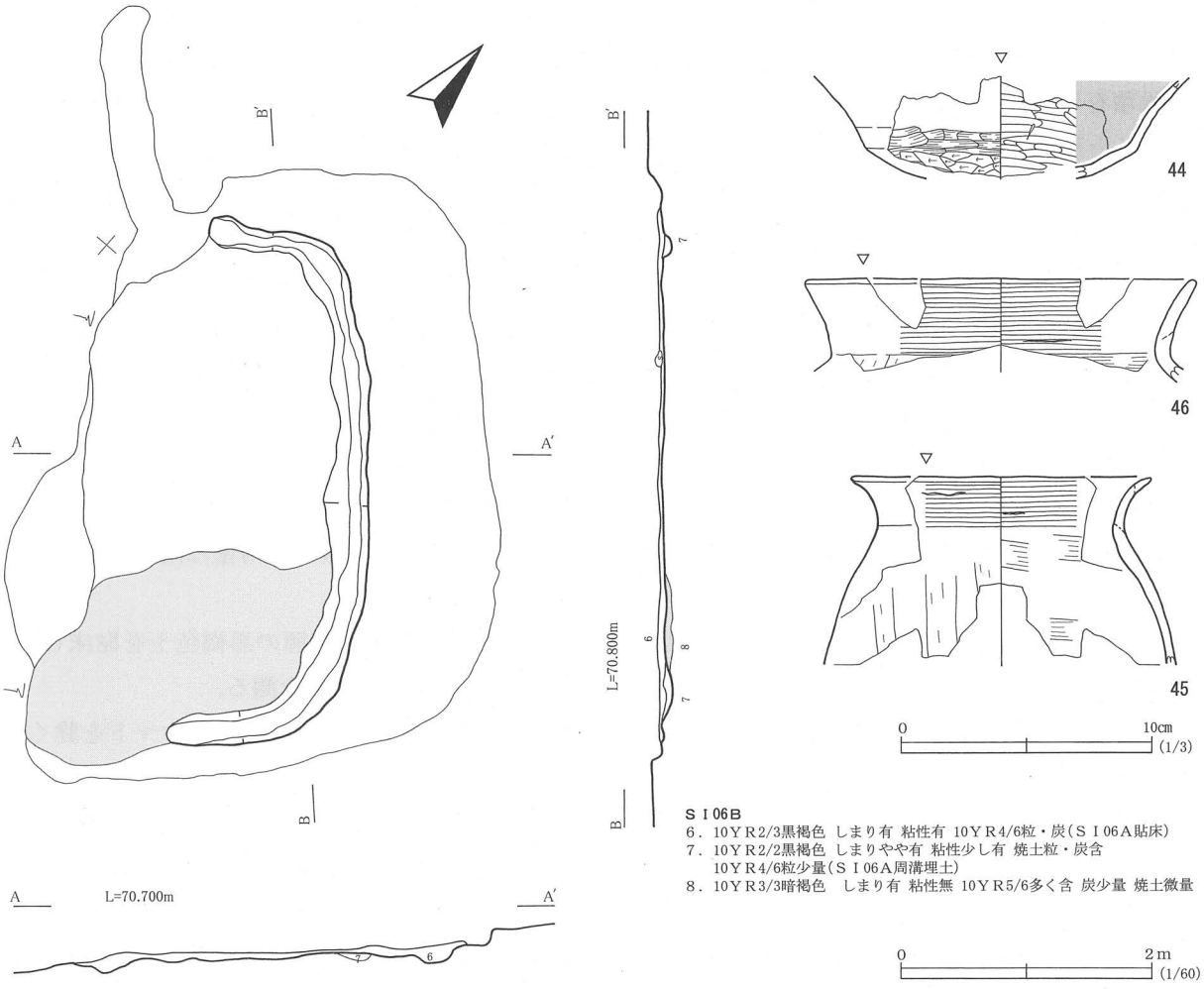
遺　物（第20図、写真図版43）

床面・埋土から土師器1,760ｇ、石製品425ｇが出土した。大半が床面からの出土である。このうち31～33の土師器坏、34～43の土師器甕を掲載した。
＜土師器＞器種構成は坏はＢ・Ｅ・Ｆ類が各１点、甕はＢ類２点、Ｅ・Ｆ・Ｈ・Ｉ・Ｊ類各１点とバラエティに富んでいる。調整技法は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデが主体を占める。

ＳＩ06Ｂ

遺　構（第19・21図、写真図版12）

＜位置・検出状況＞上記の通り。
＜重複＞ＳＩ06Ａに切られている。
＜平面形・規模＞斜面の崩落で南半部が消失し、平面形・規模ははっきりしない。規模は北東壁は4.14m遺存、南東壁は1.60m、北西壁は1.32m残存していることと貼床の残存状況から、一辺が４ｍ前後。平面形は各辺が中央付近が若干外側に膨らむ緩い弧状を呈し、住居コーナーが角張らず、なで肩状を呈することから、概ね隅丸方形状。検出面からの深さは最大７cmを測る。
＜主軸方向・床面積＞東壁を基準とした主軸方向はＮ－41°－Ｅ、床面積は残存部分で8.40㎡を測る。
＜埋土＞２層に細分され、黒褐色土を主体とした人為堆積を呈する。
＜壁＞概ねⅣ層を壁としている。床面から外傾して立ち上がる。壁高は北東壁５～７cm、南東壁は最



第21図　ＳＩ06Ｂ竪穴住居跡(2)、出土遺物

大４㎝、北西壁は最大６㎝を測る。北東壁は東に、南東・北西壁は南に向かうにつれて低くなる。
＜床＞概ね平坦で、Ⅳ層を掘り込み、Ⅳ層起源の褐色土が混入したⅢ層起源の暗褐色土を貼床(掘り方埋土)にして床面としている。貼床は住居東部に広がる。標高は70.3～70.5ｍを測る。
＜床面施設＞各壁際から周溝を検出した。周溝は幅18～35㎝、深さ３～７㎝を測る。
＜カマド＞検出されなかった。

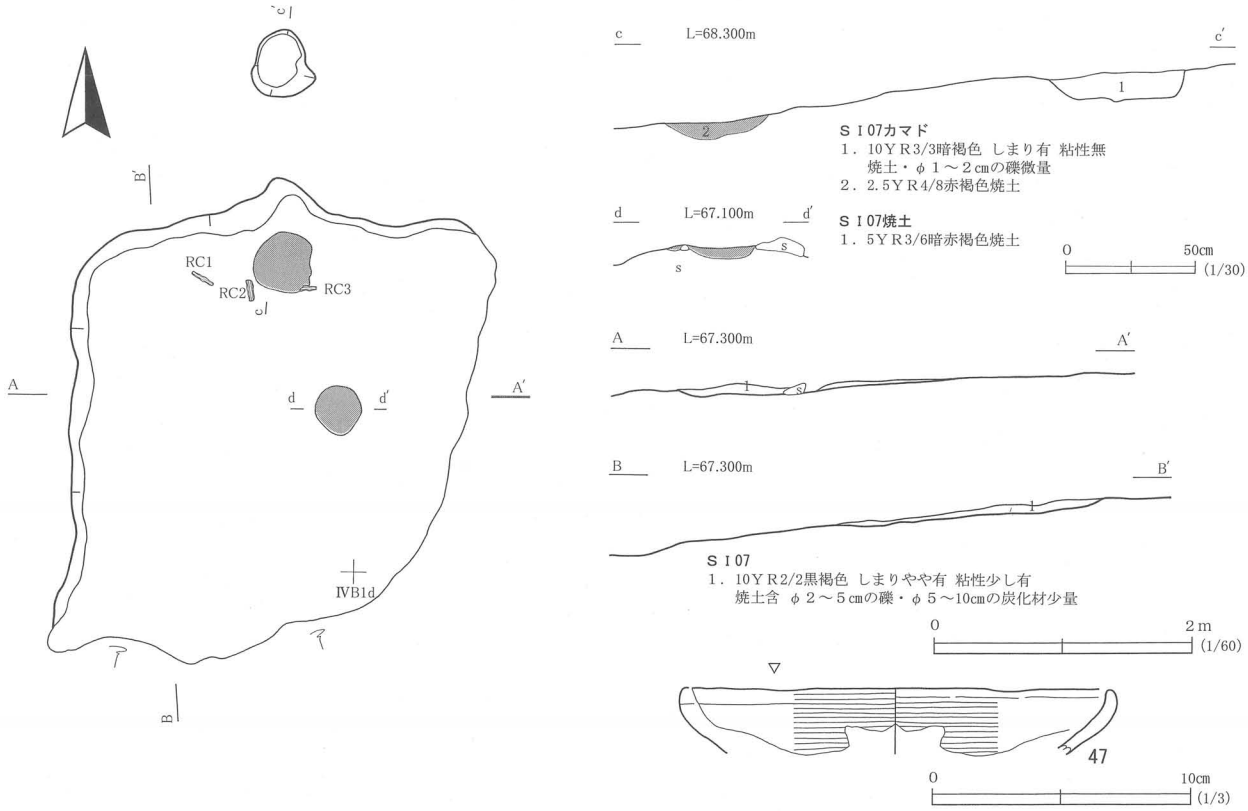
遺　物（第21図、写真図版43）

床面・埋土から土師器236ｇが出土した。このうち44の土師器坏、45・46の土師器甕を掲載した。
＜土師器＞器種構成は坏Ａ類１点、甕Ｃ・Ｆ類各１点である。坏の底部はヘラケズリ調整が施されている。甕の外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整が施されている。

ＳＩ07竪穴住居跡

遺　構（第22図、写真図版13）

＜位置・検出状況＞Ａ区南、ⅢＢ10ｃ・ｄ、ⅣＢ１ｃ・１ｄグリッドに位置する。本遺構の周辺は畑造成時の削平で概ね平坦であるが、本来は北東から南西に下る緩斜面を呈していたと思われる。検出面は標高66.8～67.2ｍのⅢ層上面である。床面に向かうにつれてⅣ層に移行する。重複する遺構はな



第22図　ＳＩ07竪穴住居跡、出土遺物

い。南南西約1.8mにＳＫ81、北西約1.8mにＳＫＩ11が位置する。畑造成時の削平で全体的に残存状況は不良で住居の南半分が消失している。僅かにカマドと北・東壁の一部が残存していることから竪穴住居であると判断した。

＜平面形・規模＞削平で南半部が消失しているため、平面形・規模ははっきりしない。規模は北壁は3.14m、西壁は3.13m残存していることと床の残存状況から、一辺が４m前後。平面形は北壁がカマド付近が若干外側に膨らむ緩い弧状を呈し、住居コーナーが角張っていないためはっきりしないが、概ね隅丸方形状を呈する。検出面からの深さは最大９cmを測る。

＜主軸方向・床面積＞西壁を基準とした主軸方向はＮ－１°－W、床面積は残存部分で9.11㎡を測る。

＜埋土＞黒褐色土単層の自然堆積を呈する。カマド燃焼焼土の周辺を中心に長さ10～20cmの炭化材の広がりが若干認められることから、焼失住居の可能性も考えられる。なお、炭化材の樹種は全てクリであった（ＲＣ１～３）。

＜壁＞概ねⅣ層を壁としているが、掘り込み面がⅢ～Ⅳ層へ移行する漸移層であるために一様でなく、Ⅲ層を壁としているところもある。床面から外傾して立ち上がる。壁高は北壁で最大９cm、西壁では最大８cmを測る。北壁は東に、西壁は南に向かうにつれて低くなっていく。

＜床＞概ね平坦で、Ⅲ・Ⅳ層を掘り込み床面としている。標高は66.8～67.2mを測る。

＜床面施設＞住居中央付近から、地床炉を１基検出した。地床炉は40×38cmの楕円形状を呈する、厚さ４cmの暗赤褐色焼土が形成されている。

＜カマド＞カマドは北壁中央で検出した。煙道方位はＮ－１°－W。本体部の残存状況は不良で、僅かに燃焼部焼土が残存するのみである。燃焼部には49×46cmの楕円形状を呈する赤褐色焼土が形成されている。厚さ７cmを測り、下位のⅣ層に漸移的に移行する。煙道部は畑造成時の削平の影響が著し

く、僅かに煙出し部が残存するのみである。そのため、煙道部は掘り込み式か刳り抜き式かは判然としない。煙出し部は燃焼部焼土から北に約1.02mに位置する。52×40cmの楕円形を呈し、深さ10cmを測る。

遺　物（第22図、写真図版43）

床面・埋土から縄文土器119ｇ、土師器189ｇ出土した。縄文土器は全て埋土上位からの出土である。土師器は床面・埋土から半数ずつ出土している。このうち47の土師器甕を掲載した。

ＳＩ10竪穴住居跡

遺　構（第23図、写真図版13）

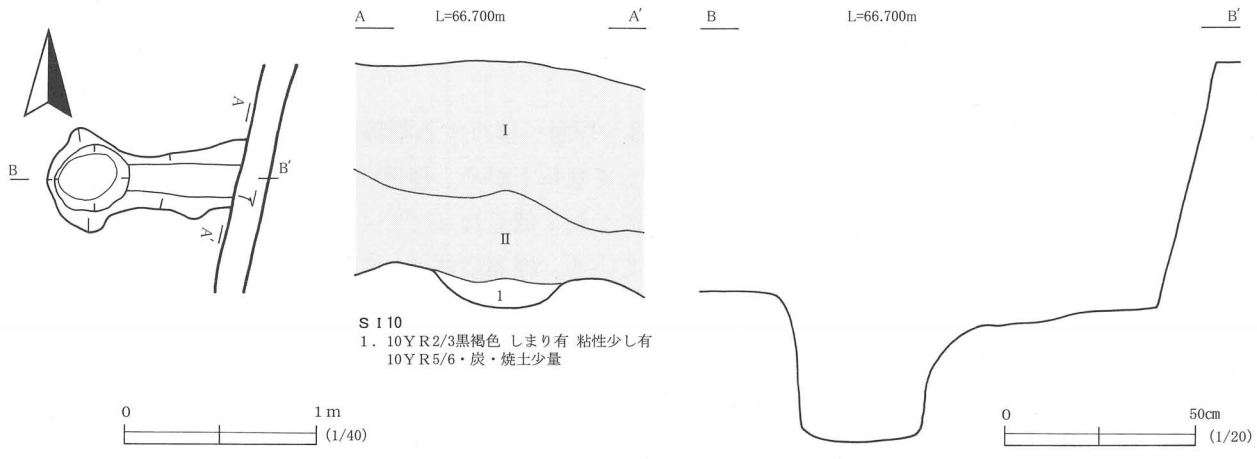
＜位置・検出状況＞Ａ区南、ⅣＢ３ｄグリッドに位置する。本遺構の周辺は畑造成時の削平で概ね平坦であるが、本来は北東から南西に下る緩斜面を呈していたと思われる。検出面は標高66.0m前後のⅢ層上面である。重複する遺構はない。西南西約1.4mにＳＫ82、北北西約1.3mにＳＫ80が位置する。検出当初は溝跡の可能性も考え精査を開始したが、形状・埋土の状況がカマド煙道部の状況に類似していることから、竪穴住居跡のカマド煙道部であると判断した。東側の林道松山前線（調査区外）に住居本体があったものと思われる。

＜平面形・規模＞調査区外にあるため不明（以下不明と略）。＜主軸方向・床面積＞不明。＜埋土＞不明。＜壁＞不明。＜床＞不明。＜床面施設＞不明。

＜カマド＞煙道方位はＷ－０°－Ｎ。本体部の残存状況は不明である。煙道部は上半部が削平されていることと本体部が調査区外にあるために、掘り込み式か刳り抜き式かは判然としない。残存部分で長さ56cm、幅26cmを測り、下り勾配で煙出し部へ続いている。煙出し部は42×54cmの楕円形を呈し、深さ39cmを測る。

遺　物

埋土から土師器21ｇが出土した。



第23図　ＳＩ10竪穴住居跡

（２）炉跡

ＳＮ01炉跡

遺　構（第24図、写真図版14）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅣＢ１ｊグリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。平成15年に県教委生涯学習文化課が行った試掘調査のＴ１トレンチで検出した土坑である可能性が高い。検出面は標高69.0～69.1ｍのⅣ層上面である。重複する遺構はない。北約5.5ｍにＳＫ27、東約10.1ｍにＳＩ04、南西約５ｍにＳＩ02、西約4.2ｍにＳＫ86、北西約5.5ｍにＳＫ28が位置する。

＜平面形・規模＞開口部は東西約1.24ｍ、南北方向1.00ｍの楕円形状を呈する。深さ12㎝を測る。壁は外傾している。底部は東西方向1.14ｍ、南北方向0.84ｍを測る。

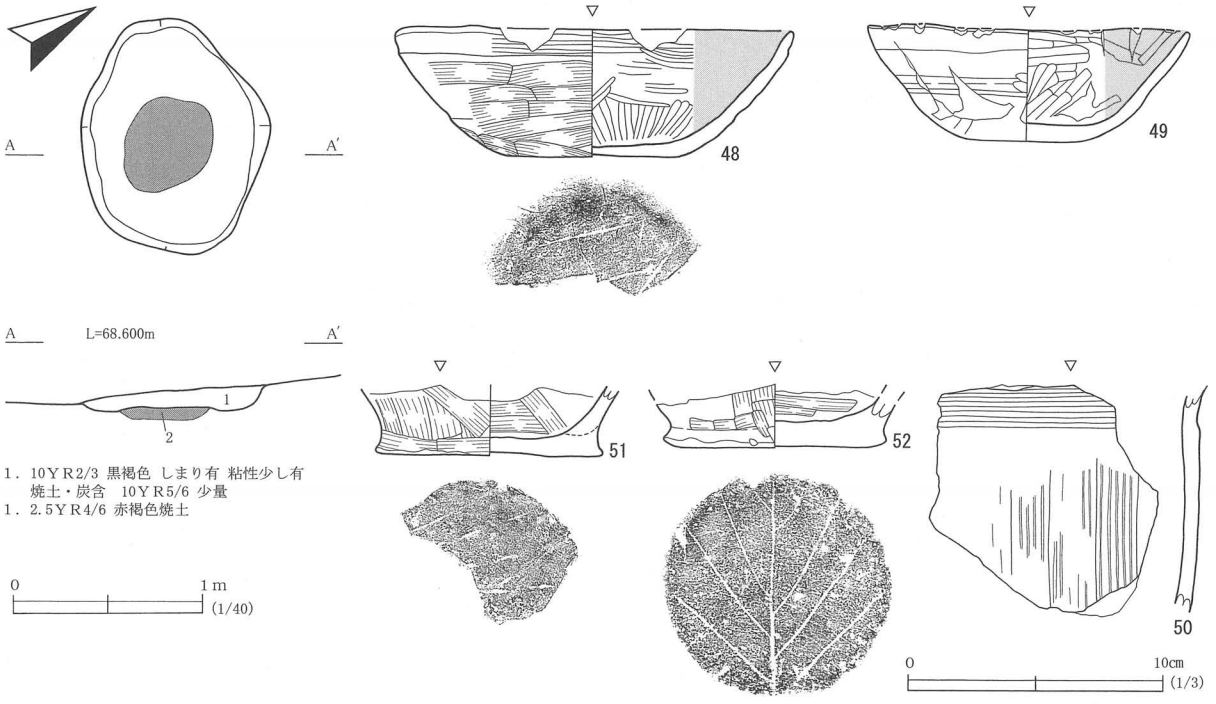
＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞Ⅳ層面を掘り込み底面としている。中央付近に径56×45㎝の楕円形状を呈する赤褐色焼土が形成されている。厚さは６㎝を測り、下位のⅣ層に漸移的に移行する。標高は69.0ｍ前後を測る。

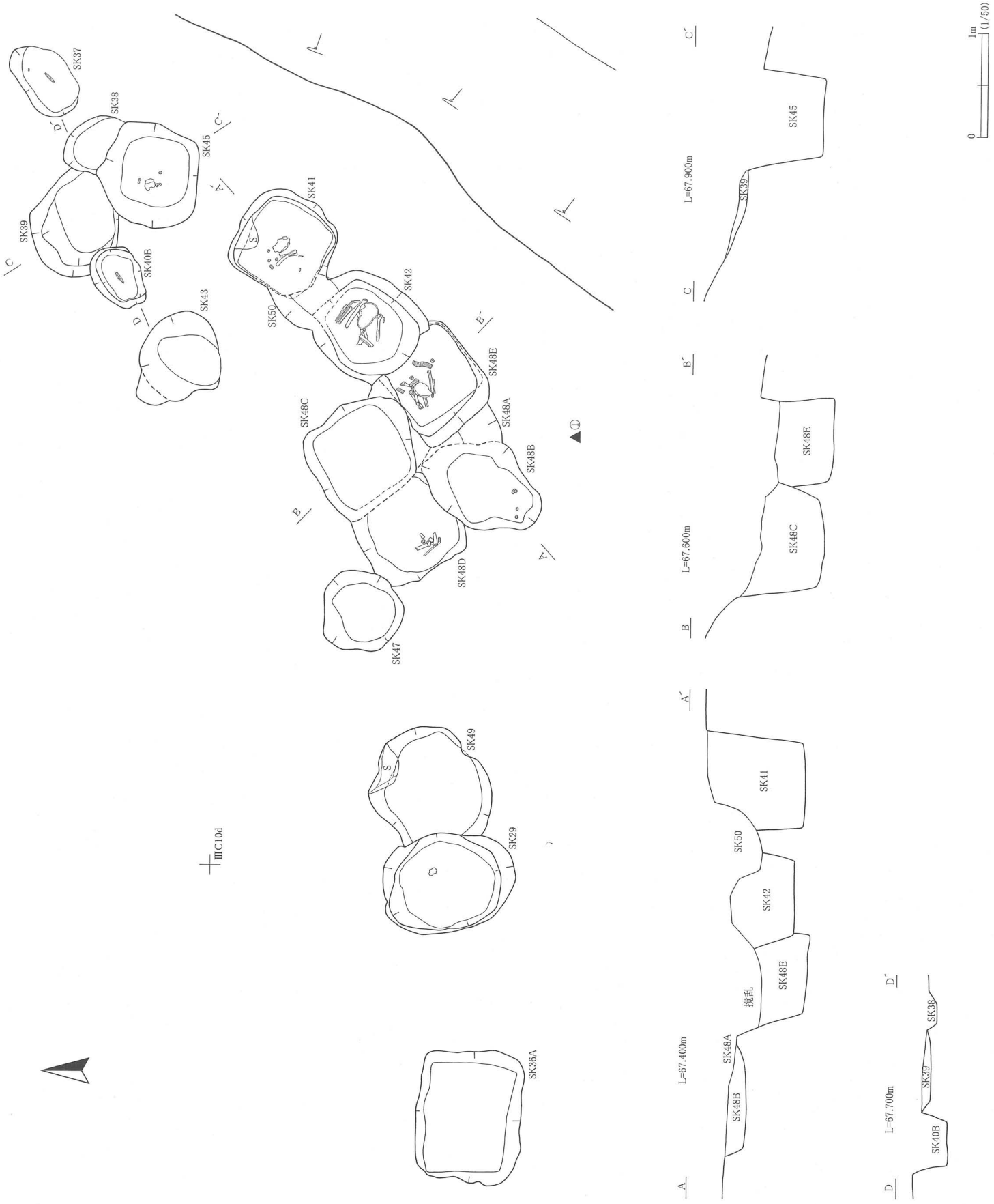
遺　物（第24図、写真図版43）

検出面・埋土から土師器144ｇが出土した。このうち48・49の土師器坏と50～52の土師器甕を掲載した。

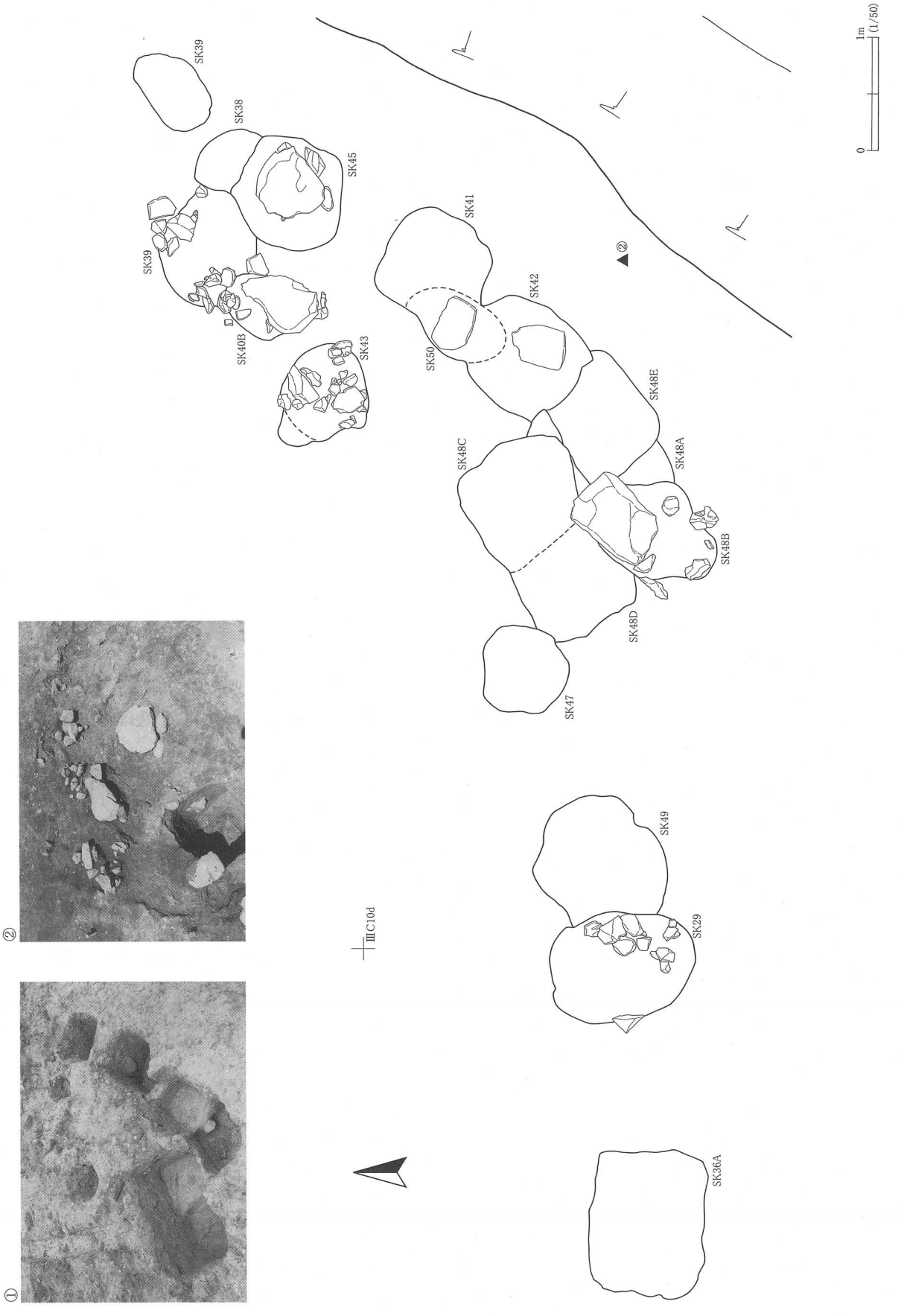
＜土師器＞器種構成は坏はＣ・Ｆ類各１点、甕は３点出土しているが胴・底部破片のみで分類不能である。坏は外面がヘラナデ調整が施されている。甕は50の胴部破片は外面ハケメ調整、51・52は内外面ヘラナデ調整が施されている。



第24図　ＳＮ01炉跡、出土遺物



第25図　近世墓遺構配置図(1)



第26図　近世墓遺構配置図(2)

3　近世の遺構

（1）墓　　壙

B区中央、ⅢC９d・10c・10dグリッドを中心に18基検出した。この区域は地目が墓地となっていた。元地権者の山田氏に伺ったところ、江戸時代から明治初期頃の山田家の墓地があったとのことだった。今回の調査に先立ち、墓標等で地表面から認識できる墓に関しては移転を行ったが、場所が分からず移転できなかった墓もあるとのことだった。

墓壙の周辺は北から南に下る緩斜面を呈するが、畑造成時の削平で斜面下方は崖状を呈している。

ＳＫ29・49墓壙

検出当初は単独の墓壙であると判断し精査を開始したが、ＳＫ29の東壁部分を精査中に遺構のプランを確認した。周辺を再検出したところ、地山に類似した埋土をもつ墓壙（ＳＫ49）を検出した。問題は新旧関係であるが、ＳＫ29の東壁付近を精査中にＳＫ49の埋土を確認していないことから、ＳＫ29はＳＫ49より新しいと思われる。

ＳＫ29墓壙

遺　構（第27図、写真図版15）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅢC10cグリッドに位置する。検出面は標高67.2～67.5mのⅣ層上面である。北東約２mにＳＫ47、東北東約2.6mにＳＫ48Ｄ、東南東約３mにＳＫ48Ａ、西約0.8mにＳＩ04・ＳＫ36が位置する。

＜重複関係＞ＳＫ49を切っている。

＜平面形・規模＞開口部径1.30×0.96mの楕円形状を呈する。深さ1.04mを測る。底部径0.90×0.80mを測る。

＜壁＞上位が崩落の影響で外反しているが、概ね鉛直気味に立ち上がる。Ⅳ層を壁としている。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の人為堆積を呈す。上位に７～26cmの礫を含む。

＜底面＞概ね平坦であるが、中央付近が周辺より４cm程低くなり、北側では若干段差をもつ。棺桶の据え方が反映されたのだろうか？。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は66.5m付近である。

遺　物（第27図、写真図版44）

＜出土状況＞底面から寛永通寶６枚と頭蓋骨の一部が出土した。寛永通寶は頭蓋骨の下から重なって出土した。このうち53～58の寛永通寶を掲載した。

＜寛永通寶＞右表の通り。

古寛永	文銭	新寛永
3	2	1

＜人骨＞頭蓋骨の一部（頭頂部？）であると思われる。

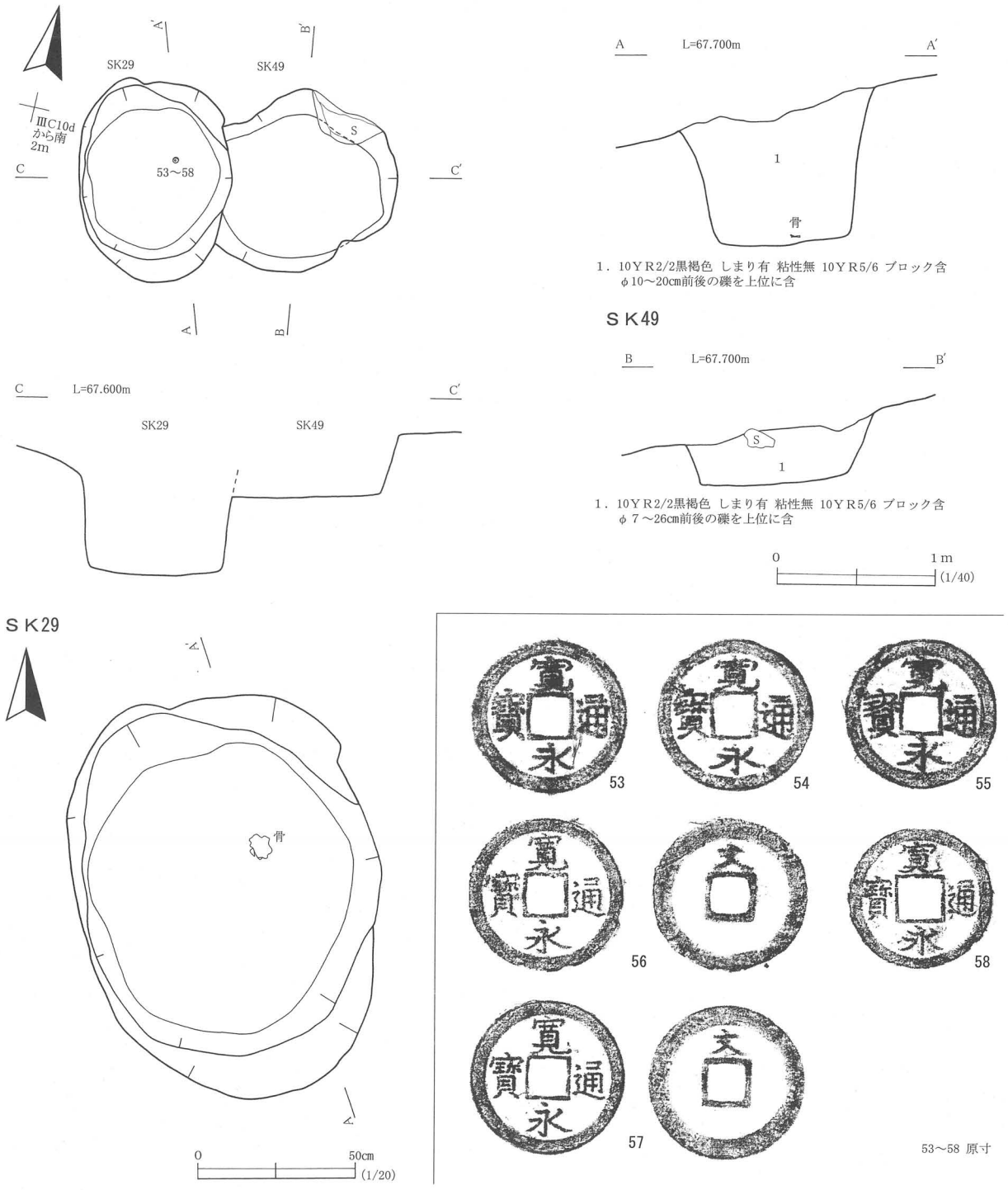
ＳＫ49墓壙

遺　構（第27図、写真図版15）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅢC10dグリッドに位置する。検出面は標高67.2～67.4mのⅣ層上面である。北東約0.8mにＳＫ47、東約1.4mにＳＫ48Ｄ、東南東約２mにＳＫ48Ａが位置する。

＜重複関係＞ＳＫ29に切られている。

＜平面形・規模＞西側をＳＫ29に切られているためはっきりしない。開口部は長軸1.18m残存、短軸1.04m遺存していることから、径1.4×1.2mの楕円形状を呈すると思われる。深さ46cmを測る。



第27図　ＳＫ29・49墓壙、出土遺物

＜壁＞底面から外傾して立ち上がる。底部は長軸0.94m残存、短軸0.92m遺存。Ⅳ層を壁としている。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の人為堆積を呈し、上位に10～20cm前後の礫を少量含む。

＜底面＞南壁に向かうにつれて緩やかに下り、比高差８cmを測る。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は67.0m付近である。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫ37墓壙

遺　構（第28図、写真図版16）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅢＣ９ｅグリッドに位置する。検出面は標高67.3～67.4ｍのⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層で、底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。西南西約0.2ｍにＳＫ38、西約0.7ｍにＳＫ39が位置する。重複する遺構はない。

＜平面形・規模＞南東側が斜面の崩落で消失しはっきりしない。開口部は長軸77㎝遺存、短軸48㎝残存していることから、長軸80㎝前後、短軸60㎝前後の楕円形状を呈していたと思われる。深さ14㎝を測る。底部は長軸67㎝遺存、短軸41㎝残存している。

＜壁＞底面から外傾して立ち上がる。上位はⅢ層からⅣ層の漸移層、下位はⅣ層を壁としている。

＜埋土＞暗褐色土を主体とした単層の人為堆積を呈し、礫を少量含む。また、人骨細片と灰が多く含まれている。

＜底面＞南壁に向かうにつれて若干上る。比高差は最大６㎝を測る。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は67.3ｍ前後である。

遺　物（第28図、写真図版44）

＜出土状況＞埋土から陶磁器片４ｇ、寛永通寶８枚、金属製品(鉄)66ｇ、人骨片が出土した。このうち59の鉄と差し状に出土した60～64の寛永通寶を掲載した。

古寛永	新寛永	不明
2	1	4

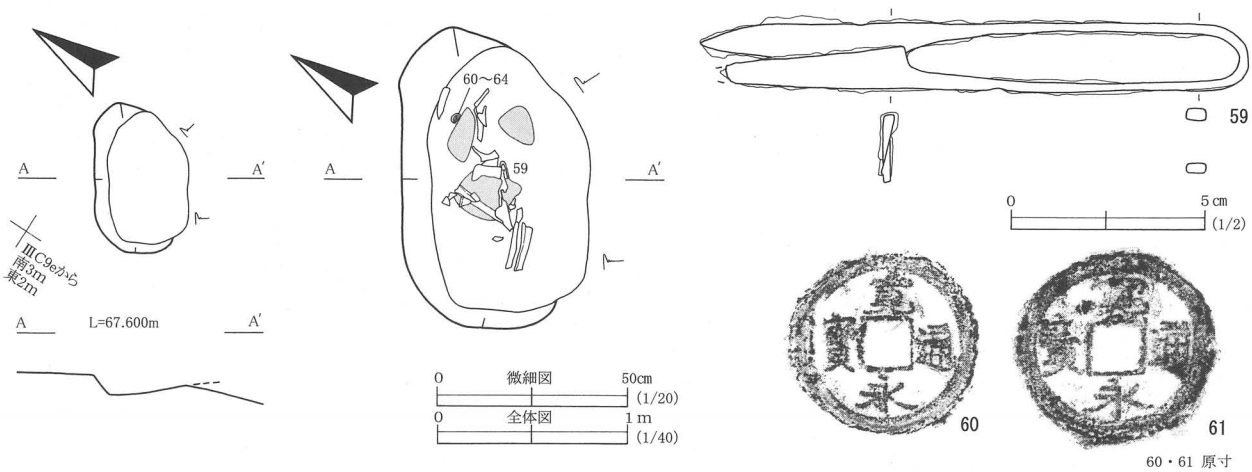
＜寛永通寶＞右表の通り。

＜鉄＞59は長さ14.4㎝、幅2.1㎝、厚さ最大３㎜、重さ65.78ｇを測る。

＜人骨＞形状から四肢骨の一部と思われる骨２本、部位不明の骨と細片を検出した。前者は長さ12㎝、幅1.5～3.3㎝を測る。後者は図化可能な骨は示したが、細片は範囲のみを示した。

まとめ

本遺構は埋土に灰と被熱した骨片・寛永通寶が含まれることから、火葬もしくは再葬の可能性もあると思われる。



第28図　ＳＫ37墓壙、出土遺物

ＳＫ38墓壙

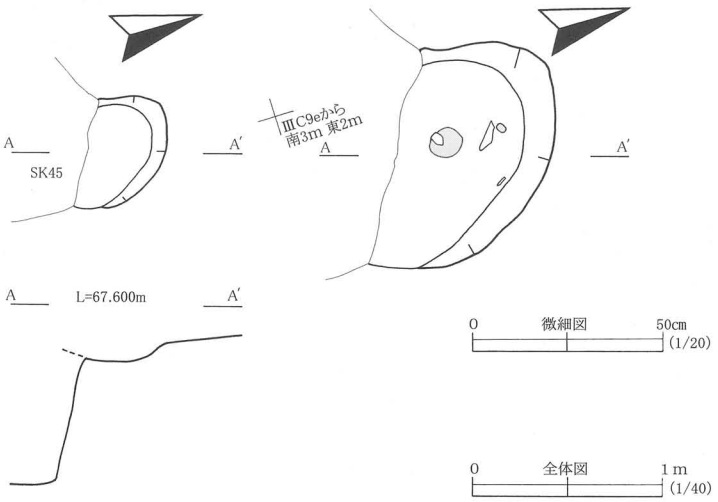
遺　構（第29図、写真図版16）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅢＣ９ｅグリッドに位置する。検出面は標高67.3～67.4ｍのⅢ層からⅣ層にかけての漸移層で、底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。東北東約0.2ｍにＳＫ37、西南西約0.8ｍにＳＫ40Ｂが位置する。

＜重複関係＞ＳＫ39を切り、ＳＫ45に切られる。
＜平面形・規模＞南側をＳＫ45に切られ、はっきりしない。開口部は長軸70cm遺存、短軸38cm残存していることから、長軸70cm前後の楕円形状を呈していたと思われる。深さ10cmを測る。底部は長軸60cm遺存、短軸33cm残存している。
＜壁＞底面から外傾して立ち上がる。上位はⅢ層からⅣ層の漸移層、下位はⅣ層を壁としている。
＜埋土＞暗褐色土を主体とした単層の人為堆積を呈し、礫を少量含む。また、人骨細片と灰が比較的多く含まれる。
＜底面＞中央が若干窪むが、概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高67.3m付近を測る。

遺　物（写真図版44）

＜出土状況＞埋土から土師器片９ｇ、鉄釘31ｇ、ガラス20ｇ、人骨が出土した。このうち65・66の釘２点を掲載した。
＜釘＞65は長さ９cm、釘頭1.2×0.5cmの長方形、断面形は0.5×0.4cmの方形を呈している。66は長さ9.2cm、釘頭1.0×0.5cmの長方形、断面形は0.5×0.4cmの方形を呈している。
＜人骨＞部位不明の骨と細片を検出した。図化可能な骨は示したが、細片は範囲のみを示した。



第29図　ＳＫ38墓壙

ＳＫ39墓壙

遺　構（第30図、写真図版16）

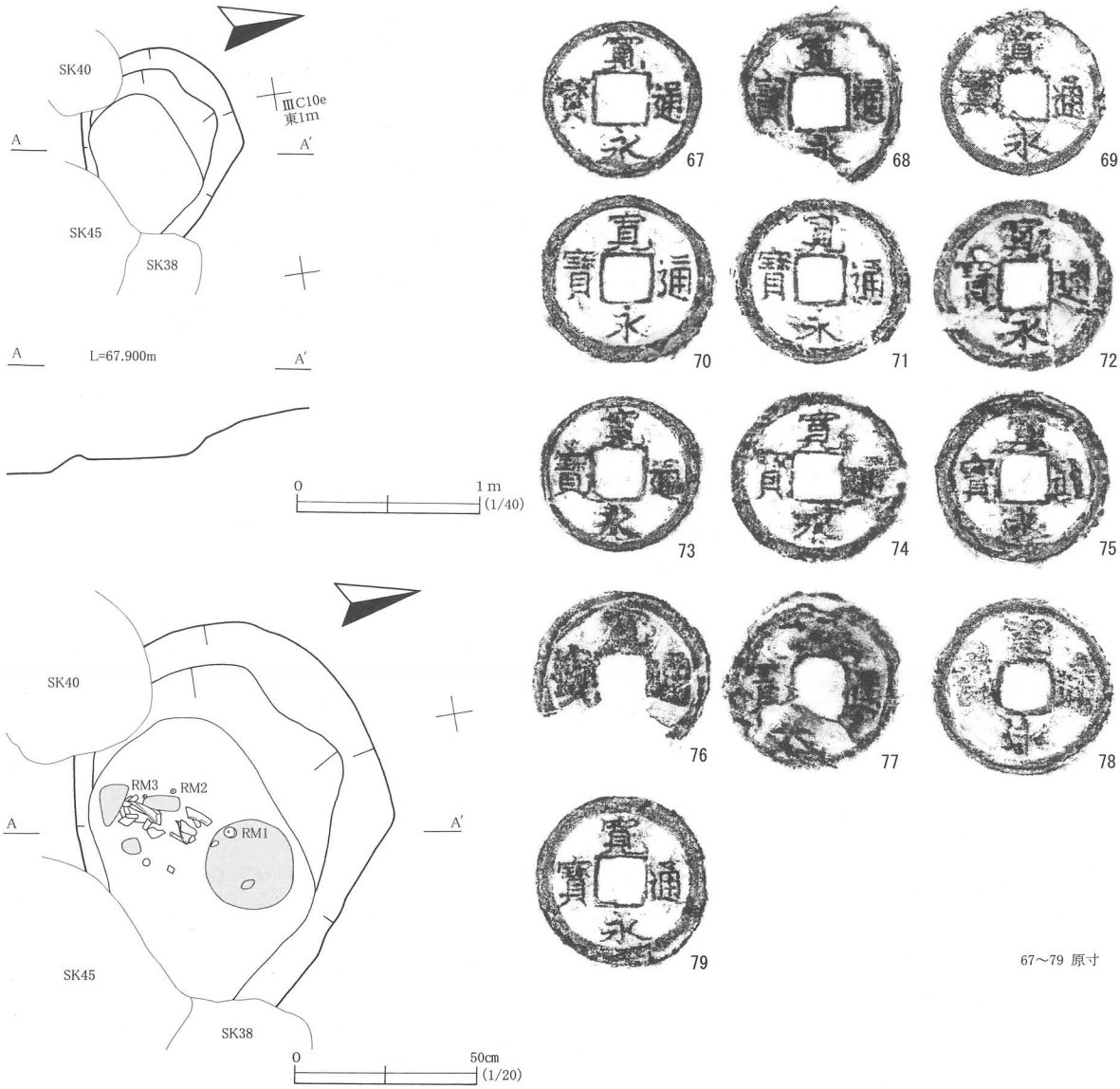
＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅢＣ９ｅグリッドに位置する。検出面は標高67.4～67.6mのⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層で、底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。東北東約0.2mにＳＫ37、南西約0.9mにＳＫ43、南南西約1.1mにＳＫ41が位置する。
＜重複関係＞ＳＫ38・40Ａ・40Ｂ・45に切られている。
＜平面形・規模＞上記の遺構に切られているためはっきりしない。開口部は長軸84cm、短軸83cm残存していることから、長軸85cm以上の楕円形状を呈していたと思われる。深さ21cmを測る。底部は長軸72cm、短軸51cm残存している。
＜壁＞底面から外傾して立ち上がる。上位はⅢ～Ⅳ層の漸移層、下位はⅣ層を壁としている。
＜埋土＞暗褐色土を主体とした単層の人為堆積を呈し、礫を少量含む。また、人骨細片と灰が多く含まれる。
＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は67.4m付近である。

遺　物（写真図版44）

＜出土状況＞埋土から寛永通寶15枚、鉄釘２ｇ、人骨が出土した。このうち67～81の寛永通寶と82の鉄釘を掲載した。

古寛永	新寛永	不明
1	10	4

＜寛永通寶＞右表の通り。
＜釘＞82は長さ４cm、釘頭0.75×0.4cmの長方形、断面形は0.3×0.3cmの方形を呈している。



第30図　ＳＫ39墓壙、出土遺物

＜人骨＞部位不明の骨と細片を検出した。図化可能な骨は示したが、細片は範囲のみを示した。

まとめ

本遺構は埋土に灰と被熱した骨片・寛永通寶が含まれていることから、現時点では火葬もしくは再葬の可能性もあると思われる。

ＳＫ40Ａ

遺　構（第31図、写真図版16）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅢＣ９ｅグリッドに位置する。検出面は標高67.5～67.6ｍのⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層で、底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。検出時から長さ約70㎝、幅約50㎝、厚さ10㎝前後の礫が露出していた。南東約0.3ｍにＳＫ45、南約0.8ｍにＳＫ41、南西約0.2ｍにＳＫ43が位置する。野外調査時には単独の遺構として精査を開始したが、室内整理段階で２つの遺構が重複していることを確認したので、新しい方をＡ、古い方をＢとした。

＜重複関係＞ＳＫ40Ｂを切っている。
＜平面形・規模＞断面観察等の状況から見て開口部径1.4ｍの楕円形状を呈すると思われる。深さ28㎝を測る。底部径1.13ｍを測る。
＜壁＞底面から外傾して立ち上がる。Ⅲ～Ⅳ層の漸移層を壁としている。
＜埋土＞２層に細分した。２はⅢ層起源の暗褐色土である。骨片を多く含み、３～20㎝の礫も含む。１はⅢ層起源の黒褐色土である。上位を中心に10～50㎝の礫を含む。
＜底面＞南壁に向かうにつれて若干下る。比高差は最大14㎝を測る。Ⅲ～Ⅳ層の漸移層を掘り込み底面としている。標高は67.3～67.4ｍ付近である。

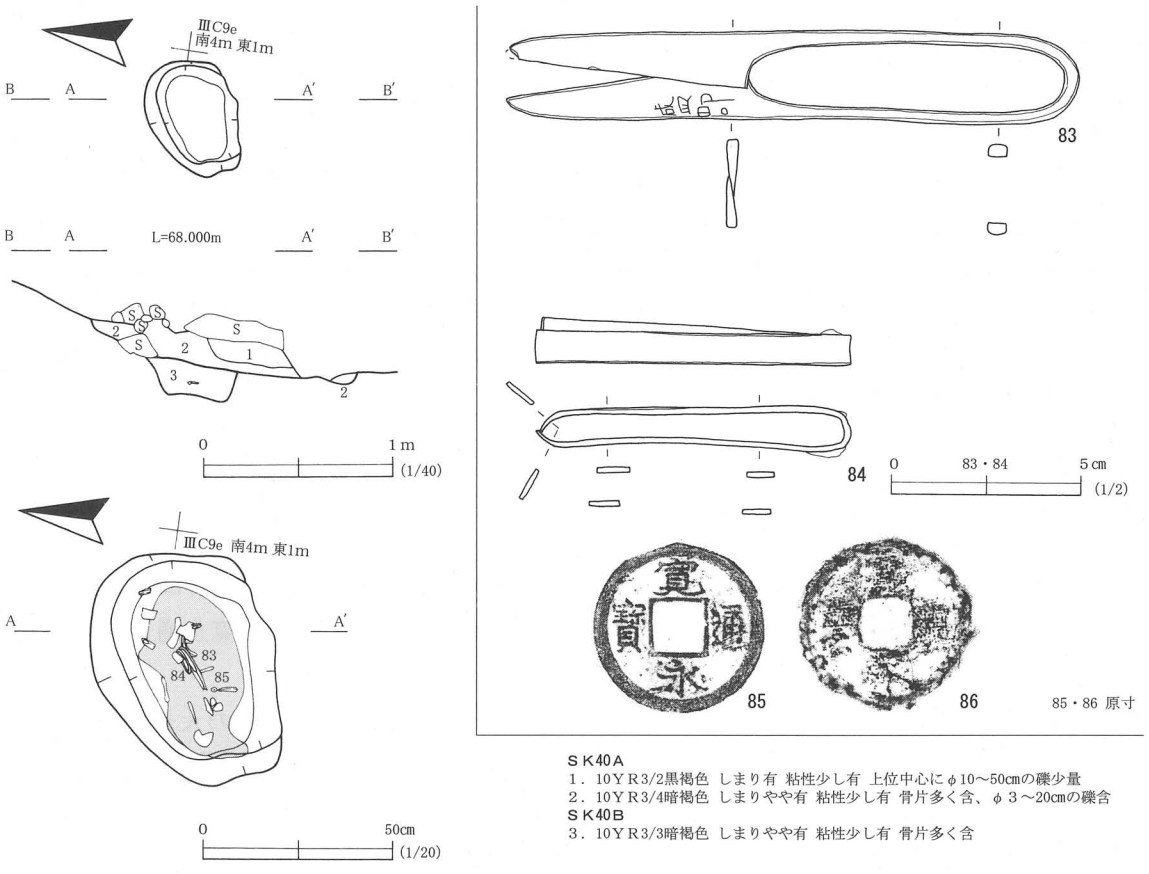
遺　物（第31図、写真図版44）

ＳＫ40Ｂに一括記載。

ＳＫ40Ｂ

遺　構（第31図、写真図版16）

＜位置・検出状況＞ＳＫ40Ａと同じ。
＜重複関係＞ＳＫ40Ａに切られている。
＜平面形・規模＞開口部径64×48㎝楕円形状を呈する。深さ20㎝を測る。底部径48×28㎝を測る。
＜壁＞底面から外傾して立ち上がる。上位はⅢ～Ⅳ層の漸移層、下位はⅣ層を壁としている。
＜埋土＞３はⅢ層起源の暗褐色土である。骨片を多く含む。
＜底面＞凹凸である。また、南壁に向かうにつれて若干下る。比高差は最大５㎝を測る。Ⅳ層を掘り



ＳＫ40Ａ
1．10ＹＲ3/2黒褐色 しまり有 粘性少し有 上位中心にφ10～50㎝の礫少量
2．10ＹＲ3/4暗褐色 しまりやや有 粘性少し有 骨片多く含、φ３～20㎝の礫含
ＳＫ40Ｂ
3．10ＹＲ3/3暗褐色 しまりやや有 粘性少し有 骨片多く含

第31図　ＳＫ40墓壙、出土遺物

込み底面としている。標高は67.2～67.3m付近である。

遺　物（第31図、写真図版44）

＜出土状況＞埋土から寛永通寶３枚、金属製品（毛抜・鋏・釘）77.71ｇが出土した。このうち83の鋏、84の毛抜、85～87の寛永通寶と88～91の鉄釘を掲載した。

＜鋏＞83は長さ15.0cm、幅2.4cm、厚さ２mm、重さ30.57ｇを測る。「盛町？」と刻まれている。

＜毛抜＞84は長さ8.2cm、幅7.5cm、厚さ1.25mm、重さ11.99ｇを測る。

新寛永	不明
2	1

＜寛永通寶＞右表の通り。

＜釘＞88は長さ５cm、釘頭0.9×0.5cmの長方形、断面形は0.4×0.4cmの方形を呈している。89は長さ4.9cm、釘頭0.9×0.45cmの長方形、断面形は0.4×0.3cmの方形を呈している。90は長さ4.8cm、釘頭0.8×0.4cmの長方形、断面形は0.4×0.4cmの方形を呈している。91は長さ4.9cm、釘頭0.8×0.5cmの長方形、断面形は0.6×0.4cmの方形を呈している。

＜人骨＞部位不明の骨と細片を検出した。図化可能な骨は示したが、細片は範囲のみを示した。

まとめ

本遺構は埋土中に灰と被熱した骨片・寛永通寶が含まれていることから、現時点では火葬もしくは再葬の可能性もあると思われる。

ＳＫ41墓壙

遺　構（第32図、写真図版16）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅢＣ10ｅグリッドに位置する。検出面は標高67.2～67.3mのⅣ層上面である。北約0.6mにＳＫ40Ａ・Ｂ、北北東約0.5mにＳＫ45、北西約0.5mにＳＫ43が位置する。

＜重複関係＞ＳＫ50に切られている。重複はしないが南西約0.2mにＳＫ42が近接する。

＜平面形・規模＞開口部0.98×0.93mの隅丸方形を呈する。深さ90cmを測る（底面標高66.3m付近）。底部0.79×0.76mを測る。

＜壁＞底面から鉛直に立ち上がる。Ⅳ層を壁としている。北壁中位では約40cm程の礫が露出している。

＜埋土＞８層に細分した。15・16層はⅣ層起源の褐色土を主体とした掘り方埋土である。16層は１～10cmの礫を含んでいる。14層は棺桶の天井が崩落し、上方から流入したⅣ層起源のにぶい黄褐色土である。９～13層は棺桶が崩落した際に流入した掘り方埋土起源のにぶい黄褐色系土である。なお、遺物の大半と人骨が14層下位から出土している。15・16層が崩落を免れた堀片埋土である点を勘案すると、14層の範囲は棺桶の形状・規模を反映されたものと思われる。状況から、棺桶は長さ50cm前後であると思われる。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。

遺　物（第33・34図、写真図版45・46）

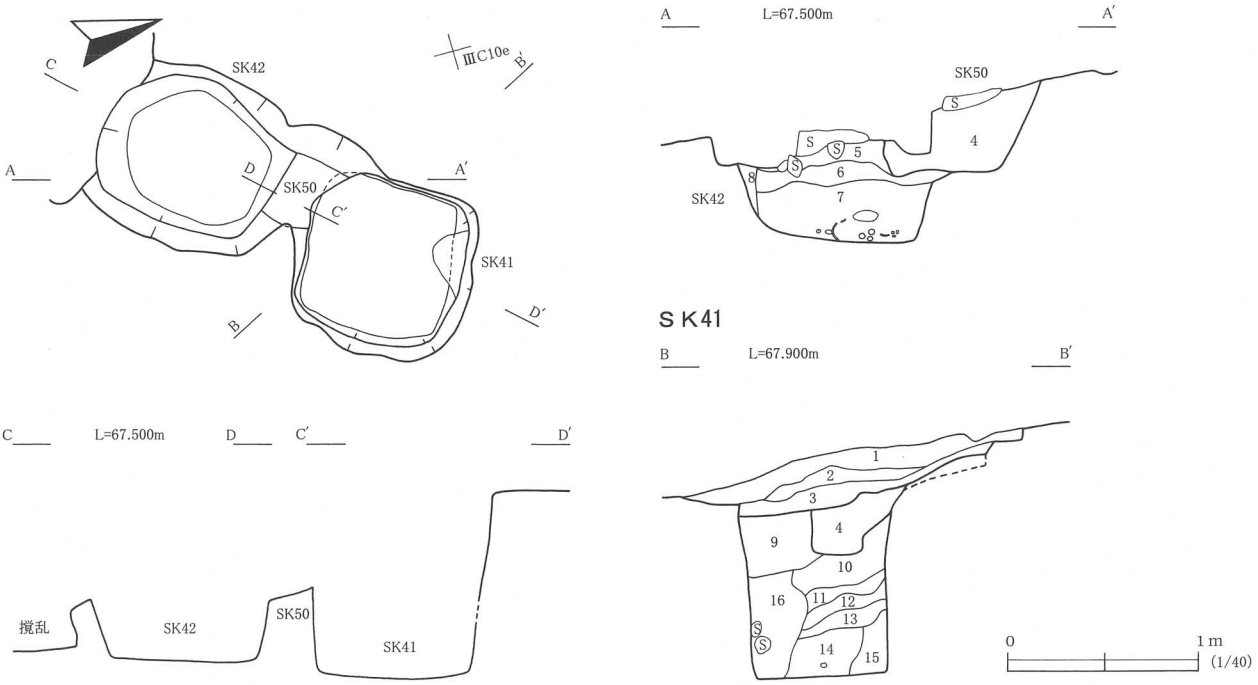
＜出土状況＞埋土から寛永通寶94枚、金属製品（煙管・釘）159ｇ、木製品（棺材）33ｇと人骨が出土した。大半が14層下位から出土している。このうち92の煙管雁首、93～162の寛永通寶、163～165の鉄釘、166・167の棺材を掲載した。

＜煙管雁首＞92は長さ4.15cm、火皿径2.15cm、身径0.9～1.1cmを測る。火皿の大きさの割には油返しの湾曲は緩やかである。

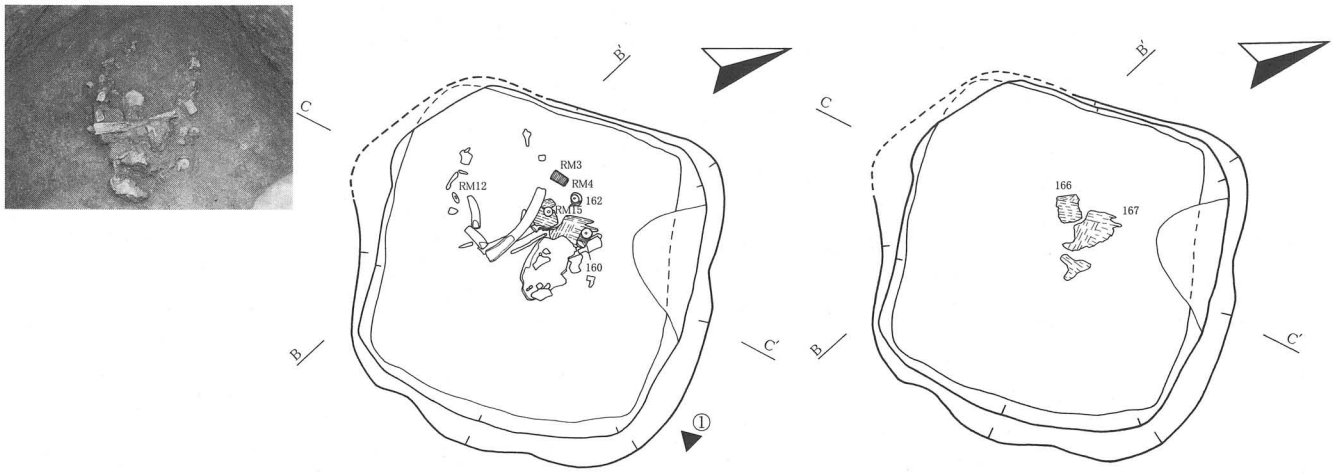
古寛永	文銭	新寛永	21波	11波	鉄銭
6	2	38	3	18	27

＜寛永通寶＞右表の通り。

＜釘＞163は長さ3.7cm、釘頭0.6×0.4cmの長方形、断面形は0.5×0.3cmの長方形を呈している。164は錆や棺材の一部と思われる木質が付着しているために詳細は不明である。長さは4.4cmを測る。165



SK41①

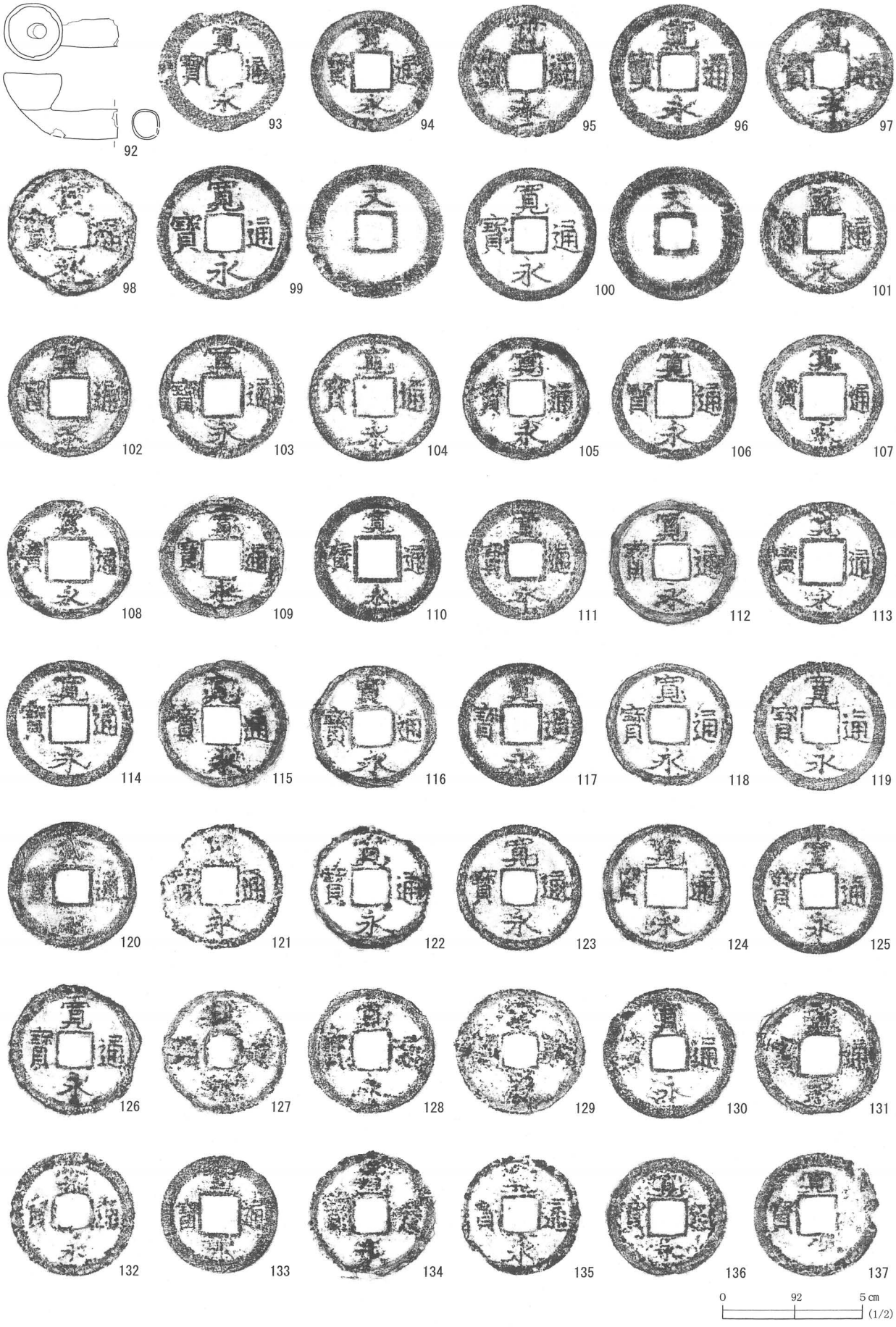


SK41
1．10YR3/3 暗褐色 しまり有 粘性無 10YR5/6粒含（人為堆積）
2．10YR4/4 褐色 しまり有 粘性やや有 10YR5/6粒含 10YR3/3含（人為堆積）
3．10YR4/4 褐色 しまり有 粘性やや有 10YR5/6粒含 10YR3/3混入（人為堆積）
SK50
4．10YR3/2 黒褐色 しまりやや有 粘性少し有 φ3～15cmの礫少量含
10YR4/6をブロック状に少量含 骨細片を含
SK42
5．10YR3/2 黒褐色 しまり有 粘性少し有 10YR5/6粒含 φ6～10cmの礫少量含
6．10YR4/3 にぶい黄褐色 しまり少し有 粘性無 10YR5/6粒含 φ3～6cmの礫少量
7．10YR4/3 にぶい黄褐色 しまり少し有 粘性無 10YR5/6少量含 骨を含
8．10YR4/3 にぶい黄褐色 しまり少し有 粘性無 10YR5/6粒含

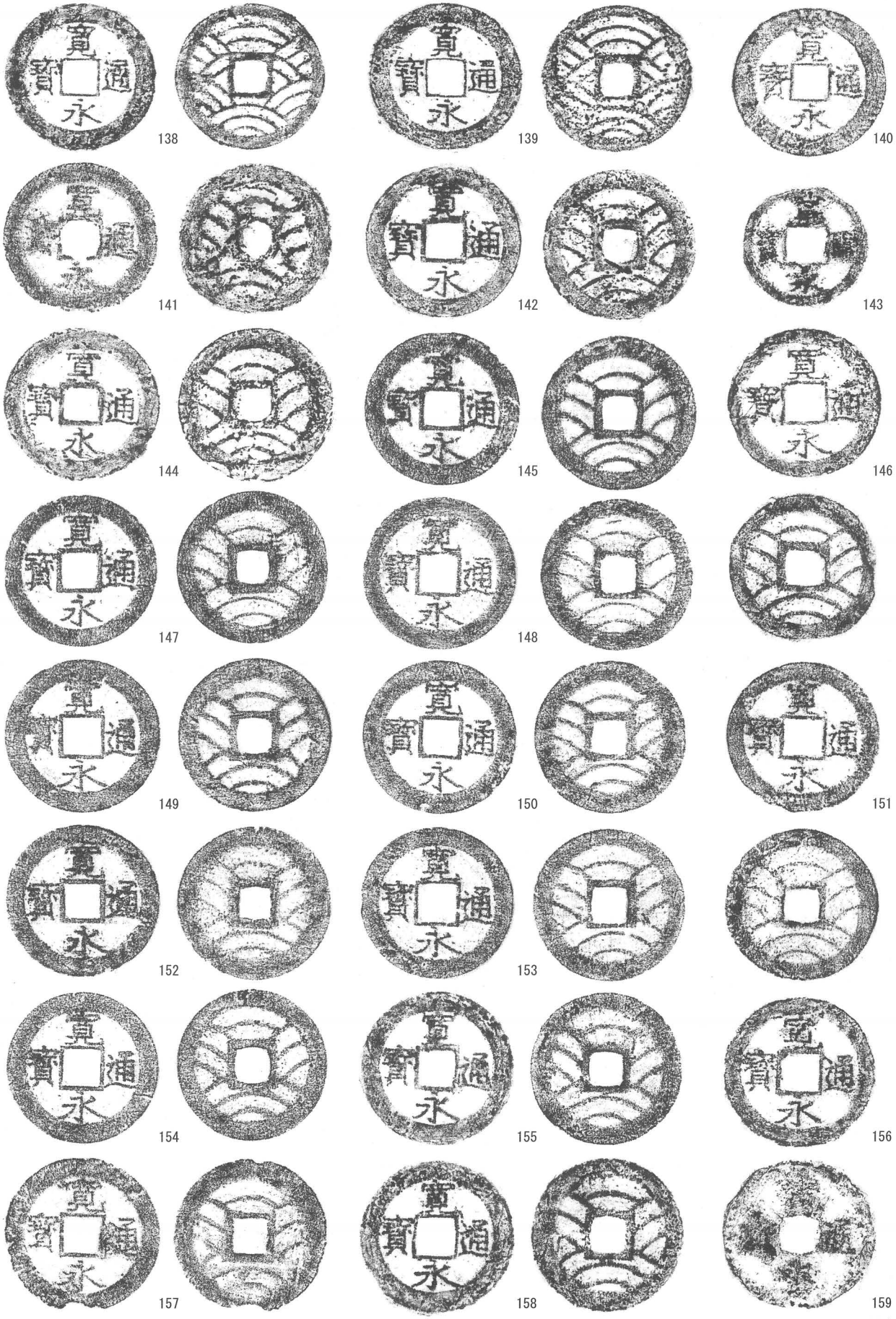
SK41
9．10YR5/6 黄褐色 しまり有 粘性有 φ1～3cmの礫含
10．10YR4/3 にぶい黄褐色 しまり少し有 粘性有 10YR5/6粒含
11．10YR4/4 褐色 しまり有 粘性やや有 10YR5/6粒含 10YR3/3混入
12．10YR4/2 灰黄褐色 しまり・粘性無 炭少量
13．10YR4/4 褐色 しまり有 粘性やや有 10YR5/6粒含 10YR3/3混入
14．10YR4/3 にぶい黄褐色 しまり・粘性無
15．10YR4/4 褐色 しまり・粘性無 10YR5/6粒含
16．10YR5/4 にぶい黄褐色 しまり・粘性有 φ1～3cmの礫含

第32図　SK41・42・50墓壙(1)

は長さ3.2cm、釘頭0.8×0.6cmの長方形、断面形は0.6×0.3cmの長方形を呈している。
＜棺材＞166は長さ7.54cm、幅６cm、厚さ0.65cm、167は長さ7.56cm、幅4.81cm、厚さ2.1cmの板状を呈している。ともに墓壙中央の底面直上から出土した。出土位置から棺桶の底板であると思われる。また、両者とも202と類似しているので、樹種はスギである可能性が高い。
＜人骨＞頭蓋骨の一部と四肢骨、部位不明の骨が出土した。頭蓋骨は後頭部から頸部が残存し、頸部



第33図　ＳＫ41墓壙出土遺物(1)



93～159 原寸

第34図　ＳＫ41墓壙出土遺物(2)

には歯がついていた。四肢骨としたものは長さ23cm、幅３cm、厚さ2.1cmを測る。

まとめ

本遺構は骨の出土状況から被葬者は座葬、棺桶は埋土の堆積状況から長さ50cm程の座棺であったと思われる。

ＳＫ42墓壙

遺　構（第32・35図、写真図版17）

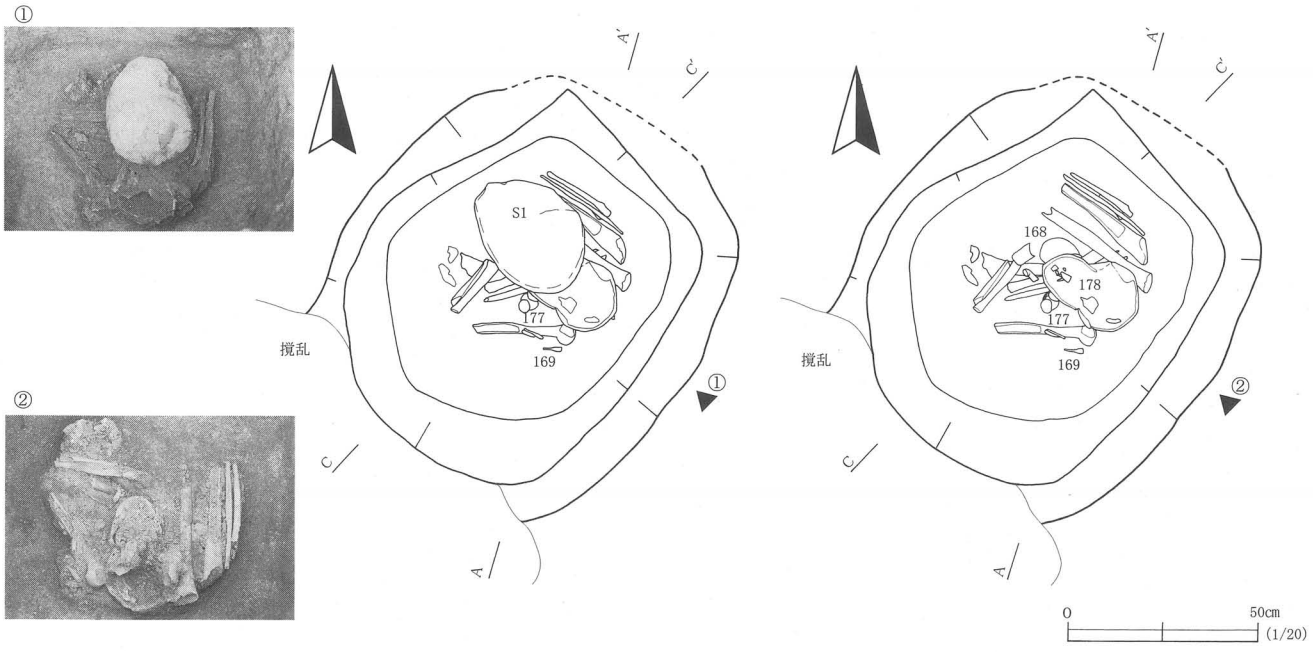
＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅢＣ10ｄグリッドに位置する。検出面は標高66.8～67.0ｍのⅣ層上面である。検出時に長さ46cm、幅34cm、厚さ10cmを測る扁平な石が墓壙のプラン中央付近で出土した。北約１ｍにＳＫ43、西約0.5ｍにＳＫ48Ｃが位置する。

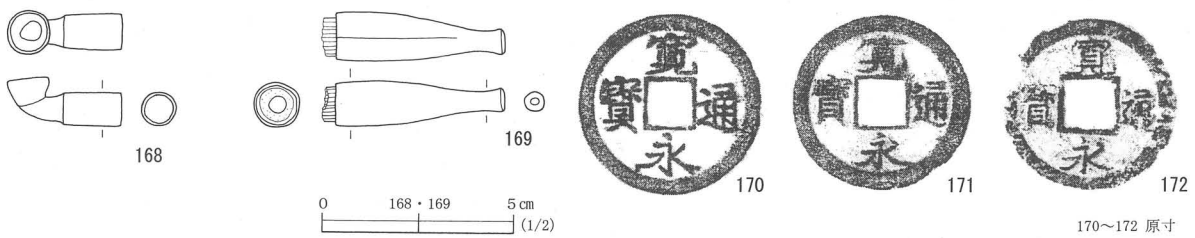
＜重複関係＞ＳＫ48Ｅを切り、ＳＫ50に切られている。重複はしていないが北東約0.2ｍにＳＫ41が近接する。

＜平面形・規模＞開口部0.94×0.92ｍの隅丸方形状を呈する。深さ50cmを測る。底部0.77×0.61ｍを測る。

＜壁＞底面からやや外傾して立ち上がる。Ⅳ層を壁としている。

＜埋土＞４層に細分した。８層はⅣ層起源のにぶい黄褐色土を主体とした掘り方埋土である。７層は棺桶の天井が崩落し、上方から流入したⅣ層起源のにぶい黄褐色土である。５・６層は棺桶が崩落した際に流入した掘り方埋土起源のにぶい黄褐色系土である。遺物の大半と人骨が７層下位から出土し





第35図　ＳＫ42墓壙(2)、出土遺物

ている。また、遺物・骨の上位には径33×24cmの円礫が出土した。これは出土状況から見て棺桶の崩落時に人骨・埋土上に崩れ落ちた蓋石と思われる。他の墓壙の状況を勘案すると、７層の範囲は棺桶の形状・規模が反映されたものと思われる。棺桶は長さ50cm前後の方形を呈していたと推測される。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は66.4m前後を測る。

遺　物（第35図、写真図版46）

＜出土状況＞埋土から土師器10ｇ、陶磁器７ｇ、寛永通寶38枚、金属製品(煙管)106ｇ、木製品(棺材)２ｇと人骨が出土した。遺物の大半は７層下位から出土した。このうち168の煙管雁首、169の煙管吸口、170～178の寛永通寶、179の棺材を掲載した。

＜煙管雁首＞168は長さ３cm、火皿径1.1cm、身径0.8～0.9cmを測る。火皿が小さく油返しの湾曲は緩やかである。また、羅宇との接続部が太くなっている。

＜煙管吸口＞169は長さ4.4cm、身径0.5～1.25cmを測る。羅宇が一部残存している。口付が玉状に膨らむ。

＜寛永通寶＞右表の通り。

古寛永	新寛永	鉄銭
1	2	36

＜棺材＞179は長さ2.56cm、幅2.67cm、厚さ0.20cmの板状を呈している。

墓壙中央の底面直上から出土した。出土位置から棺桶の底板であると思われる。202と類似しているので、樹種はスギである可能性が高い。

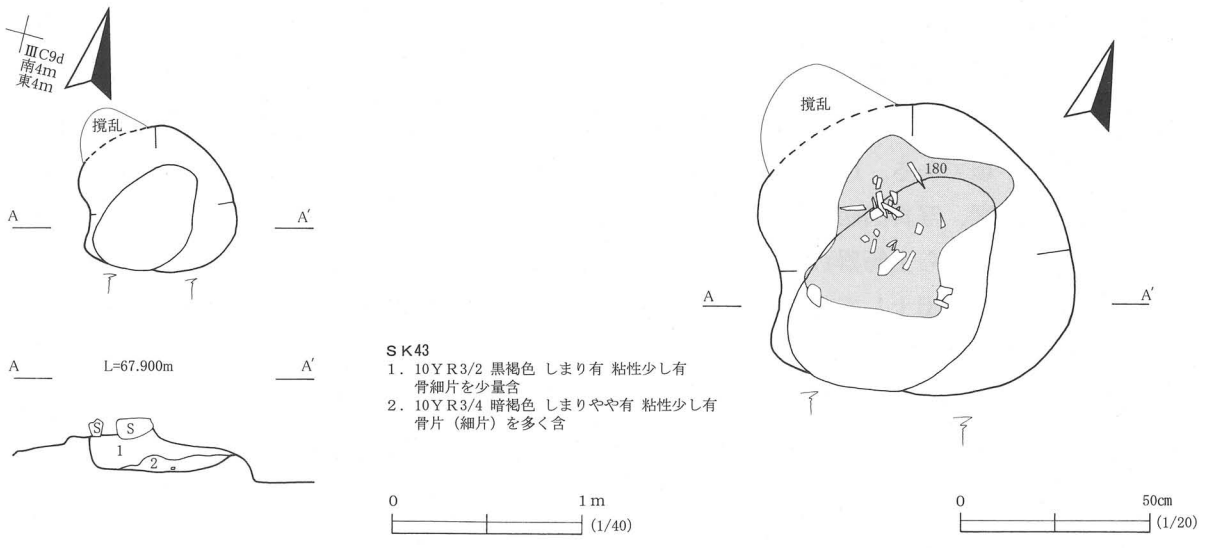
＜人骨＞前述の円礫に押しつぶされた状態で検出されたが、頭蓋骨・四肢骨の残存状況は良好である。それぞれの位置関係は左大腿骨と左上腕骨は頭蓋骨北側でバラバラに検出された。しかし、右大腿骨と右上腕骨は上から頭蓋骨、上腕骨、大腿骨の順に重なり、右大腿骨は頭蓋骨の長軸に対して直角に、右上腕骨は斜め45度に検出され、埋葬姿勢をある程度復元できると思われる。可能性として座葬が一番高いと思われる。

まとめ

本遺構は骨の出土状況から被葬者は座葬の可能性が高い。棺桶は埋土の堆積状況から長さ50cm前後の座棺であると推測される。

ＳＫ43墓壙

遺　構（第36図、写真図版17・18）



第36図　ＳＫ43墓壙

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅢＣ９ｅグリッドに位置する。検出面は標高67.5～67.6ｍのⅣ層上面である。北東約0.2ｍにＳＫ40Ａ・Ｂ、東北東約0.8ｍにＳＫ45、南東約0.6ｍにＳＫ41、南南東約0.7ｍにＳＫ50、南約１ｍにＳＫ42、南南西約1.1ｍにＳＫ48Ｃが位置する。重複する遺構はない。
＜平面形・規模＞北側を攪乱、南側を斜面の崩落で消失し、はっきりしない。開口部は長軸77cm残存、短軸77cm遺存していることから、長軸80cm前後の楕円形状を呈していたと思われる。深さ19cmを測る。底部は長軸60cm残存、短軸50cm遺存している。
＜壁＞概ね底面から外傾しているが、西壁は鉛直気味に立ち上がる。Ⅳ層を壁としている。
＜埋土＞２層に細分した。２層は骨を多く含む暗褐色土である。１層は骨を少量含む黒褐色土である。
＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は67.4ｍ付近である。

遺　物（写真図版47）

＜出土状況＞埋土から鉄釘27ｇと人骨が出土した。このうち180・181の鉄釘を掲載した。
＜釘＞180は長さ7.3cm、釘頭1.2×0.7cmの長方形、断面形は0.5×0.5cmの方形を呈している。181は長さ7.2cm、釘頭1.3×0.65cmの長方形、断面形は0.5×0.45cmの長方形を呈している。いずれも「くの字」状に折れ曲がっている。
＜人骨＞部位不明の骨と細片を検出した。図化可能な骨は示したが、細片は範囲のみを示した。

ＳＫ45墓壙

遺　構（第37図、写真図版18）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅢＣ９ｅグリッドに位置する。検出面は標高67.2～67.5ｍのⅣ層上面である。検出時から長さ64cm、幅62cm、厚さ14cmを測る扁平な石が露頭していた。南南西約0.5ｍにＳＫ41、西南西約0.8ｍにＳＫ43、西北西約0.3ｍにＳＫ40Ｂが位置する。
＜重複関係＞北側でＳＫ38・39と重複関係にあり、両者を切っている。
＜平面形・規模＞開口部1.00×0.98ｍの隅丸方形を呈する。深さ80cmを測る。底部0.66×0.63ｍを測る。
＜壁＞概ね底面から外傾しているが、西壁は鉛直気味に立ち上がる。Ⅳ層を壁としている。
＜埋土＞３層に細分した。２・３層はⅣ層起源の褐色土にⅢ層起源の暗褐色土が混入した掘り方埋土である。また、２層は１層との層界を中心に３～10cmの礫を含んでいる。１層は棺桶の天井が崩落し、上方から流入したⅢ層起源の暗褐色土である。なお、遺物の大半と人骨が１層下位から出土している。２・３層の崩落が微弱な点を勘案すると、１層の範囲は棺桶の形状・規模が反映されたものと思われる。よって、棺桶は長さ60cm前後の方形を呈していた可能性が想定される。
＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘りこみ底面としている。標高は66.7～66.8ｍ前後を測る。

遺　物（第37図、写真図版46）

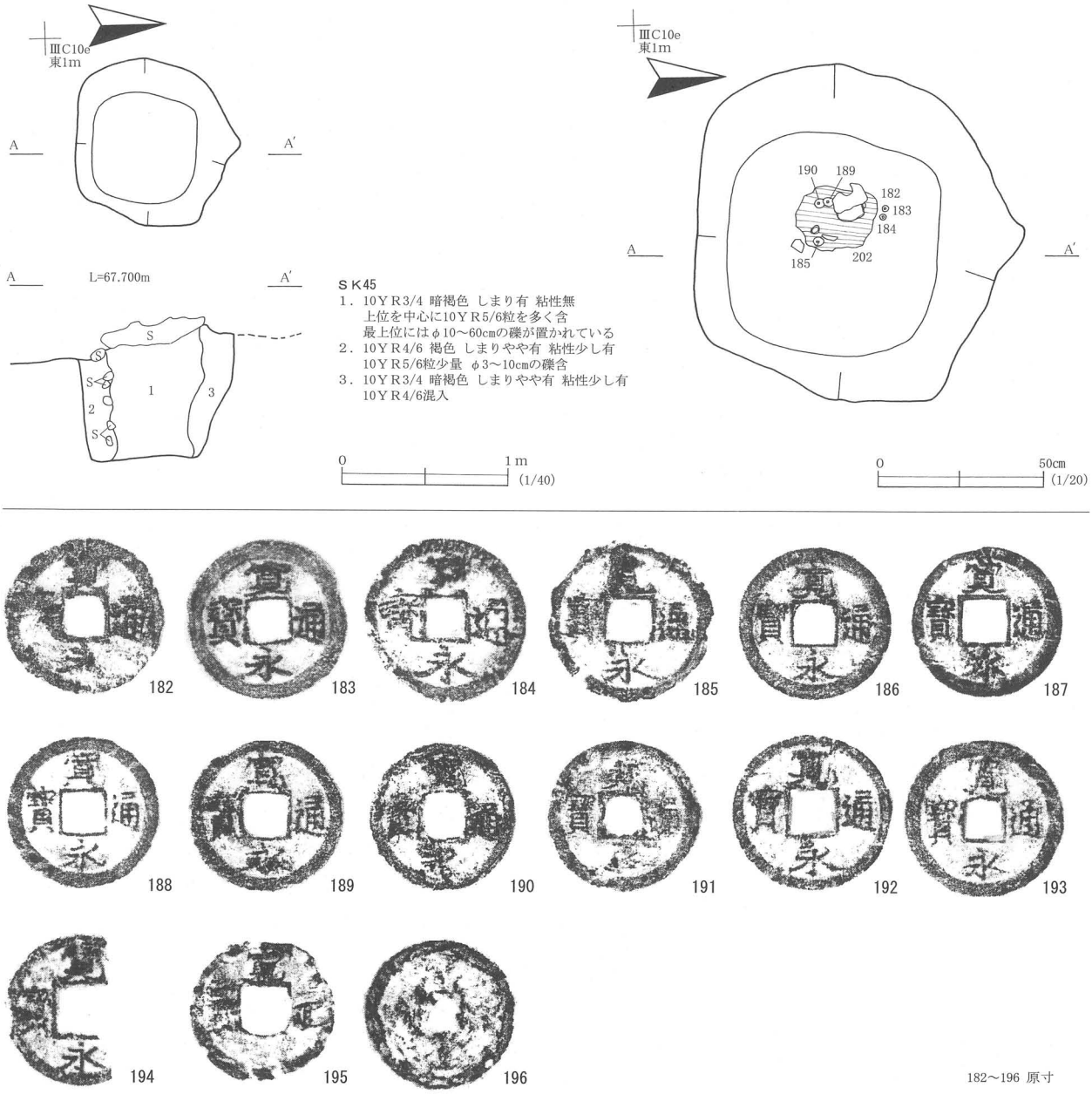
＜出土状況＞埋土から土師器47ｇ、石器15ｇ、寛永通寶20枚、木製品29ｇと人骨が出土した。遺物の大半は１層下位から出土している。このうち182～201の寛永通寶、202の棺材１点を掲載した。
＜寛永通寶＞右表の通り。

古寛永	新寛永	鉄一文	鉄銭	不明
3	9	2	1	5

＜棺材＞202は長さ9.9cm、幅4.5cm、厚さ0.9cmの板状を呈している。底面直上から出土している。出土位置から棺桶の底板であると思われる。樹種同定の結果、スギであることが判明した（Ⅵ３参照）。
＜人骨＞頭蓋骨の一部と部位不明の骨片が出土した。

まとめ

本遺構は墓域北側から密集して検出された墓壙の中で一番新しい。そのため、他の墓壙と比べて墓



第37図　ＳＫ45墓壙、出土遺物

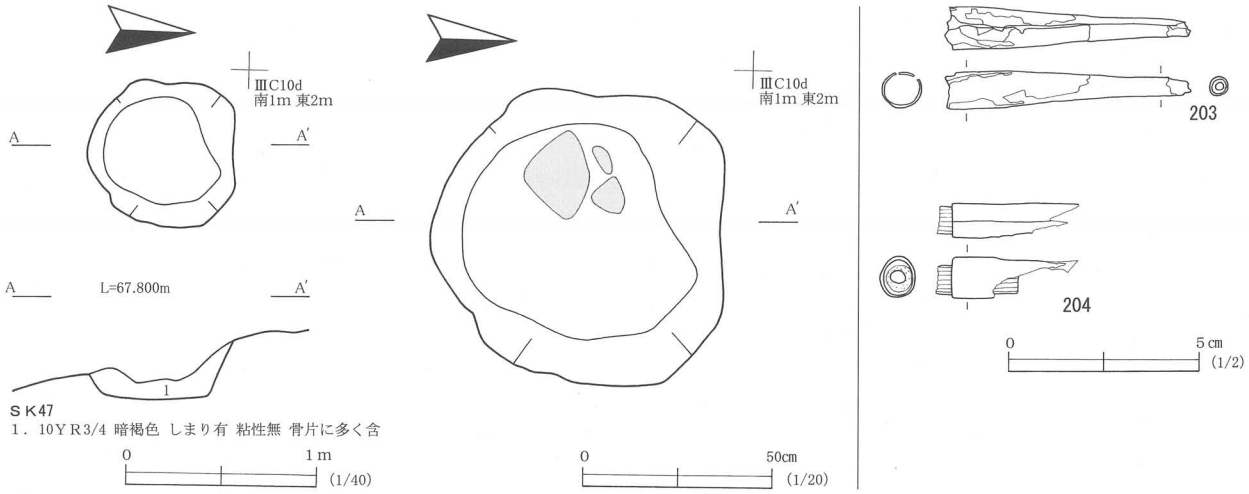
壙本体の残存状況は良好で、墓壙の形状・規模をおおよそ把握することができた。棺桶は遺物出土状況と断面観察から、長さ60cm前後の座棺の可能性が想定される。被葬者の埋葬姿勢は人骨の残存状況が不良のため不明である。

ＳＫ47墓壙

遺　構（第38図、写真図版19）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅢＣ10ｄグリッドに位置する。検出面は標高67.4～67.6ｍのⅣ層上面である。東約0.5ｍにＳＫ48Ｃ、南東約0.9ｍにＳＫ48Ｂ、南西約0.8ｍにＳＫ49が位置する。

＜重複関係＞ＳＫ48Ｄを切っている。



第38図　ＳＫ47墓壙、出土遺物

＜平面形・規模＞開口部径83×75cmの円形状を呈する。深さ30cmを測る。底部径62×56cmを測る。
＜壁＞底面から外傾して立ち上がる。Ⅳ層を壁としている。
＜埋土＞Ⅲ層起源の暗褐色土を主体とした人為堆積を呈する。骨片を多く含んでいる。
＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は67.3m付近である。

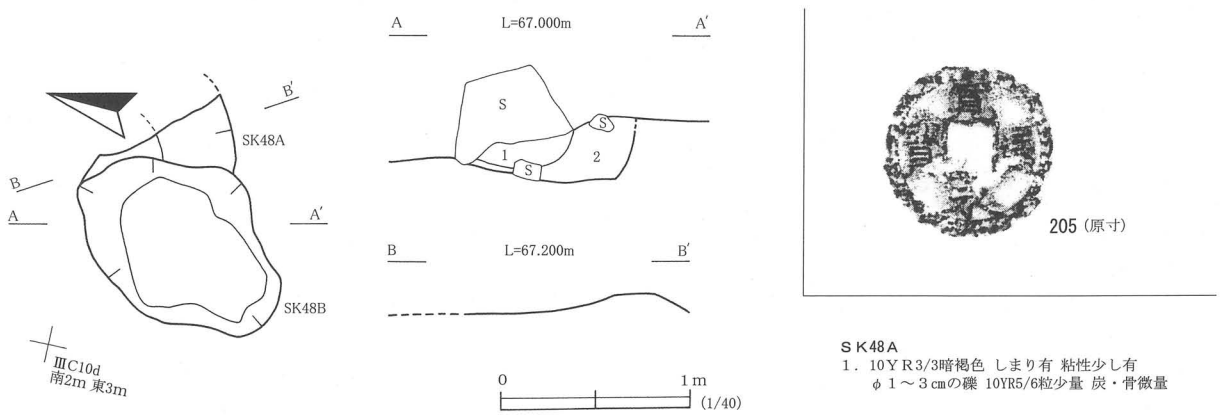
遺　物（第38図、写真図版47）

＜出土状況＞埋土から金属製品(煙管２点) ７ｇが出土した。このうち203・204の煙管吸口を掲載した。
＜煙管吸口＞203は長さ6.3cm、身径0.5～1.1cmを測る。表面の剥落が著しい。204は長さ3.3cm、身径1.1cmを測る。羅宇の一部が残存している。
＜人骨＞部位不明の骨と細片を検出した。図化できなかった細片の範囲を図示した。

ＳＫ48Ａ墓壙

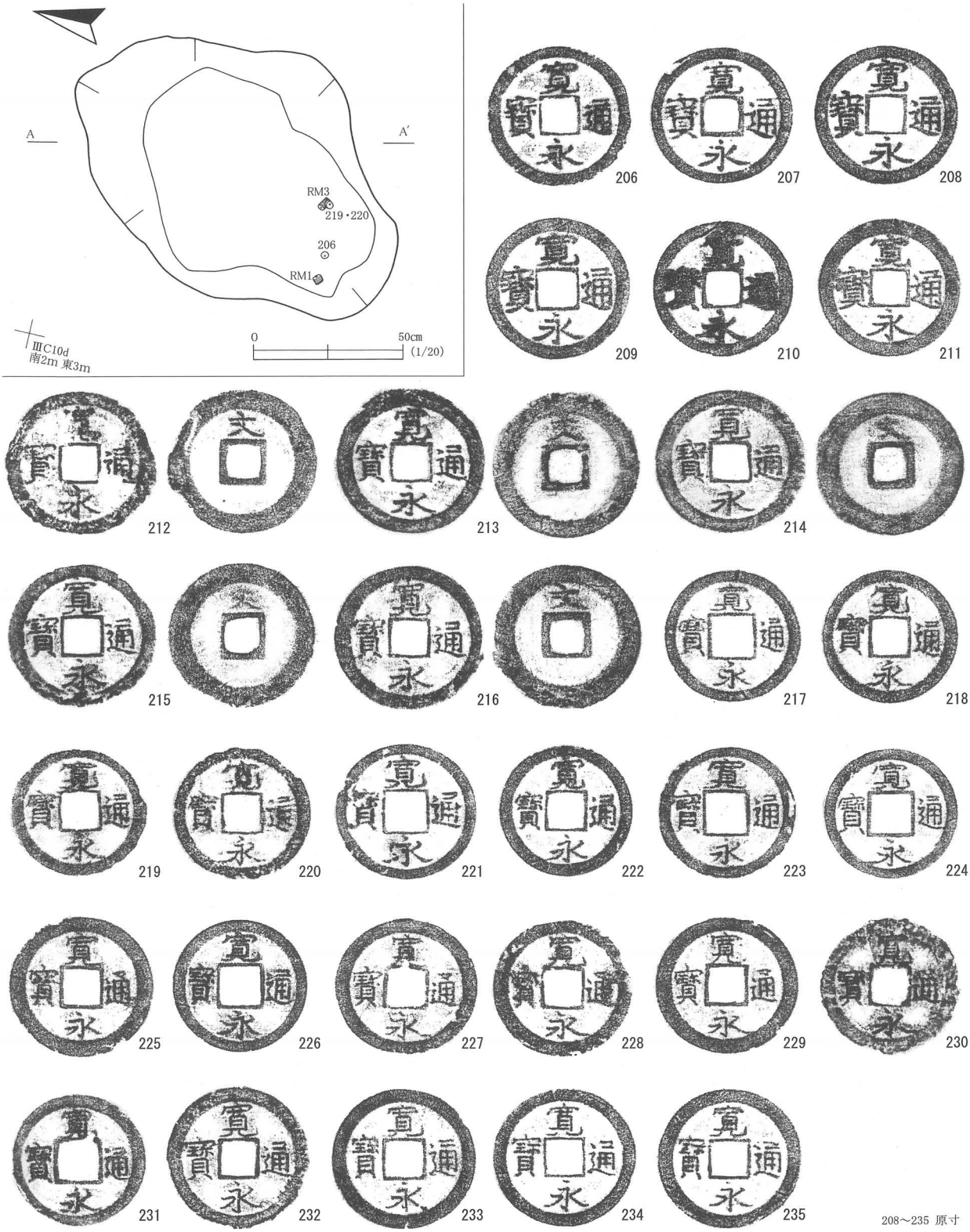
遺　構（第39図、写真図版19）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅢＣ10ｄグリッドに位置する。検出面は標高66.9～67.2mのⅣ層上面である。長さ80cm、幅50cm、厚さ48cmを測る石が、検出時に墓壙のプラン中央付近で検出した。この石は当初ＳＫ48Ｂに伴うものと考えていたが、断面観察時にＳＫ48Ｂを切る本遺構を認識した。しかし、周辺の撹乱で大半が消失しており、僅かに北東壁の一部が残存していたのを確認した。西北西約



第39図　ＳＫ48Ａ・Ｂ墓壙(1)、出土遺物

２ｍにＳＫ49、北西約１ｍにＳＫ47が位置する。
＜重複関係＞ＳＫ48Ｂ・Ｅを切っている。
＜平面形・規模＞攪乱の影響で遺構の大半を消失しているためはっきりしない。開口部は長軸90cm、短軸10cm残存していることから、長軸90cm以上であったと思われる。深さ20cmを測る。



第40図　ＳＫ48Ｂ墓壙、出土遺物

底部は長軸48cm、短軸10cm残存している。
＜壁＞底面からやや外傾して立ち上がる。Ⅳ層と他遺構の埋土を掘り込み壁としている。
＜埋土＞Ⅲ層起源の暗褐色土を主体とした人為堆積を呈する。骨片を含む。
＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層とＳＫ48Ｂの埋土を掘り込み底面としている。標高は66.9ｍを測る。

遺　物（第39図、写真図版47）

＜出土状況＞埋土から寛永通寶１枚(205)が出土し、掲載した。
＜寛永通寶＞205は新寛永通寶である。

ＳＫ48Ｂ墓壙

遺　構（第39・40図、写真図版19）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅢＣ10ｄグリッドに位置する。検出面は標高66.9～67.2ｍのⅣ層上面である。西北西約２ｍにＳＫ49、北西約１ｍにＳＫ47が位置する。
＜重複関係＞ＳＫ48Ｄを切り、ＳＫ48Ａに切られている。
＜平面形・規模＞開口部径1.23×0.85ｍの不整な楕円形状を呈する。深さ32cmを測る。底部径0.88×0.59ｍを測る。
＜壁＞東壁は鉛直気味に、それ以外は底面から外傾して立ち上がる。
＜埋土＞Ⅲ層起源の暗褐色土を主体とした人為堆積を呈する。
＜底面＞北側から南側にかけて緩やかに傾斜している。比高差10cmを測る。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は66.8ｍ付近である。

遺　物（第40図、写真図版47）

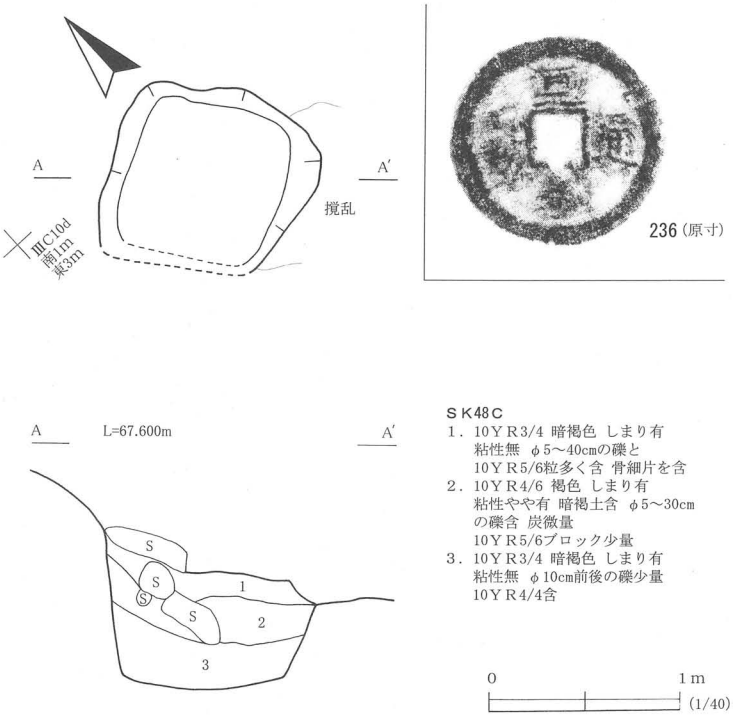
＜出土状況＞埋土から寛永通寶30枚が出土した。このうち206～235の寛永通寶を掲載した。
＜寛永通寶＞右表の通り。

古寛永	文銭	新寛永
6	5	19

ＳＫ48Ｃ墓壙

遺　構（第41図、写真図版19）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅢＣ10ｄグリッドに位置する。検出面は標高66.8～67.1ｍのⅣ層上面である。検出時から長さ約40cm、厚さ13cm前後の石が露出していた。西北西約２ｍにＳＫ49、北西約１ｍにＳＫ47が位置する。
＜重複関係＞ＳＫ47Ｄ・Ｅを切っている。
＜平面形・規模＞撹乱の影響で西壁の大半を消失し、はっきりしない。開口部は長軸1.04ｍ遺存、短軸0.96ｍ残存していることから、一辺１ｍ前後の隅丸方形であったと思われる。深さ83cmを測る。底部は長軸0.82ｍ遺存、短軸0.81ｍ残存している。
＜壁＞底面から外傾して立ち上がる。



第41図　ＳＫ48Ｃ墓壙、出土遺物

＜埋土＞３層に細分した。３層は棺桶が崩落する過程で流入したⅢ層起源の暗褐色土である。掘り方崩落土起源の褐色土も含まれる。２層は掘り方の崩壊土を起源とする褐色土である。長さ５～30㎝前後の礫を含む。１層はⅢ層起源の暗褐色土を主体とした人為堆積である。長さ５～40㎝の礫を含む。
＜底面＞中央が若干窪む。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は66.3m付近を測る。

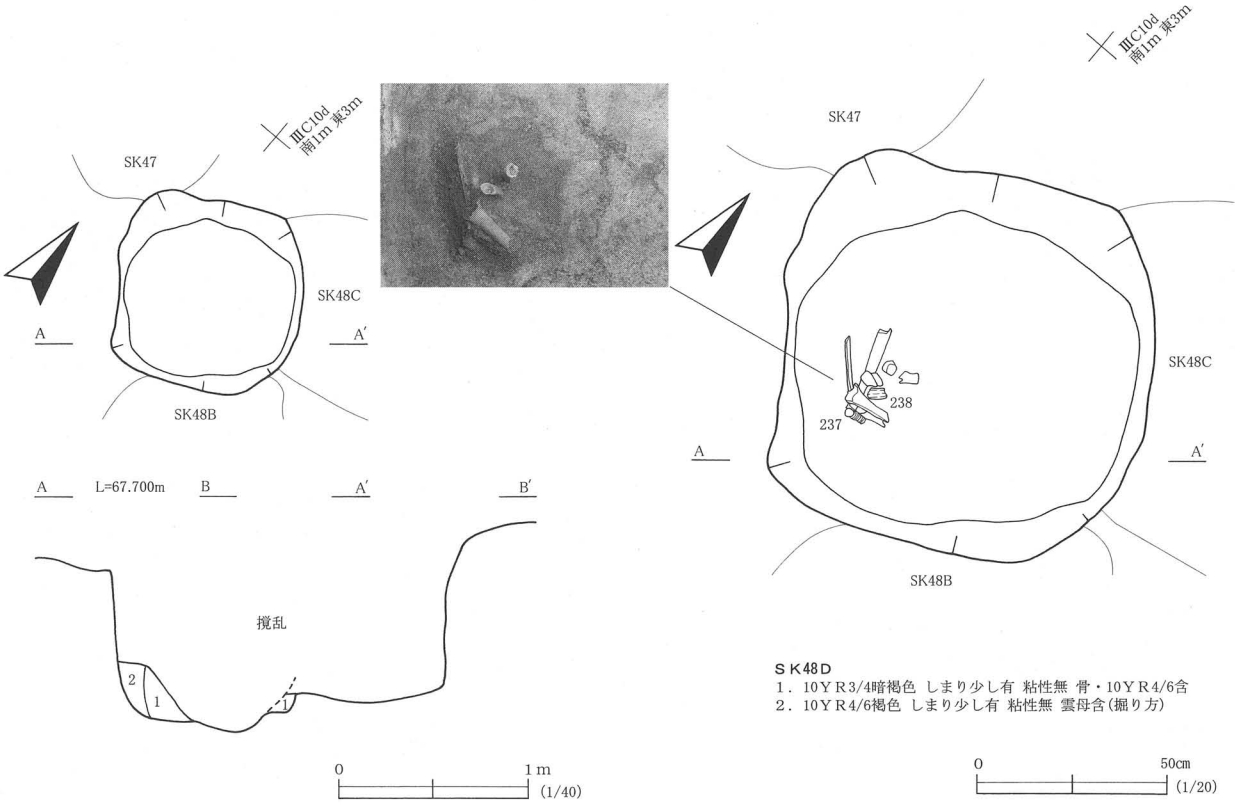
遺　物（写真図版48）

＜出土状況＞埋土から寛永通寶１枚、鉄釘25.04ｇ、陶磁器３ｇが出土した。このうち236の新寛永通寶を掲載した。

ＳＫ48Ｄ墓壙

遺　構（第42図、写真図版19・20）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅢＣ10ｄグリッドに位置する。検出面は標高67.5～67.7mのⅣ層上面である。埋土の大半は撹乱によって消失。西北西約２mにＳＫ49、北西約１mにＳＫ47が位置する。
＜重複関係＞ＳＫ47・48Ｂ・48Ｃに切られている。
＜平面形・規模＞開口部径1.00×0.96mの円形状を呈する。深さ76㎝を測る。底部径0.90×0.83mを測る。
＜壁＞底面から鉛直に立ち上がる。Ⅳ層を壁としている。
＜埋土＞２層に細分した。大半が撹乱によって消失している。２層はⅣ層起源の褐色土を主体とした堀片である。１層は棺桶の天井が崩落し、上方から流入したⅢ層起源の暗褐色土である。
＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。一部撹乱によって消失した部分もある。標高は66.5m付近を測る。



第42図　ＳＫ48Ｄ墓壙

遺　物（第42図、写真図版48）

＜出土状況＞埋土から寛永通寶72ｇ、鉄釘17ｇ、木製品1ｇと人骨が出土した。このうち237の寛永通寶、238の棺材を掲載した。

＜寛永通寶＞銅銭主体で一部鉄銭が含まれており、24枚程を数える。

＜棺材＞238は長さ4.95cm、幅4.55cm、厚さ0.39cmの板状を呈している。墓壙の底面直上から出土している。棺桶の底板と思われる。202に類似しているので、樹種はスギの可能性が高い。

＜人骨＞四肢骨の一部と思われる骨５点と部位不明の骨を検出した。なかでも長さ15cm、幅３cm、厚さ2.1cmと、長さ25cm、幅３cm、厚さ５cmを測る大腿骨は直立した状態で確認した。

まとめ

本遺構は骨の出土状況から被葬者は蹲葬の可能性を考えたが、情報量は少なく確証はない。棺桶は埋土の堆積状況等から長さ50～60cm前後の円形を呈していた可能性がある。

ＳＫ48Ｅ墓壙

遺　構（第43図、写真図版20）

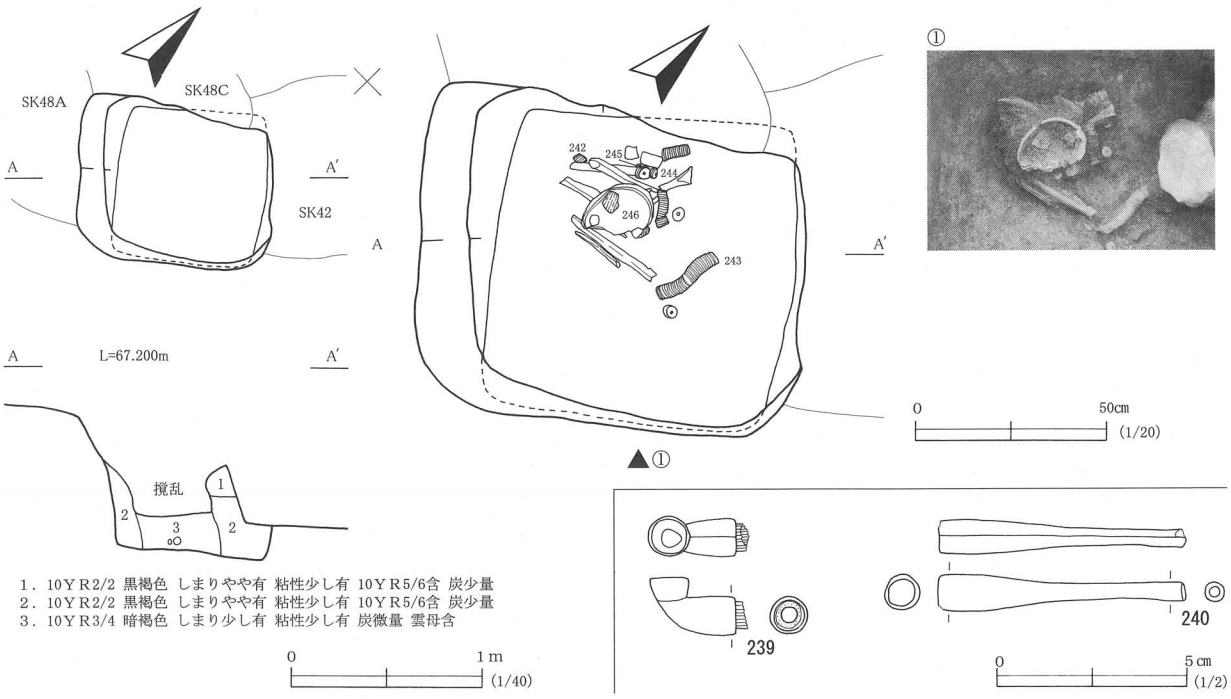
＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅢＣ10ｄグリッドに位置する。検出面は標高66.7～66.9ｍのⅣ層上面である。中央付近に撹乱が入り、埋土中位にまで及んでいる。西北西約２ｍにＳＫ49、北西約１ｍにＳＫ47が位置する。

＜重複関係＞ＳＫ42・48Ａ・48Ｃに切られている。

＜平面形・規模＞開口部1.02×0.80ｍの長方形を呈する。深さ65cmを測る。底部0.80×0.78ｍを測る。

＜壁＞下半は鉛直気味に、上半は外傾気味に立ち上がる。Ⅳ層を掘り込み壁としている。

＜埋土＞３層に細分した。３層は棺桶が崩落する過程で流入したⅢ層起源の暗褐色土である。２層はⅢ層起源の黒褐色土にⅣ層起源の黄褐色土が含まれた掘り方埋土である。１層はⅢ層起源の黒褐色土



第43図　ＳＫ48Ｅ墓壙、出土遺物

にⅣ層起源の黄褐色土が含まれた掘り片埋土である。
＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は66.2m付近を測る。

遺　物（第43図、写真図版48）

＜出土状況＞埋土から寛永通寶516ｇ、煙管７ｇ、鉄釘118ｇ、木製品20ｇ、陶磁器10ｇと人骨が出土した。このうち239の煙管雁首、240の煙管吸口、241～245の寛永通寶、246・247の棺材を掲載した。
＜煙管雁首＞239は長さ4.5cm、火皿径1.1cm、身径0.8～1.0cmを測る。火皿が小さく油返しの湾曲は緩やかである。羅宇が残存している。
＜煙管吸口＞240は長さ6.5cm、身径0.4～0.95cmを測る。口付が玉状に膨らみ、羅宇が残存している。
＜寛永通寶＞サシ状に出土した。すべて鉄銭で、約200枚を数える。個別に分離せずサシの写真掲載・重量計測のみとした。
＜棺材＞246は長さ7.15cm、幅1.58cm、厚さ1.04cm、247は長さ7.21cm、幅4.98cm、厚さ0.68cmの板状を呈している。底面直上から出土している。出土位置から棺桶の部材(底？)であると思われる。
＜人骨＞棺桶の崩落時に押しつぶされた状態で検出されたが、頭蓋骨・四肢骨の残存状況は良好である。それぞれの位置関係は頭蓋骨下に四肢骨があり、四肢骨は上から概ね上腕骨、大腿骨の順に重なり、埋葬姿勢を復元できると思われる。座葬の可能性が高いと思われる。

ＳＫ50墓壙

遺　構（第44図）

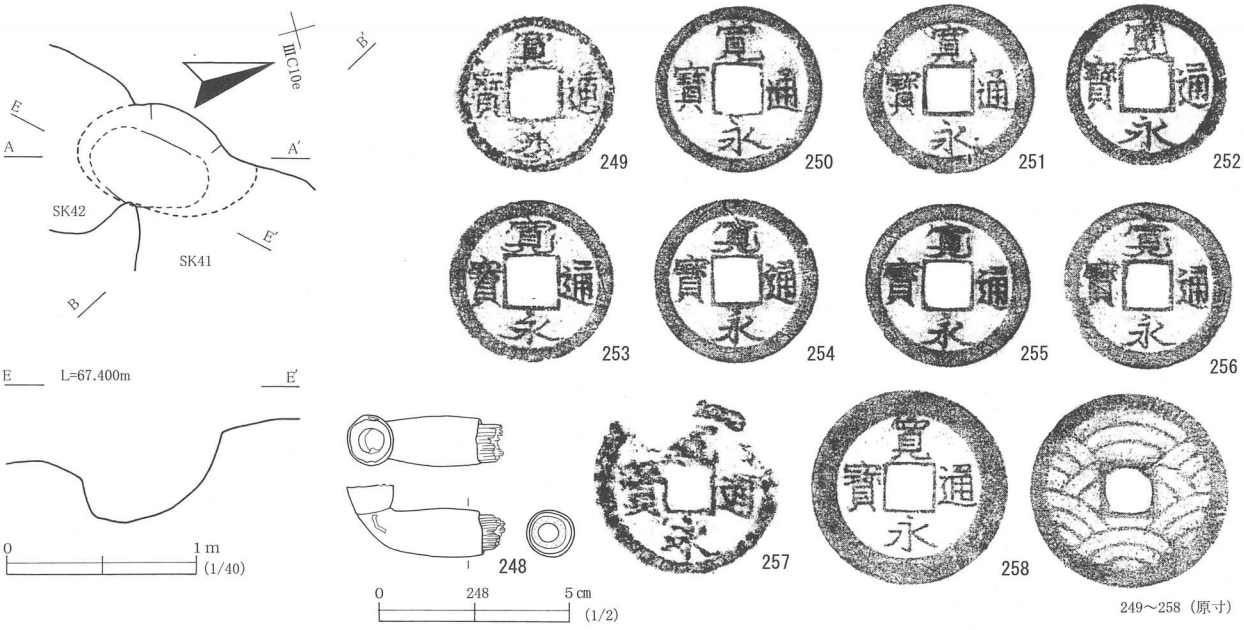
＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅢＣ10ｅグリッドに位置する。検出面は標高66.9～67.2mのⅣ層上面である。検出時に長さ47cm、幅30cm、厚さ８cmを測る扁平な石を墓壙のプラン中央付近で確認している。北北東約1.5mにＳＫ40Ｂ、西南西約１mにＳＫ48Ｃ、北北西約0.7mにＳＫ43が位置する。
＜重複関係＞ＳＫ41・42を切っている。
＜平面形・規模＞本遺構の認識が遅れたため北西・南東壁を消失し、はっきりしない。開口部は長軸82cm残存、短軸58cm遺存することから、長軸80cm前後の楕円形状を呈すると思われる。深さ44cmを測る。底部は長軸62cm残存、短軸38cm遺存している。
＜壁＞概ね底面から外傾しているが、南壁は鉛直気味に立ち上がる。Ⅳ層を壁としている。
＜埋土＞Ⅲ層起源の暗褐色土の単層である。Ⅳ層起源の褐色ブロックと３～15cmの礫と骨片が含まれている。
＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は66.7m付近を測る。

遺　物（第44図、写真図版48）

＜出土状況＞埋土・撹乱から寛永通寶11枚、金属製品(煙管・釘)６ｇと人骨が出土した。このうち248の煙管雁首、249～259の寛永通寶、260の鉄釘を掲載した。
＜煙管雁首＞248は長さ４cm、火皿径1.2cm、身径0.85～1.25cmを測る。火皿が小さく油返しの湾曲は緩やかである。

古寛永	新寛永	21波
1	9	1

＜寛永通寶＞右表の通り。
＜釘＞260は長さ４cm、釘頭0.8×0.4cmの長方形、断面形は0.3×0.3cmの方形を呈している。



第44図　ＳＫ50墓壙、出土遺物

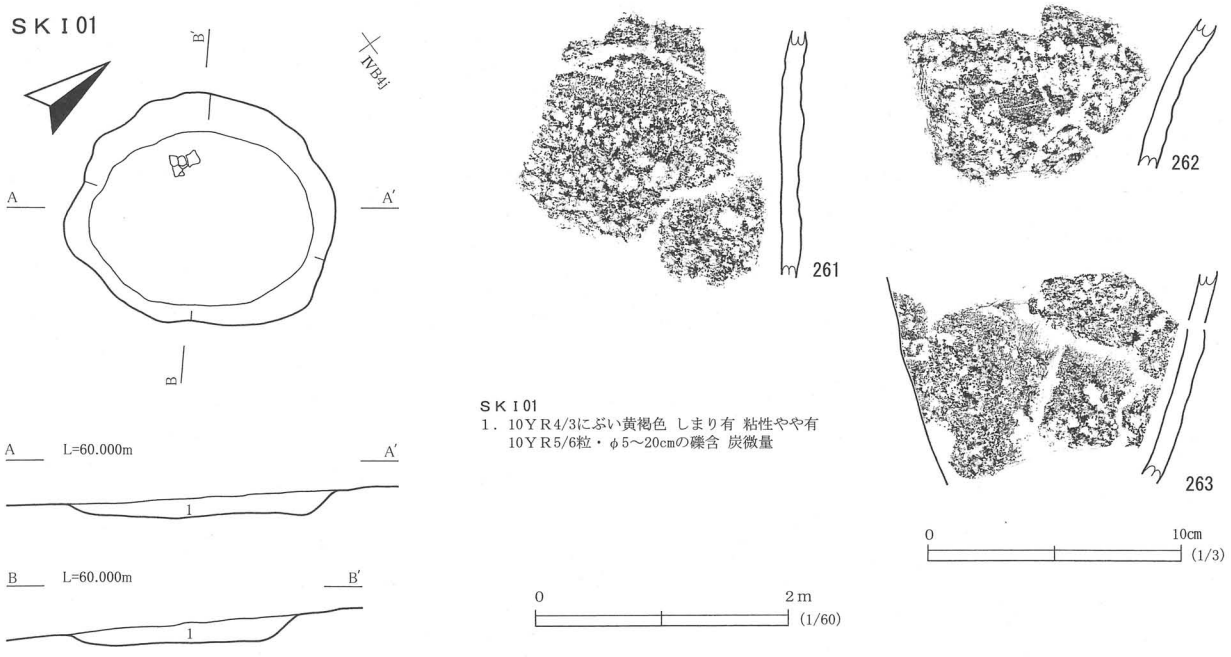
4　その他の遺構

（1）竪穴状遺構

ＳＫＩ01竪穴状遺構

遺　構（第45図、写真図版21）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅣＢ４ｉ・４ｊグリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に



第45図　ＳＫＩ01竪穴状遺構、出土遺物

下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.6～65.8mのⅣ層上面でにぶい黄褐色土のプランを確認した。重複する遺構はない。北北西約4.7mにＳＤ23、東約1.6mにＳＫＩ03Ａ、南約４mにＳＫ14、西約3.5mにＳＤ18が位置する。

＜平面形・規模＞開口部は長軸2.14m、短軸1.78mの楕円形状を呈し、深さは18cmを測る。底部は長軸1.78m、短軸1.36mを測る。

＜主軸方向・床面積＞長軸を基準とした主軸方向はＮ－37°－Ｅ、床面積は1.89㎡を測る。

＜埋土＞にぶい黄褐色土単層の自然堆積を呈する。

＜壁＞おおむねⅣ層を壁としている。床面から外傾して立ち上がる。壁高は北東壁は13～19cm、南東壁は８～13cm、南西壁は８～10cm、北西壁は10～20cmを測る。北東・南西壁は東に、南東・北西壁は南に向かうにつれて低くなっていく。

＜床＞おおむね平坦で、Ⅳ層を掘り込み床面としている。標高は65.5～65.6m前後を測る。

遺　物（第45図、写真図版48）

＜出土状況＞埋土下位・床面から縄文土器389ｇが出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないと思われる。このうち261～263の縄文土器深鉢３点を掲載した。

＜縄文土器＞261～263は深鉢の体部破片である。直線的に立ち上がり、斜縄文ＲＬが施文されている。

ＳＫＩ03Ａ・Ｂ竪穴状遺構・ＳＫ85土坑

Ｂ区中央、ⅣＢ４ｊグリッドに位置する。これらの遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.5～65.8mのⅣ層上面で、暗褐色土のプランを確認した。北約0.2mにＳＡ03、西約1.6mにＳＫＩ01が位置する。検出当初からいびつなプランであったことから、プランの長軸にベルトを設定し、サブトレンチによる断面観察を行った。その結果、竪穴状遺構（ＳＫＩ03Ａ）が土坑（ＳＫ85）を切っている状況が確認された。その後、竪穴状遺構の貼床を剥がした際に下に古い竪穴状遺構があることを確認したので、新しい方をＡ、古い方をＢとした。

ＳＫＩ03Ａ

遺　構（第46図、写真図版22）

＜位置・検出状況＞前述の通り。

＜重複＞ＳＫＩ03Ｂを埋め立てていることから、ＳＫＩ03Ｂより新しい。

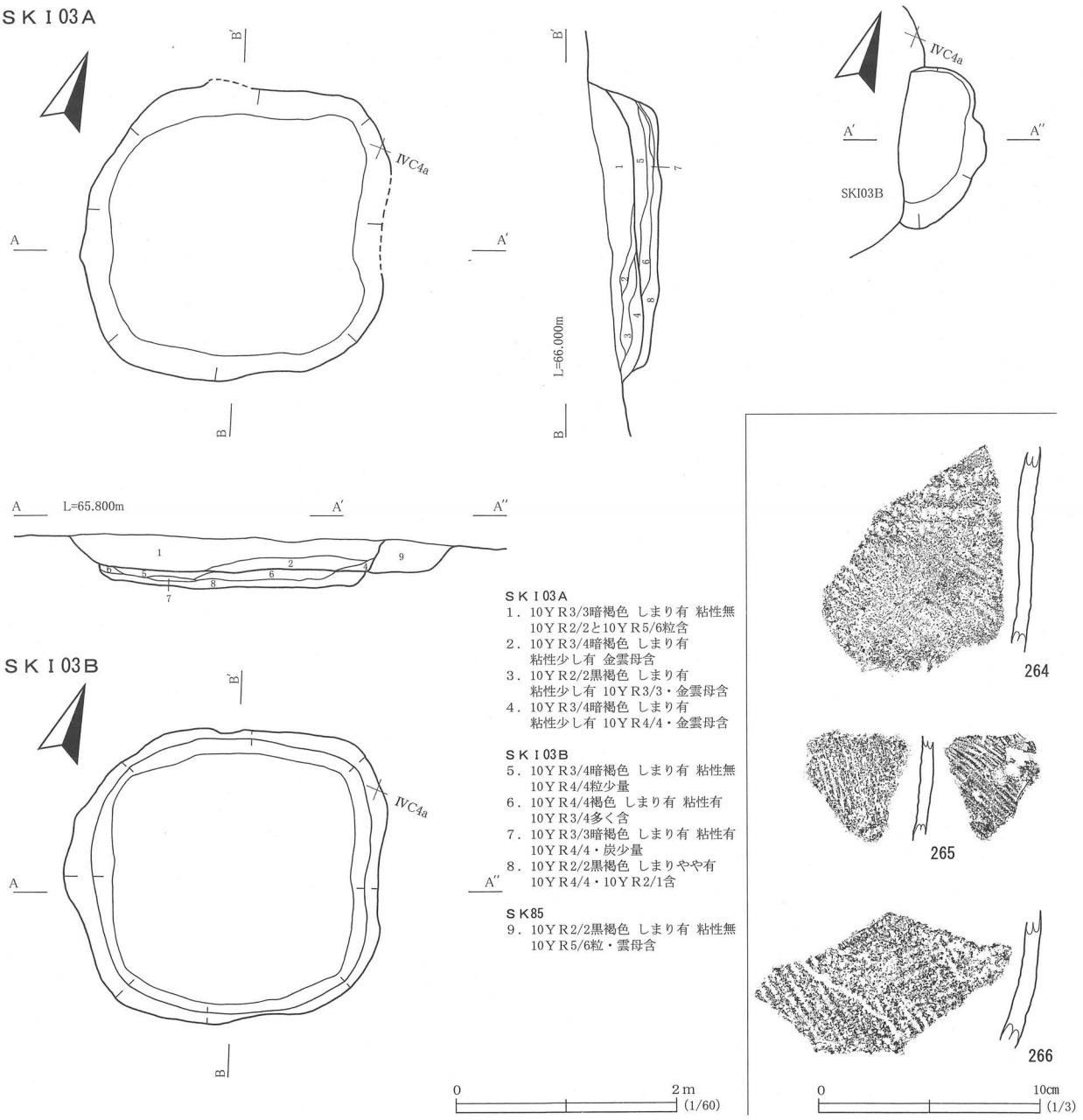
＜平面形・規模＞東壁中央付近が若干内側に、西壁中央付近が若干外側に膨らむ緩い弧状を呈し、各コーナーが角張っていないためはっきりしない。概ね隅丸方形状を呈する。規模は北壁長2.69m、東壁長2.51m、南壁長2.67m、西壁長2.57mを測る。検出面からの深さは最大38cmを測る。

＜主軸方向・床面積＞東壁を基準とした主軸方向はＮ－21°－Ｗ、床面積は4.41㎡を測る。

＜埋土＞４層に細分され、上位は暗褐色（１・２層）、中位は黒褐色（３層）、下位は暗褐色土（４層）に大別される自然堆積を呈する。

＜壁＞概ねⅣ層を壁とする。床面から外傾して立ち上がる。壁高は北壁28～38cm、東壁19～28cm、南壁19～25cm、西壁24～32cmを測る。北・南壁は東に、東・西壁は南に向かうにつれて低くなっていく。

＜床＞概ね平坦で、Ⅳ層を掘り込み、Ⅲ層起源の暗褐色土とⅣ層起源の褐色土を貼床（掘り方埋土）にして床面としている。貼床は全面に広がる。標高は65.3～65.4mを測る。



第46図　ＳＫＩ03Ａ・Ｂ竪穴状遺構、ＳＫ85、出土遺物

遺　物（第46図、写真図版48）

＜出土状況＞埋土から縄文土器700ｇが出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないと思われる。このうち264～266の縄文土器深鉢３点を掲載した。

＜縄文土器＞264～266は埋土から出土した深鉢の体部破片である。264・266は体部が直線的に立ち上がり、斜縄文ＲＬが施文されている。265は貝殻条痕文が施文されている。

ＳＫＩ03Ｂ

遺　構（第46図、写真図版23）

＜位置・検出状況＞前述の通り。

＜重複＞ＳＫＩ03Ａに埋め立てられていることから、ＳＫＩ03Ａより古い。
＜平面形・規模＞東壁以外の各壁中央付近が若干外側に膨らむ緩い弧状を呈し、各コーナーがさほど角張らずはっきりしない。概ね隅丸方形状を呈する。規模は北壁長2.67m、東壁長2.50m、南壁長2.63m、西壁長2.56mを測る。検出面からの深さは最大50cmを測る。
＜主軸方向・床面積＞東壁を基準とした主軸方向はＮ－22°－Ｗ、床面積は4.41㎡を測る。
＜埋土＞４層に細分され、上位は暗褐色土(５層)・褐色土(６層)、中位は暗褐色土(７層)、下位は黒褐色土(８層)に大別される人為堆積を呈する。
＜壁＞概ねⅣ層を壁としている。床面から外傾して立ち上がる。壁高は北壁44～50cm、東壁28～48cm、南壁19～24cm、西壁19～50cmを測る。北・南壁は東に、東・西壁は南に向かうにつれて低くなっていく。
＜床＞概ね平坦で、Ⅳ層を掘り込み床面としている。標高はおおよそ65.2m前後を測る。

遺　物

埋土から縄文土器18ｇが出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないと思われる。

ＳＫ85土坑

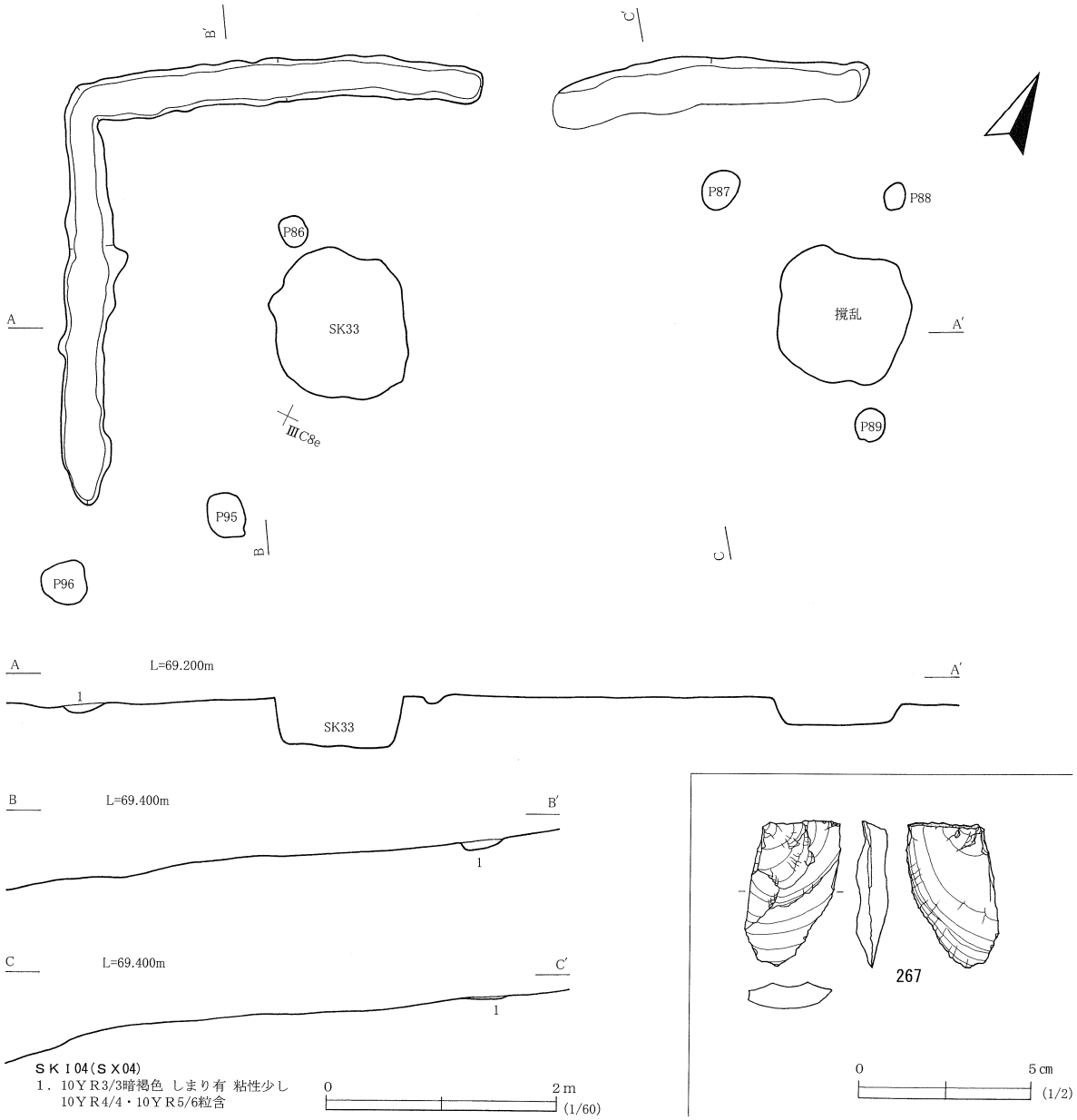
遺　構（第46図、写真図版33）
＜位置・検出状況＞前述の通り。
＜重複関係＞ＳＫＩ03Ａ・Ｂに切られている。
＜平面形・規模＞西半部をＳＫＩ03Ａ・Ｂに切られ、平面形・規模ははっきりしない。開口部は長軸1.46m遺存、短軸0.77m残存していることから、径1.5m前後の円形ないし楕円形状を呈すると思われる。深さ30cmを測る。壁は底面から外傾している。底部は長軸1.10m遺存、短軸0.58m残存している。
＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。
＜底面＞概ね平坦である。標高は65.3m前後を測る。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫＩ04竪穴状遺構

遺　構（第47図、写真図版24）
＜位置・検出状況＞Ｂ区北、ⅢＣ７ｅ・７ｆ・８ｆグリッドに位置する。南約3.5mにＳＫ32、南約５mにＳＤ44、南西約4.3mにＳＫ31が位置する。検出面は標高68.8～69.3mのⅣ層上面である。幅25～50cmの溝がコの字状に東西方向約７m、南北方向約４mの範囲を巡り、その埋土から若干の土師器が出土した。よって畑造成時の削平で掘り方まで消失した竪穴状遺構であると判断した。
＜重複＞位置関係からＳＫ33や柱穴群と重複関係にあると思われるが、前述の削平で埋土を消失し、新旧関係の把握はできなかった。しかし、埋土の状況からこれらの遺構より古い可能性はある。
＜平面形・規模＞周溝が東西方向6.97m、南北方向3.72m残存していることから、少なくとも長軸７m、短軸４m以上の隅丸長方形を呈すると思われる。
＜主軸方向・床面積＞西壁を基準とした主軸方向はＮ－26°－Ｗ。床面積は範囲がはっきりしないため未計測。
＜埋土＞Ⅳ層起源の褐色土を含んだ暗褐色土単層の自然堆積を呈する。



第47図　ＳＫＩ04竪穴状遺構、出土遺物

＜壁＞残存していないので不明。

＜床＞検出した面が床面とは限らないので不明。Ⅳ層面を掘り込んだのは確かである。

＜床面施設＞北・西壁の壁際？から周溝を検出した。周溝は幅28～50cm、深さ３～９cmを測り、北壁際のものは断続的に巡る。

遺　物（第47図、写真図版48）

埋土から土師器66ｇと不定形石器１点（７ｇ）が出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないと思われる。このうち267の不定形石器を掲載した。

ＳＫＩ11竪穴状遺構

遺　構（第48図、写真図版24）

＜位置・検出状況＞Ａ区南、ⅢＢ９ｂ・９ｃ・10ｂ・10ｃグリッドに位置する。検出面は標高67.0～67.2ｍのⅢ層上面である。重複する遺構はない。北北東約1.7ｍにＳＫ63、南東約1.8ｍにＳＩ07が位置する。幅36～67㎝の溝がＬの字状に東西方向約3.79ｍ、南北方向約1.08ｍの範囲を巡り、埋土に焼土・炭が含まれ若干の土師器が出土したことから、畑造成時の削平で掘り方まで消失した竪穴状遺構であると判断した。

＜平面形・規模＞周溝が東西方向3.79ｍ、南北方向1.08ｍ残存している。少なくとも長軸４ｍ、短軸1.1ｍ以上の隅丸長方形状を呈すると思われる。

＜主軸方向・床面積＞西側周溝を基準とした主軸方向はＮ－36°－Ｅ。床面積は範囲がはっきりしないため未計測。

＜埋土＞炭・焼土を含む黒褐色土単層の自然堆積を呈する。

＜壁＞残存していないので不明。

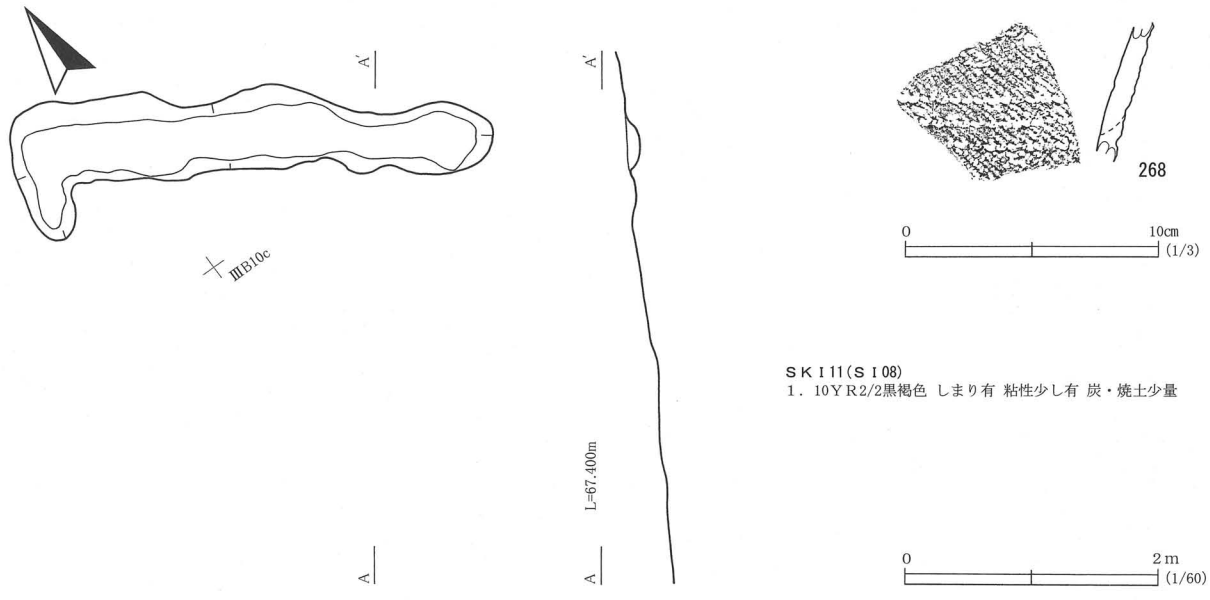
＜床＞検出した面が床面とは限らないので不明。Ⅳ層面を掘り込んだのは確かである。

＜床面施設＞北・西壁の壁際？から周溝を検出した。周溝は幅36～67㎝、深さ５～14㎝を測る。

遺　物（第48図、写真図版48）

＜出土状況＞埋土から縄文土器15ｇと土師器291ｇが出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないと思われる。このうち(268)の縄文土器を掲載した。

＜縄文土器＞268は深鉢の体部破片で、附加条縄文が施文されている。



第48図　ＳＫＩ11竪穴状遺構、出土遺物

（2）柱　穴　列

ＳＡ01柱穴列

遺　構（第49図）

＜位置・検出状況＞Ｂ区西、ⅣＢ４ｇ・４ｈグリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.8～66.0ｍのⅣ層上面である。重複する遺構はない。北約3.2ｍにＳＤ18、南東約2.9ｍにＳＤ13、南約4.7ｍにＳＤ08、南西約6.5ｍにＳＤ07が位置する。

＜平面形・規模＞西北西－東南東方向に４間(7.6ｍ)を測る。

＜軸方向＞桁行の方向はＥ－11°－Ｓである。

＜柱間寸法＞1.5～2.3ｍ(５～７尺７寸)を測る。

＜掘り方＞平面形は円形ないし楕円形状を呈し、規模は35～49㎝、深さ11～16㎝を測る(底面標高65.7～65.9ｍ)。

遺　物

埋土から土師器6.40ｇが出土した。

ＳＡ02柱穴列

遺　構（第49図・写真図版37）

＜位置・検出状況＞Ｂ区西、ⅢＢ９ｉ・10ｈグリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.8～68ｍのⅣ層上面である。重複する遺構はない。北北東約2.6ｍにＳＤ36、南約5.8ｍにＳＫ86、北西1.3ｍにＳＫ20が位置する。

＜平面形・規模＞北東－南西方向に２間(4.2ｍ)を測る。

＜軸方向＞桁行の方向はＮ－44°－Ｅである。

＜柱間寸法＞2.0～2.2ｍ(６尺６寸～７尺３寸)を測る。

＜掘り方＞平面形は楕円形状を呈し、規模は40～75㎝、深さ10～15㎝を測る(底面標高67.7～67.9ｍ)。

遺　物

出土しなかった。

ＳＡ03柱穴列

遺　構（第49図）

＜位置・検出状況＞Ｂ区西、ⅣＢ３ｊ・ⅣＣ３ａグリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.7～65.8ｍのⅣ層上面である。重複する遺構はない。南約0.2ｍにＳＫＩ03Ａ・Ｂが位置する。

＜平面形・規模＞東北東－西南西方向に２間(3.1ｍ)を測る。

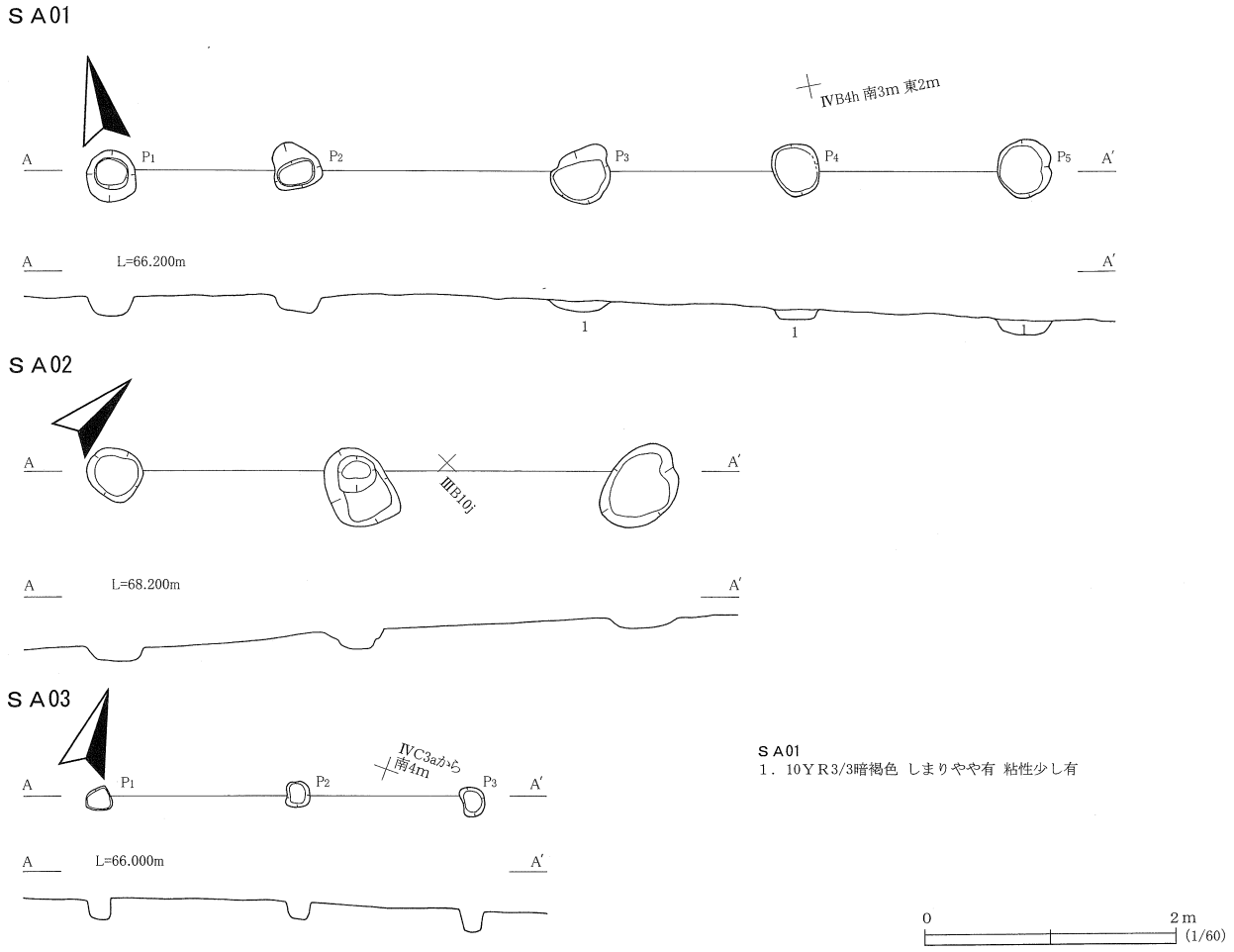
＜軸方向＞桁行の方向はＥ－23°－Ｎである。

＜柱間寸法＞1.5～1.6ｍ(５～５尺２寸)を測る。

＜掘り方＞平面形は楕円形ないし方形状を呈し、規模は19～24㎝、深さ14～15㎝を測る(底面標高65.5～65.6ｍ)。

遺　物

出土しなかった。



第49図　ＳＡ01～03柱穴列

（3）炭　　窯

ＳＷ01炭窯

遺　構（第50図、写真図版25）

＜位置・検出状況＞Ｂ区西、ⅣＢ６ｅグリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る緩斜面を呈する。検出面は標高64.7～64.8ｍのⅢ層上面で、Ⅲ層起源と思われる黒褐色土の楕円形プランを確認した。底面に行くにつれてⅢ層からⅣ層の漸移層に移行する。重複する遺構はない。北東約0.1ｍにＳＫ02、北東約2.6ｍにＳＫ01が位置する。

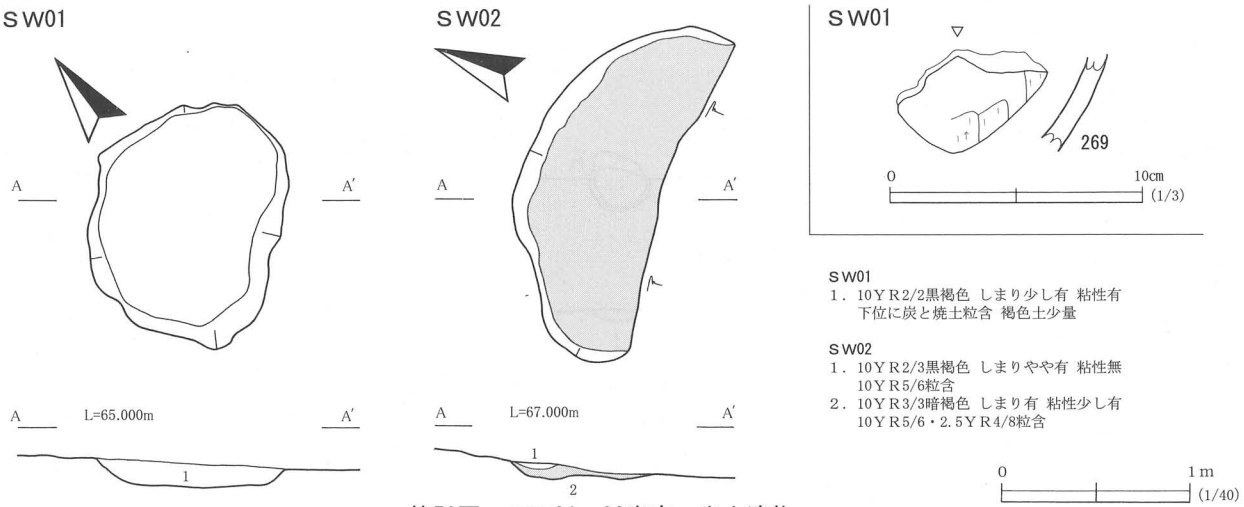
＜平面形・規模＞開口部は長軸方向1.18ｍ、短軸方向1.02ｍの楕円形状を呈する。深さ12㎝を測る。壁は外傾している。底部は長軸方向1.26ｍ、短軸方向0.82ｍを測る。

＜埋土＞下位に炭と焼土を含む黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み床面としている。標高は64.6ｍ前後を測る。

遺　物（第50図、写真図版48）

埋土から土師器片83ｇが出土した。このうち269の土師器甕片を掲載した。



第50図　ＳＷ01・02炭窯、出土遺物

ＳＷ02炭窯

遺　構（第50図、写真図版25）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅣＢ１ｈグリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.2～67.3m前後のⅣ層上面で、黒褐色土と炭が混入した暗褐色土の広がりを確認した。重複する遺構はない。北東約2.7mにＳＫ68、南東約2.5mにＳＩ02、南南西約4.2mにＳＫ17が位置する。

＜平面形・規模＞斜面の崩落と畑造成時の削平で南半部が消失したため、平面形・規模ははっきりしない。開口部は長軸方向1.86m遺存、短軸方向0.79m残存していることから、開口部径1.9×1.6m前後の隅丸楕円形状を呈する。深さ８cmを測る。壁は外傾している。底部は長軸方向1.73m遺存、南北方向0.68mを測る。

＜埋土＞２層に細分した。上位は黒褐色土主体、下位は炭が混入した暗褐色土を主体とした自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘りこんでいる床面としている。標高67.2m前後を測る。

遺　物

出土しなかった。

（４）土　　坑

ＳＫ01土坑

遺　構（第51図、写真図版26）

＜位置・検出状況＞Ｂ区西、ⅣＢ６ｅグリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.1m前後のⅢ層上面である。底面に向かうにつれてⅢ層からⅣ層の漸移層に移行する。重複する遺構はない。北東約3.5mにＳＤ07、東約2.8mにＳＩ03、南西約1.1mにＳＫ02、南西約2.6mにＳＷ01が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径1.26×1.04mの楕円形状を呈する。深さ６cmを測る。壁は底面から外傾している。底部径は1.07×0.74mを測る。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅲ～Ⅳ層の漸移層を掘り込み底面としている。標高は65.0m付近である。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫ02土坑

遺　構（第51図、写真図版26）

＜位置・検出状況＞Ｂ区西、ⅣＢ６ｅグリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る緩斜面を呈する。検出面は標高64.8～65.0mのⅢ層上面である。底面に向かうにつれてⅢ層からⅣ層の漸移層に移行する。重複する遺構はない。北東約1.1mにＳＫ01、南西約0.1mにＳＷ01が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径1.60×1.32mの楕円形状を呈する。深さ26cmを測る。壁は底面から外傾している。底部径は1.44×1.04mを測る。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞擂鉢状を呈する。中央よりやや西側が最も深い。Ⅲ～Ⅳ層の漸移層を掘り込み底面としている。標高は64.7～64.8mを測る。

遺　物

埋土から土師器９ｇが出土した。流れ込みの遺物と思われる。

ＳＫ05土坑

遺　構（第51図、写真図版26）

＜位置・検出状況＞Ｂ区西、ⅣＢ６ｇグリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.2m前後のⅢ層からⅣ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。重複する遺構はない。北約0.2mにＳＫ06、北東約2.2mにＳＫ07、南東約5.2mにＳＩ01、南南東約４mにＳＫ09、西約4.8mにＳＩ03が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径96×86cmの楕円形状を呈する。深さ11cmを測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部径89×62cmを測る。

＜埋土＞Ⅳ層起源の褐色ブロックを含む黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は65.1m前後を測る。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫ06土坑

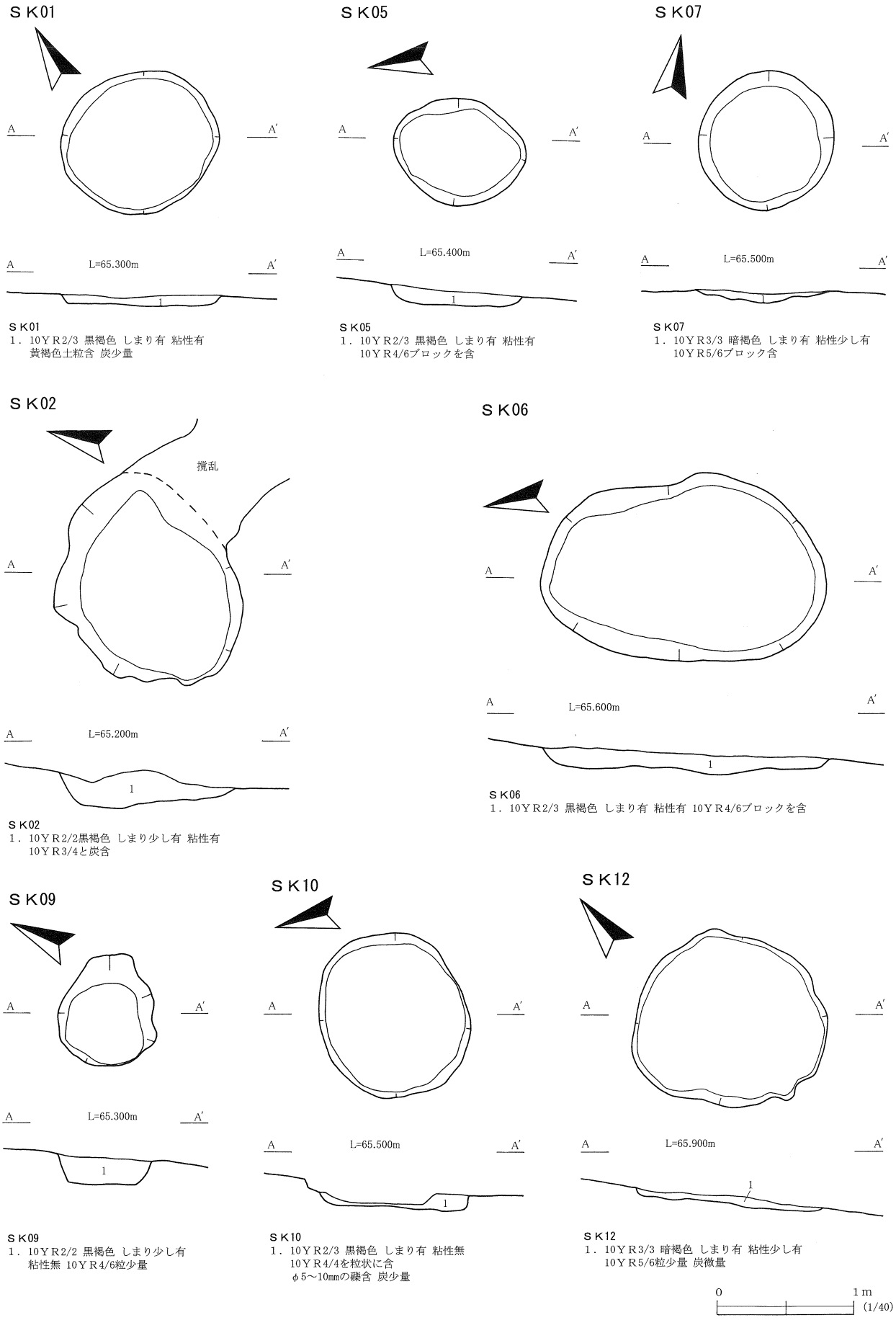
遺　構（第51図、写真図版26）

＜位置・検出状況＞Ｂ区西、ⅣＢ５ｇ～６ｈグリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.3～65.4mのⅢ層からⅣ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。重複する遺構はない。北北東約0.4mにＳＫ10、東約0.9mにＳＫ07、南約0.2mにＳＫ05が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径2.06×1.38mの楕円形状を呈する。深さ15cmを測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部径1.90×1.22mを測る。

＜埋土＞Ⅳ層起源の褐色ブロックを含む黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は65.2m前後を測る。



ＳＫ01
1．10ＹＲ2/3 黒褐色 しまり有 粘性有
　黄褐色土粒含 炭少量

ＳＫ05
1．10ＹＲ2/3 黒褐色 しまり有 粘性有
　10ＹＲ4/6ブロックを含

ＳＫ07
1．10ＹＲ3/3 暗褐色 しまり有 粘性少し有
　10ＹＲ5/6ブロック含

ＳＫ02
1．10ＹＲ2/2黒褐色 しまり少し有 粘性有
　10ＹＲ3/4と炭含

ＳＫ06
1．10ＹＲ2/3 黒褐色 しまり有 粘性有 10ＹＲ4/6ブロックを含

ＳＫ09
1．10ＹＲ2/2 黒褐色 しまり少し有
　粘性無 10ＹＲ4/6粒少量

ＳＫ10
1．10ＹＲ2/3 黒褐色 しまり有 粘性無
　10ＹＲ4/4を粒状に含
　φ5～10㎜の礫含 炭少量

ＳＫ12
1．10ＹＲ3/3 暗褐色 しまり有 粘性少し有
　10ＹＲ5/6粒少量 炭微量

第51図　ＳＫ01・02・05～07・09・10・12土坑

遺　物

出土しなかった。

ＳＫ07土坑

遺　構（第51図、写真図版27）

＜位置・検出状況＞Ｂ区西、ⅣＢ５ｈ・６ｈグリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.3～65.4ｍのⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。重複する遺構はない。南西約2.2ｍにＳＫ05、西約0.9ｍにＳＫ06、北西約１ｍにＳＫ10が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径1.02×0.96ｍの円形状を呈する。深さ６㎝を測る。断面形は半円状を呈する。底部径0.85×0.78ｍを測る。

＜埋土＞暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞起伏に富んでいる。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高はおおよそ65.2ｍである。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫ09土坑

遺　構（第51図、写真図版27）

＜位置・検出状況＞Ｂ区西、ⅣＢ７ｈグリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高64.7～64.8ｍのⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。重複する遺構はない。南東約0.6ｍにＳＩ01、北北西約４ｍにＳＫ05が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径82×72㎝の円形状を呈する。深さ20㎝を測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部径60×57㎝を測る。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高はおおよそ64.5ｍである。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫ10土坑

遺　構（第51図、写真図版27）

＜位置・検出状況＞Ｂ区西、ⅣＢ５ｈグリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.4ｍ前後のⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。北東4.3ｍにＳＤ13、南東１ｍにＳＫ07、南南西約0.4ｍにＳＫ06が位置する。

＜重複関係＞ＳＤ08を切っている。

＜平面形・規模＞開口部径1.20×1.10ｍの円形状を呈する。深さ13㎝を測る。壁は底面から鉛直に立ち上がる。底部径は1.07×1.01ｍを測る。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高65.3ｍ前後を測る。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫ12土坑

遺　構（第51図、写真図版27）

＜位置・検出状況＞Ｂ区西、ⅣＢ６ｊグリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高64.5～64.7ｍのⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。重複する遺構はない。東約3.3ｍにＳＫ53、西南西約7.5ｍにＳＩ01、北北西約5.7ｍにＳＫ14が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径1.40×1.24ｍの楕円形状を呈する。深さ７㎝を測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部径1.32×1.18ｍを測る。

＜埋土＞暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞多少凸凹がある。Ⅲ～Ⅳ層にかけての漸移層を掘り込み底面としている。標高は64.5～64.6ｍを測る。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫ14土坑

遺　構（第52図、写真図版27）

＜位置・検出状況＞Ｂ区西、ⅣＢ５ｉグリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.2～65.4ｍのⅢ層からⅣ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。北約４ｍにＳＫＩ01、南南東約5.7ｍにＳＫ12が位置する。

＜重複関係＞ＳＤ13を切っている。

＜平面形・規模＞開口部径95×93㎝の円形状を呈する。深さ25㎝を測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部径78×77㎝を測る。

＜埋土＞Ⅳ層起源の褐色ブロックを含む黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は65.1～65.2ｍを測る。

遺　物（第55図）

埋土から鉄釘？3.79ｇと陶磁器１点（４ｇ）が出土した。このうち270の陶磁器碗を掲載した。産地は不明だが、在地の可能性がある。所属時期は19世紀代の可能性が想定される。

ＳＫ15土坑

遺　構（第52図、写真図版28）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅣＢ２ｉグリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高66.8～66.9ｍのⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。重複する遺構はない。東南東約1.6ｍにＳＤ23、南南西5.7ｍにＳＤ15が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径1.11×1.02ｍの円形状を呈する。深さ22㎝を測る。断面形は深鍋状を呈する。底部径1.02×0.98ｍを測る。

＜埋土＞Ⅳ層起源の褐色ブロックが混入した暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は66.7ｍ前後を測る。

遺　物

埋土から鉄釘？４ｇが出土した。

ＳＫ17土坑

遺　構（第52図、写真図版28）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅣＢ４ｇ・４ｈグリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高66ｍ前後のⅢ層からⅣ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。北北東約4.2ｍにＳW02、西南西約4.3ｍにＳＩ02が位置する。

＜重複関係＞ＳＤ23を切っている。

＜平面形・規模＞開口部径1.16×0.98ｍの楕円形状を呈する。深さ21㎝を測る。壁は底面から鉛直に立ち上がる。底部径1.03×0.93ｍを測る。

＜埋土＞Ⅳ層起源の褐色ブロックを含んだ暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は約65.9ｍを測る。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫ20土坑

遺　構（第52図、写真図版28）

＜位置・検出状況＞Ｂ区北、ⅢＢ９ｈグリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高68.0～68.1ｍのⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。重複する遺構はない。北東約4.6ｍにＳＤ36、南東約1.3ｍにＳＡ02が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径71×65㎝の円形状を呈する。深さは12㎝を測る。断面形は半円状を呈する。底部径54×51㎝を測る。

＜埋土＞暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。概ねⅣ層を掘り込み底面としているが、一部Ⅲ～Ⅳ層にかけての漸移層を底面としているところもある。標高は67.9～68.0ｍを測る。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫ24土坑

遺　構（第52図、写真図版28）

＜位置・検出状況＞Ｂ区北、ⅢＣ９ａグリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高68.0～68.1ｍのⅣ層上面である。重複する遺構はない。南東約2.5ｍにＳＫ35、南西約５ｍにＳＫ27が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径68×64㎝の円形状を呈する。深さ６㎝を測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部径は55×49㎝を測る。

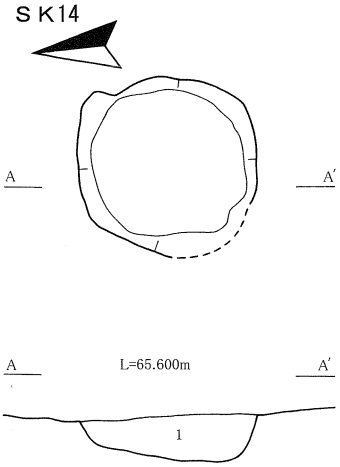
＜埋土＞暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞おおむね平坦である。概ねⅣ層を掘りこんで底面としている。標高は68.0ｍを測る。

遺　物

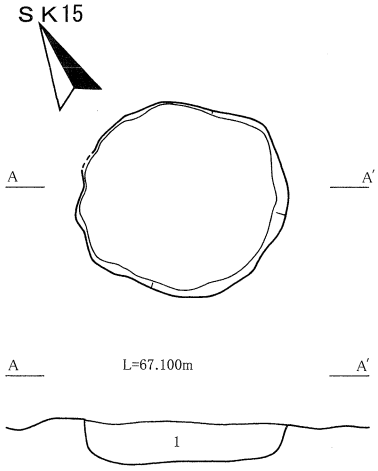
出土しなかった。

SK14



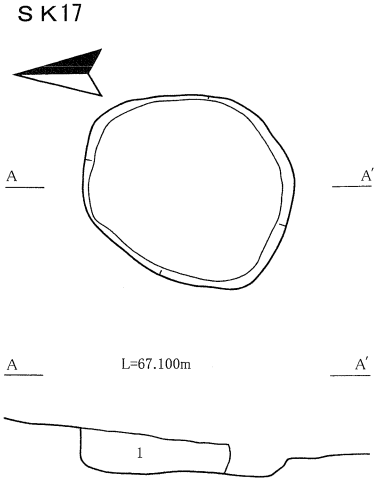
SK14
1．10YR3/2 黒褐色 しまりやや有 粘性やや有
10YR4/4ブロック含 10YR5/6粒少量

SK15



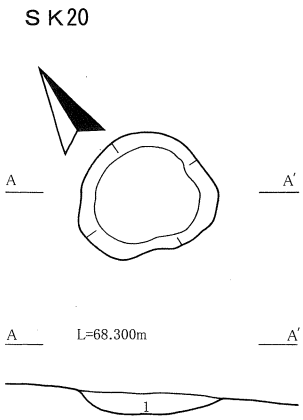
SK15
1．10YR3/4暗褐色 しまり有 粘性無
10YR4/4混入 10YR5/6粒含

SK17



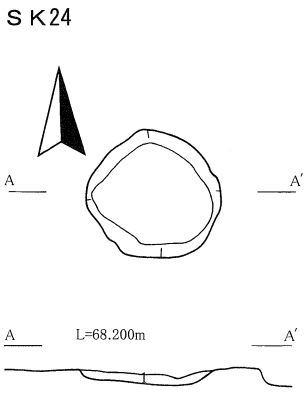
SK17
1．10YR3/3暗褐色 しまり有 粘性有
10YR5/6粒と10YR4/4を多く含

SK20



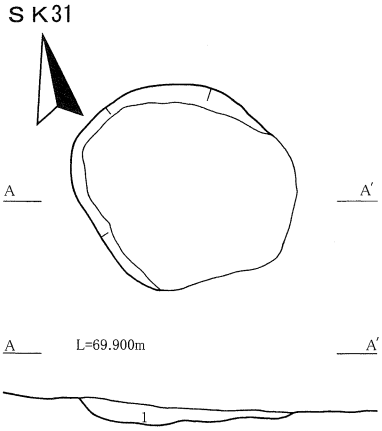
SK20
1．10YR3/3暗褐色 しまり有 粘性無
10YR5/6粒含 炭少量

SK24



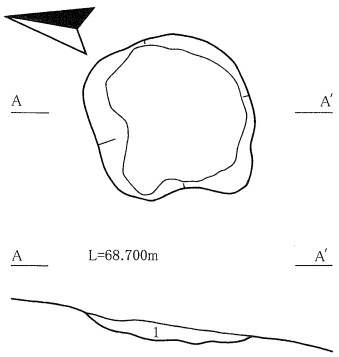
SK24
1．10YR3/3暗褐色 しまり有 粘性少し
10YR5/6粒含 炭少量

SK31



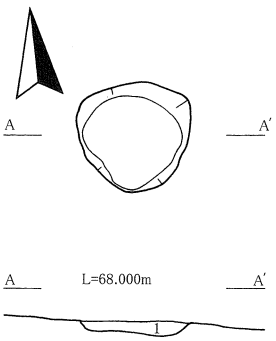
SK31
1．10YR3/2黒褐色 しまりやや有 粘性少し有
10YR4/4含 炭少量

SK26



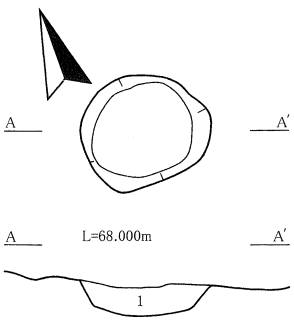
SK26
1．10YR2/2黒褐色 しまり有 粘性無
10YR5/6粒少量

SK27

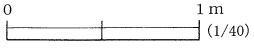


SK27
1．10YR3/3暗褐色 しまり有 粘性少し有
10YR5/6粒含 炭少量

SK28



SK28
1．10YR3/3暗褐色 しまり・粘性やや有
10YR5/6粒含 炭少量



第52図　SK14・15・17・20・24・26～28・31土坑

ＳＫ26土坑

遺　構（第52図、写真図版29）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅢＣ９ｃ・10ｃグリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.7～67.9ｍのⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。重複する遺構はない。北東約0.8ｍにＳＤ44、南西約1.8ｍにＳＩ04・ＳＫ36Ｂ、西約0.8ｍにＳＤ43が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径90×89㎝の楕円形状を呈する。深さ10㎝を測る。断面形は半円状を呈する。底部径78×75㎝を測る。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞多少凹凸がある。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は67.7～67.8ｍを測る。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫ27土坑

遺　構（第52図、写真図版29）

＜位置・検出状況＞Ｂ区北、ⅢＢ10ｊグリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.8ｍ前後のⅣ層上面である。重複する遺構はない。北東約５ｍにＳＫ24、南約5.2ｍにＳＮ01、西約1.9ｍにＳＫ28が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径59×54㎝の円形状を呈する。深さ８㎝を測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部径49×43㎝を測る。

＜埋土＞暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は67.7ｍを測る。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫ28土坑

遺　構（第52図、写真図版29）

＜位置・検出状況＞Ｂ区北、ⅢＢ10ｉ～10ｊグリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.8ｍ前後のⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層である。重複する遺構はない。東約1.9ｍにＳＫ27、南東約5.5ｍにＳＮ01、南南西約６ｍにＳＫ86が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径68×59㎝の楕円形状を呈する。深さ15㎝を測る。断面形は半円状を呈する。底部径54×47㎝を測る。

＜埋土＞暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅲ～Ⅳ層の漸移層を掘り込み底面としている。標高は67.6ｍ前後を測る。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫ31土坑

遺　構（第52図、写真図版29）

＜位置・検出状況＞Ｂ区北、ⅢＣ９ｄグリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高68.1～68.3ｍのⅣ層上面である。重複する遺構はない。北東約4.3ｍにＳＫＩ04、東約3.5ｍにＳＫ32、南約0.4ｍにＳＤ44が位置する。斜面の崩落や畑造成時の削平によって、南側壁が消失している。
＜平面形・規模＞上記の理由で南壁を消失しているため、平面形・規模ははっきりしない。開口部は長軸1.18ｍ残存、短軸1.04ｍ遺存していることから、径1.2×1.0ｍの楕円形状を呈すると思われる。深さ10㎝を測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部は長軸約1.13ｍ残存、短軸0.93ｍ遺存している。
＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。
＜底面＞若干凹凸がある。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は68.1～68.2ｍを測る。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫ32土坑

遺　構（第53図、写真図版30）

＜位置・検出状況＞Ｂ区北、ⅢＣ８ｅグリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈し、斜面下はより傾斜が急になる。検出面は標高68.2～68.4ｍのⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。重複する遺構はない。北約3.5ｍにＳＫＩ04、北約4.2ｍにＳＫ33、南約0.4ｍにＳＤ44、西約3.5ｍにＳＫ31が位置する。
＜平面形・規模＞開口部径1.07×1.02ｍの楕円形状を呈する。深さ18㎝を測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部径0.92×0.85ｍを測る。
＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。
＜底面＞概ね平坦である。自然礫が露出したⅣ層を掘り込み底面としている。標高68.2～68.3ｍを測る。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫ33土坑

遺　構（第53図、写真図版30）

＜位置・検出状況＞Ｂ区北、ⅢＣ７ｄ・７ｅグリッドに位置する。検出面は標高68.9～69.1ｍのⅣ層上面である。南約4.2ｍにＳＫ32が位置する。
＜重複関係＞位置関係からＳＫＩ04と重複関係にあると思われるが、畑造成時の削平で埋土が消失し、新旧関係を判断することはできなかった。しかし、埋土の状況からＳＫＩ04より新しい可能性はあると思われる。
＜平面形・規模＞開口部径1.32×1.12ｍの楕円形状を呈する。深さ44㎝を測る。壁は底面からほぼ鉛直に立ち上がる。底部径1.00×0.92ｍを測る。
＜埋土＞暗褐色土を主体とした単層の人為堆積を呈する。
＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は68.7～68.9ｍを測る。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫ35土坑

遺　構（第53図、写真図版30）

＜位置・検出状況＞Ｂ区北、ⅢＣ10ａ・10ｂグリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.8～67.9ｍのⅣ層上面である。重複する遺構はない。南東約3.9ｍにＳＩ04、北西約2.5ｍにＳＫ24が位置する。撹乱によって南半部を消失している。

＜平面形・規模＞南半部を消失しているため平面形・規模ははっきりしない。開口部は長軸65㎝遺存、短軸52㎝残存していることから、径１×0.6ｍ前後の楕円形状を呈すると思われる。深さ６㎝を測る。壁は底面から外傾している。底部は長軸方向57㎝遺存、短軸方向47㎝残存している。

＜埋土＞暗褐色土を主体とした自然堆積を呈する。

＜底面＞若干凸凹がある。Ⅳ層を掘り込み底面としている。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫ36Ａ土坑

遺　構（第53図、写真図版30）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅢＣ10ｃグリッドに位置する。本遺構の周辺は北北西から南南西に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.2ｍ前後のⅣ層上面である。東約0.8ｍにＳＫ29が位置する。

＜重複関係＞ＳＩ04・ＳＫ36Ｂを切っている。

＜平面形・規模＞開口部は長軸1.36ｍ、短軸1.03ｍの隅丸方形状を呈する。深さ78㎝を測る。壁は底面から鉛直に立ち上がる。底部は長軸1.05ｍ、短軸0.83ｍを測る。

＜埋土＞８層に細分した。１～３層は黒褐色土を主体とした自然堆積、４～８層は黒色土と褐色土が互層をなし、人為堆積を呈する。本遺構の堆積状況は墓壙の堆積状況に類似している。六道銭・副葬品等の遺物が出土していないものの、鉄釘が出土していることから墓壙の可能性もあると思われる。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は66.5ｍ前後を測る。

遺　物

埋土から土師器17ｇ、鉄釘５ｇが出土した。流れ込みの遺物と思われる。

ＳＫ36Ｂ土坑

遺　構（第53図、写真図版30）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅢＣ10ｃグリッドに位置する。本遺構の周辺は北北西から南南西に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.3～67.4ｍのⅣ層上面である。東約0.8ｍにＳＫ29が位置する。本遺構はＳＫ36Ａによって西半部を消失している。

＜重複関係＞ＳＩ04を切り、ＳＫ36Ａに切られている。

＜平面形・規模＞上記の理由で西半部を消失しているため平面形・規模ははっきりしない。開口部は長軸約79㎝遺存、短軸36㎝残存していることから、径80㎝前後の円形ないし楕円形状を呈すると思われる。深さ28㎝を測る。壁は底面から鉛直に立ち上がる。底部は長軸64㎝遺存、短軸34㎝残存している。

＜埋土＞暗褐色土を主体とした自然堆積を呈している。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は67.0～67.1ｍを測る。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫ46土坑

遺　構（第53図、写真図版31）

＜位置・検出状況＞Ｂ区東、ⅣＣ５ｊグリッドに位置する。本遺構の周辺は北北西から南南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高61.5～61.7ｍのⅢ層上面である。底面に向かうにつれてⅢ層からⅣ層の漸移層に移行する。重複する遺構はない。

＜平面形・規模＞開口部は長軸方向96㎝、短軸方向69㎝の楕円形状を呈する。深さ16㎝を測る。壁は外傾している。底部は東西方向73㎝、南北方向56㎝を測る。

＜埋土＞上位は黒色土、下位は黒褐色土を主体とした自然堆積を呈し、２層に細分した。

＜底面＞凹凸状を呈し、起伏に富んでいる。Ⅲ～Ⅳ層にかけての漸移層を掘り込み床面としている。標高は61.5ｍ前後を測る。

遺　物

埋土から土師器８ｇが出土した。

ＳＫ53土坑

遺　構（第53図、写真図版31）

＜位置・検出状況＞Ｂ区西、ⅣＣ６ａグリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面であるが、ここより南東側斜面下はより傾斜が急になる。検出面は標高64.3～64.5ｍのⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。重複する遺構はない。東約11.8ｍにＳＫ54、南約6.2ｍにＳＤ42、西約3.3ｍにＳＫ12が位置する。斜面の崩落や畑造成時の削平に加え植栽痕によって東側壁の上半部が消失している。

＜平面形・規模＞上記の理由で南壁を消失しているため、平面形・規模ははっきりしない。開口部は長軸約78㎝、短軸74㎝残存していることから、径80㎝前後の円形ないし楕円形状を呈すると思われる。深さ32㎝を測る。断面形は半円状を呈する。底部は長軸56㎝、短軸48㎝を測る。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は64.2ｍ前後を測る。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫ54土坑

遺　構（第53図、写真図版31）

＜位置・検出状況＞Ｂ区南、ⅣＣ６ａグリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面であるが、ここより南東側斜面下はより傾斜が急になる。検出面は標高63.2～63.4ｍのⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。重複する遺構はない。南約5.7ｍにＳＤ42、西約11.8ｍにＳＫ53が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径1.18×1.08ｍの楕円形状を呈する。深さ８㎝を測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部径0.99×0.85ｍを測る。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層面を掘り込み底面としている。標高は63.2～63.3ｍを測る。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫ56土坑

遺　構（第53図、写真図版31）

＜位置・検出状況＞Ａ区北、ⅢＢ３ｉグリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る緩斜面を呈する。検出面は標高71.4～71.6ｍのⅢ層上面である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。北約2.5ｍにＳＤ48が位置する。重複する遺構はない。斜面の崩落や畑造成時の削平によって、西側壁が消失している。

＜平面形・規模＞上記の理由で西壁を消失しているため、平面形・規模ははっきりしない。開口部は長軸約1.10ｍ残存、短軸0.92ｍ遺存していることから、径1.2×１ｍ前後の楕円形状を呈するものと思われる。深さ21㎝を測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部は長軸方向0.96ｍ残存、短軸方向0.76ｍ残存している。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞起伏に富む。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は71.2～71.4ｍを測る。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫ61土坑

遺　構（第54図、写真図版31）

＜位置・検出状況＞Ａ区北、ⅢＢ４ｅグリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る緩斜面を呈し、ここより斜面下はより傾斜が急になる。検出面は標高70.2ｍ前後のⅣ層上面である。重複する遺構はない。北約0.5ｍにＳＩ06Ａ・Ｂ、南東約6.8ｍにＳＫ70、西約3.3ｍにＳＫ69が位置する。

＜平面形・規模＞開口部は長軸方向1.71ｍ、短軸方向0.64ｍの隅丸長方形状を呈する。深さ17㎝を測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部は長軸方向1.67ｍ、短軸方向0.56ｍを測る。

＜埋土＞暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層面を掘り込み底面としている。標高は70.1ｍ前後を測る。

遺　物

埋土からガラス3.50ｇが出土した。流れ込みの遺物と思われる。

ＳＫ63土坑

遺　構（第54図、写真図版32）

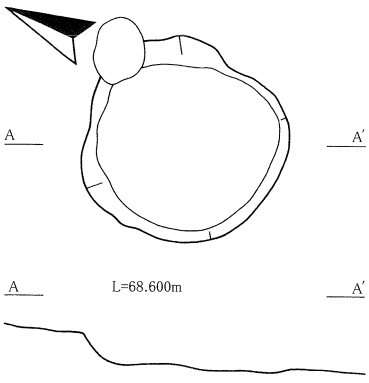
＜位置・検出状況＞Ａ区南、ⅢＢ９ｃグリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.4～67.5ｍのⅢ層上面である。底面に向かうにつれてⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層に移行する。重複する遺構はない。南南西約1.7ｍにＳＫＩ11が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径1.02×0.98ｍの円形状を呈する。深さ13㎝を測る。壁は外傾して立ち上がる。底部径0.82×0.82ｍを測る。

＜埋土＞直径10～15㎝の礫を含む黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

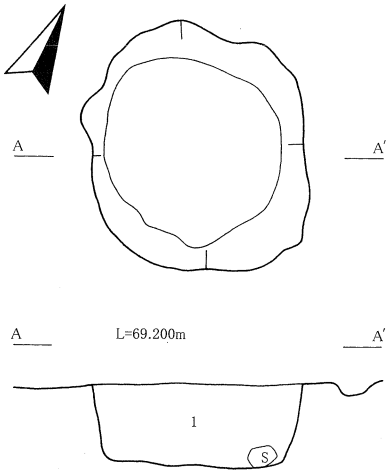
＜底面＞多少凹凸がある。Ⅲ～Ⅳ層にかけての漸移層を掘り込み底面としている。標高は67.3ｍ前後を測る。

ＳＫ32



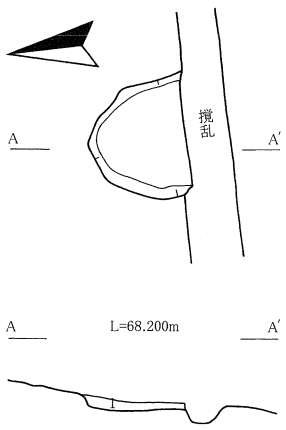
ＳＫ32
1．10ＹＲ2/2 黒褐色 しまり有 粘性少し有
　10ＹＲ5/6含

ＳＫ33



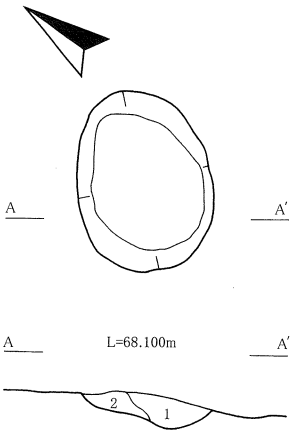
ＳＫ33
1．10ＹＲ3/3暗褐色 しまりやや有 粘性有
　10ＹＲ4/4混入10ＹＲ5/6粒含φ1～10cmの礫少量

ＳＫ35



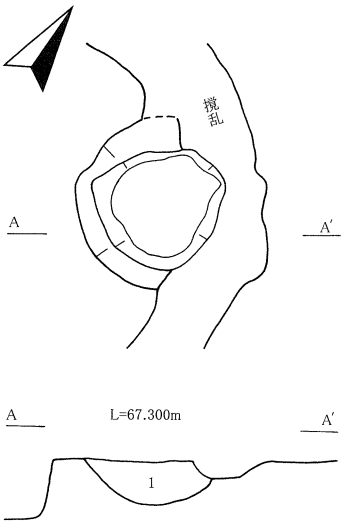
ＳＫ35
1．10ＹＲ3/3暗褐色 しまりやや有
　粘性少し有
　10ＹＲ4/4 と10ＹＲ5/6粒少量

ＳＫ46



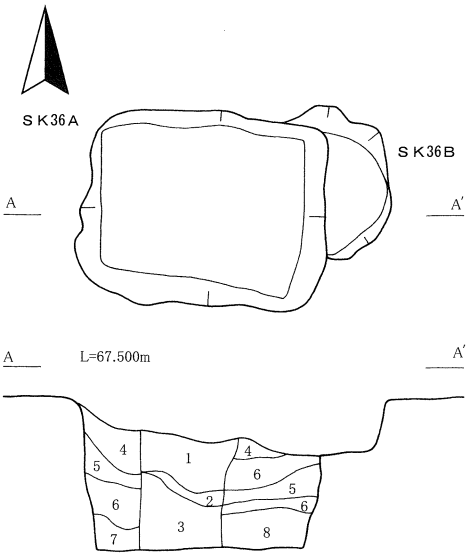
ＳＫ46
1．10ＹＲ1.7/1 黒色 しまりやや有 粘性有
2．10ＹＲ2/2 黒褐色 しまり・粘性有

ＳＫ53



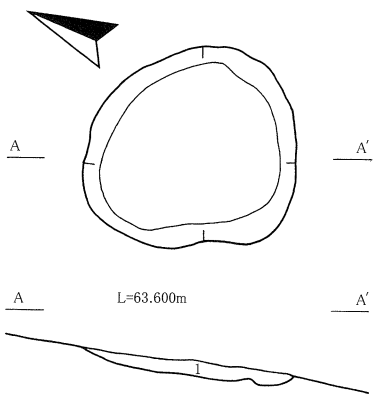
ＳＫ53
1．10ＹＲ2/2 黒褐色 しまり有 粘性有
　10ＹＲ4/4少量 φ3～5cmの礫・焼土粒微量

ＳＫ36Ａ・Ｂ



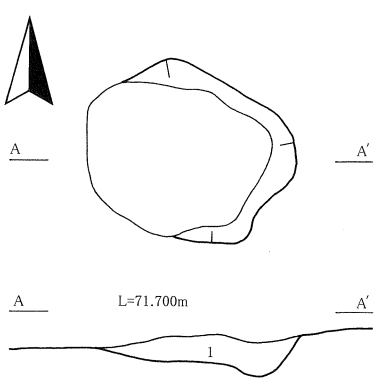
ＳＫ36Ａ
1．10ＹＲ2/2 黒褐色 しまりやや有 粘性少し有
　10ＹＲ5/6粒含
2．10ＹＲ2/1 黒色 しまり・粘性やや有
　10ＹＲ5/6粒少量
3．10ＹＲ2/2 黒褐色 しまりやや有 粘性少し有
　10ＹＲ5/6粒少量 炭微量
4．10ＹＲ2/2 黒褐色 しまりやや有 粘性少し有
　10ＹＲ5/6粒ブロック含
5．10ＹＲ2/1 黒色 しまりやや有 粘性少し有
　10ＹＲ5/6粒ブロック含
6．10ＹＲ4/6 褐色 しまり・粘性やや有
　10ＹＲ2/1含
7．10ＹＲ2/1 黒色 しまりやや有 粘性少し有
8．10ＹＲ4/6 褐色 しまり・粘性やや有
　10ＹＲ2/1混入

ＳＫ54

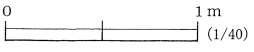


ＳＫ54
1．10ＹＲ2/2 黒褐色 しまりやや有 粘性無
　10ＹＲ5/6粒含 炭・焼土粒少量

ＳＫ56



ＳＫ56
1．10ＹＲ2/2黒褐色 しまり・粘性やや有
　φ３～７cmの礫・10ＹＲ5/6含 炭・焼土粒微量



第53図　ＳＫ32・33・35・36Ａ・36Ｂ・46・53・54・56土坑

遺　物

埋土から縄文土器11ｇが出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないと思われる。

ＳＫ69土坑

遺　構（第54図、写真図版32）

＜位置・検出状況＞Ａ区北、ⅢＢ４ｄグリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る斜面を呈する。検出面は標高70.1～70.2ｍのⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。重複する遺構はない。北東約4.3ｍにＳＩ06Ａ・Ｂ、東約3.3ｍにＳＫ61、西約0.9ｍにＳＤ48が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径1.10×0.84ｍの楕円形状を呈する。深さ22㎝を測る。断面形は逆台形状を呈する。底部径0.80×0.64ｍを測る。

＜埋土＞Ⅳ層起源の褐色ブロックを含む黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞多少凹凸がある。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は69.9～70.0ｍを測る。

遺　物

埋土から陶磁器片１ｇが出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないと思われる。

ＳＫ70土坑

遺　構（第54図、写真図版32）

＜位置・検出状況＞Ａ区北、ⅢＢ５ｆグリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る緩斜面を呈する。検出面は標高70.2ｍ前後のⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。重複する遺構はない。北西約７ｍにＳＫ61、北西約7.1ｍにＳＩ06Ａ・Ｂが位置する。

＜平面形・規模＞開口部径1.43×1.34ｍの楕円形状を呈する。深さ27㎝を測る。断面形は逆台形状を呈する。底部径1.14×1.07ｍを測る。

＜埋土＞上位はⅣ層起源の褐色ブロックを含む黒褐色土、下位は直径１～３㎝の礫を含む黒褐色土を主体とした自然堆積を呈し、２層に細分した。

＜底面＞若干凹凸があるが概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高69.9～70.0ｍを測る。

遺　物

埋土から縄文土器10ｇが出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないと思われる。

ＳＫ72土坑

遺　構（第54図、写真図版32）

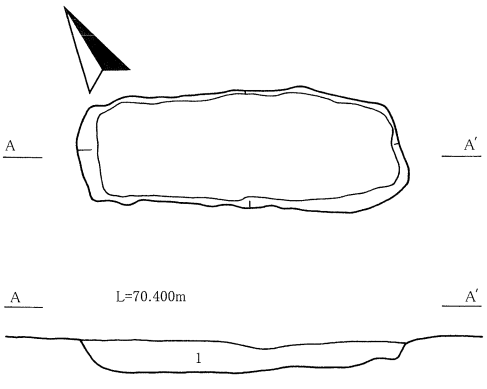
＜位置・検出状況＞Ａ区北、ⅢＢ３ｅグリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る緩斜面を呈し、ここより斜面下はより傾斜が急になる。検出面は標高70.6～70.7ｍのⅣ層上面である。重複する遺構はない。南東約0.5ｍにＳＩ06Ａ・Ｂ、西約1.2ｍにＳＤ48が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径1.02×0.93ｍの円形状を呈する。深さ26㎝を測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部径0.70×0.70ｍを測る。

＜埋土＞Ⅳ層起源の黄褐色土を多く含む暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

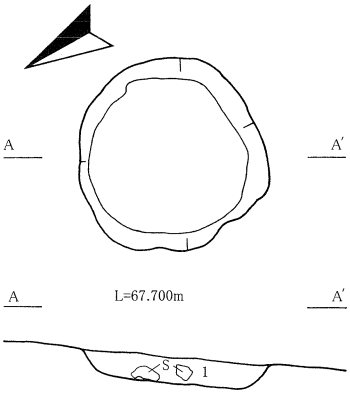
＜底面＞凸凹である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は70.4ｍ前後を測る。

SK61



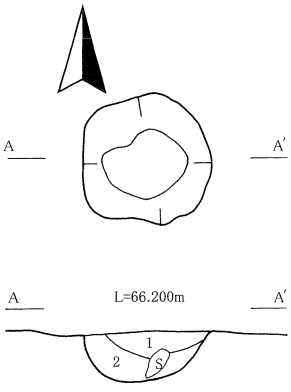
SK61
1．10YR3/3暗褐色 しまり有 粘性少し有
　10YR5/6粒含 炭少量

SK63



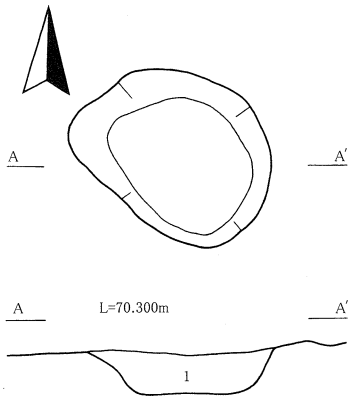
SK63
1．10YR2/3黒褐色 しまり有 粘性やや有
　10YR4/4ブロック少量
　φ10～15cmの礫・10YR5/6粒微量

SK80



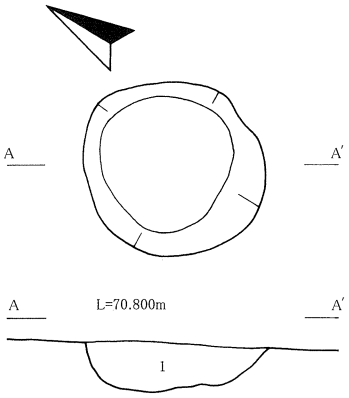
SK80
1．10YR1.7/1黒色 しまり・粘性やや有
2．10YR2/1黒色 しまりやや有
　粘性少し有
　10YR5/6含 フレーク少量含

SK69



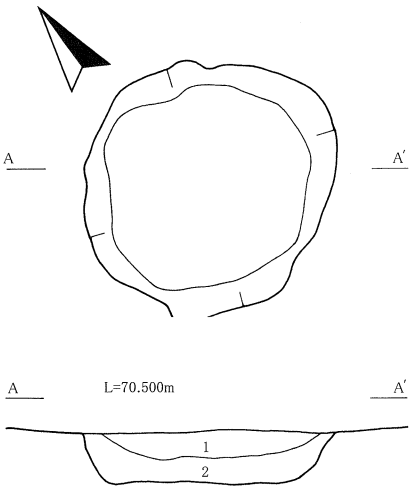
SK69
1．10YR2/3黒褐色 しまりやや有 粘性少し有
　10YR3/3・10YR4/6ブロック含

SK72



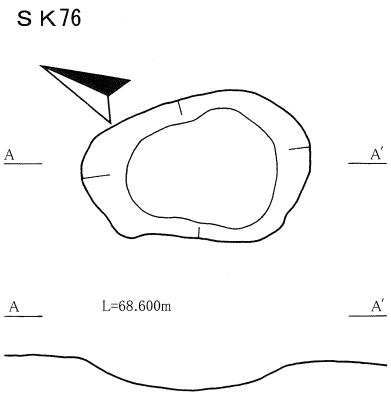
SK72
1．10YR3/4暗褐色 しまり有 粘性無
　10YR5/6粒多く含 炭微量

SK70

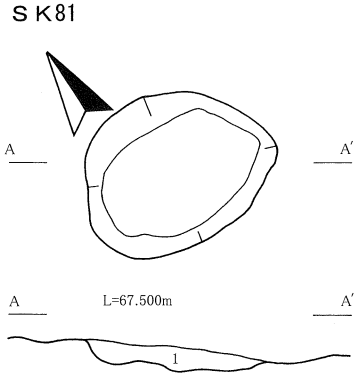


SK70
1．10YR2/3黒褐色 しまり有 粘性無
　10YR4/4ブロック φ1～3cmの礫含
2．10YR2/3黒褐色 しまり有 粘性無
　φ1～3cmの礫含

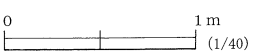
SK76



SK81



SK81
1．10YR2/1黒色 しまり有 粘性やや有
　10YR5/6粒少量 焼土 炭微量



第54図　SK61・63・69・70・72・76・80・81土坑

遺　物

出土しなかった。

ＳＫ76土坑

遺　構（第54図）

＜位置・検出状況＞Ａ区北、ⅢＢ８ｆグリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.8～66.0ｍのⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層である。重複する遺構はない。北西約9.3ｍにＳＤ49が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径1.20×0.82ｍの楕円形状を呈する。深さ18㎝を測る。断面形は半円状を呈する。底部径0.80×0.62ｍを測る。

＜埋土＞暗褐色土主体の自然堆積を呈する。

＜底面＞若干凸凹がある。Ⅲ～Ⅳ層の漸移層を掘り込み底面としている。標高65.8ｍ前後を測る。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫ80土坑

遺　構（第54図、写真図版32）

＜位置・検出状況＞Ａ区南、ⅣＢ３ｄグリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る緩斜面を呈する。検出面は標高66.0～66.1ｍのⅢ層上面である。底面に向かうにつれてⅢ～Ⅳ層の漸移層に移行する。重複する遺構はない。南南東約1.3ｍにＳＩ10、南南西約２ｍにＳＫ82、北西約6.7ｍにＳＫ81が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径68×68㎝の円形状を呈する。深さ26㎝を測る。断面形は半円状を呈する。底部径44×33㎝を測る。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした自然堆積を呈し、２層に細分した。

＜底面＞若干凸凹がある。Ⅲ～Ⅳ層の漸移層を掘り込み底面としている。標高65.8ｍ前後を測る。

遺　物（第55図、写真図版48）

埋土から土師器284ｇが出土した。このうち271の土師器甕Ｃを掲載した。

ＳＫ81土坑

遺　構（第54図、写真図版32）

＜位置・検出状況＞Ａ区南、ⅣＢ２ｃグリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る緩斜面を呈する。検出面は標高66.2ｍ前後のⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。重複する遺構はない。北北東約6.1ｍにＳＩ07、南東約6.7ｍにＳＫ80が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径1.20×0.82ｍの楕円形状を呈する。深さ13㎝を測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部径0.80×0.62ｍを測る。

＜埋土＞黒色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞起伏に富む。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は66.1ｍ前後を測る。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫ82土坑

遺　構（第55図、写真図版32）

＜位置・検出状況＞Ａ区南、ⅣＢ３ｄグリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.7～65.9ｍのⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。重複する遺構はない。北北東約２ｍにＳＫ80、東北東約1.4ｍにＳＩ10が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径1.22×1.20ｍの円形を呈する。深さ18㎝を測る。断面形は半円状を呈する。底部径は1.11×1.09ｍを測る。

＜埋土＞焼土を微量含む黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は65.6～65.9ｍを測る。

遺　物

埋土から土師器が11ｇ出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないと思われる。

ＳＫ83土坑

遺　構（第55図、写真図版33）

＜位置・検出状況＞Ａ区北、ⅣＡ６ｊ・ⅣＢ６ａグリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る斜面を呈する。検出面は標高67.6～67.8ｍのⅣ層上面である。重複する遺構はない。東約5.9ｍにＳＤ50、南東約5.2ｍにＳＫ84が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径1.22×0.99ｍの楕円形状を呈する。深さ９㎝を測る。壁は外傾している。底部径1.10×0.88ｍを測る。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞若干凸凹がある。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は67.5～67.7ｍを測る。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫ84土坑

遺　構（第55図、写真図版33）

＜位置・検出状況＞Ａ区北、ⅣＢ７ａグリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る斜面を呈する。検出面は標高66.6～66.9ｍのⅣ層上面である。重複する遺構はない。東約0.2ｍにＳＤ50、北西約5.2ｍにＳＫ83が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径1.50×1.20ｍの楕円形状を呈する。深さ27㎝を測る。断面形は半円状を呈する。底部径1.19×0.97ｍを測る。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は66.5～66.7ｍを測る。

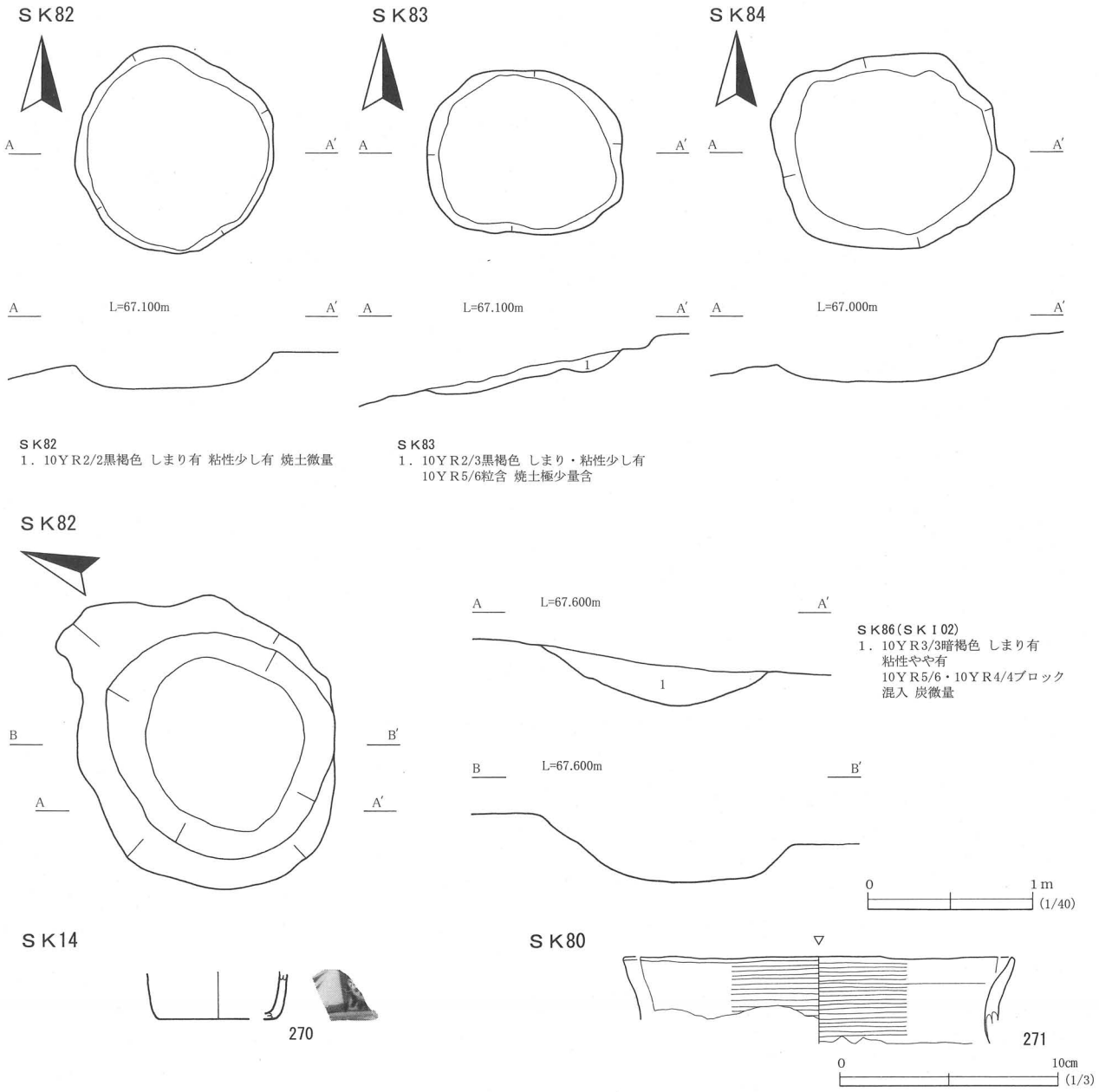
遺　物

埋土から土師器３ｇが出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないと思われる。

ＳＫ86土坑（ＳＫＩ02）

遺　構（第55図、写真図版33）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅣＢ１ｉグリッドに位置する。本遺構の周辺は北北西から南南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.2～67.4ｍのⅣ層上面である。重複する遺構はない。北約5.8ｍにＳＡ02、北北東約６ｍにＳＫ28、東約4.2ｍにＳＮ01、南約3.1ｍにＳＩ04、南西約2.7ｍにＳＷ01



第55図　ＳＫ82～86・86土坑、出土遺物

が位置する。撹乱によって南壁上半部が消失している。

＜平面形・規模＞開口部径2.00×1.60ｍの楕円形状を呈する。深さ44㎝を測る。断面形は半円状を呈する。底部径は1.04×0.94ｍを測る。

＜埋土＞黄褐色・褐色ブロックが混入した暗褐色土を主体とした単層の人為堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦を呈する。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は66.7ｍ前後を測る。

遺　物

出土しなかった。

（５）溝　　跡

ＳＤ07溝跡

遺　構（第65・69図、写真図版33）

＜位置・検出状況＞Ｂ区西、ⅣＢ５ｆグリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.4～65.5ｍのⅣ層上面である。重複する遺構はない。北約6.8ｍにＳＤ15、北東約6.5ｍにＳＡ01、東約3.8ｍにＳＤ08、南約2.8ｍにＳＩ03、南西約3.5ｍにＳＫ01が位置する。

＜規模・形状＞総長2.72ｍ、幅0.17～0.23ｍを測る。横断面形は半円状を呈し、深さ２～５㎝を測る。

＜方向＞西北西－東南東方向（Ｅ－13°－Ｓ）である。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は65.36～65.42ｍ、高低差は６㎝を測り、西に向かうにつれて低くなっていく。

遺　物

出土しなかった。

ＳＤ08溝跡

遺　構（第65・69図、写真図版33）

＜位置・検出状況＞Ｂ区西、ⅣＢ５ｇグリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.5ｍ前後のⅣ層上面である。北約4.7ｍにＳＡ01、南約１ｍにＳＫ06、西約3.8ｍにＳＤ07が位置する。

＜重複関係＞ＳＫ10に切られている。

＜規模・形状＞ＳＫ10に切られているため、はっきりしない。確認した部分では総長3.83ｍ、幅0.23～0.30ｍを測る。横断面形は半円状を呈し、深さは１～５㎝を測る。

＜方向＞西北西－東南東方向（Ｅ－12°－Ｓ）である。

＜埋土＞暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は65.4～65.5ｍ、高低差14㎝を測り、東に向かうにつれて低くなっていく。

遺　物

出土しなかった。

ＳＤ13溝跡

遺　構（第65・69図、写真図版34）

＜位置・検出状況＞Ｂ区西、ⅣＢ５ｉグリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.3～65.5ｍのⅣ層上面である。南西約4.3ｍにＳＫ10、北西約2.9ｍにＳＡ01が位置する。

＜重複関係＞ＳＫ14に切られている。

＜規模・形状＞東側をＳＫ14に切られているため、はっきりしない。確認した部分では総長3.73ｍ、幅0.20～0.29ｍを測る。横断面形は半円状を呈し、深さは６～９㎝を測る。

＜方向＞西北西－東南東方向（Ｅ－10°－Ｓ）である。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。
＜底面＞多少凹凸がある。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は65.2～65.4m、高低差は21cmを測り、東に向かうにつれて低くなっていく。

遺　物

出土しなかった。

ＳＤ15溝跡

遺　構（第65・69図、写真図版34）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅣＢ３ｆ・４ｆグリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高66.0～66.3mのⅣ層上面である。北北東約5.7mにＳＫ15、東北東約5.3m、東約4.8mにＳＤ18、南約6.8mにＳＤ07が位置する。
＜規模・形状＞幅0.24～0.51mの溝が、長軸2.46m、短軸2.30mの馬蹄形状に巡っている。横断面形は逆台形状を呈し、深さは４～40cmを測る。
＜方向＞西北西－東南東方向（Ｅ－12°－Ｓ）である。
＜埋土＞黒褐色土主体を主体とした単層の自然堆積を呈する。
＜底面＞起伏に富んでいる。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は67.4～67.7m、高低差は32cmを測り、南に向かうにつれて低くなっていく。

遺　物

出土しなかった。

ＳＤ18溝跡

遺　構（第65・69図、写真図版34）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅣＢ３ｇ・３ｈ・４ｈ・４ｉグリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.5～67.8mのⅣ層上面である。重複する遺構はない。北約0.6mにＳＤ19、東約3.5mにＳＫＩ01、南約3.2mにＳＡ01が位置する。
＜規模・形状＞総長7.81m、幅0.13～0.35mを測る。横断面形は半円状を呈し、深さ７～９cmを測る。
＜方向＞西北西－東南東方向（Ｅ－12°－Ｓ）である。
＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。
＜底面＞起伏に富む。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は67.4～67.7m、高低差は32cmを測り、東に向かうにつれて低くなっていく。

遺　物

出土しなかった。

ＳＤ19溝跡

遺　構（第65・69図、写真図版34）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅣＢ３ｇ・３ｈグリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南西に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.7～67.9mのⅣ層上面である。重複する遺構はない。北約3.6mにＳＤ23、南約0.6mにＳＤ18が位置する。
＜規模・形状＞総長5.37m、幅0.23～0.33mを測る。横断面形は半円状を呈し、深さは13～17cmを測る。

＜方向＞西北西－東南東方向（Ｅ－12°－Ｓ）である。
＜埋土＞Ⅳ層起源の褐色土を含む暗褐色土主体を主体とした単層の自然堆積を呈する。
＜底面＞多少凹凸がある。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は67.5～67.8m、高低差は28cmを測り、東に向かうにつれて低くなっていく。

遺　物

出土しなかった。

ＳＤ23溝跡

遺　構（第65・69図、写真図版35）

＜位置・検出状況＞Ｂ区中央、ⅣＢ２ｇ・２ｈ・３ｈ・３ｉグリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.9～68.3mのⅣ層上面である。北約2.3mにＳＩ02、南南東約4.7mにＳＫＩ01、南約3.6mにＳＤ19、西北西約1.6mにＳＫ15が位置する。
＜重複関係＞ＳＫ17に切られている。
＜規模・形状＞総長10.8m、幅0.06～0.48mを測る。横断面形は半円状を呈し、深さは５～20cmを測る。
＜方向＞西南西－東南東方向（Ｅ－13°－Ｓ）である。
＜埋土＞Ⅳ層起源の褐色土を含む暗褐色土主体を主体とした単層の自然堆積を呈する。
＜底面＞径19～26cm、深さ11～33cmの円形を呈するピット14個と長軸0.78～1.23m、短軸0.28～0.48mの楕円形状を呈する深さ16～24cmのピット２個を検出。溝の底面とピットはⅣ層を掘り込み底面としている。溝の底面はピットがあるために起伏に富んでいるが、ピットの底面は概ね平坦である。標高は67.7～68.3m、高低差は55.7cmを測り、東に向かうにつれて低くなっていく。

遺　物

出土しなかった。

ＳＤ36溝跡

遺　構（第62・69図、写真図版35）

＜位置・検出状況＞Ｂ区北、ⅢＢ８ｉ・９ｉグリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高68.2～68.6mのⅣ層上面である。南東約3.8mにＳＫ28、南南西約2.6mにＳＡ02、南西約4.6mにＳＫ20が位置する。
＜重複関係＞重複する遺構はないが、南側を植栽痕によって切られている。
＜規模・形状＞総長4.80m、幅0.32～0.48mを測る。横断面形は半円状を呈し、深さは５～20cmを測る。
＜方向＞南南西－北北東方向（Ｎ－25°－Ｅ）である。
＜埋土＞Ⅳ層起源の褐色ブロックを含んだ暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。
＜底面＞起伏に富む。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は68.2～68.6m、高低差は42cmを測り、南に向かうにつれて低くなっていく。

遺　物

出土しなかった。

ＳＤ42溝跡

遺　構（第67・69図、写真図版35）

＜位置・検出状況＞Ｂ区南、ⅣＣ７ａ～７ｄグリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る斜面を呈する。本遺構より斜面下は傾斜が急になる。検出面は標高62.3～64mのⅢ～Ⅳ層面で、斜面上位から下位に向かうにつれてⅢ～Ⅳ層へと移行する。重複する遺構はない。北約6.2mにＳＫ53、北約5.7mにＳＫ54が位置する。

＜規模・形状＞東側が調査区外にのびているため、全容ははっきりしない。確認された部分では総長20.08m、幅0.41～1.13mを測る。横断面形は逆台形状を呈し、深さは４～26cmを測る。

＜方向＞東西方向（Ｗ－５°－Ｓ）である。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞凸凹である。検出面から底部に、斜面上位から下位に向かうにつれてⅢ～Ⅳ層に移行するため、Ⅲ～Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は62.3～63.95m、高低差は1.64mを測り、東に向かうにつれて低くなっていく。

遺　物

埋土から土師器６ｇが出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないと思われる。

ＳＤ43溝跡

遺　構（第64・69・70図、写真図版36）

＜位置・検出状況＞Ｂ区北、ⅢＣ９ｃグリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.7～67.8mのⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層である。重複する遺構はない。東約0.8mにＳＫ26、南約1.2mにＳＩ04が位置する。

＜規模・形状＞総長2.36m、幅0.20～0.33mを測る。横断面形は半円状を呈し、深さは１～11cmを測る。

＜方向＞西北西－東南東方向（Ｗ－26°－Ｎ）である。

＜埋土＞黒色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞若干凹凸はあるが概ね平坦である。Ⅲ～Ⅳ層の漸移層もしくはⅣ層を掘り込み底面としている。標高は67.6～67.8m、高低差は22cmを測り、東に向かうにつれて低くなる。

遺　物（第43図）

埋土から石器１点（２ｇ）、陶磁器碗１点（２ｇ）が出土した。このうち272の陶磁器碗を掲載した。産地は不明だが、在地の可能性がある。所属時期は18世紀代の可能性が想定される。

ＳＤ44溝跡

遺　構（第64・69図、写真図版36・37）

＜位置・検出状況＞Ｂ区北、ⅢＣ９ｄ・９ｅ・８ｅ・８ｆグリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。本遺構の斜面下は近世墓が検出された部分以外は畑造成時の削平を受けており、崖状となっている。検出面は標高67.7～68.2mのⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層である。重複する遺構はない。北約0.4mにＳＫ31・32、北約５mにＳＫＩ04、南約１～２mに近世墓群、南西約0.8mにＳＫ26、南西約6.2mにＳＤ45が位置する。

＜規模・形状＞総長13.52m、幅0.58～1.50mを測る。横断面形は逆台形状を呈し、深さは９～56cmを測る。

＜方向＞西南西－東北東方向（W－26°－S）である。
＜埋土＞２層に細分した。上位は黒褐色土、下位は暗褐色土を主体とした自然堆積を呈する。
＜底面＞若干凹凸はあるが概ね平坦である。Ⅲ～Ⅳ層の漸移層もしくはⅣ層を掘り込み底面としている。標高は67.6～67.9m、高低差は32.3cmを測り、東に向かうにつれて低くなる。

遺　物

埋土から土師器154ｇが出土した。

ＳＤ45溝跡

遺　構（第64・69図、写真図版37）

＜位置・検出状況＞Ｂ区東、ⅢＣ９ｇ・９ｈグリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高66.4～66.6mのⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層である。重複する遺構はない。北東約6.2mにＳＤ44が位置する。
＜規模・形状＞総長3.26m、幅0.27～0.45mを測る。横断面形は半円状を呈し、深さは２～10cmを測る。
＜方向＞東西方向（W－６°－N）である。
＜埋土＞黒色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。
＜底面＞多少凹凸がある。標高は66.3～66.6m、高低差は29cmを測り、東に向かうにつれて低くなる。

遺　物

出土しなかった。

ＳＤ48溝跡

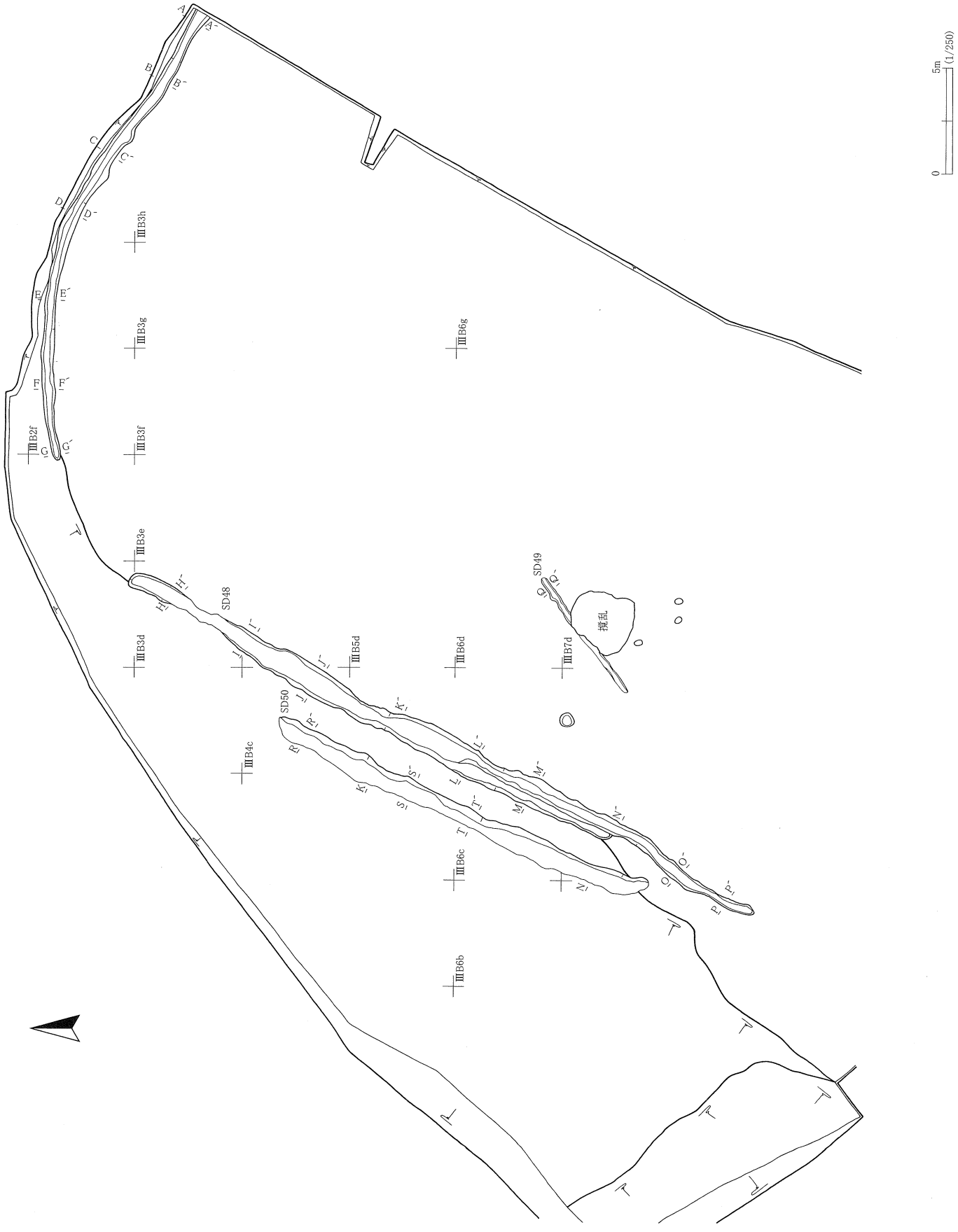
遺　構（第57・58図、写真図版38・39）

＜位置・検出状況＞Ａ区、ⅢＢ２ｆ～２ｉ・３ｉ・３ｊ・３ｄ・４ｄ・４ｃ・５ｃ・６ｂ・６ｃ・７ｂ・８ａ・８ｂに位置する。畑造成時の削平によって、本来一連のものが二つに分かれている。便宜的に北側と南側と呼ぶ。北側は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高71.2～72.0mのⅣ層上面である。南側は北東から南西に下る緩斜面を呈する。本遺構より斜面下は傾斜がより急峻となる。検出面は標高68.1～70.5mのⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層である。重複する遺構はない。東約0.9mにＳＫ69、東約1.2mにＳＩ06Ａ・Ｂ・ＳＫ72、東約6.2mにＳＤ49、南約2.5mにＳＫ56、東約1.2mにＳＩ06Ａ・Ｂ、西約1.2mにＳＤ50が位置する。
＜規模・形状＞北側は総長22.20m、幅0.30～0.83mを測る。横断面形は半円状を呈し、深さは３～12cmを測る。底面標高71.1～72.0m、高低差は87cmを測り、西に向かうにつれて低くなっていく。南側は総長33m、幅0.39～1.31mを測る。横断面形は半円ないし逆台形状を呈し、深さは５～20cmを測る。
＜方向＞北側は西北西－東南東方向（W－30°－N）、南側は南南西－北北東方向（W－36°－S）である。
＜埋土＞北側と南側の北半は暗褐色土、南側の南半は黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。
＜底面＞凹凸に富む。標高は68～70.4m、高低差は242cmを測り、南に向かうにつれて低くなる。

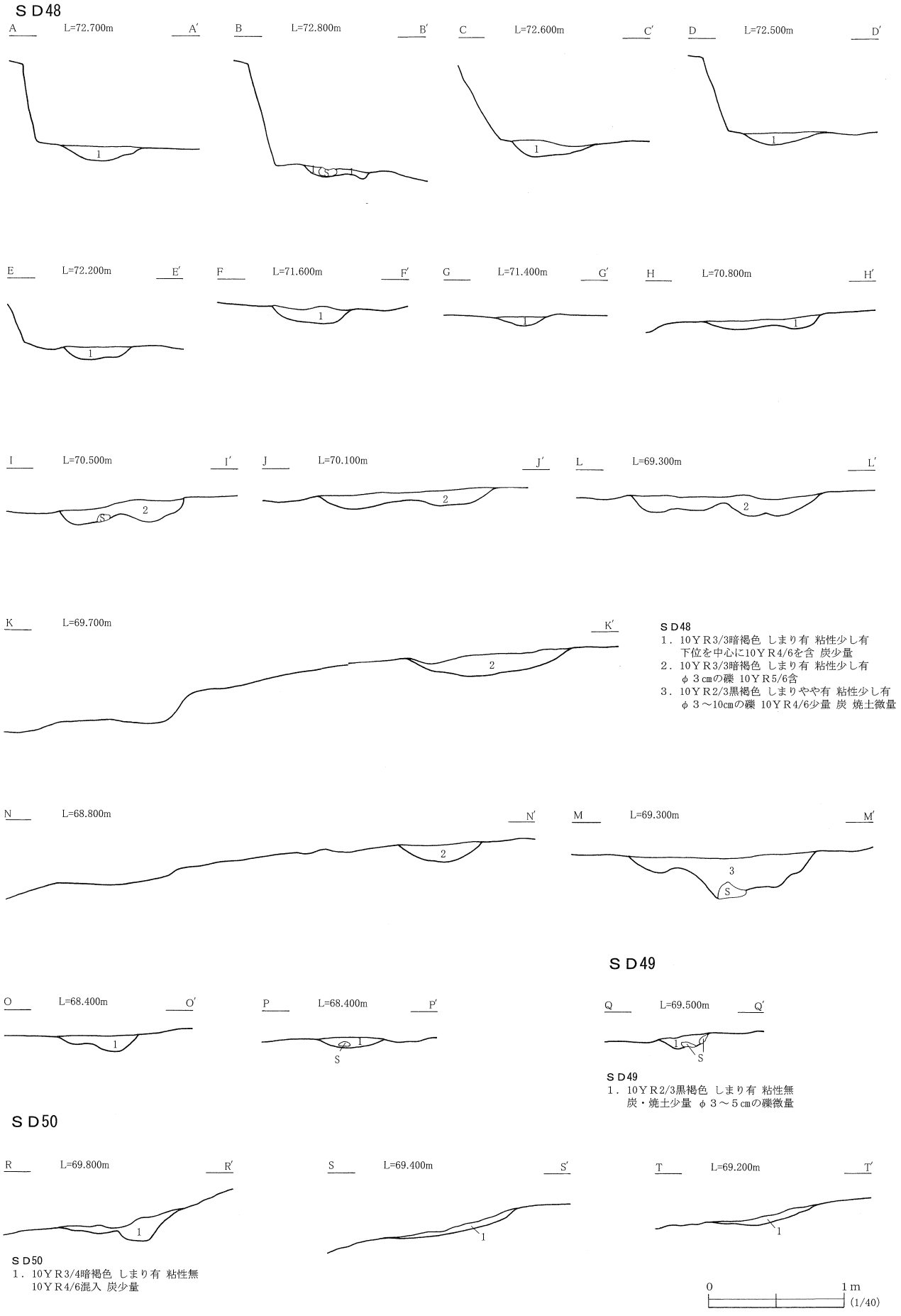
遺　物

埋土から縄文土器16ｇ、陶磁器２ｇが出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないと思われる。

第56図　溝状・柱穴状土坑割付図(第57・59～68図)



第57図　ＳＤ48～50溝跡(1)



ＳＤ48
1．10ＹＲ3/3暗褐色 しまり有 粘性少し有
　下位を中心に10ＹＲ4/6を含 炭少量
2．10ＹＲ3/3暗褐色 しまり有 粘性少し有
　φ３㎝の礫 10ＹＲ5/6含
3．10ＹＲ2/3黒褐色 しまりやや有 粘性少し有
　φ３～10㎝の礫 10ＹＲ4/6少量 炭 焼土微量

ＳＤ49
1．10ＹＲ2/3黒褐色 しまり有 粘性無
　炭・焼土少量 φ３～５㎝の礫微量

ＳＤ50
1．10ＹＲ3/4暗褐色 しまり有 粘性無
　10ＹＲ4/6混入 炭少量

第58図　ＳＤ48～50溝跡(2)

ＳＤ49溝跡

遺　構（第57・58図、写真図版37）

＜位置・検出状況＞Ａ区北、ⅢＢ６ｄ・７ｃ・７ｄグリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高69.2～69.4ｍのⅣ層上面である。重複する遺構はないが、中央付近を攪乱によって切られている。南東約9.3ｍにＳＫ76、西約6.2ｍにＳＤ48が位置する。

＜規模・形状＞総長6.75ｍ、幅0.20～0.37ｍを測る。横断面形は逆台形状を呈し、深さは４～９㎝を測る。

＜方向＞西南西－東北東方向（Ｗ－36°－Ｓ）である。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞凹凸である。標高は69.1～69.3ｍ、高低差22.5㎝を測り、南に向かうにつれて低くなっていく。

遺　物

出土しなかった。

ＳＤ50溝跡

遺　構（第57・58図、写真図版39）

＜位置・検出状況＞Ａ区北、ⅢＢ４ｃ・５ｂ・５ｃ・６ｂ・７ａ・７ｂグリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る斜面を呈する。本遺構の斜面下はより傾斜が急になる。検出面は標高68.3～68.4ｍのⅣ層上面である。東約1.2ｍにＳＤ48、西約0.2ｍにＳＫ84、西約5.9ｍにＳＫ83が位置する。

＜規模・形状＞総長19.02ｍ、幅0.65～1.35ｍを測る。横断面形は半円ないし逆台形状を呈し、深さは７～23㎝を測る。

＜方向＞南南西－北北東方向（Ｎ－26°－Ｅ）である。

＜埋土＞褐色土混入した暗褐色土を主体とする単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞起伏に富む。標高は68.4～69.2ｍ、高低差は78.9㎝を測り、南に向かうにつれて低くなっていく。

遺　物

埋土から縄文土器15ｇが出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないものと思われる。

柱穴状土坑

遺　構（第59～68図、第１表）

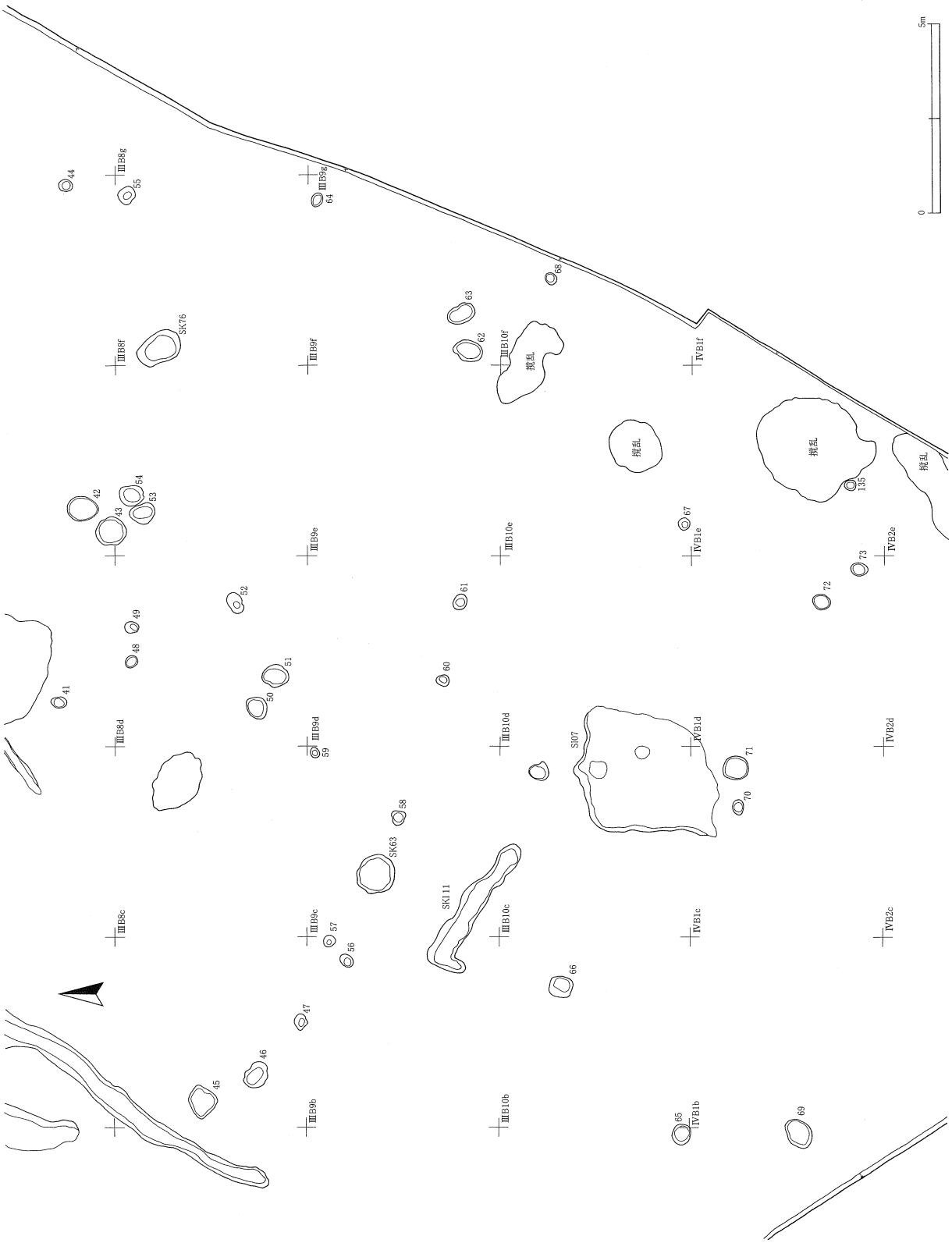
調査区で検出された柱穴は206基を数え、削平が著しいＢ区北と中央南を除く調査区各地から検出された。平面形は円形・楕円形・方形・隅丸方形・不整形などがあり、規模は20～94㎝、深さは３～56㎝を測る。掘り方をもった柱穴や、掘立柱建物跡を構成する柱穴は確認されていないが、一部柱穴列を構成する柱穴は検出された。埋土は黒褐色土～暗褐色土主体の自然堆積を呈している。

これらの柱穴からは確実に遺構に伴うと思われる遺物は出土しなかった。そのため、所属時期は不明である。（150・151は欠番）

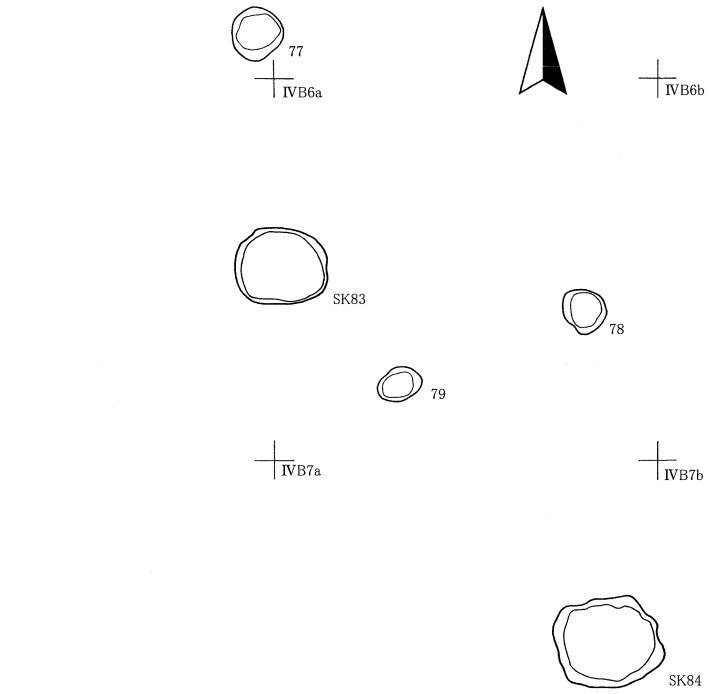
遺　物

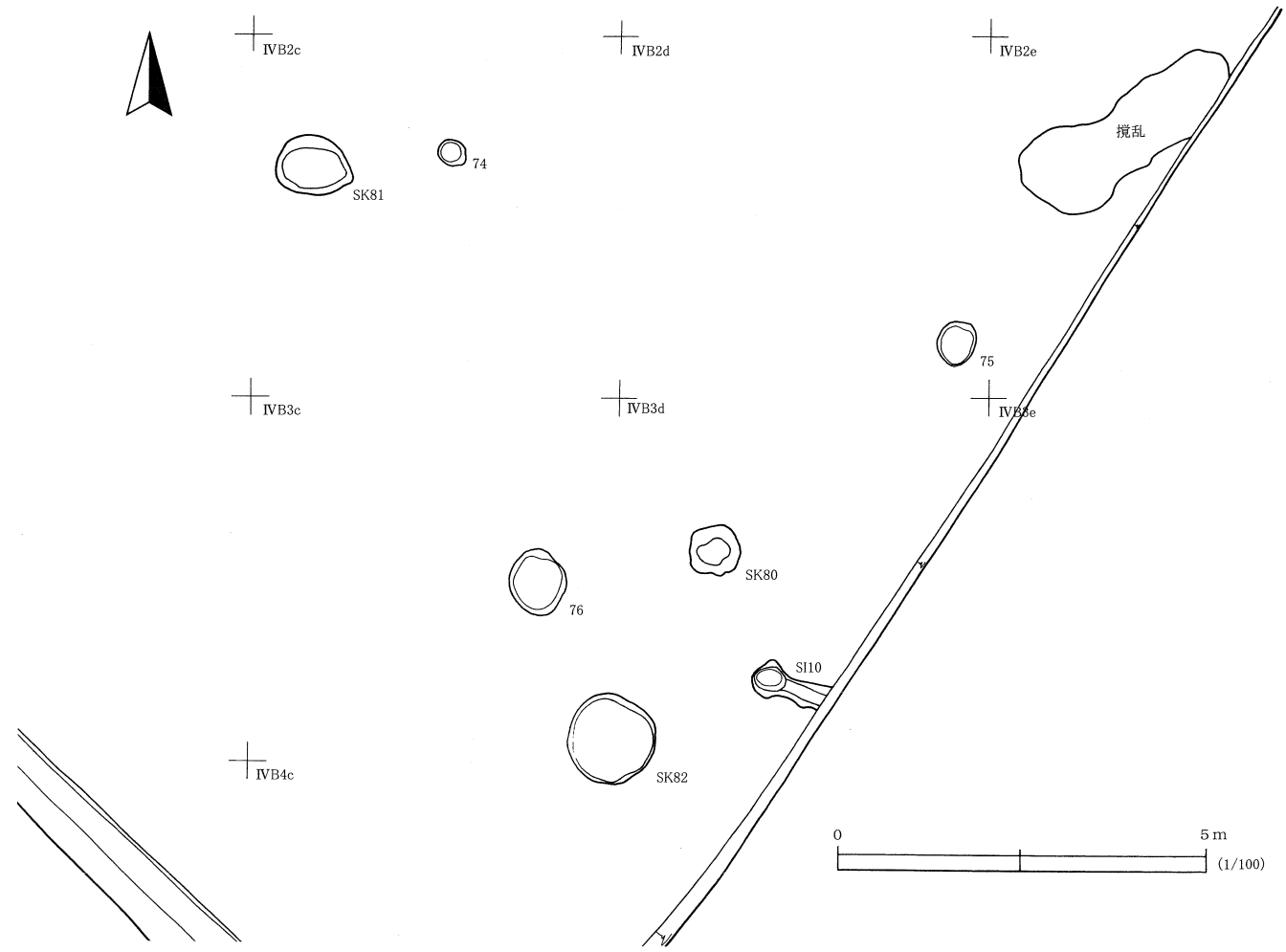
Ｐ20埋土から土師器3.37ｇが出土した。

第59図　柱穴状土坑(1)


5m
0
SK76
SK63
SK111
SI07
撹乱
撹乱
撹乱
ⅢB8f
ⅢB9f
ⅢB10f
ⅣB1f
ⅢB9e
ⅢB10e
ⅣB1e
ⅣB2e
ⅢB8d
ⅢB9d
ⅢB10d
ⅣB1d
ⅣB2d
ⅢB8c
ⅢB9c
ⅢB10c
ⅣB1c
ⅣB2c
ⅢB9b
ⅢB10b
ⅣB1b
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
135

第60図　柱穴状土坑(2)


77
IVB6a
IVB6b
SK83
78
79
IVB7a
IVB7b
SK84


IVB2c
IVB2d
IVB2e
搅乱
SK81
74
75
IVB3c
IVB3d
IVB3e
SK80
76
SI10
SK82
IVB4c
0
5m
(1/100)

第61図　柱穴状土坑(3)

5　遺構外出土遺物

試掘・粗掘・検出時に調査区各地から縄文土器8,962ｇ、土師器1,272ｇ、陶磁器26ｇ、石器425ｇ、金属製品46ｇ、ガラスが４ｇ出土した。（Ａ区からは縄文土器5,782ｇ・土師器183ｇ・陶磁器57ｇ・石器73ｇ・金属製品９ｇ出土。Ｂ区からは縄文土器3,180ｇ、土師器1,050ｇ、陶磁器51ｇ、石器356ｇ、金属製品36ｇ、ガラス４ｇ出土。）

縄文土器は畑造成時の削平を比較的免れた調査区斜面下に位置するＡ区南・Ｂ区東から大半が出土している。これらは斜面上位からの流れ込みの遺物であると考えられる。土師器はＡ区北・Ｂ区西・中央から比較的的多く出土しており、竪穴住居跡の分布状況と対応している状況がうかがえる。陶磁器・金属製品・ガラスはＡ区南・Ｂ区中央から出土している傾向が認められる。Ｂ区中央は近世墓域があることから、墓域の位置と対応している状況がうかがえる。しかし、Ａ区南では攪乱から出土しているものがほとんどである。斜面上位の流れ込みの遺物か畑造成時に消滅した遺構の遺物である可能性が想定される。

なお、遺構外に出土した金属製品の中には鉄滓もあるが、近現代の遺物の可能性もあるのでここでは取り扱わない。

縄文土器（第70・71図、写真図版49）

＜斜縄文（ＬＲ）＞273・276・287・288・292はが施文されている。275・288・292は口縁部がやや湾曲（外反）して立ち上がる。胎土に繊維含。

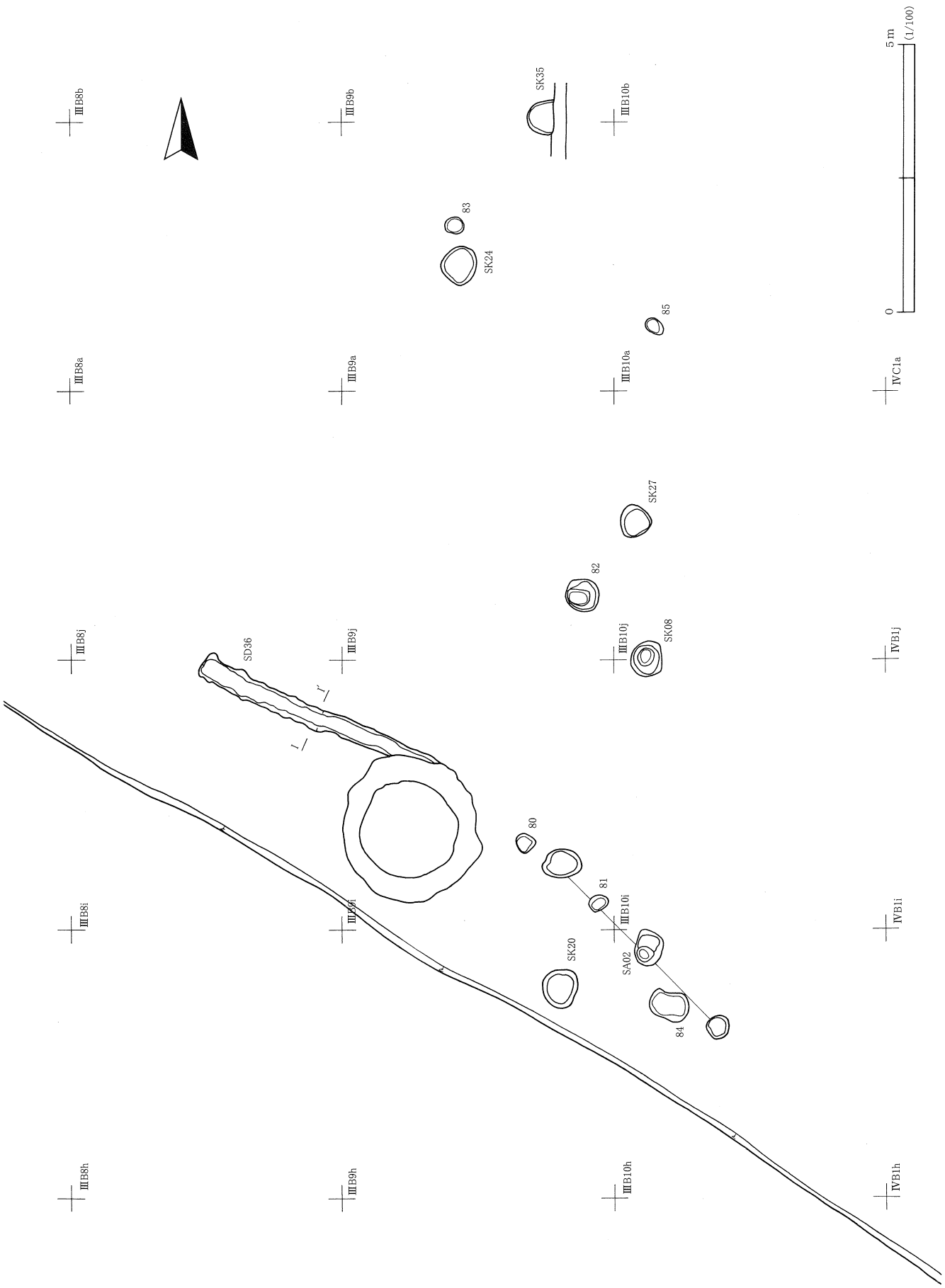
＜斜縄文（ＲＬ）＞277・279・282・283・285・293～295・299～305・307・309・314は斜縄文（ＲＬ）が施文されている。283・300・301は口縁部直線的に立ち上がる。277は磨り消しが施されている。胎土に繊維含。

＜羽状縄文＞284・286・287・289・290・291・292・315は羽状縄文である。287・290・291・287はＲＬ＋ＲＬ、非結節、菱形文である。284・286・292・315はＬＲ＋ＲＬ、非結節、菱形文である。289はＲＬ＋ＲＬ、結節、菱形文である。

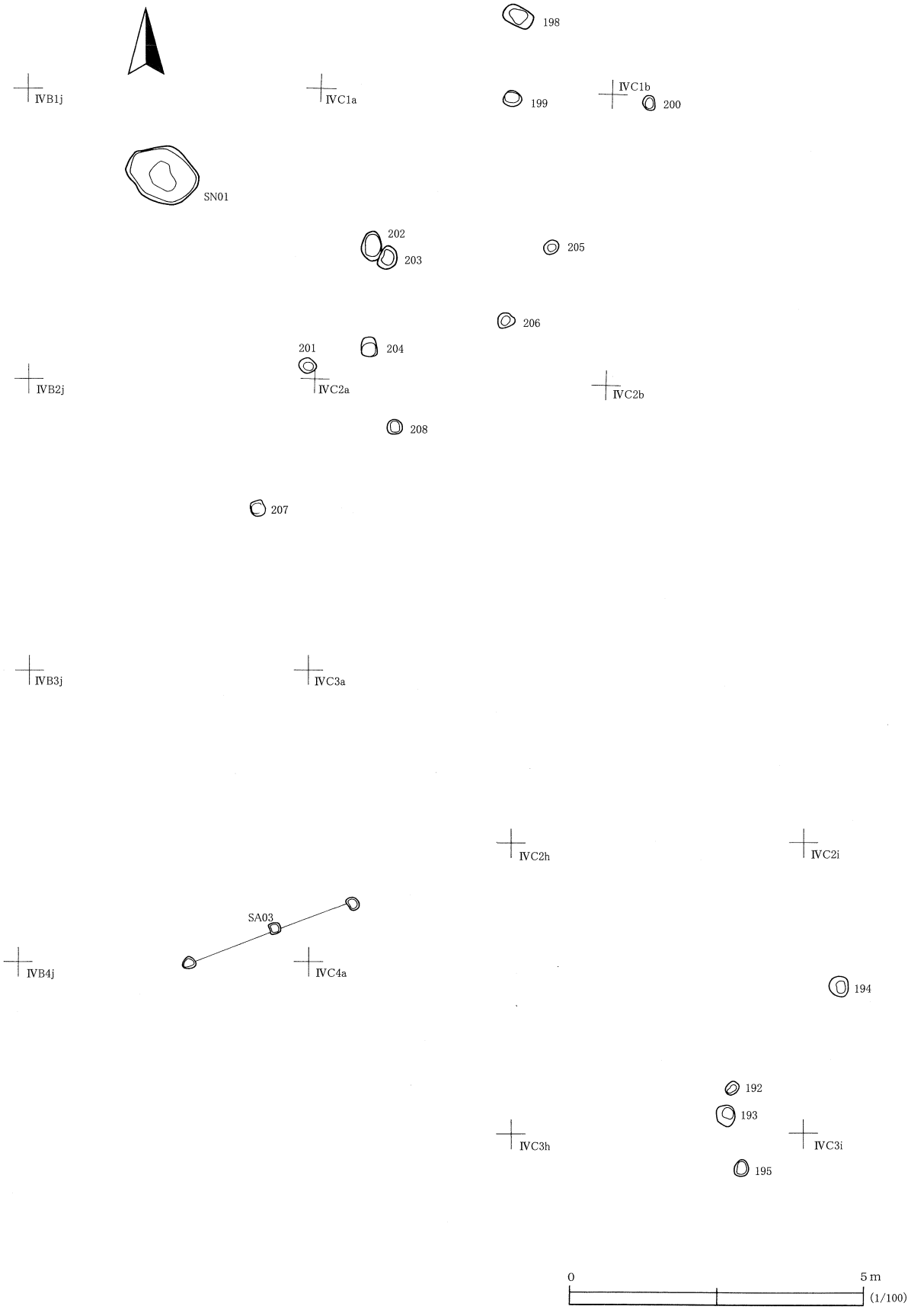
＜ループ状縄文＞274・296・298・311・312・313ループ状縄文である。Ｃ字と逆Ｃ字のいずれも認められる。

＜Ｓ字状連鎖文＞275はＳ字状連鎖文である。

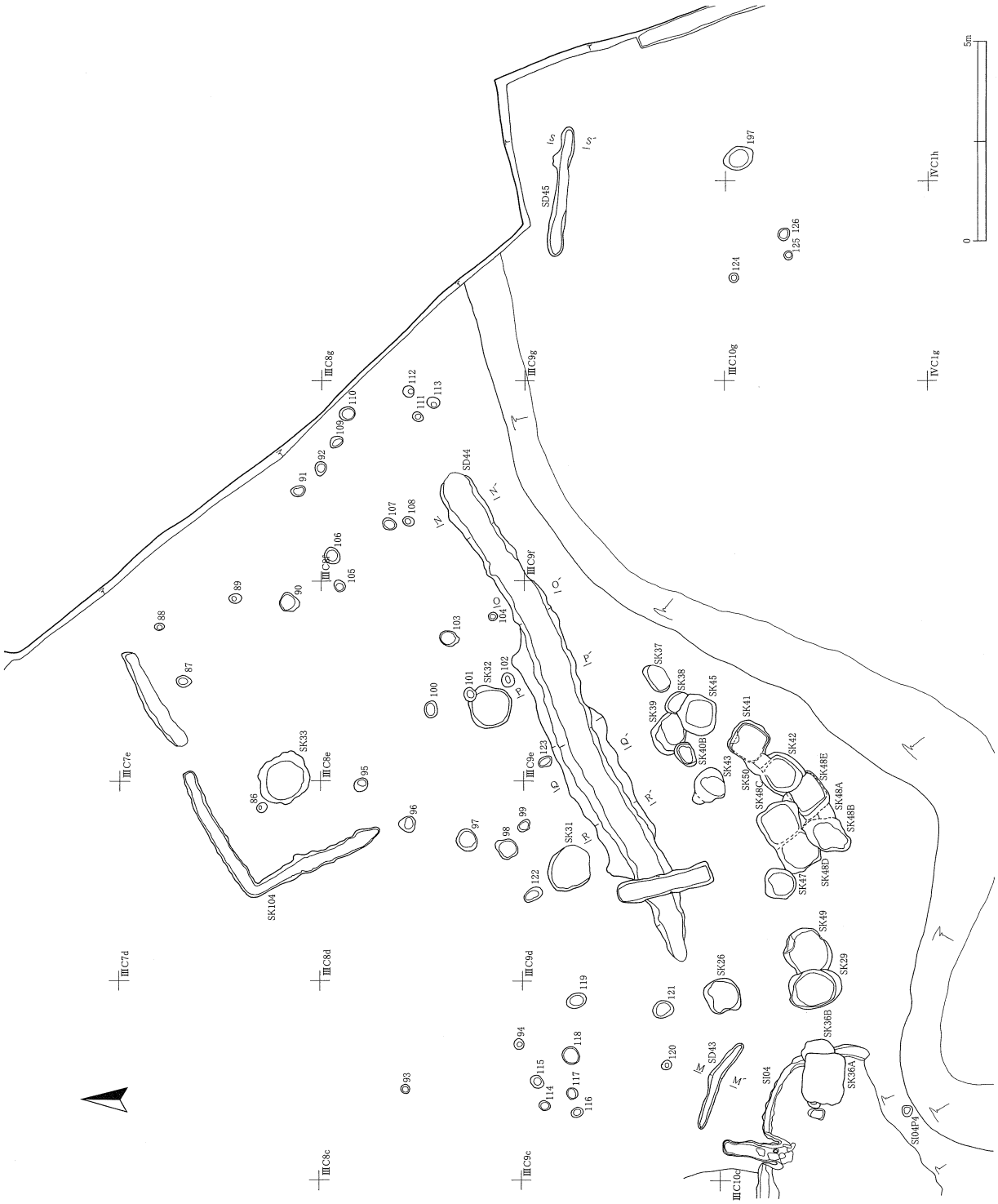
＜単軸絡条体＞278・310は単軸絡条体である。撚り方は残存状況不良のため不明。



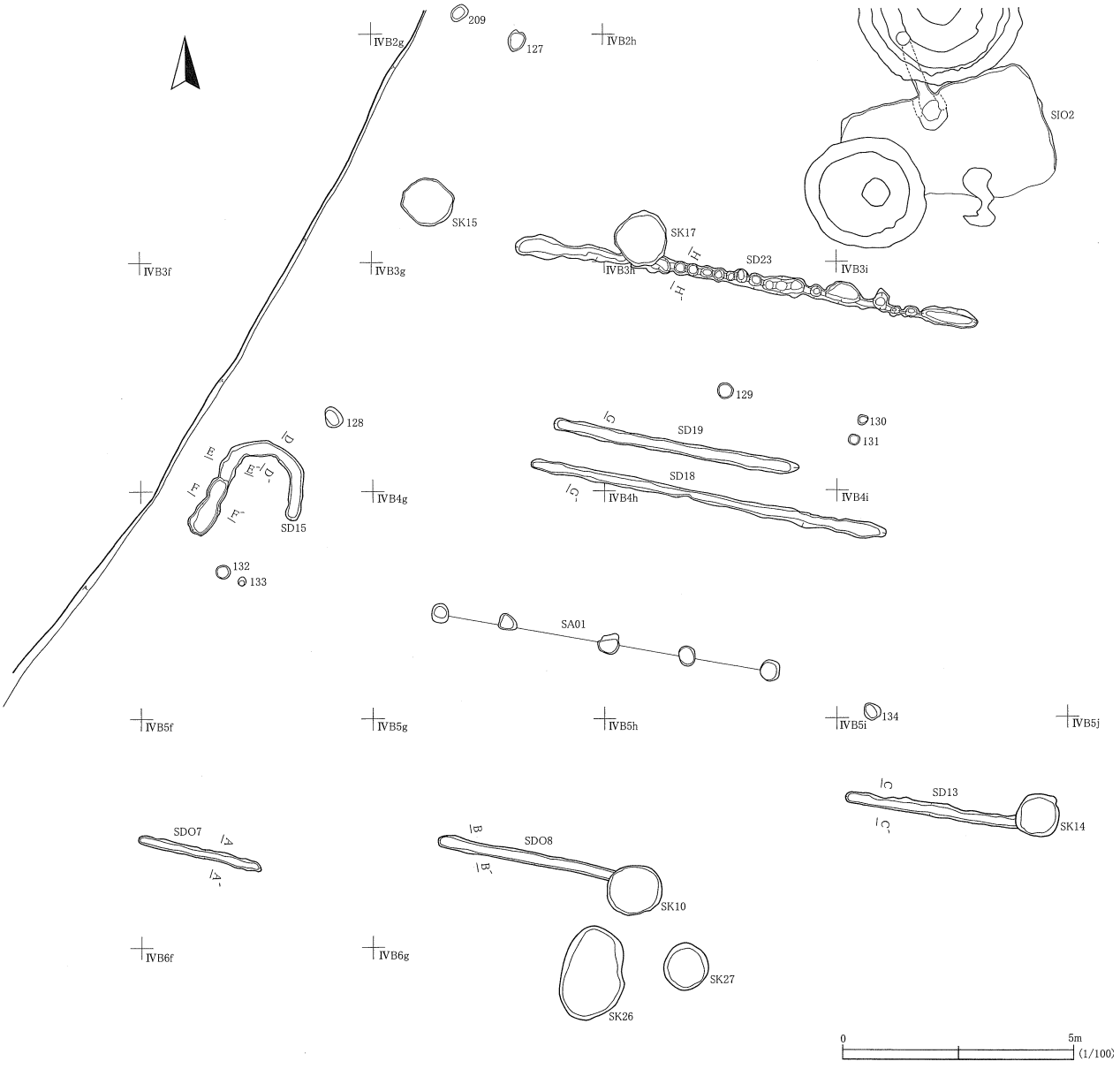
第62図　ＳＤ36溝跡・柱穴状土坑(4)


198
IVB1j
IVC1a
199
IVC1b
200
SN01
202
203
205
206
201
204
IVB2j
IVC2a
IVC2b
208
207
IVB3j
IVC3a
IVC2h
IVC2i
SA03
IVB4j
IVC4a
194
192
193
IVC3h
IVC3i
195
0
5m
(1/100)

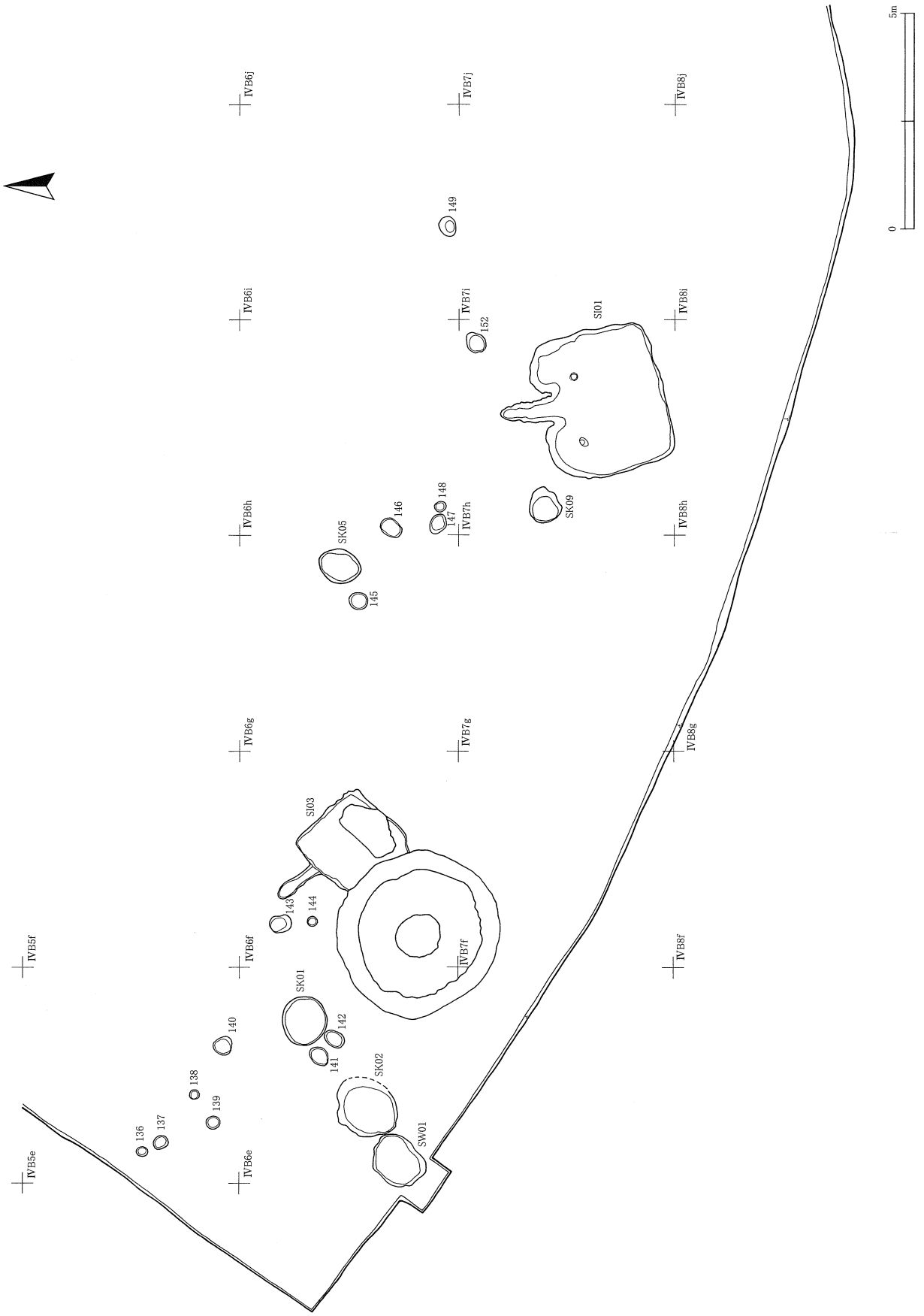
第63図　柱穴状土坑(5)



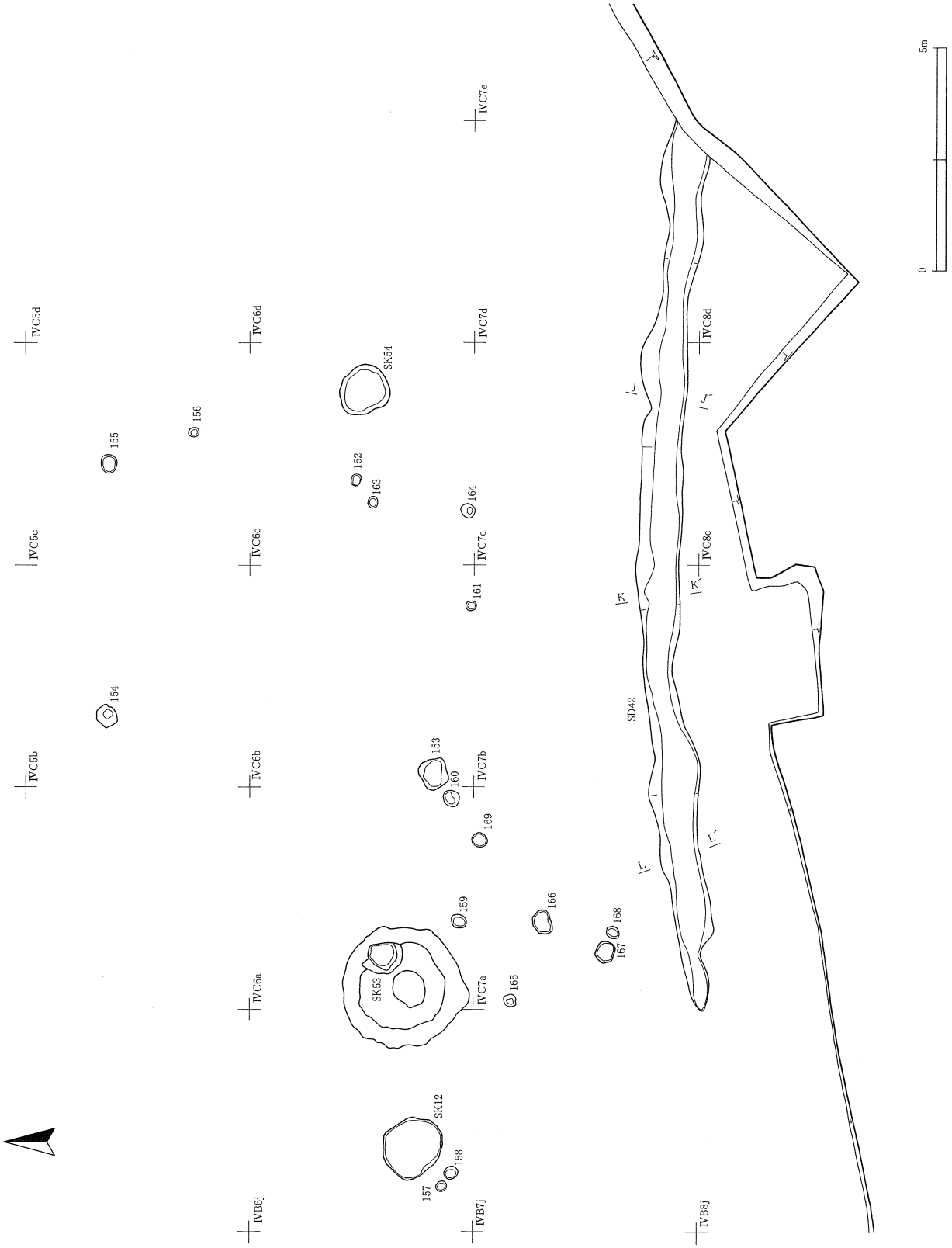
第64図　ＳＤ43～45溝跡・柱穴状土坑(6)



第65図　ＳＤ07・08・13・15・18・19・23溝跡・柱穴状土坑(7)

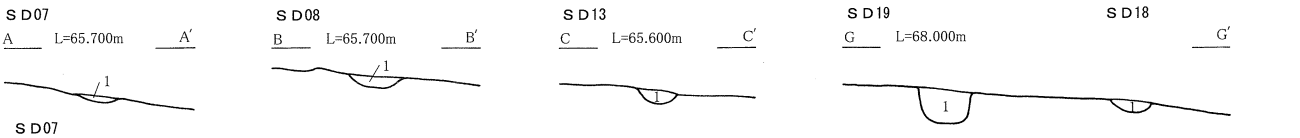

IVB5e
IVB5f
IVB6e
IVB6f
IVB6g
IVB6h
IVB6i
IVB6j
IVB7f
IVB7g
IVB7h
IVB7i
IVB7j
IVB8f
IVB8g
IVB8h
IVB8i
IVB8j
SI01
SI03
SK01
SK02
SK05
SK09
SW01
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
152
5m
0

第66図　柱穴状土坑(8)



第67図　ＳＤ48溝跡・柱穴状土坑(9)

第68図　柱穴状土坑(10)



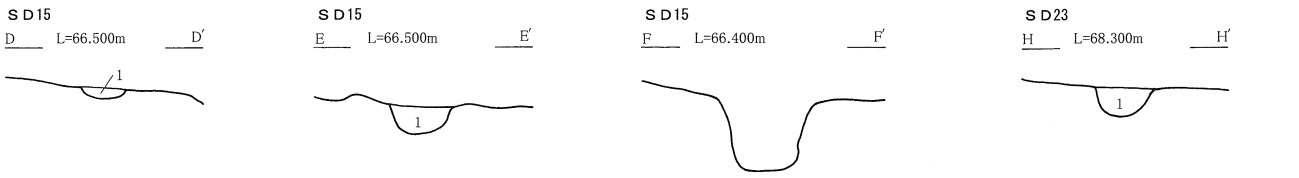
SD07
1．10YR2/2黒褐色 しまり有 粘性無 10YR5/6粒含

SD08
1．10YR3/3暗褐色 しまり有 粘性無 10YR5/6粒含 炭少量

SD13
1．10YR3/2 黒褐色 しまり有 粘性少し有 10YR5/6粒含

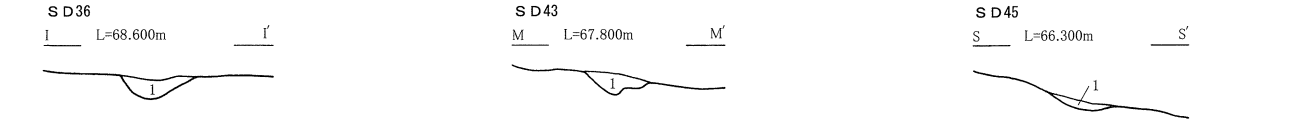
SD18
1．10YR3/2黒褐色 しまりやや有 粘性少し有 10YR5/6粒含

SD19
1．10YR3/4暗褐色 しまり有 粘性無 10YR4/4混入 10YR5/6粒含



SD15
1．10YR3/2黒褐色 しまりやや有 粘性少し有 10YR5/6粒含

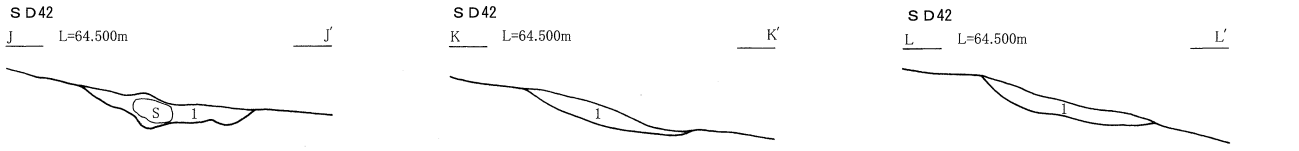
SD23
1．10YR3/4暗褐色 しまり有 粘性無 10YR4/4混入 10YR5/6粒含



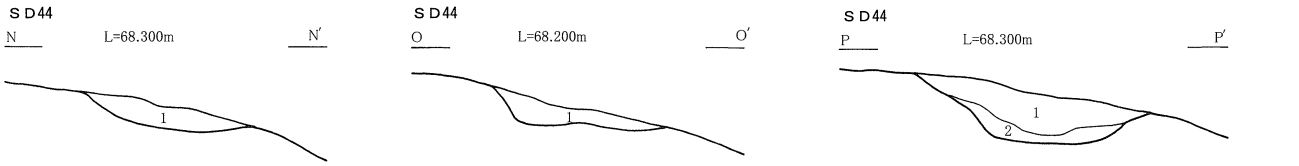
SD36
1．10YR3/3暗褐色 しまり有 粘性少し
10YR4/4ブロックを含

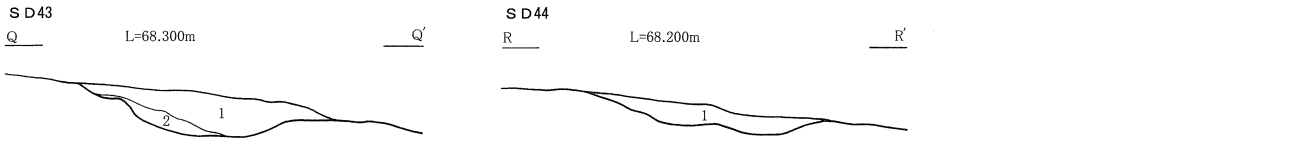
SD43
1．10YR2/1黒色 しまり有 粘性無
φ3～5cmの礫少量

SD45
1．10YR2/1 黒色 しまり有 粘性無
10YR5/6粒微量

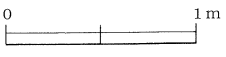


SD42
1．10YR2/2黒褐色 しまり有 粘性少し有 10YR5/6粒少量 下位を中心にφ5～10cmの礫含





SD44
1．10YR2/2 黒褐色 しまりやや有 粘性少し有 φ5～20cmの礫少量 10YR4/4微量
2．10YR3/3 暗褐色 しまりやや有 粘性少し有 φ5cm前後の礫含 10YR4/4粒少量

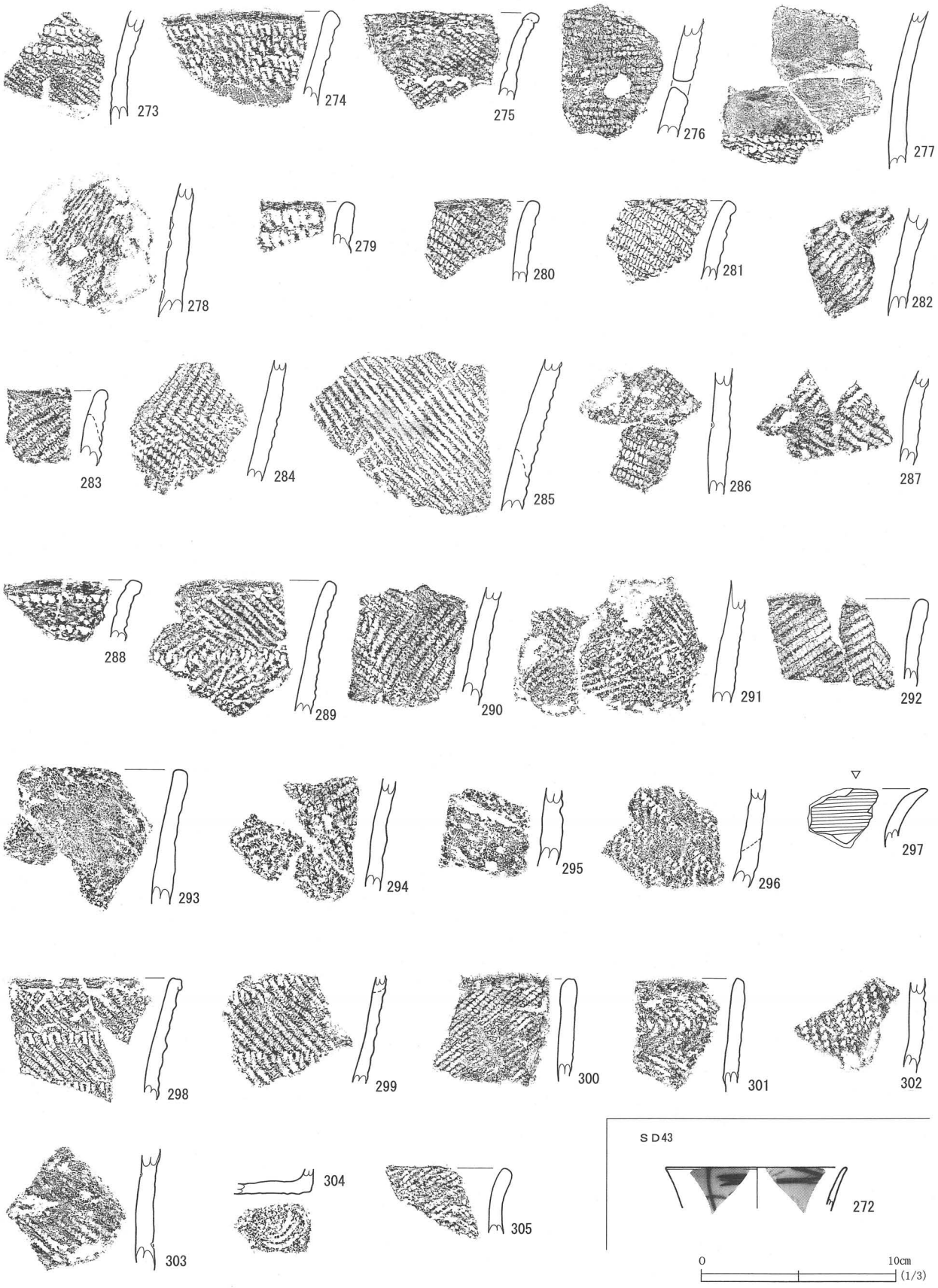


第69図　SD07・08・13・18・19・23・36・43～45溝跡

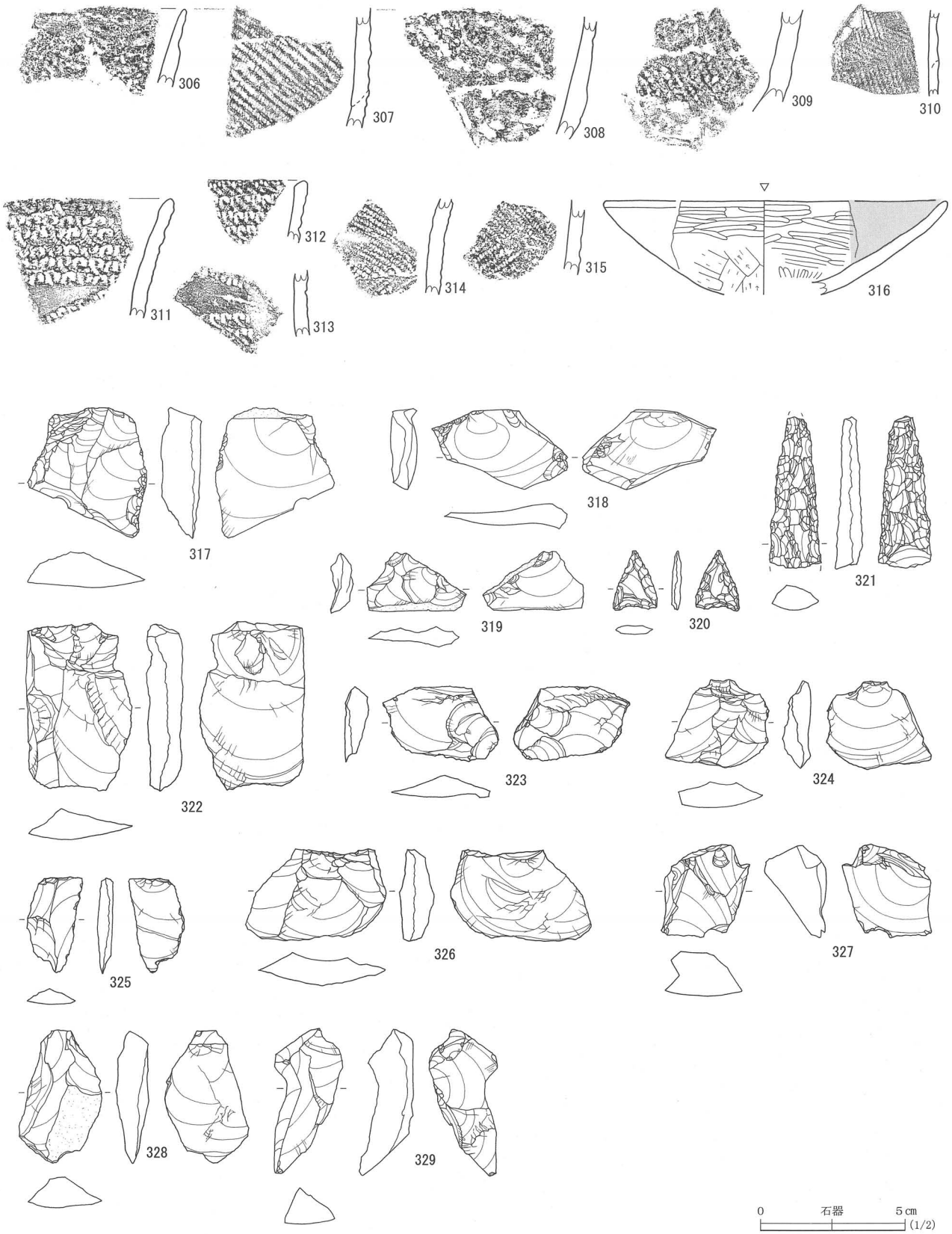
第１表　柱穴状土坑観察表

No.	グリッド名	径(cm)	深さ(cm)	検出面標高(m)	底面標高(m)	備考	No.	グリッド名	径(cm)	深さ(cm)	検出面標高(m)	底面標高(m)	備考
1	ⅢＢ３ｇ	42×35	14.9	71.09	71.07		70	ⅣＢ１ｃ	39×28	5.5	66.65	66.59	
2	ⅢＢ３ｇ	35×31	10.3	71.09	71.03		71	ⅣＢ１ｃ	66×61	19.1	66.82	66.63	
3	ⅢＢ３ｇ	44×34	16.8	71.09	71.03		72	ⅣＢ１ｄ	43×36	8.1	66.96	66.88	
4	ⅢＢ３ｈ	38×30	13.8	71.09	71.09		73	ⅣＢ１ｄ	40×35	23.4	66.95	66.71	
5	ⅢＢ４ｄ	43×38	11.8	71.60	70.26		74	ⅣＢ２ｃ	38×35	11.9	66.34	66.22	
6	ⅢＢ４ｆ	71×69	20.2	71.09	70.62		75	ⅣＢ２ｄ	60×52	8.5	66.52	66.43	
7	ⅢＢ４ｆ	45×38	19.9	71.09	70.50		76	ⅣＢ３ｃ	93×71	17.0	65.97	65.80	
8	ⅢＢ４ｆ	46×40	20.3	71.10	70.42		77	ⅢＡ５ｊ	70×65	28.8	68.49	68.20	
9	ⅢＢ４ｇ	67×62	22.6	71.09	70.70		78	ⅢＢ６ａ	57×55	24.8	67.97	67.72	
10	ⅢＢ４ｇ	26×26	8.5	71.09	70.71		79	ⅢＢ６ａ	58×43	18.7	67.51	67.33	
11	ⅢＢ４ｇ	50×50	25.4	71.10	70.38		80	ⅢＢ９ｉ	35×31	14.1	68.09	67.95	
12	ⅢＢ５ｄ	40×35	10.9	71.60	69.62		81	ⅢＢ９ｉ	35×29	11.0	68.00	67.89	
13	ⅢＢ５ｄ	58×42	18.3	71.60	69.52		82	ⅢＢ９ｊ	63×59	18.0	67.98	67.80	
14	ⅢＢ５ｅ	28×24	10.7	70.50	69.94		83	ⅢＢ９ａ	31×31	9.3	68.10	68.00	
15	ⅢＢ５ｅ	20×20	11.0	70.50	69.85		84	ⅢＢ10ｈ	74×55	17.7	67.91	67.73	
16	ⅢＢ５ｆ	39×30	13.9	70.50	70.17		85	ⅢＣ10ａ	40×27	17.4	67.78	67.60	
17	ⅢＢ５ｆ	75×52	14.0	70.50	70.03		86	ⅢＣ７ｄ	25×22	13.3	69.08	68.94	
18	ⅢＢ５ｆ	24×21	9.5	70.50	70.23		87	ⅢＣ７ｅ	36×31	16.9	69.18	69.01	
19	ⅢＢ５ｆ	43×29	10.8	70.50	70.35		88	ⅢＣ７ｅ	25×18	25.1	69.17	68.92	
20	ⅢＢ５ｇ	49×38	9.5	70.50	70.36	土師器片出土	89	ⅢＣ７ｅ	29×26	11.5	68.86	68.75	
21	ⅢＢ５ｇ	66×46	17.5	69.11	69.20		90	ⅢＣ７ｅ	50×44	15.7	68.75	68.60	
22	ⅢＢ５ｇ	34×31	7.0	70.00	69.66		91	ⅢＣ７ｆ	35×26	21.1	68.33	68.12	
23	ⅢＢ５ｇ	42×29	7.9	70.00	69.58		92	ⅢＣ７ｆ	35×30	31.5	68.25	68.94	
24	ⅢＢ５ｇ	60×53	20.4	70.00	69.52		93	ⅢＣ８ｃ	22×19	9.4	68.64	68.54	
25	ⅢＢ５ｈ	35×27	14.0	70.00	69.76		94	ⅢＣ８ｃ	26×23	13.6	68.39	38.25	
26	ⅢＢ５ｈ	46×40	13.9	70.00	69.71		95	ⅢＣ８ｄ	39×32	12.8	68.78	68.65	
27	ⅢＢ６ｄ	47×35	11.7	71.61	69.47		96	ⅢＣ８ｄ	42×42	13.0	68.71	68.58	
28	ⅢＢ６ｄ	45×31	6.8	68.72	68.36		97	ⅢＣ８ｄ	56×47	14.8	68.58	68.43	
29	ⅢＢ６ｆ	63×42	19.5	70.50	69.85		98	ⅢＣ８ｄ	58×52	16.4	68.42	68.26	
30	ⅢＢ６ｆ	25×23	17.8	69.11	68.66		99	ⅢＣ８ｄ	33×23	12.0	68.37	38.25	
31	ⅢＢ６ｆ	40×33	12.0	69.11	68.70		100	ⅢＣ８ｅ	40×30	31.8	68.54	68.23	
32	ⅢＢ７ｆ	94×69	18.5	69.12	68.43		101	ⅢＣ８ｅ	35×27	14.2	68.37	38.23	
33	ⅢＢ６ｇ	30×20	10.8	69.11	68.79		102	ⅢＣ８ｅ	34×31	39.1	68.24	67.85	
34	ⅢＢ６ｇ	84×64	14.5	69.11	69.25		103	ⅢＣ８ｅ	47×39	17.6	68.35	68.17	
35	ⅢＢ６ｇ	50×48	26.8	69.11	68.84		104	ⅢＣ８ｅ	22×22	17.8	68.10	67.92	
36	ⅢＢ６ｈ	47×32	17.0	69.11	69.44		105	ⅢＣ８ｅ	27×23	23.3	68.53	68.30	
37	ⅢＢ６ｈ	35×32	13.7	69.11	69.44		106	ⅢＣ８ｆ	41×37	21.4	68.44	68.23	
38	ⅢＢ６ｈ	53×46	18.7	69.11	69.08		107	ⅢＣ８ｆ	35×27	10.7	68.18	68.08	
39	ⅢＢ７ｇ	69×65	19.3	69.11	68.88		108	ⅢＣ８ｆ	27×23	18.8	68.13	67.94	
40	ⅢＢ７ｇ	45×42	16.1	69.11	68.83		109	ⅢＣ８ｆ	34×27	11.3	68.16	68.05	
41	ⅢＢ７ｄ	42×30	15.5	68.72	68.09		110	ⅢＣ８ｆ	39×36	15.0	68.03	67.88	
42	ⅢＢ７ｅ	81×64	19.6	69.02	68.21		111	ⅢＣ８ｆ	28×21	15.8	67.74	67.58	
43	ⅢＢ７ｅ	76×72	21.8	69.02	68.13		112	ⅢＣ８ｆ	28×28	31.8	67.66	67.34	
44	ⅢＢ７ｆ	34×32	9.9	69.01	68.67		113	ⅢＣ８ｆ	32×30	21.7	67.62	67.40	
45	ⅢＢ８ｂ	91×72	11.3	67.63	67.14		114	ⅢＣ９ｃ	26×24	10.9	68.29	68.18	
46	ⅢＢ８ｂ	72×55	23.3	67.63	67.01		115	ⅢＣ９ｃ	35×29	8.9	68.32	68.23	
47	ⅢＢ８ｂ	43×35	14.7	67.63	67.13		116	ⅢＣ９ｃ	32×25	12.4	68.19	68.07	
48	ⅢＢ８ｄ	35×29	3.8	68.72	68.11		117	ⅢＣ９ｃ	29×28	16.3	68.21	68.05	
49	ⅢＢ８ｄ	35×31	8.5	68.72	68.08		118	ⅢＣ９ｃ	44×43	6.3	68.24	68.18	
50	ⅢＢ８ｄ	59×51	7.1	67.62	67.81		119	ⅢＣ９ｃ	53×35	8.6	68.18	68.10	
51	ⅢＢ８ｄ	71×60	15.2	67.62	67.74		120	ⅢＣ９ｃ	24×23	13.6	67.97	67.83	
52	ⅢＢ８ｄ	56×39	21.8	67.62	67.82		121	ⅢＣ９ｃ	50×40	12.8	67.99	67.87	
53	ⅢＢ８ｅ	66×53	15.9	69.02	68.18		122	ⅢＣ９ｄ	47×29	15.6	68.35	68.19	
54	ⅢＢ８ｅ	60×53	17.4	69.02	68.18		123	ⅢＣ９ｅ	35×25	7.9	68.21	68.14	
55	ⅢＢ８ｆ	44×42	19.8	69.02	68.45		124	ⅢＣ10ｇ	24×24	8.4	66.02	65.94	
56	ⅢＢ９ｂ	39×29	10.1	67.63	67.22		125	ⅢＣ10ｇ	22×20	6.0	65.80	65.74	
57	ⅢＢ９ｂ	34×31	37.0	67.63	67.02		126	ⅢＣ10ｇ	32×27	9.8	65.78	65.68	
58	ⅢＢ９ｃ	40×34	10.4	67.63	67.36		127	ⅣＢ２ｇ	48×38	10.9	67.25	67.14	
59	ⅢＢ９ｃ	27×23	13.6	67.62	67.60		128	ⅣＢ３ｆ	47×37	16.9	66.45	66.28	
60	ⅢＢ９ｄ	33×31	13.2	67.63	67.48		129	ⅣＢ３ｈ	32×29	8.0	66.43	66.35	
61	ⅢＢ９ｄ	43×32	10.4	67.62	67.53		130	ⅣＢ３ｉ	23×19	3.4	66.26	66.22	
62	ⅢＢ９ｆ	74×57	13.6	68.12	67.79		131	ⅣＢ３ｉ	24×22	6.5	66.26	66.19	
63	ⅢＢ９ｆ	74×45	11.7	68.12	67.82		132	ⅣＢ４ｆ	30×30	7.2	66.00	65.92	Ｐ16
64	ⅢＢ９ｆ	30×29	19.0	68.12	67.60		133	ⅣＢ４ｆ	20×19	9.2	65.98	65.89	Ｐ17
65	ⅢＢ10ａ	56×46	19.0	67.34	66.28		134	ⅣＢ４ｉ	37×36	13.0	65.69	65.56	
66	ⅢＢ10ｂ	59×57	31.7	68.43	66.61		135	ⅣＢ１ｅ	28×26	16.0	67.09	66.93	
67	ⅢＢ10ｅ	31×30	14.6	68.13	67.26		136	ⅣＢ５ｅ	25×24	25.7	65.32	65.06	Ｐ１
68	ⅢＢ10ｆ	32×31	19.0	68.12	67.60		137	ⅣＢ５ｅ	35×27	22.1	65.30	65.08	Ｐ２
69	ⅣＢ１ａ	86×66	18.4	67.34	66.01		138	ⅣＢ５ｅ	23×22	19.6	65.24	65.04	Ｐ３

No.	グリッド名	径(cm)	深さ(cm)	検出面標高(m)	底面標高(m)	備考
139	ⅣＢ５ｅ	33×29	18.7	65.23	65.04	Ｐ４
140	ⅣＢ５ｅ	43×42	11.2	65.19	65.19	Ｐ７
141	ⅣＢ６ｅ	44×37	16.5	65.09	64.92	Ｐ６
142	ⅣＢ６ｅ	46×35	15.3	65.07	64.91	
143	ⅣＢ６ｆ	51×39	23.1	65.18	64.95	
144	ⅣＢ６ｆ	22×21	10.0	65.16	65.06	Ｐ10
145	ⅣＢ６ｇ	42×41	9.1	65.19	65.10	Ｐ12
146	ⅣＢ６ｈ	51×37	13.3	65.12	64.98	Ｐ13
147	ⅣＢ６ｈ	50×39	18.8	64.96	64.78	Ｐ14
148	ⅣＢ６ｈ	25×25	6.8	64.95	64.88	Ｐ15
149	ⅣＢ６ｉ	47×38	14.8	64.73	64.58	
152	ⅣＢ７ｈ	41×40	18.7	64.79	64.61	
153	ⅣＣ６ｂ	70×60	20.7	64.08	63.87	
154	ⅣＣ５ｂ	53×47	18.9	64.49	64.31	
155	ⅣＣ５ｃ	41×34	19.4	65.03	64.83	
156	ⅣＣ５ｃ	22×22	22.0	64.80	64.58	
157	ⅣＢ６ｊ	25×23	11.1	64.61	64.50	
158	ⅣＢ６ｊ	30×28	18.0	64.56	64.38	
159	ⅣＣ６ａ	35×31	11.9	64.26	64.14	
160	ⅣＣ６ａ	37×37	16.1	64.08	63.92	
161	ⅣＣ６ｂ	23×21	14.2	63.66	63.51	
162	ⅣＣ６ｃ	28×22	10.1	64.50	64.40	
163	ⅣＣ６ｃ	28×22	8.1	64.55	64.47	
164	ⅣＣ６ｃ	32×31	17.7	64.39	64.21	
165	ⅣＣ７ａ	28×26	18.0	64.25	64.07	
166	ⅣＣ７ａ	52×40	9.1	64.04	63.95	
167	ⅣＣ７ａ	46×38	10.2	63.92	63.82	
168	ⅣＣ７ａ	30×28	10.5	63.84	63.74	
169	ⅣＣ７ａ	34×33	9.6	64.08	63.99	
171	ⅣＣ３ｉ	48×42	11.7	62.96	62.84	
172	ⅣＣ３ｉ	47×38	9.6	62.92	62.82	
173	ⅣＣ３ｉ	47×41	16.7	62.76	62.59	
174	ⅣＣ３ｉ	45×40	14.0	62.57	62.43	
175	ⅣＣ４ｈ	28×27	13.0	62.69	62.56	
176	ⅣＣ４ｈ	33×31	11.4	62.63	62.51	
177	ⅣＣ４ｉ	46×34	14.8	62.55	62.40	
178	ⅣＣ４ｉ	46×35	14.5	62.40	62.26	
179	ⅣＣ４ｊ	32×25	13.9	62.15	62.01	
180	ⅣＣ５ｈ	53×43	22.4	62.50	62.28	
181	ⅣＣ６ｇ	31×27	16.4	61.92	61.76	
182	ⅣＣ６ｇ	27×25	21.5	61.71	61.50	
183	ⅣＣ６ｇ	33×32	36.5	61.38	61.02	
184	ⅣＣ６ｈ	27×23	26.8	61.30	61.04	
185	ⅣＣ６ｈ	27×21	11.5	61.25	61.14	
186	ⅣＣ６ｈ	45×35	10.7	61.30	61.19	
187	ⅣＣ７ｆ	26×26	11.6	61.34	61.22	
188	ⅣＣ７ｇ	22×22	14.0	61.34	61.20	
189	ⅣＣ７ｇ	23×22	24.0	60.99	60.75	
190	ⅣＣ７ｇ	23×18	10.7	61.02	60.91	
191	ⅣＣ７ｈ	42×37	29.9	61.11	60.81	
192	ⅣＣ２ｈ	25×21	8.2	63.78	63.69	
193	ⅣＣ２ｈ	38×32	12.0	63.73	63.61	
194	ⅣＣ２ｉ	36×29	12.0	63.82	63.70	
195	ⅣＣ３ｈ	29×22	8.1	63.58	63.50	
196	ⅢＢ６ｇ	65×55	11.4	69.24	69.12	
197	ⅢＣ10ｈ	75×59	20.5	65.86	65.66	
198	ⅢＣ10ａ	52×31	16.6	67.46	67.29	
199	ⅣＣ１ａ	32×26	16.2	67.27	67.11	
200	ⅣＣ１ｂ	23×20	10.5	67.20	67.09	
201	ⅣＢ１ｊ	30×25	55.9	66.74	66.18	
202	ⅣＣ１ａ	50×33	15.9	67.00	66.84	
203	ⅣＣ１ａ	42×28	22.1	66.95	66.73	
204	ⅣＣ１ａ	32×29	34.8	66.69	66.35	
205	ⅣＣ１ａ	26×22	10.3	66.82	66.72	
206	ⅣＣ１ａ	29×25	47.4	66.72	66.24	
207	ⅣＢ２ｊ	28×24	33.3	66.58	66.25	
208	ⅣＣ２ａ	28×28	11.2	66.52	66.40	
209	ⅣＢ１ｇ	41×30	8.8	67.28	67.20	



第70図　ＳＤ43溝跡・遺構外出土遺物(1)



第71図　遺構外出土遺物(2)

石器（第71図、写真図版49・50）

320は所謂凹基鏃、321は所謂平基鏃である。317～319・322～329は不定形石器である。

土師器（第71図、写真図版49）

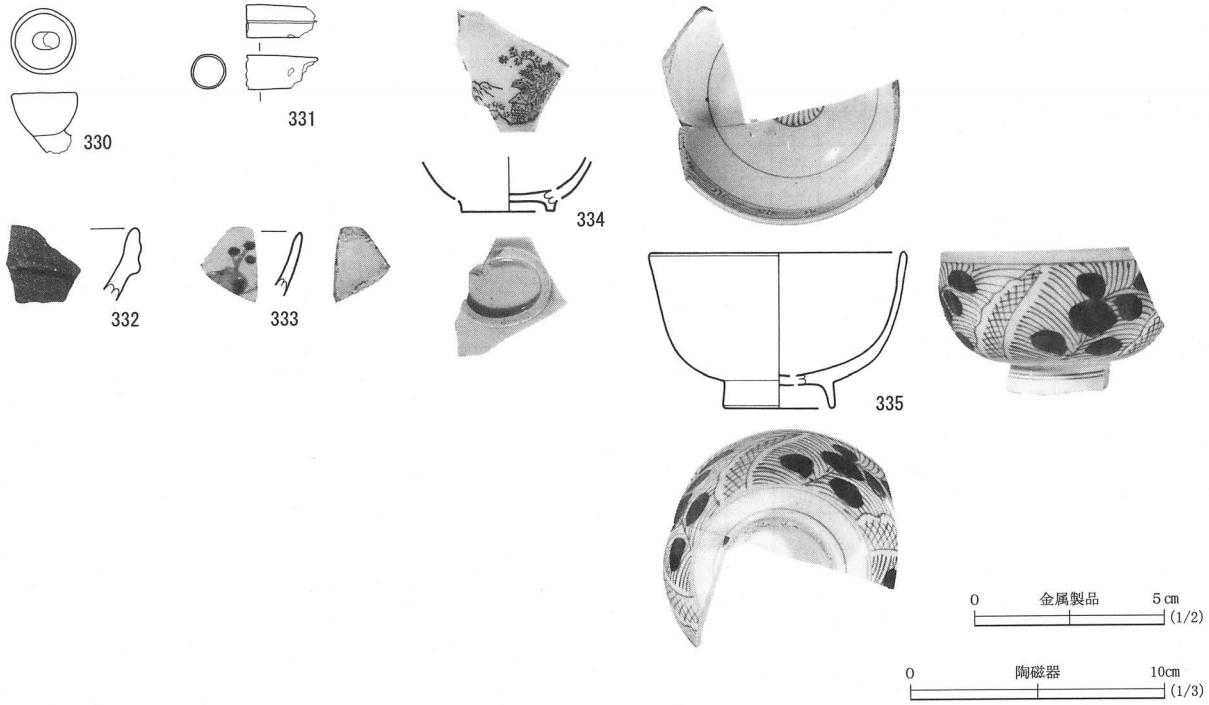
Ｂ区東端より出土した316の１点を図示した。非ロクロ成形の丸底の坏もしくは浅鉢状のものである。底部から若干丸みをもって口縁部まで立ち上がり、内面黒色処理・ヘラミガキ、外面下半はヘラケズリ、上半はヘラミガキ調整が施されている。

金属製品（第71図、写真図版50）

330は煙管の雁首。331は煙管の吸口である。336～339は釘である。

陶器・陶磁器（第71図、写真図版50）

332は近世の擂鉢の口縁部破片である。産地は不明であるが、在地ではないかと思われる。333は肥前産の碗である。時期は19世紀前半である。355は小皿、356は碗である。



第71図　遺構外出土遺物(3)

第２表　土器観察表

（　）：推定、［　］残存値

図番	登番	区域名	新遺構名	出土位置・属位	器種	法量（cm）			調整	色調	焼成	胎土	備考	分類	図版	写版
						口径	器高	底径	内面／外面	内面／外面						
1	50	B区	ＳＩ01	床面・埋土	土師器甕	14.2	11.7	6.5	ヨコナデ・ヘラナデ／ヨコナデ・ヘラミガキ・ヘラケズリ	10YR7/6明黄褐／10YR7/6明黄褐	良	密・砂含	ベルト埋土と接合	G	10	41
2	52	B区	ＳＩ01	埋土	土師器甕	(14.6)	[3.2]	—	ヨコナデ・ハケメ／ヨコナデ・ハケメ	7.5YR7/6橙／7.5YR7/6橙	良	砂含		G	10	41
3	51	B区	ＳＩ01	床面	土師器甕	(12.8)	[11.7]	6.8	ヘラミガキ／ヘラミガキ・ヘラナデ	7.5YR8/6浅黄橙／10YR7/4にぶい黄橙			反転実測	G	10	41
7	60	B区	ＳＩ02	ＲＰ８～11	土師器甕	(17.0)	24.6	(9.4)	ヨコナデ・ヘラナデ／ヨコナデ・ハケメ	7.5YR7/8黄橙／５YR7/8橙	良	砂まじり	反転実測。輪積	I	13	41
8	59	B区	ＳＩ02	床面　ＲＰ12	土師器甕	(18.2)	[8.5]	—	ヨコナデ・ハケメ・ヘラナデ／ヨコナデ・ヘラケズリ	５YR7/8橙／５YR7/8橙	？	砂含	反転実測	I	13	41
9	56	B区	ＳＩ02	ＲＰ１	土師器甕	(18.7)	[9.6]	—	ヘラナデ／ヘラナデ	2.5YR6/8橙／５YR6/8橙	良	砂含	反転実測	C	13	41
10	53	B区	ＳＩ02	カマド ＲＰ１～４	土師器甕	(18.6)	[5.8]	—	ヨコナデ・ハケメ／ヨコナデ・ヘラケズリ	５YR5/6明赤褐／５YR5/6明赤褐	良	砂含	反転実測。剥落著しい埋土と接合	D	13	41
11	58	B区	ＳＩ02	カマドＲＰ５～８西袖	土師器甕	(14.6)	[5.0]	—	ヨコナデ・ヘラナデ／ヨコナデ・ハケメ	10YR7/6明黄褐／10YR7/6明黄褐	良	砂含	反転実測	F	13	41
12	57	B区	ＳＩ02	ＲＰ２	土師器甕	—	[10.0]	—	ヨコナデ・ヘラナデ／ヨコナデ・ハケメ	7.5YR7/6黄橙／7.5YR7/6黄橙	良	砂含φ１㎝の小石入る	平面実測　埋土と接合	C	13	41
13	55	B区	ＳＩ02	カマド	土師器甕	—	[2.4]	—	ヨコナデ・ヘラナデ／ヨコナデ	2.5YR5/6明赤褐／2.5YR5/6明赤褐	良	砂含	平面実測	C	13	41
14	54	B区	ＳＩ02	床面	土師器甕	—	[3.6]	7.4	ハケメ／ヘラケズリ	7.5YR7/6橙／10YR7/6明黄褐	良	砂含、密	ＲＰ１脇	—	13	41
16	61	B区	ＳＩ04	カマドＲＰ２・12・16・23、煙道埋土	土師器甕	(20.6)	[23.5]	—	ヘラナデ／ヘラナデ（強い）	7.5YR6/6橙／7.5YR6/6橙	良	砂含	反転実測。全面煤付着北東床面　埋土と接合	A	17	42
17	73	B区	ＳＩ04	カマド　ＲＰ11	土師器甕	(17.6)	[17.2]	—	不明／ヨコナデ・ハケメ	10YR8/4浅黄橙／10YR8/4浅黄橙	？	砂含	全体的に磨滅・剥落著しく調整不明	A	17	42
18	74	B区	ＳＩ04	カマド　ＲＰ５	土師器甕	(17.6)	[12.2]	—	剥落著しく不明／剥落著しく不明	10YR6/6明黄褐／10YR7/6明黄褐	？	砂含	反転実測。煤付着	C	17	42
19	67	B区	ＳＩ04	カマド　ＲＰ14	土師器甕	(22.0)	[7.7]	—	ヘラナデ・ヘラミガキ／ヨコナデ・単位の細いハケメかヘラミガキ	7.5YR7/6橙／7.5YR7/6橙	良	砂含	反転実測	A	17	42
20	62	B区	ＳＩ04	埋土	土師器甕	(16.1)	[9.9]	—	ヨコナデ・ヘラナデ／ヨコナデ・ヘラミガキ	５YR6/6橙／５YR4/4にぶい赤褐	良	砂含	反転実測口縁部におこげ付着	C	17	42
21	71	B区	ＳＩ04	カマド　ＲＰ21	土師器甕	(20.0)	[4.4]	—	ヘラミガキ・ヨコナデ／ヘラナデ・ヘラミガキ・ヨコナデ	7.5YR6/6橙／7.5YR6/6橙	良	細砂含	反転実測	A	17	42
22	69	B区	ＳＩ04	カマド　ＲＰ16・北東床面	土師器甕	—	[11.2]	—	ヨコナデ・ヘラナデ／ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラナデ	7.5YR6/8橙／7.5YR6/8橙	良	砂含	反転実測。輪積痕有	C	17	42
23	63	B区	ＳＩ04	カマド	土師器甕	—	[7.6]	—	ヨコナデ・ヘラナデ／ヨコナデ・ヘラミガキ・ヘラケズリ	7.5YR6/4にぶい橙／7.5YR7/6橙	良	細砂金雲母含	反転実測。輪積痕・付着物有	I	17	42
24	68	B区	ＳＩ04	カマド　ＲＰ17	土師器甕	—	[6.2]	—	ヘラナデ／ミガキ	10YR6/8黄橙／10YR6/8黄橙	良	砂含	平面実測・カマドＲＰ１４・煙道埋土と接合	I	17	42
25	72	B区	ＳＩ04	カマド　ＲＰ２・ＲＰ10・ＲＰ22	土師器甕	—	[9.8]	—	ハケメ／ヘラナデ	7.5YR7/6橙／7.5YR7/6橙	良	細砂含	反転実測	—	18	42
26	66	B区	ＳＩ04	カマド　ＲＰ７	土師器甕	—	[4.2]	9.5	ヘラナデ／ハケメ・ヘラナデ	7.5YR7/6橙／7.5YR7/6橙	良	砂と金雲母含	底は磨滅していて不明	I	18	42
27	65	B区	ＳＩ04	カマド　ＲＰ６	土師器甕	—	[6.5]	(9.6)	ヘラナデ／(ハケメ)・ヘラミガキ？	7.5YR7/8黄橙／7.5YR6/8橙	良	砂雲母含	内外面剥落著しい底は磨滅していて不明	—	18	42
28	64	B区	ＳＩ04	カマド　ＲＰ４	土師器甕	—	[8.8]	(5.8)	ヘラナデ／ハケメ・ヘラケズリ	10YR7/4にぶい黄橙／7.5YR5/8明褐	良	砂含	反転実測。輪積底は磨滅していて不明	—	18	42
29	70	B区	ＳＩ04	ＲＰ20	土師器甕	—	[8.0]	8.5	ハケメ／ハケメ・ヘラナデ	2.5YR7/4浅黄／2.5YR7/4浅黄	良	砂含、雲母入る	輪積痕有	—	18	42
31	4	A区	ＳＩ06A	ＲＰ３	土師器坏	10.4	3.6	—	内黒・ヘラミガキ／ヘラケズリ・ヘラナデ	10YR2/1黒／５YR6/6橙	良	砂含・小石少量	内黒・輪積痕有	B	20	43
32	3	A区	ＳＩ06A	埋土	土師器坏	(10.0)	3.0	—	内黒／ヨコナデ・底ヘラケズリ（剥落著しい）	10YR2/1黒／10YR6/6明黄褐	良	小石含	内黒・丸底・反転実測	F	20	43
33	11	A区	ＳＩ06A	ＲＰ12	土師器坏	(11.9)	[3.4]	—	ヘラミガキ／ヘラナギ・ヘラケズリ	５YR5/8明赤褐／５YR5/8明赤褐	良	砂含	被熱で内黒消滅	E	20	43
34	1	A区	ＳＩ06A	ＲＰ２	土師器甕	(14.6)	15.9	(5.9)	ヨコナデ・ヘラナデ／ヨコナデ・ヘラナデ	10YR4/2灰黄褐／2.5YR6/6赤褐	良	砂粒・小石含	輪積痕有、反転実測、埋土接合。	H	20	43
35	9	A区	ＳＩ06A	ＲＰ８	土師器甕	(12.3)	[17.9]	—	ヨコナデ・ヘラナデ／ヨコナデ・ヘラケズリ	10YR6/8明黄褐／10YR6/6明黄褐	良	砂粒含	反転実測。輪積痕有	F	20	43
36	2	A区	ＳＩ06A	床面	甑（甕）	(10.8)	7.5	(6.1)	ヘラナデ／ヘラナデ	５YR5/8明赤褐／５YR5/6明赤褐	良	砂含・小石微量	36・37は同一固体の可能性もある。底縁がつくられている事から36は甑と判明した。埋土と接合。ＲＰ13の下から出土	J	20	43
37	′2	A区	ＳＩ06A	床面	土師器甕	—	[2.75]	(5.6)	ヘラナデ／ヘラナデ	５YR5/8明赤褐／５YR5/6明赤褐	良	砂含・小石微量	36・37共反転。ＲＰ16の下から出土	—	20	43
38	8	A区	ＳＩ06A	ＲＰ６	土師器甕	(18.3)	[7.4]	—	ヨコナデ・ヘラナデ／ヨコナデ・ハケメ	10YR7/4にぶい黄橙／10YR7/6明黄褐	良	砂粒含		B	20	43
39	7	A区	ＳＩ06A	ＲＰ５	土師器甕	(19.6)	[5.9]	—	ヨコナデ・ヘラケズリ／ヨコナデ・ヘラケズリ	10YR6/1にぶい黄橙／7.5YR6/6橙	良	砂含	反転実測・煤付着	B	20	43
40	6	A区	ＳＩ06A	ＲＰ４	土師器甕	(18.0)	[4.2]	—	ヨコナデ・ヘラナデ／ヨコナデ・ヘラナデ	５YR6/8橙／５YR6/8橙	良	砂粒とφ１～２㎜の小石含	反転実測	E	20	43
41	12	A区	ＳＩ06A	ＲＰ13	土師器甕	—	[18.8]	8.0	ヘラナギ／ヘラケズリ	10YR7/6明黄褐／10YR7/6明黄褐	良	砂含	輪積	I	20	43
42	5	A区	ＳＩ06A	ＲＰ３	土師器甕	—	[6.3]	(8.6)	ヘラナデ（磨滅）／ヘラナデ	10YR7/6明黄褐／10YR6/4にぶい黄橙	良？	砂多く含	反転実測。輪積痕・底部木葉痕有	—	20	43
43	10	A区	ＳＩ06A	ＲＰ９・ＲＰ10	土師器甕	—	[7.2]	—	ヨコナデ・ヘラナデ／ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ	10YR7/4にぶい黄橙／５YR6/4にぶい赤褐	良	砂含	埋土と接合	—	20	43
44	13	A区	ＳＩ06B	床面	土師器坏	—	[4.05]	(10.6)	内黒・ヘラミガキ／ヘラケズリ・ヘラナデ	10YR2/1黒／10YR5/4にぶい黄橙	良	砂含・粗	内黒	A	21	43
45	15	A区	ＳＩ06B	Ｐ１	土師器甕	(12.0)	[7.5]	—	ヨコナデ・ヘラナデ／ヨコナデ・ヘラケズリ	7.5YR7/8黄橙／５YR6/8橙	良	砂含・粗	反転実測。輪積痕。埋土と接合。内外面剥落著しい	F	21	43
46	14	A区	ＳＩ06B	床面	土師器甕	(15.6)	[4.2]	—	ヨコナデ・ヘラナデ／ヨコナデ・ヘラケズリ	7.5YR6/8橙／５YR6/8橙	良	砂含		C	21	43
47	16	A区	ＳＩ07	床面	土師器甕	(16.7)	[2.6]	—	ヨコナデ／ヨコナデ	7.5YR6/6／7.5YR6/6橙	良	砂含	坏とも考えたが、胎土・形状から甕口縁と判断した	A	22	43
48	88	B区	ＳＮ01	検出面	土師器坏	(15.6)	5.1	—	内黒・ヘラミガキ／ヘラナデ・ヨコナデ	10YR2/1黒／10YR7/8黄橙	良	砂雲母含	底部木葉痕	F	24	43
49	87	B区	ＳＮ01	埋土	土師器坏	(13.7)	4.5	4.1	内黒・ヘラミガキ／ヨコナデ？・ヘラミガキ	10YR2/1黒／7.5YR5/6明褐	良	砂含金雲母入る	剥落・磨滅著しく調整不明。反転実測	C	24	43
50	91	B区	ＳＮ01	検出面	土師器甕	—	[2.4]	—	不明／ハケメ・ヨコナデ	7.5YR7/8黄橙／7.5YR7/8黄橙	良	砂含	剥落著しい内面は剥落の為調整不明。平面実測	—	24	43
51	89	B区	ＳＮ01	埋土	土師器甕	—	[2.7]	(9.0)	ヘラナデ／ヘラナデ	10YR6/8明黄橙／10YR6/8明黄橙	良	金雲母・砂含	反転実測	—	24	43
52	90	B区	ＳＮ01	検出面	土師器甕	—	[2.5]	8.6	ヘラナデ／ヘラナデ	５YR6/6橙／7.5YR6/6橙	良	砂含	底部木葉痕	—	24	43
261	75	B区	ＳＫＩ01	ＲＰ１	縄文深鉢	—	[9.5]	—	斜縄文ＲＬ	7.5YR4/2灰褐／2.5YR6/8橙	良	小石・石英含	ＲＰ４と接合	—	45	48
262	76 b	B区	ＳＫＩ01	ＲＰ３	縄文深鉢	—	[5.8]	—	斜縄文ＲＬ	５YR4/2灰褐／５YR6/6橙	良	小石・石英含		—	45	48
263	76 a	B区	ＳＫＩ01	ＲＰ２	縄文深鉢	—	[8.2]	—	斜縄文ＲＬ	7.5YR3/1黒褐／7.5YR7/8黄橙	良	小石・石英含	ＲＰ４・ベルト埋土と接合	—	45	48

（　）：推定、［　］残存値

図番	登番	区域名	新遺構名	出土位置・属位	器種	法量（cm）			調整	色調	焼成	胎土	備考	分類	図版	写版
						口径	器高	底径	内面／外面	内面／外面						
264	79	B区	SKI01A	埋土	縄文深鉢	—	［8.6］	—	斜縄文ＲＬ	10YR5/3にぶい黄褐／10YR4/4褐	良	小石・石英含		—	46	48
265	78	B区	SKI01A	埋土	縄文深鉢	—	［4.4］	—	貝殻条痕文（外面縦、内面横方向）	10YR5/3にぶい黄褐／5YR5/8赤褐	良	小石・雲母含		—	46	48
266	77	B区	SKI01A	埋土	縄文深鉢	—	［5.8］	—	斜縄文ＲＬ	7.5YR5/3にぶい褐／7.5YR5/4にぶい褐	良	小石・雲母含		—	46	48
268	18	A区	ＳＫＩ11	埋土	縄文深鉢	—	［4.9］	—	附加状縄文（ＲＬ／ｒ）	10YR7/4にぶい黄橙／10YR7/4明黄褐	良	小石・石英含		—	48	48
269	85	B区	ＳW01	埋土	土師器甕	—	［3.2］	—	ヘラナデ／ヘラケズリ	7.5YR7/6橙／7.5YR7/6橙	良	砂含	平面実測	—	50	48
271	17	A区	ＳK80		土師器甕	(17.9)	［4.0］	—	ヨコナデ／ヨコナデ	7.5YR6/6／7.5YR6/6橙	良	砂含、密	反転実測	C	55	48
273	32	A区	遺構外	ⅢC10ｃグリッド	縄文深鉢	—	［5.5］	—	斜縄文ＬＲ	10YR7/4にぶい黄橙／10YR3/1黒褐	良	小石・石英・雲母含		—	70	49
274	19	A区	遺構外	ⅢB10ｆグリッドⅠ層	縄文深鉢	—	［4.3］	—	ループ状	10YR5/3にぶい黄褐／10YR7/4にぶい黄橙	良	小石・石英・雲母含		—	70	49
275	22	A区	遺構外	ⅢB10ｆグリッドⅠ層	縄文深鉢	—	［4.2］	—	Ｓ字状連鎖文（ＲＬ）	5YR5/4にぶい赤橙／10YR6/3にぶい黄橙	良	小石・石英・雲母含		—	70	49
276	20	A区	遺構外	ⅢB10ｆグリッドⅠ層	縄文深鉢	—	［5.7］	—	斜縄文ＬＲ	10YR5/4にぶい黄褐／10YR4/3にぶい黄褐	良	小石・石英・雲母含	穿孔有	—	70	49
277	21	A区	遺構外	ⅢB10ｆグリッドⅠ層	縄文深鉢	—	［7.9］	—	斜縄文ＲＬ。磨り消し	10YR7/4にぶい黄橙／10YR6/4にぶい黄橙	良	小石・石英・雲母含		—	70	49
278	35	A区	遺構外	ⅣC３ｄグリッドⅢ層	縄文深鉢	—	［6.7］	—	単軸絡条体（縦位）	10YR6/3にぶい黄橙／10YR6/4にぶい黄橙	良	小石・石英・雲母含	底部破片	—	70	49
279	36	A区	遺構外	ⅣC３ｄグリッドⅢ層	縄文深鉢	—	［2.1］	—	斜縄文ＲＬ	10YR7/8黄橙／10YR8/6黄橙	良	小石・石英含	口縁部直立気味に立ち上がる	—	70	49
280	37	A区	遺構外	ⅣC３ｄグリッドⅢ層	縄文深鉢	—	［4.2］	—	斜縄文ＲＬ	10YR6/4にぶい黄橙／10YR5/3にぶい黄褐	良	小石・石英・雲母含	口縁部直立	—	70	49
281	38	A区	遺構外	ⅣC３ｄグリッドⅢ層	縄文深鉢	—	［4.1］	—	斜縄文ＲＬ	10YR6/4にぶい黄橙／10YR2/1黒	良	小石・石英含	口縁部直立	—	70	49
282	34	A区	遺構外	ⅢC２ｅグリッドⅠ層	縄文深鉢	—	［5.7］	—	斜縄文ＲＬ	10YR8/4浅黄橙／10YR8/3浅黄橙	良	小石・石英含	口縁部直立	—	70	49
283	27	A区	遺構外	調査区南端　Ⅲ層検出面	縄文深鉢	—	［3.3］	—	斜縄文ＲＬ	10YR8/3浅黄橙／10YR8/4浅黄橙	良	小石・石英含	口縁部直立	—	70	49
284	28	A区	遺構外	調査区南端　Ⅲ層検出面	縄文深鉢	—	［6.0］	—	羽状縄文（ＬＲ＋ＲＬ）。菱形文	10YR5/3／10YR5/3にぶい黄褐	良	小石少量・石英含		—	70	49
285	29	A区	遺構外	調査区南端　Ⅳ層検出面	縄文深鉢	—	［7.9］	—	斜縄文ＲＬ	10YR7/4にぶい黄橙／10YR8/4浅黄橙	良	小石少量・石英含		—	70	49
286	30	A区	遺構外	調査区南端　Ⅳ層検出面	縄文深鉢	—	［6.5］	—	羽状縄文（ＬＲ＋ＲＬ）。菱形文	7.5YR6/6橙／7.5YR5/4にぶい褐	良	小石・石英・雲母含		—	70	49
287	31	A区	遺構外	調査区南端　Ⅳ層検出面	縄文深鉢	—	［4.7］	—	羽状縄文（ＲＬ＋ＲＬ）。菱形文	7.5YR6/4にぶい橙／7.5YR7/6褐	良	小石・石英・雲母含		—	70	49
288	23	A区	遺構外	調査区南　Ⅱ層	縄文深鉢	—	［3.0］	—	斜縄文ＬＲ	10YR7/3にぶい黄橙／10YR6/3にぶい黄橙	良	石英・雲母含	口縁部やや湾曲して立ち上がる	—	70	49
289	26	A区	遺構外	調査区南　Ⅱ層	縄文深鉢	—	［6.9］	—	羽状縄文（ＲＬ＋ＲＬ。結節）。菱形文	10YR8/6黄橙／10YR6/4にぶい黄橙	良	石英・雲母含	口縁部直立	—	70	49
290	24	A区	遺構外	調査区南　Ⅱ層	縄文深鉢	—	［5.5］	—	羽状縄文（ＲＬ＋ＲＬ）。菱形文	10YR7/4にぶい黄橙／10YR6/4にぶい黄橙	良	小石・石英・雲母含		—	70	49
291	25	A区	遺構外	調査区南　Ⅱ層	縄文深鉢	—	［6.3］	—	羽状縄文（ＲＬ＋ＲＬ）	10YR7/4にぶい黄橙／10YR8/6黄橙	良	石英・雲母含		—	70	49
292	33	A区	遺構外		縄文深鉢	—	［4.1］	—	羽状縄文（ＬＲ＋ＲＬ）。菱形文	10YR8/4浅黄橙／10YR6/3にぶい黄橙	良	小石・石英・雲母含		—	70	49
293	107	B区	遺構外	ⅢC８ｆグリッドⅡ層	縄文深鉢	—	［7.0］	—	斜縄文ＲＬ	10YR6/4にぶい黄橙／10YR6/8明黄褐	良	小石・石英含		—	70	49
294	108	B区	遺構外	ⅢC８ｆグリッドⅡ層	縄文深鉢	—	［5.6］	—	斜縄文ＲＬ	7.5YR6/6橙／7.5YR5/4にぶい褐	良	小石・石英含		—	70	49
295	106	B区	遺構外	ⅢC８ｆグリッドⅡ層	縄文深鉢	—	［4.0］	—	斜縄文ＲＬ	10YR5/4にぶい黄褐／10YR7/6明黄褐	良	石英・雲母・繊維含		—	70	49
296	109	B区	遺構外	ⅢD10ｂグリッド撹乱	縄文深鉢	—	［4.7］	—	ループ状	7.5YR6/6橙／10YR7/4黄橙	良	小石・石英・雲母含		—	70	49
297	92	B区	遺構外	ⅣB１ｇグリッドⅠ層	土師器甕	—	［8.3］	—	ヨコナデ／ヨコナデ	7.5YR7/8黄橙／7.5YR7/9黄橙	良	砂含	平面実測		70	49
298	94	B区	遺構外	ⅣB１ｇグリッドⅠ層	縄文深鉢	—	［6.0］	—	ループ状	10YR6/4にぶい黄橙／10YR4/3にぶい黄褐	良	石英・雲母含		—	70	49
299	93	B区	遺構外	ⅣB１ｇグリッドⅠ層	縄文深鉢	—	［5.4］	—	斜縄文ＲＬ	10YR5/4にぶい黄褐／10YR5/4にぶい黄褐	良	石英・雲母含		—	70	49
300	84	B区	遺構外	ⅣC５ｈグリッドⅠ層	縄文深鉢	—	［5.2］	—	斜縄文ＲＬ	5YR5/6明赤褐／5YR5/4にぶい赤褐	良	石英・雲母含	口縁部直立	—	70	49
301	83	B区	遺構外	ⅣC５ｈグリッドⅠ層	縄文深鉢	—	［5.5］	—	斜縄文ＲＬ	10YR4/6褐／10YR6/4にぶい黄褐	良	小石・石英・雲母含	口縁部直立	—	70	49
302	81	B区	遺構外	ⅣC３ｉグリッドⅠ層	縄文深鉢	—	［4.4］	—	斜縄文ＲＬ	7.5YR6/6橙／7.5YR6/6橙	良	石英・砂含		—	70	49
303	82	B区	遺構外	ⅣC３ｉグリッドⅠ層	縄文深鉢	—	［5.6］	—	斜縄文ＲＬ	5YR6/6橙／5YR5/4にぶい赤褐	良	石英・雲母含		—	70	49
304	80	B区	遺構外	ⅣC３ｉグリッドⅠ層	縄文　鉢？	—	［1.4］	—	斜縄文ＲＬ	10YR5/4にぶい黄褐／10YR4/4褐	良	石英含	底部破片	—	70	49
305	110	B区	遺構外	ⅣC６ｇグリッド	縄文深鉢	—	［3.4］	—	斜縄文ＲＬ	10YR5/4にぶい褐／10YR5/3にぶい褐	良	石英含		—	71	49
306	100	B区	遺構外	調査区南　Ⅱ層	縄文深鉢	—	［3.9］	—	磨滅が著しくはっきりしない	10YR4/3にぶい黄褐／10YR5/3にぶい黄褐	良	小石・石英含		—	71	49
307	97	B区	遺構外	調査区中央　Ⅱ層	縄文深鉢	—	［6.2］	—	斜縄文ＲＬ	10YR7/6明黄褐／10YR6/4にぶい黄橙	良	石英・繊維含		—	71	49
308	105	B区	遺構外	東端　Ⅲ層	縄文深鉢	—	［6.1］	—	磨滅が著しくはっきりしない	10YR5/4にぶい黄褐／10YR6/6明黄褐	良	石英・雲母・繊維含		—	71	49
309	104	B区	遺構外	東端　Ⅲ層	縄文深鉢	—	［4.6］	—	斜縄文ＲＬ	10YR5/3にぶい黄褐／10YR5/3にぶい黄褐	良	石英・雲母・繊維含		—	71	49
310	98	B区	遺構外	調査区西　Ⅱ層	縄文深鉢	—	［4.4］	—	単軸絡条体（縦位）	7.5YR6/8橙／7.5YR6/8橙	良	石英含		—	71	49
311	95	B区	遺構外	Ⅱ層	縄文深鉢	—	［6.0］	—	ループ状。磨り消し	10YR5/3にぶい黄褐／10YR5/4にぶい黄褐	良	石英・雲母・繊維含		—	71	49
312	103	B区	遺構外	東端　Ⅲ層	縄文深鉢	—	［2.8］	—	ループ状	7.5YR6/6橙／7.5YR6/6橙	良	石英・雲母含		—	71	49
313	96	B区	遺構外	Ⅱ層	縄文深鉢	—	［3.3］	—	ループ状。磨り消し	10YR5/4にぶい黄褐／10YR6/4にぶい黄橙	良	石英・雲母・繊維含		—	71	49
314	101	B区	遺構外	Ⅲ層	縄文深鉢	—	［4.9］	—	羽状縄文（ＬＲ＋ＲＬ）。菱形文	10YR5/3にぶい黄褐／10YR3/1黒褐	良	小石・石英含		—	71	49
315	102	B区	遺構外	東端　Ⅲ層	縄文深鉢	—	［3.6］	—	羽状縄文（ＬＲ＋ＲＬ）。菱形文	10YR4/3にぶい黄褐／10YR8/8橙	良	石英・雲母含		—	71	49
316	99	B区	遺構外	調査区東　Ⅱ層	土師器坏？	(19.0)	［5.0］	—	ミガキ／ミガキ・ヘラケズリ	内黒／10YR7/4にぶい黄橙	良	細砂	反転実測。内黒	D	71	49

第３表　金属製品観察表

［　］残存値

図番	登番	区域名	遺　構　名	出土位置・層位	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　　考	図版	写版
59	402	B区	SK37	RM2	鋏	14.4	2.1	—	65.78		28	44
65	403	B区	SK38	埋土	釘	4.7	4.3	0.5	10.09	長さ９cm、径0.5cm。Ｌ字状に折り曲がっている	—	44
66	404	B区	SK38	埋土	釘	5.0	4.2	0.4	10.30	長さ9.2cm、径0.4cm。Ｌ字状に折り曲がっている	—	44
82	405	B区	SK39		釘	4.0	—	0.3	2.36	長さ４cm、径0.3cm	—	44
83	401	B区	SK40A・B	RM5	鋏	15.0	2.4	—	30.57		31	44
84	400	B区	SK40A・B	RM4	毛抜	8.2	7.5	1.25	11.99		31	44
88	408	B区	SK40A・B	RM1－3	釘	5.0	—	0.4	3.50	長さ５cm、径0.4cm	—	44
89	409	B区	SK40A・B	RM3	釘	4.9	—	0.4	3.45	長さ4.9cm、径0.4cm	—	44
90	406	B区	SK40A・B	埋土	釘	4.8	—	0.4	3.48	長さ4.8cm、径0.4cm	—	44
91	407	B区	SK40A・B	埋土	釘	4.9	—	0.4	3.38	長さ4.9cm、径0.4cm	—	44
92	419	B区	SK41	RM8	煙管雁首	[4.15]	—	—	6.68	火皿径2.15cm、身径0.9～1.1cm	33	45
163	411	B区	SK41	RM10	釘	3.7	—	0.5	2.80	長さ3.7cm、径0.5cm。木質部付	—	46
164	412	B区	SK41	RM18	釘	4.4	0.8	0.4	2.80	長さ4.4cm、径0.4cm。木質部付	—	46
165	410	B区	SK41	埋土	釘	3.2	2.4	0.6	2.48	長さ3.2cm、径0.6cm。木質部付	—	46
168	421	B区	SK42	RM1	煙管雁首	[3.00]	—	—	3.55	火皿径1.1cm、身径0.8～0.9cm	35	46
169	422	B区	SK42	RM2	煙管吸口	[4.4]	—	—	4.93	身径0.5～1.25cm	35	46
180	414	B区	SK43	RM1	釘	7.3	—	0.5	13.28	長さ7.3cm、径0.5cm	—	47
181	415	B区	SK43	RM1	釘	7.2	—	0.5	8.30	長さ7.2cm、径0.5cm	—	47
203	424	B区	SK47		煙管吸口	[6.3]	—	—	4.18	身径0.5～1.1cm	38	47
204	423	B区	SK47	埋土	煙管吸口	[3.3]	—	—	2.47	身径1.1cm	38	47
239	426	B区	SK48E	埋土	煙管雁首	[2.3]	—	—	2.71	火皿径1.1cm、身径0.8～1.0cm	43	48
240	425	B区	SK48E	埋土	煙管吸口	[6.5]	—	—	4.38	身径0.4～0.95cm	43	48
245	416	B区	SK48E	RM16	釘	4.7	—	0.4	3.37	長さ4.7cm、径0.4cm	—	48
248	420	B区	SK50	１～３層	煙管雁首	[4.00]	—	—	4.20	火皿径1.2cm、身径0.85～1.25cm	44	48
260	413	B区	SK50	１～３層	釘	4.0	—	0.3	2.10	長さ４cm、径0.3cm	—	48
330	418	A区	遺構外	ⅢB10b　Ⅰ層	煙管雁首	[1.75]	—	—	2.72	火皿径1.75cm、身径0.7～0.8cm	72	50
331	417	A区	遺構外	ⅢB10b　Ⅰ層	煙管吸口	[1.95]	0.9	—	0.89	身径0.9cm	72	50
336	588	A区	遺構外	ⅢB10b　Ⅰ層	釘	3.6	—	0.4	3.52	長さ3.6cm、径0.4cm	—	50
337	589	A区	遺構外	ⅢB10b　Ⅰ層	釘	4.2	—	0.4	2.07	長さ4.2cm、径0.4cm	—	50
338	591	B区	遺構外	Ⅲ層　検出面	釘	5.9	—	0.6	7.70	長さ5.9cm、径0.6cm	—	50
339	590	B区	遺構外	ⅣB５ｇグリッド	釘	6.2	—	0.6	5.60	長さ6.2cm、径0.6cm	—	50

第４表　銭貨観察表

図番	登番	遺　構　名	出土位置・層　位	器　種	外径(cm)	内径(cm)	重量(g)	金属の種　類	初鋳年代	備　　考	図版	写版
53	427	SK29	RM1－1	寛永通寶	2.45	0.7	3.59	銅	1636	古寛永	27	44
54	430	SK29	RM1－4	寛永通寶	2.4	0.6	2.67	銅	1636	古寛永	27	44
55	432	SK29	RM1－6	寛永通寶	2.4	0.6	4.04	銅	1636	古寛永	27	44
56	428	SK29	RM1－2	寛永通寶	2.5	0.6	3.24	銅	1668	新寛永（文銭）	27	44
57	429	SK29	RM1－3	寛永通寶	2.4	0.6	3.61	銅	1668	新寛永（文銭）	27	44
58	431	SK29	RM1－5	寛永通寶	2.3	0.7	2.19	銅	1697	新寛永。元禄～寛永江戸亀戸	27	44
60	437	SK37	RM1－5	寛永通寶	2.45	0.6	8.45	銅	1636	熱により寛永通寶３枚が密着して剥がれない。重量以外は一番上の寛永通寶の観察結果。一番上は古寛永	28	44
61	433	SK37	RM1－1	寛永通寶	2.5	0.6	3.78	銅	1636	古寛永	28	44
62	435	SK37	RM1－3	寛永通寶	—	—	2.35	銅	1697	火を受けたため焼けただれておりはっきりしない。新寛永と思われる	—	44
63	434	SK37	RM1－2	寛永通寶？	—	—	5.31	銅	—	火を受けたのか焼けただれている。詳細は不明	—	44
64	436	SK37	RM1－4	寛永通寶？	—	—	1.48	銅	—	火を受けたのか焼けただれている。詳細は不明	—	44
67	439	SK39	RM1－2	寛永通寶	2.2	0.7	2.25	銅	1636	古寛永	30	44
68	444	SK39	RM1－7	寛永通寶	2.2	0.8	2.75	銅	1697	新寛永。元禄～寛永江戸亀戸	30	44
69	452	SK39	RM3	寛永通寶	2.25	0.65	2.01	銅	1697	新寛永。正徳江戸亀戸所鋳銭	30	44
70	438	SK39	RM1－1	寛永通寶	2.3	0.6	3.88	銅	1697	新寛永。明和５年江戸亀戸所鋳銭	30	44
71	443	SK39	RM1－6	寛永通寶	2.4	0.6	3.39	銅	1697	新寛永。明和５年江戸亀戸所鋳銭	30	44
72	451	SK39	RM2－5	寛永通寶	2.4	0.7	2.92	銅	1697	新寛永。明和５年江戸亀戸所鋳銭	30	44
73	440	SK39	RM1－3	寛永通寶	2.15	0.7	2.42	銅	1697	新寛永。熱によって磨滅が進行しており、分類はできなかった	30	44
74	441	SK39	RM1－4	寛永通寶	2.4	0.7	2.45	銅	1697	新寛永。熱によって磨滅が進行しており、分類はできなかった	30	44
75	442	SK39	RM1－5	寛永通寶	2.4	0.7	2.34	銅	1697	新寛永。熱によって磨滅が進行しており、分類はできなかった	30	44
76	449	SK39	RM2－3	寛永通寶	2.4	0.7	2.19	銅	—	磨滅著しく詳細は不明	30	44
77	450	SK39	RM2－4	寛永通寶	2.4	0.7	3.07	銅	—	磨滅著しく詳細は不明。赤味を帯びている	30	44
78	447	SK39	RM2－1	寛永通寶	2.4	0.7	2.88	銅	1697	新寛永。赤味を帯びている	30	44
79	448	SK39	RM2－2	寛永通寶	2.3	0.7	3.25	銅	1697	新寛永。赤味を帯びている	30	44
80	445	SK39	RM1－8	寛永通寶	—	—	1.09	銅	—	火を受けたのか焼けただれている。詳細は不明	—	44
81	446	SK39	RM1－9	寛永通寶	—	—	1.51	銅	—	火を受けたのか焼けただれている。詳細は不明	—	44
85	454	SK40A・B	RM1－1	寛永通寶	2.2	0.7	2.55	銅	1697	新寛永。正徳江戸亀戸所鋳銭	31	44

図番	登番	遺構名	出土位置・層位	器種	外径(cm)	内径(cm)	重量(g)	金属の種類	初鋳年代	備考	図版	写版
86	455	ＳＫ40Ａ・Ｂ	ＲＭ１－２	寛永通寶	2.3	0.7	1.57	銅	1697	新寛永。赤味を帯びている	31	44
87	453	ＳＫ40Ａ・Ｂ	埋土	寛永通寶？	—	—	1.02	銅	—	火を受けたのか焼けただれている。詳細は不明	—	44
93	521	ＳＫ41	ＲＭ15－１	寛永通寶	2.3	0.6	2.03	銅	1636	古寛永	33	45
94	476	ＳＫ41	ＲＭ３－２	寛永通寶	2.2	0.6	2.55	銅	1636	古寛永	33	45
95	499	ＳＫ41	ＲＭ３－25	寛永通寶	2.4	0.7	2.87	銅	1636	古寛永	33	45
96	509	ＳＫ41	ＲＭ７－２	寛永通寶	2.4	0.6	3.67	銅	1636	古寛永	33	45
97	456	ＳＫ41	埋土－１	寛永通寶	2.3	0.6	2.22	銅	1636	古寛永	33	45
98	470	ＳＫ41	埋土－15	寛永通寶	2.3	0.6	2.94	銅	1636	古寛永。	33	45
99	522	ＳＫ41	ＲＭ15－２	寛永通寶	2.4	0.65	3.03	銅	1668	新寛永（文銭）	33	45
100	506	ＳＫ41	ＲＭ４－３	寛永通寶	2.4	0.6	3.39	銅	1668	新寛永（文銭）	33	45
101	494	ＳＫ41	ＲＭ３－20	寛永通寶	2.2	0.65	3.05	銅	1697	新寛永。元文江戸小名木所鋳銭	33	45
102	500	ＳＫ41	ＲＭ３－26	寛永通寶	2.2	0.7	3.26	銅	1697	新寛永。元文江戸小名木所鋳銭	33	45
103	482	ＳＫ41	ＲＭ３－８	寛永通寶	2.2	0.65	3.30	銅	1697	新寛永。元文江戸小名木所鋳銭	33	45
104	475	ＳＫ41	ＲＭ３－１	寛永通寶	2.3	0.7	2.53	銅	1697	新寛永。元文江戸深川平野新田所鋳銭	33	45
105	490	ＳＫ41	ＲＭ３－16	寛永通寶	2.3	0.65	2.24	銅	1697	新寛永。元文江戸深川平野新田所鋳銭	33	45
106	508	ＳＫ41	ＲＭ７－１	寛永通寶	2.2	0.65	2.07	銅	1697	新寛永。元文江戸深川平野新田所鋳銭	33	45
107	487	ＳＫ41	ＲＭ３－13	寛永通寶	2.2	0.7	2.63	銅	1697	新寛永。元文江戸柳島所鋳銭	33	45
108	489	ＳＫ41	ＲＭ３－15	寛永通寶	2.2	0.8	3.46	銅	1697	新寛永。元文江戸柳島所鋳銭	33	45
109	493	ＳＫ41	ＲＭ３－19	寛永通寶	2.2	0.7	2.51	銅	1697	新寛永。元文江戸柳島所鋳銭	33	45
110	495	ＳＫ41	ＲＭ３－21	寛永通寶	2.25	0.7	3.37	銅	1697	新寛永。元文江戸柳島所鋳銭	33	45
111	503	ＳＫ41	ＲＭ３－29	寛永通寶	2.2	0.7	2.47	銅	1697	新寛永。元文江戸柳島所鋳銭	33	45
112	479	ＳＫ41	ＲＭ３－５	寛永通寶	2.25	0.65	2.97	銅	1697	新寛永。元文江戸柳島所鋳銭	33	45
113	504	ＳＫ41	ＲＭ４－１	寛永通寶	2.3	0.7	2.43	銅	1697	新寛永。元文江戸柳島所鋳銭	33	45
114	501	ＳＫ41	ＲＭ３－27	寛永通寶	2.3	0.6	2.79	銅	1697	新寛永。元文出羽秋田所鋳銭	33	45
115	488	ＳＫ41	ＲＭ３－14	寛永通寶	2.3	0.7	3.00	銅	1697	新寛永。元文山城横大路所鋳銭	33	45
116	480	ＳＫ41	ＲＭ３－６	寛永通寶	2.2	0.7	3.07	銅	1697	新寛永。元禄～寛永江戸亀戸	33	45
117	497	ＳＫ41	ＲＭ３－23	寛永通寶	2.25	0.65	2.88	銅	1697	新寛永。正徳江戸亀戸所鋳銭	33	45
118	477	ＳＫ41	ＲＭ３－３	寛永通寶	2.2	0.7	2.45	銅	1697	新寛永。正徳江戸亀戸所鋳銭	33	45
119	507	ＳＫ41	ＲＭ４－４	寛永通寶	2.3	0.65	2.66	銅	1697	新寛永。正徳江戸亀戸所鋳銭	33	45
120	511	ＳＫ41	ＲＭ７－４	寛永通寶	2.3	0.65	2.60	銅	1697	新寛永。正徳江戸亀戸所鋳銭	33	45
121	465	ＳＫ41	埋土－10	寛永通寶	2.2	0.6	3.12	銅	1697	新寛永。明和～応永常陸太田所鋳銭	33	45
122	486	ＳＫ41	ＲＭ３－12	寛永通寶	2.15	0.65	3.10	銅	1697	新寛永。明和５年江戸亀戸所鋳銭	33	45
123	498	ＳＫ41	ＲＭ３－24	寛永通寶	2.25	0.65	3.81	銅	1697	新寛永。明和５年江戸亀戸所鋳銭	33	45
124	481	ＳＫ41	ＲＭ３－７	寛永通寶	2.3	0.7	2.82	銅	1697	新寛永。明和５年江戸亀戸所鋳銭	33	45
125	510	ＳＫ41	ＲＭ７－３	寛永通寶	2.3	0.6	3.45	銅	1697	新寛永。明和５年江戸亀戸所鋳銭	33	45
126	467	ＳＫ41	埋土－12	寛永通寶	2.4	0.6	3.2	銅	1697	新寛永。明和５年江戸亀戸所鋳銭	33	45
127	484	ＳＫ41	ＲＭ３－10	寛永通寶	2.2	0.55	2.11	銅	1697	新寛永。摩耗の影響でそれ以上の分類はできなかった	33	45
128	491	ＳＫ41	ＲＭ３－17	寛永通寶	2.2	0.65	2.82	銅	1697	新寛永。同上	33	45
129	492	ＳＫ41	ＲＭ３－18	寛永通寶	2.3	0.65	3.10	銅	1697	新寛永。同上	33	45
130	502	ＳＫ41	ＲＭ３－28	寛永通寶	2.4	0.6	3.09	銅	1697	新寛永。同上	33	45
131	483	ＳＫ41	ＲＭ３－９	寛永通寶	2.2	0.7	3.06	銅	1697	新寛永。同上	33	45
132	463	ＳＫ41	埋土－８	寛永通寶	2.2	0.7	2.54	銅	1697	新寛永。同上	33	45
133	496	ＳＫ41	ＲＭ３－22	寛永通寶	2.1	0.7	2.20	銅	1697	新寛永。同上	33	45
134	466	ＳＫ41	埋土－11	寛永通寶	2.3	0.6	1.57	銅	1697	新寛永。同上	33	45
135	505	ＳＫ41	ＲＭ４－２	寛永通寶	2.1	0.6	1.88	銅	1697	新寛永。同上	33	45
136	478	ＳＫ41	ＲＭ３－４	寛永通寶	2.15	0.65	2.71	銅	1697	新寛永。同上	33	45
137	519	ＳＫ41	ＲＭ12－８	寛永通寶	2.2	0.7	1.87	銅	1697	新寛永。同上	33	45
138	457	ＳＫ41	埋土－２	寛永通寶	2.7	0.6	4.87	銅	1768	寛永通寶四文銭（21波）。明和江戸十萬坪鋳銭	34	45
139	461	ＳＫ41	埋土－６	寛永通寶	2.7	0.7	4.79	銅	1768	寛永通寶四文銭（21波）。明和江戸十萬坪鋳銭	34	45
140	462	ＳＫ41	埋土－７	寛永通寶	2.7	0.6	5.13	銅	1768	寛永通寶四文銭（21波）。明和江戸十萬坪鋳銭	34	45
141	469	ＳＫ41	埋土－14	寛永通寶	2.7	0.7	7.21	銅	1821	寛永通寶四文銭（11波）。赤味を帯びている。文政江戸十萬坪鋳造	34	45
142	458	ＳＫ41	埋土－３	寛永通寶	2.7	2.4	5.31	銅	1821	寛永通寶四文銭（11波）。赤味を帯びている。文政江戸十萬坪鋳造	34	45

図番	登番	遺構名	出土位置・層位	器種	外径(cm)	内径(cm)	重量(g)	金属の種類	初鋳年代	備考	図版	写版
143	485	ＳＫ41	ＲＭ３－11	寛永通寶	2.2	0.7	2.85	銅	1697	新寛永。摩耗の影響でそれ以上の分類はできなかった	34	46
144	460	ＳＫ41	埋土－５	寛永通寶	2.8	0.6	4.39	銅	1821	寛永通寶四文銭（11波）。赤味を帯びている。文政江戸十萬坪鋳造	34	46
145	512	ＳＫ41	ＲＭ12－１	寛永通寶	2.8	0.7	5.05	銅	1769	寛永通寶四文銭（11波）。明和江戸十萬坪鋳造	34	46
146	464	ＳＫ41	埋土－９	寛永通寶	2.7	0.7	4.40	銅	1769	寛永通寶四文銭（11波）。明和江戸十萬坪鋳造	34	46
147	513	ＳＫ41	ＲＭ12－２	寛永通寶	2.7	0.65	4.84	銅	1769	寛永通寶四文銭（11波）。明和江戸十萬坪鋳造	34	46
148	514	ＳＫ41	ＲＭ12－３	寛永通寶	2.7	0.7	4.05	銅	1769	寛永通寶四文銭（11波）。明和江戸十萬坪鋳造	34	46
149	515	ＳＫ41	ＲＭ12－４	寛永通寶	2.8	0.7	4.58	銅	1769	寛永通寶四文銭（11波）。明和江戸十萬坪鋳造	34	46
150	516	ＳＫ41	ＲＭ12－５	寛永通寶	2.75	0.7	5.36	銅	1769	寛永通寶四文銭（11波）。明和江戸十萬坪鋳造	34	46
151	474	ＳＫ41	埋土－19	寛永通寶	2.7	0.7	5.20	銅	1769	寛永通寶四文銭（11波）。明和江戸十萬坪鋳造	34	46
152	517	ＳＫ41	ＲＭ12－６	寛永通寶	2.8	0.6	5.57	銅	1769	寛永通寶四文銭（11波）。明和江戸十萬坪鋳造	34	46
153	518	ＳＫ41	ＲＭ12－７	寛永通寶	2.7	0.7	4.31	銅	1769	寛永通寶四文銭（11波）。明和江戸十萬坪鋳造	34	46
154	520	ＳＫ41	ＲＭ12－９	寛永通寶	2.7	0.7	4.73	銅	1769	寛永通寶四文銭（11波）。明和江戸十萬坪鋳造	34	46
155	471	ＳＫ41	埋土－16	寛永通寶	2.7	0.7	5.01	銅	1769	寛永通寶四文銭（11波）。明和江戸十萬坪鋳造	34	46
156	459	ＳＫ41	埋土－４	寛永通寶	2.7	0.7	5.09	銅	1769	寛永通寶四文銭（11波）。明和江戸十萬坪鋳造	34	46
157	472	ＳＫ41	埋土－17	寛永通寶	2.8	0.7	4.91	銅	1769	寛永通寶四文銭（11波）。明和江戸十萬坪鋳造	34	46
158	473	ＳＫ41	埋土－18	寛永通寶	2.8	0.7	5.37	銅	1769	寛永通寶四文銭（11波）。明和江戸十萬坪鋳造	34	46
159	468	ＳＫ41	埋土－13	寛永通寶	2.7	0.7	4.68	銅	1821	寛永通寶四文銭（11波）。赤味を帯びている。文政江戸十萬坪鋳造	34	46
160	594	ＳＫ41	ＲＭ16	寛永通寶	2.3	0.6	53.49	鉄	1739～	14枚重なる	—	46
161	592	ＳＫ41	埋土	寛永通寶	2.3	0.5	13.23	鉄	1739～	４枚重なる	—	46
162	593	ＳＫ41	ＲＭ14	寛永通寶	2.4	0.7	28.06	鉄	1739～	９枚重なる	—	46
170	531	ＳＫ42	埋土	寛永通寶	2.4	0.6	3.11	銅	1636	古寛永	35	46
171	530	ＳＫ42	埋土	寛永通寶	2.3	0.6	2.15	銅	1697	新寛永。元文江戸深川平野新田所鋳銭	35	46
172	532	ＳＫ42	埋土	寛永通寶	2.2	0.7	2.20	銅	1697	新寛永。正徳江戸亀戸所鋳銭	35	46
173	595	ＳＫ42	埋土	寛永通寶	2.7	—	8.13	鉄	1739～	２枚重なる	—	46
174	600	ＳＫ42	埋土	寛永通寶	2.7	0.7	7.79	鉄	1739～	２枚重なる	—	46
175	597	ＳＫ42	ＲＭ３	寛永通寶	2.5	0.7	20.03	鉄	1739～	５枚重なる	—	46
176	596	ＳＫ42	埋土	寛永通寶	—	—	4.17	鉄	1739～	鉄銭破片	—	—
177	598	ＳＫ42	ＲＭ４	寛永通寶	2.3	0.6	56.71	鉄	1739～	鉄銭を主体として最低12枚重なる。錆がひどくはっきりしないが銅銭数枚混じる	—	46
178	599	ＳＫ42	ＲＭ５	寛永通寶	2.3	0.6	51.38	鉄	1739～	錆がひどくはっきりしないが鉄銭最低14枚重なる	—	46
182	536	ＳＫ45	ＲＭ３	寛永通寶	2.4	0.7	2.34	銅	1636	古寛永	37	46
183	533	ＳＫ45	ＲＭ１－１	寛永通寶	2.35	0.6	3.45	銅	1636	古寛永。熱による損耗有	37	46
184	534	ＳＫ45	ＲＭ１－２	寛永通寶	2.4	0.6	2.84	銅	1636	古寛永。熱による損耗有	37	46
185	551	ＳＫ45	ＲＭ11	寛永通寶	2.3	0.7	1.37	銅	1697	新寛永。摩耗の影響でそれ以上の分類はできなかった	37	46
186	542	ＳＫ45	ＲＭ７－１	寛永通寶	2.3	0.6	2.19	銅	1697	新寛永。元文江戸深川平野新田所鋳銭	37	46
187	537	ＳＫ45	ＲＭ４	寛永通寶	2.2	0.7	2.38	銅	1697	新寛永。元禄～寛永江戸亀戸	37	46
188	545	ＳＫ45	ＲＭ７－４	寛永通寶	2.3	0.65	2.08	銅	1697	新寛永。元文江戸小名木所鋳銭	37	46
189	538	ＳＫ45	ＲＭ５－１	寛永通寶	2.2	0.7	2.25	銅	1697	新寛永。元文江戸深川平野新田所鋳銭	37	46
190	541	ＳＫ45	ＲＭ６	寛永通寶	2.2	0.7	1.93	銅	1697	新寛永。摩耗の影響でそれ以上の分類はできなかった	37	47
191	543	ＳＫ45	ＲＭ７－２	寛永通寶	2.2	0.6	2.33	銅	1697	新寛永。摩耗の影響でそれ以上の分類はできなかった	37	47
192	535	ＳＫ45	ＲＭ１－３	寛永通寶	2.3	0.7	1.68	銅	1697	新寛永。摩耗の影響でそれ以上の分類はできなかった	37	47
193	544	ＳＫ45	ＲＭ７－３	寛永通寶	2.4	0.6	1.77	銅	1697	新寛永。摩耗の影響でそれ以上の分類はできなかった	37	47
194	547	ＳＫ45	ＲＭ７－６	寛永通寶	2.25	0.8	0.93	鉄	1739	鉄一文銭	37	47
195	539	ＳＫ45	ＲＭ５－２	寛永通寶	2.1	0.8	1.16	銅	—	磨滅著しい	37	47
196	550	ＳＫ45	ＲＭ９	寛永通寶？	2.2	0.5	2.89	銅	—	磨滅著しい	37	47
197	601	ＳＫ45	ＲＭ10	寛永通寶	—	—	2.32	鉄	1739～	鉄銭の破片	—	47
198	548	ＳＫ45	ＲＭ７－７	寛永通寶？	2.2	0.6	2.71	銅	—	火を受けたため焼けただれ、発泡している。詳細は不明	—	47
199	549	ＳＫ45	ＲＭ８	寛永通寶	—	—	1.86	鉄	—	火を受けたため焼けただれ、発泡している。詳細は不明だが、背面に波紋があるようにもみえる。鉄四文銭？	—	47
200	540	ＳＫ45	ＲＭ５－３	寛永通寶？	—	—	0.67	鉄	—	磨滅著しい	—	47
201	546	ＳＫ45	ＲＭ７－５	寛永通寶	—	—	1.57	鉄	1739	鉄一文銭	—	47
205	552	ＳＫ48Ａ	埋土	寛永通寶	2.2	0.6	1.60	銅	1697	新寛永。摩耗の影響でそれ以上の分類はできなかった	39	47
206	560	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ２	寛永通寶	2.4	0.6	2.52	銅	1636	古寛永	40	47
207	572	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ３－12	寛永通寶	2.3	0.6	2.89	銅	1636	古寛永	40	47

図番	登番	遺構名	出土位置・層位	器種	外径(cm)	内径(cm)	重量(g)	金属の種類	初鋳年代	備考	図版	写版
208	569	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ３－９	寛永通寶	2.4	0.6	3.38	銅	1636	古寛永	40	47
209	577	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ３－17	寛永通寶	2.4	0.7	4.10	銅	1636	古寛永	40	47
210	562	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ３－２	寛永通寶	2.3	0.6	3.14	銅	1636	古寛永	40	47
211	565	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ３－５	寛永通寶	2.3	0.6	3.21	銅	1636	古寛永	40	47
212	555	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ１－２	寛永通寶	2.5	0.6	3.43	銅	1668	新寛永（文銭）	40	47
213	556	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ１－３	寛永通寶	2.4	0.6	3.42	銅	1668	新寛永（文銭）	40	47
214	557	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ１－４	寛永通寶	2.5	0.6	3.66	銅	1668	新寛永（文銭）	40	47
215	558	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ１－５	寛永通寶	2.4	0.6	3.26	銅	1668	新寛永（文銭）	40	47
216	559	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ１－６	寛永通寶	2.4	0.6	3.85	銅	1668	新寛永（文銭）	40	47
217	570	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ３－10	寛永通寶	2.25	0.7	2.53	銅	1697	新寛永。元文江戸深川平野新田所鋳銭	40	47
218	580	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ３－20	寛永通寶	2.2	0.6	2.68	銅	1697	新寛永。元文江戸深川平野新田所鋳銭	40	47
219	581	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ４－１	寛永通寶	2.2	0.7	2.07	銅	1697	新寛永。元文江戸深川平野新田所鋳銭	40	47
220	582	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ４－２	寛永通寶	2.3	0.65	2.78	銅	1697	新寛永。元文江戸深川平野新田所鋳銭	40	47
221	578	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ３－18	寛永通寶	2.3	0.7	2.84	銅	1697	新寛永。元文相模藤澤・吉田島所鋳銭	40	47
222	567	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ３－７	寛永通寶	2.2	0.6	2.85	銅	1697	新寛永。元文相模藤澤・吉田島所鋳銭	40	47
223	574	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ３－14	寛永通寶	2.2	0.7	2.72	銅	1697	新寛永。元文摂津加島所鋳銭	40	47
224	579	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ３－19	寛永通寶	2.2	0.7	2.59	銅	1697	新寛永。元文摂津加島所鋳銭	40	47
225	568	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ３－８	寛永通寶	2.4	0.6	3.52	銅	1697	新寛永。元文山城横大路所鋳銭	40	47
226	563	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ３－３	寛永通寶	2.2	0.7	2.5	銅	1697	新寛永。正徳江戸亀戸所鋳銭	40	47
227	566	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ３－６	寛永通寶	2.3	0.7	2.3	銅	1697	新寛永。正徳江戸亀戸所鋳銭	40	47
228	571	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ３－11	寛永通寶	2.3	0.7	2.47	銅	1697	新寛永。明和～応水常陸太田所鋳銭	40	47
229	564	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ３－４	寛永通寶	2.4	0.6	3.27	銅	1697	新寛永。明和～応水常陸太田所鋳銭	40	47
230	553	ＳＫ48Ｂ	埋土	寛永通寶	2.3	0.6	1.91	銅	1697	新寛永。明和～応水常陸太田所鋳銭	40	47
231	573	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ３－13	寛永通寶	2.2	0.7	2.57	銅	1697	新寛永。明和２年江戸亀戸所鋳銭	40	47
232	554	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ１－１	寛永通寶	2.4	0.6	3.06	銅	1697	新寛永。明和５年江戸亀戸所鋳銭	40	47
233	561	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ３－１	寛永通寶	2.4	0.65	3.57	銅	1697	新寛永。明和５年江戸亀戸所鋳銭	40	47
234	575	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ３－15	寛永通寶	2.3	0.65	2.94	銅	1697	新寛永。明和５年江戸亀戸所鋳銭	40	47
235	576	ＳＫ48Ｂ	ＲＭ３－16	寛永通寶	2.3	0.6	3.36	銅	1697	新寛永。明和５年江戸亀戸所鋳銭	40	47
236	583	ＳＫ48Ｃ	埋土	寛永通寶	2.7	0.6	3.08	銅	1697	新寛永。摩耗の影響でそれ以上の分類はできなかった	41	48
237	606	ＳＫ48Ｄ	ＲＭ１	寛永通寶	2.3	0.7	72.20	銅・鉄	1739～	銅銭を主体として最低24枚重なる。錆がひどくはっきりしないが鉄銭が混入している 銅銭は新寛永が認められる	—	48
241	602	ＳＫ48Ｅ	埋土	寛永通寶	2.7	0.7	613.11	鉄	1739～	錆がひどくはっきりしないが最低100枚重なる	—	48
242	604	ＳＫ48Ｅ	ＲＭ18	寛永通寶	2.7	0.7	53.92	鉄	1739～	錆がひどくはっきりしないがが最低10枚重なる	—	48
243	605	ＳＫ48Ｅ	ＲＭ５	寛永通寶	2.8	0.6	360.14	鉄	1739～	錆がひどくはっきりしないが最低66枚重なる。一部背面に波紋のある鉄銭が含まれる	—	48
244	603	ＳＫ48Ｅ	ＲＭ15	寛永通寶	2.8	0.5	3.77	鉄	1739～	錆がひどくはっきりしないが最低19枚重なる	—	48
249	586	ＳＫ50	埋土	寛永通寶	2.15	0.7	2.22	銅	1697	新寛永。摩耗の影響でそれ以上の分類はできなかった	44	48
250	524	ＳＫ50	１～３層－２	寛永通寶	2.3	0.65	2.61	銅	1697	新寛永。明和～応水常陸太田所鋳銭	44	48
251	523	ＳＫ50	１～３層－１	寛永通寶	2.4	0.6	3.07	銅	1697	新寛永。元文山城横大路所鋳銭	44	48
252	587	ＳＫ50	埋土	寛永通寶	2.2	0.7	2.64	銅	1697	新寛永。元文江戸深川平野新田所鋳銭	44	48
253	526	ＳＫ50	１～３層－４	寛永通寶	2.2	0.7	2.28	銅	1697	新寛永。元文江戸深川平野新田所鋳銭	44	48
254	527	ＳＫ50	１～３層－５	寛永通寶	2.3	0.6	2.38	銅	1697	新寛永。元文江戸深川平野新田所鋳銭	44	48
255	528	ＳＫ50	１～３層－６	寛永通寶	2.25	0.65	2.53	銅	1697	新寛永。元文江戸深川平野新田所鋳銭	44	48
256	525	ＳＫ50	１～３層－３	寛永通寶	2.3	0.6	2.89	銅	1697	新寛永。元文江戸深川平野新田所鋳銭	44	48
257	585	ＳＫ50	埋土	寛永通寶	2.4	0.6	2.32	銅	1636	古寛永	44	48
258	529	ＳＫ50	１～３層－７	寛永通寶	2.7	0.65	5.06	銅	1768	寛永通寶四文銭（21波）。明和江戸十萬坪鋳銭	44	48
259	584	ＳＫ50	埋土	寛永通寶	2.2	0.6	1.52	銅	1697	新寛永。熱により湾曲している。摩耗の影響でそれ以上の分類はできなかった	—	48

第５表　陶磁器観察表

［　］残存値

図番	登番	区域	遺構名	出土位置・層位	器種	産地	時　期	釉　調	胎　土	法　量（cm）			重量	図版	写版
										口径	器高	底径			
270	152	Ｂ区	ＳＫ14	埋土	碗	在地？	19世紀？			—	［2.2］	5.6	3.84	55	—
272	150	Ｂ区	ＳＤ43	埋土	碗	在地	18世紀？			9.4	［2.2］	—	2.32	70	—
332	153	Ｂ区	遺構外	埋土	擂鉢	在地？					［2.5］		8.88	72	50
333	151	Ａ区	遺構外	埋土	碗	肥前	19世紀前半			—	2.5	—	3.73	72	—
334	155	Ｂ区	中央	Ⅳ層　検出面	小皿	在地？				—	［1.9］	3.7	13.91	72	—
335	154	Ｂ区	南東	Ⅰ層	碗	在地？				10.2	6.1	4.4	72.92	72	—

第６表　石器観察表

図番	登番	区域	新遺構名	出土位置・層位	器　種	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　質	図版	写版
4	216	Ｂ区	ＳＩ01	埋土	磨石		8.85	7.8	6.3	601.99	ひん岩　北上山地　中生代	10	41
5	215	Ｂ区	ＳＩ01	埋土	磨石	全面磨り	10.1	8.5	3.35	454.76	凝灰岩　北上山地　中生代	10	41
6	217	Ｂ区	ＳＩ01	埋土	磨石	全面磨り	11.4	10.2	3.2	652.89	ハンレイ岩　北上山地　中生代　白亜紀	10	41
15	200	Ｂ区	ＳＩ03	埋土	不定形		7.3	4.2	1.8	50.07	頁岩　北上山地　古生代	14	41
267	210	Ｂ区	ＳＫＩ04	南　検出面	不定形		4.25	2.75	0.95	6.95	頁岩　北上山地　古生代	47	48
317	213	Ｂ区	遺構外	Ⅱ層	不定形		4.6	4.2	1.3	24.57	頁岩　北上山地　古生代	71	49
318	212	Ｂ区	遺構外	Ⅱ層	不定形		2.1	4.7	9.0	8.88	頁岩　北上山地　古生代	71	49
319	208	Ｂ区	遺構外	ⅣＣ３ｉグリッド　Ⅰ層	不定形		3.55	2.2	8.0	3.55	頁岩　北上山地　古生代	71	50
320	211	Ｂ区	遺構外	ⅣＣ４ｃグリッド　Ⅰ層	石鏃	所謂凹基鏃	2.15	1.55	0.3	1.15	頁岩　北上山地　古生代	71	50
321	214	Ｂ区	遺構外	ⅢＢ６ｄグリッド Ⅳ層検出面	石鏃	所謂平基鏃	5.4	1.8	1.0	8.64	頁岩　北上山地　古生代	71	50
322	207	Ｂ区	遺構外	ⅣＣ３ｉグリッド　Ⅰ層	不定形		5.95	3.7	1.3	28.64	頁岩　北上山地　古生代	71	50
323	202	Ｂ区	遺構外	ⅣＣ３ｉグリッド　Ⅰ層	不定形		2.7	4.05	0.8	7.26	頁岩　北上山地　古生代	71	50
324	205	Ｂ区	遺構外	ⅣＣ３ｉグリッド　Ⅰ層	不定形		3.15	3.6	1.0	8.89	頁岩　北上山地　古生代	71	50
325	201	Ｂ区	遺構外	ⅣＣ３ｉグリッド　Ⅰ層	不定形		3.4	1.95	0.6	2.95	頁岩　北上山地　古生代	71	50
326	203	Ｂ区	遺構外	ⅣＣ３ｉグリッド　Ⅰ層	不定形		3.25	4.9	1.25	14.03	頁岩　北上山地　古生代	71	50
327	209	Ｂ区	遺構外	ⅣＣ３ｉグリッド　Ⅰ層	不定形		3.3	3.1	1.9	15.40	頁岩　北上山地　古生代	71	50
328	204	Ｂ区	遺構外	ⅣＣ３ｉグリッド　Ⅰ層	不定形		4.75	2.9	1.1	11.44	頁岩　北上山地　古生代	71	50
329	206	Ｂ区	遺構外	ⅣＣ３ｉグリッド　Ⅰ層	不定形		5.2	2.4	1.9	12.86	頁岩　北上山地　古生代	71	50

第７表　土製品観察表

図番	登番	区域名	遺構名	出土位置・層位	器　種	特　徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	色　調	焼成	胎　土	図版	写版
30	111	Ｂ区	ＳＩ04	カマドＳ２	板状土製品	全体にナデが施されている。肩部はナデで面取りをしている	［45.6］	7.6	4.8	2338.40	5YR5/4 にぶい赤褐色	良	砂粒・金雲母含	18	42

第８表　木製品観察表

図番	登番	区域名	遺構名	出土位置・層位	器種	計　測　値(cm)			重さ(g)	材質	備　考	図版	写版
						長さ	幅	厚さ					
166	301	Ｂ区	ＳＫ41	ＲＷ３	棺材	7.54	6.00	0.65	14.51	スギか		—	46
167	302	Ｂ区	ＳＫ41	ＲＷ４	棺材	7.56	4.81	0.16	18.05	〃		—	46
179	305	Ｂ区	ＳＫ42	埋土	棺材	2.56	2.67	0.20	1.63	〃		—	46
202	306	Ｂ区	ＳＫ45	ＲＷ１	棺材	9.93	4.53	0.94	28.93	スギ		—	47
238	309	Ｂ区	ＳＫ48Ｄ	ＲＷ１	棺材	4.95	4.55	0.39	1.01	スギか	旧ＲＯ７	—	48
246	308	Ｂ区	ＳＫ48Ｅ	ＲＷ１	棺材	7.15	1.58	1.04	5.08	〃	旧ＲＯ１	—	48
247	307	Ｂ区	ＳＫ48Ｅ	埋土下位	棺材	7.21	4.98	0.68	14.71	〃		—	48

VI　自然科学分析

1　松山前遺跡における樹種同定

株式会社古環境研究所

（1）は　じ　め　に

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

（2）試　　料

試料は、奈良時代の竪穴住居跡（SI06A）より出土した炭化材２点である。

（3）方　　法

試料を割折して、炭化材の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

（4）結　　果

結果を表１に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

ハンノキ属　Alnus　カバノキ科　図版１

横断面：小型で丸い道管が、放射方向に連なる傾向をみせて散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10～30本ぐらいである。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で単列である。

以上の形質よりハンノキ属に同定される。なお、本試料は小片であり広範囲の観察が出来なかったため、属以下の同定は困難であった。ハンノキ属は北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。落葉の高木または低木である。

コナラ属クヌギ節　Quercus sect. Aegilops　ブナ科　図版２

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、１～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靭で弾力に富

み、器具、農具などに用いられる。

（5）所　　見

松山前遺跡で検出された竪穴住居跡（SI06A）より出土した２点の炭化材は、ハンノキ属とコナラ属クヌギ節であった。ハンノキ属は温帯域に広く分布し、ハンノキなどの低湿地に成育するものとヤシャブシなど山地に生育するものがある。コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあるが、これらは温帯域に広く分布し、山地や乾燥した台地および丘陵地に生育する。このように松山前遺跡の炭化材は、いずれも遺跡周辺からもたらすことのできる樹種であったと考えられる。

参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，p.242

２　松山前遺跡における種実同定

株式会社古環境研究所

（1）は　じ　め　に

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

（2）試　　料

試料は、松山前遺跡で検出された奈良時代の竪穴住居跡のうち、SI04のカマド、SI06A床面、SI07カマドより出土した種実類で、いずれも水洗選別済みのものである。

（3）方　　法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

（4）結　　果

1）分類群

樹木２、樹木・草本を含むもの１、草本10の計13分類群が同定された。学名、和名および粒数を表１に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記す。

〔樹木〕

ヤマグワ　Morus australis Poir.　種子　クワ科

茶褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面はやや粗い。

ヤブツバキ　Camellia japonica L.　幼果・種子片　ツバキ科

幼果は黒色で球形を呈す。表面はやや粗い。

種子は黒色で三角状楕円形を呈し、一端に点状のへそがある。

〔樹木・草本〕

ウコギ科　Araliaceae　種子

淡褐色ないし茶褐色で、半月状を呈する。断面は扁平、向軸側はほぼ直線状になり、肺軸側には浅い溝が２～３本走る。表面はざらつく。

〔草本〕

イヌビエ属　Echinochloa　穎　イネ科

茶褐色で楕円形を呈す。表面には微細な縦方向の模様がある。

イネ科　Gramineae　穎

穎は灰褐色～茶褐色で楕円形を呈す。

カヤツリグサ科　Cyperaseae　果実

黒褐色で倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。

アカザ属　Chenopodium　種子　アカザ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝が走る。

ザクロソウ　Mollugo pentaphylla L.　種子　ザクロソウ科

黒色でやや光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込み、白い種柄がある。表面には微細な網状斑紋がある。

ナデシコ科　Caryophyllaceae　種子

黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。

カタバミ属　Oxalis　種子　カタバミ科

茶褐色で楕円形を呈し、上端がとがる。両面には横方向に6～8本の隆起が走る。

セリ科　Umbelliferae　果実

淡褐色～黄褐色で楕円形を呈す。果皮はコルク質で厚く弾力があり、片面に3本の肥厚した隆起が見られる。断面は半円形である。

シソ属　Perilla　果実　シソ科

茶褐色で円形を呈し、下端にへソがある。表面には大きい網目模様がある。

キク科　Compositae　果実　キク科

茶褐色で楕円形を呈し、両端は切形となる。表面には縦方向に８本程度の筋が走る。

２）種実群集の特徴

１）SI04カマド

ヤマグワ２、ヤブツバキ17、カヤツリグサ科５、アカザ属１、ナデシコ科１、カタバミ属１、キク科１が同定された。

２）SI06A床面

ヤマグワ１、イネ科130、カヤツリグサ科８、カタバミ属１、セリ科27が同定された。

３）SI07カマド

ウコギ科１、イヌビエ属１、イネ科47、カヤツリグサ科26、アカザ属２、ザクロソウ１、ナデシコ科６、カタバミ属３、セリ科82、シソ属４が同定された。

（５）考　　察

SI04カマド出土の種実は、ヤブツバキとヤマグワの樹木とカヤツリグサ科、アカザ属、ナデシコ科、

カタバミ属、キク科の草本である。ヤブツバキとヤマグワは食用ないし有用な種実である。草本類は人里に普通に生育する雑草である。

SI06A床面ではヤマグワの樹木を除けば、イネ科、カヤツリグサ科、カタバミ属、セリ科は人里に普通に生育する雑草である。しかし、イネ科とセリ科の多くは食用にならず、その果実または果実序のついた植物体の利用が想定される。

SI07カマドより出土したウコギ科、イヌビエ属、イネ科、カヤツリグサ科、アカザ属、ザクロソウ、ナデシコ科、カタバミ属、セリ科、シソ属は、いずれも人里に普通に生育する雑草である。イネ科、カヤツリグサ科、セリ科がやや多くいが、これらのほとんどは食用にならず、その果実または果実序のついた植物体が利用された可能性がある。

（6）ま　と　め

松山前遺跡で検出された奈良時代の竪穴住居跡より出土した種実は、人里に普通に生育する雑草類がほとんどであった。SI04カマドではヤブツバキとヤマグワ、SI06A床面ではヤマグワの食用ないし有用な種実が認められた。SI06A床面とSI07カマドではイネ科とセリ科が多く、後者ではこれに加えてカヤツリグサ科が多かった。これらのほとんどは食用にはならない草本であり、その果実または果実序のついた植物体の利用の可能性が示唆された。

参考文献

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.
笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第２巻生業，雄山閣　出版，p.131-139.
南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276-283.

3　松山前遺跡における種実・樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

松山前遺跡は、岩手県陸前高田市小友町に所在し、広田湾を望む箱根山南側山麓の丘陵上に立地する。本遺跡の発掘調査の結果、奈良時代の竪穴住居跡や江戸時代の墓壙、住居状遺構、掘立柱建物跡、土坑等の遺構や、縄文土器や奈良時代の土師器、石器等の遺物が確認されている。

本報告では、奈良時代の竪穴住居跡内のカマドや焼土等から検出された種実遺体の同定を行い、当時の植物資源利用を検討する。また、江戸時代の墓壙内から出土した棺材の一部と考えられる木材の樹種同定を行い、用材の検証を行う。

Ⅰ　種実遺体同定

1　試　　料

試料は、6棟の竪穴住居跡（SI01-04,06,07）のカマドや埋土（燃焼部焼土）から、水洗選別等によって抽出された種実遺体等6試料である。各試料はビニール袋詰めされ、種実遺体や微細な炭化材等が複数も含まれる。各試料の詳細は、結果と共に表1に示す。

2　分　析　方　法

試料を4,2,1,0.5㎜目の篩に通し、粒径別にシャーレに移した後、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実や2㎜角以上の炭化材などを抽出する。種実の形態的特徴を、現生標本および原色日本植物種子写真図鑑(石川,1994)、日本植物種子図鑑(中山ほか,2000)等と比較し、種類を同定し個数を求める。2㎜角以上の炭化材は、重量を表示した。分析後の種実遺体は、種類毎にビンに入れ、種実以外の分析残試料は袋に戻して保管する。

3　結　　果

結果を表1に示す。6試料からは、裸子植物1分類群2個、被子植物25分類群1452個、計1454個の種実が同定された。この他に、炭化材、土器片などが認められる。種実遺体は、表面に泥が付着しており遺存状態の確認が困難な個体も多いが、栽培植物のイネ、コムギと、イネ科の胚乳が炭化している。他の分類群では炭化は認められず、表面に毛が残存するなど極めて遺存状態の良好な個体や、帰化植物が認められる。以下に各試料の検出状況を示す。

・No.1：SI01カマド

草本2分類群(イネ、カタバミ属)13個、イネの炭化胚乳3個が検出された。

・No.2：SI02カマド

木本のキイチゴ属1個、草本9分類群(イネ、イネ科、カヤツリグサ科、アカザ科、ナデシコ科、エノキグサ、コミカンソウ属、セリ科、イヌコウジュ属)217個、イネの炭化胚乳1個が検出された。

・No.3：SI03カマド

木本2分類群(スギ、タラノキ)2個、草本10分類群(イネ、コムギ、イネ科、タデ属、アカザ科、ナデシコ科、エノキグサ、イヌコウジュ属、キランソウ属、アカネ科)250個、イネの穎1個とコムギの炭化胚乳1個が検出された。

4：SI04カマド

木本2分類群(タラノキ、ムラサキシキブ属)2個、草本9分類群(イネ科、カヤツリグサ科、タデ属、アカザ科、ナデシコ科、エノキグサ、コミカンソウ属、キランソウ属、アメリカセンダングサ)37個、帰化植物のアメリカセンダングサが1個検出された。

・No.5：SI06カマド

木本5分類群(スギ、ケヤキ、ヤマグワ、キイチゴ属、タラノキ)14個、草本15分類群(イネ、イネ科、カヤツリグサ科、ギシギシ属、タデ属、アカザ科、ナデシコ科、キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属、カタバミ属、エノキグサ、コミカンソウ属、ヤブジラミ、セリ科、ナス科、アカネ科)824個、イネの穎の破片が166個検出された。

・No.6：SI07埋土

木本2分類群(キイチゴ属、タラノキ)2個、草本6分類群(イネ科、ツユクサ、ナデシコ科、エノキグサ、セリ科、アカネ科)92個、イネ科の炭化胚乳1個が検出された。

以下に、本分析で同定された種実遺体の形態的特徴などを、木本、草本の順に記す。

＜木本＞

・スギ(Cryptomeria japonica (L. f.) D.)　　スギ科スギ属

種子が検出された。茶褐色、線状長楕円形でやや偏平。長さ4.5㎜、幅2.5㎜、厚さ1㎜程度。頂部はやや尖る。正中線上にやや湾曲した鈍稜がある。種皮表面はやや平滑で、両縁には質の薄い翼がある。。

・ケヤキ(Zelkova serrata (Thunb.) Makino)　　ニレ科ケヤキ属

果実が検出された。灰褐色、歪んだ心臓形で背面方向に湾曲する。径4㎜程度。花柱が嘴状突起状に

表１．種実同定結果

	分類群	学名	部位	状態	No.1 SI01 カマド	No.2 SI02 カマド	No.3 SI03 カマド	No.4 SI04 カマド	No.5 SI06 カマド	No.6 SI07 埋土
木本	スギ	*Cryptomeria japonica* (L.f.)D.	種子		－	－	1	－	1	－
	ケヤキ	*Zelkoba serrata* (Thunb.) Makino	果実		－	－	－	－	5	－
	ヤマグワ	*Morus australis* Poiret	種子		－	－	－	－	3	－
	キイチゴ属	*Rubus*	核		－	1	－	－	3	1
	タラノキ	*Aralia elate* (Miq.) Seemann	核		－	－	1	1	2	1
	ムラサキシキブ属	*Callicarpa*	核		－	－	－	1	－	－
草本	イネ	*Oryza sativa* L.	胚乳	炭化	3	1	－	－	－	－
			頴		－	－	1	－	166	－
	コムギ	*Triticum aestivum* L.	胚乳	炭化	－	－	1	－	－	－
	イネ科	Gramineae	胚乳	炭化	－	－	－	－	－	1
			果実		－	156	97	4	490	－
	カヤツリグサ科	Cyperaceae	果実		－	4	－	1	12	－
	ツユクサ	*Commelina communis* L.	種子		－	－	－	－	－	1
	ギシギシ属	*Rumex*	果実		－	－	－	－	9	－
	タデ属	*Polygonum*	果実		－	－	44	4	25	－
	アカザ科	Chenopodiaceae	種子		－	24	12	3	11	－
	ナデシコ科	Caryophyllaceae	種子		－	2	1	2	15	1
	キジムシロ属ヘビイチゴ属オランダイチゴ属	*Potentilla－Duchesnea－Fragaria*	核		－	－	－	－	7	－
	カタバミ属	*Oxalis*	種子		－	－	－	－	2	－
	エノキグサ	*Acalypha australis* L.	種子		10	23	68	20	17	27
	コミカンソウ属	*Phyllanthus*	種子		－	1	－	1	2	－
	ヤブジラミ	*Torilis japonica* (Houtt.) DC.	果実		－	－	－	－	16	－
	セリ科	Umbelliferae	果実		－	1	－	－	50	60
	イヌコウジュ属	*Mosla*	果実		－	5	23	－	－	－
	キランソウ属	*Ajuga*	果実		－	－	1	1	－	－
	ナス科	Solanaceae	種子		－	－	－	－	1	－
	アカネ科	Rubiaceae	核		－	－	2	－	1	2
	アメリカセンダングサ	*Bitens frondosa* L.	果実		－	－	－	1	－	－
炭化材（＞２㎜）				炭化	7.6g	1.6g	0.7g	4.3g	1.4g	0.9g
土器					－	－	－		－	－

残る。基部に円形の臍があり、褐色の繊維が放射状に発達する。

・ヤマグワ(Morus australis Poiret)　　クワ科クワ属

種子が検出された。黄褐色、三角状広倒卵体。一側面は狭倒卵形で、他方は稜になりやや薄い。長さ2㎜、径1.5㎜程度。一辺が鋭利で、基部に爪状の突起を持つ。表面には微細な網目模様がありざらつく。

・キイチゴ属(Rubus)　　バラ科

核(内果皮)が検出された。淡黄褐色、半円形～三日月形でやや偏平。長さ2㎜、幅1.5㎜程度。腹面方向にやや湾曲する。表面には大きな凹みが分布し網目模様をなす。

・タラノキ(Aralia elata (Miq.) Seemann)　　ウコギ科タラノキ属

核(内果皮)が検出された。淡褐色、半円形でやや偏平。長さ2.2㎜、幅1.3㎜程度。腹面はほぼ直線状で、片端に突起が見られる。背面には数本の浅い溝が走る。表面はざらつく。

・ムラサキシキブ属(Callicarpa)　　クマツズラ科

核（内果皮）が検出された。灰黄褐色、倒卵体でやや偏平。長さ2.5㎜、幅1.5㎜程度。背面は円みがあり、腹面中央はやや窪む。腹面方向に湾曲し、側面観は三日月形。中央部の内果皮が極めて薄く柔らかいため、破損してドーナツ状を呈す。縁はやや厚く、弾力がある。

＜草本＞

・イネ(Oryza sativa L.)　　イネ科イネ属

胚乳と多量の穎(果)の破片が検出された。長楕円形でやや偏平。長さ4～5㎜、幅2.5㎜、厚さ1.5㎜程度。胚乳は炭化しており黒色を呈す。基部の一端に胚が脱落した凹部がある。表面はやや平滑で、2

～3本の縦溝がみられる。穎は淡～暗灰褐色、基部に円柱状の特徴的な果実序柄がある。果皮は薄く、表面には顆粒状突起が規則的に縦列する。

・コムギ(Triticum aestivum L.)　　イネ科コムギ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色を呈す。楕円体。長さ3.8㎜、径2㎜程度。腹面の正中線上には1本のやや太く深い縦溝がある。背面基部の正中線上には胚の痕跡があり、丸く窪む。表面はやや平滑。

・イネ科(Gramineae)

胚乳と多量の果実が検出された。胚乳は炭化しており黒色を呈す。狭卵体でやや偏平。長さ5㎜、径2㎜程度。腹面の正中線上には1本のやや太く深い縦溝がある。背面基部の正中線上には胚の痕跡があり、丸く窪む。表面はやや平滑。上述のコムギや、オオムギ属オオムギ(Hordeum valgale L.)などのムギ類に似るが、同定根拠が認められないため区別した。果実は形態上差異のある複数の種を一括した。淡～灰褐色、線状楕円体～半卵体でやや偏平。長さ2～3.5㎜、径1.5㎜程度。穎は薄く柔らかくて弾力がある。表面には微細な網目模様が縦列し、毛が密生する個体もみられる。

・カヤツリグサ科(Cyperaceae)

果実が検出された。形態上差異のある複数の種を一括した。淡～黒褐色。狭倒卵形状のやや明瞭～明瞭な三稜形で先端部は尖り、基部は切形。長さ1.2㎜、径0.8㎜程度。頂部の柱頭部分がわずかに伸びる。表面には微細な網目模様がありざらつく。カヤツリグサ属(Cyperus)と思われる個体を含む。

・ツユクサ(Commelina communis L.)　　ツユクサ科ツユクサ属

種子が検出された。灰褐色、歪な半横長楕円体。径3.2㎜程度。背面は丸みがあり、腹面は平らである。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は柔らかく、背面と側面の表面は、大きなすり鉢状の孔が散在する。他の面は円形の小孔が多数存在する。

・ギシギシ属(Rumex)　　タデ科

果実が検出された。灰褐色、広楕円状三稜形。長さ2.5㎜、径1.5㎜程度。三稜は鋭く明瞭で、両端は急に尖る。果実を取り巻く内花被片が発達しており、花被は心円形、径4㎜程度で網目模様をなす。縁には歯牙があり、中肋は瘤状に膨れる。

・タデ属(Polygonum)　　タデ科

果実が検出された。形態上差異のある複数の種を一括した。黒色、丸みのある三稜状卵体で長さ2.5㎜、径1.5㎜程度、表面はやや平滑で光沢が強い、ハナタデ(Polygonum caespitosum Blume subsp. yokusaianum (Makino) Danser)またはイヌタデ(Polygonum longisetum De Bruyn)と思われる個体などがみられる。

・アカザ科(Chenopodiaceae)

種子が検出された。黒色、円盤状でやや偏平。径1.3㎜程度。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が同心円状に配列し、光沢が強い。

・ナデシコ科(Caryophyllaceae)

種子が検出された。灰褐色、腎状円形でやや偏平。径1.2㎜程度。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には、臍を取り囲むように瘤状突起が同心円状に配列する。

・キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属(Potentilla－Duchesnea－Fragaria)　　バラ科

核(内果皮)が検出された。灰褐色、腎形でやや偏平。径1～1.2㎜程度。内果皮は厚く硬く、表面は粗面。

・カタバミ属(Oxalis)　　カタバミ科

種子が検出された。黒褐色、卵形で偏平。長さ1.3㎜、幅0.9㎜程度。先端は尖る。種皮は薄く柔らかく、縦方向に裂けやすい。表面には4～7列の肋骨状横隆条が並び、わらじ状を呈す。

・エノキグサ(Acalypha australis L.)　　トウダイグサ科エノキグサ属

種子が検出された。黒褐色、倒卵体で長さ1.8㎜、径1.3㎜程度。基部はやや尖り、Y字状の筋がある。種皮は薄く硬く、表面は細かな粒状の窪みが配列しざらつく。

・コミカンソウ属(Phyllanthus)　　トウダイグサ科

種子が検出された。淡灰褐色、半倒広卵体。径1.1㎜程度。背面は丸みを帯び、腹面の正中線は稜状。正中線の一端に臍がある。種皮表面は微細な粒状突起が散在し、網目模様を呈す。

・ヤブジラミ(Torilis japonica (Houtt.) DC.)　　セリ科ヤブジラミ属

果実が検出された。淡黄褐色、狭卵体でやや偏平。長さ6㎜、径2㎜程度。両端はやや尖る。背面に3個の隆条が配列し、隆条の間に油管が配列する。表面には0.5㎜程度の鉤状の剛毛が密生する。

・セリ科(Umbelliferae)

果実が検出された。淡褐色、長楕円形でやや偏平。長さ１.5㎜、幅１㎜、厚さ0.5㎜程度。果実表面には数本の幅広い稜があり、その間に半透明で淡黄褐色の油管が配列する。

・イヌコウジュ属(Mosla)　　シソ科

果実が検出された。淡褐色、倒広卵体。径1.3㎜程度。下端は舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面には大きく不規則な網目模様がある。

・キランソウ属(Ajuga)　　シソ科

果実が検出された。淡褐色、狭楕円体。長さ1.5㎜、径1㎜。基部付近に果実の長さの2/3に達する大きな楕円形の着点痕の孔がある。果皮表面は深い凹みによる網目模様が分布する。

・ナス科(Solanaceae)

種子が検出された。淡灰褐色、歪な腎臓形で偏平。径1.7㎜程度。側面のくびれた部分に臍がある。種皮は薄く柔らかく、表面には星型状の網目模様が臍を中心に同心円状に発達する。

・アカネ科(Rubiaceae)

核が検出された。灰黒褐色、偏球形。径1.5㎜程度。腹面中央に深い楕円形の孔がある。表面には微細な網目模様が発達し、粗面。

・アメリカセンダングサ(Bidens frondosa L.)　　キク科センダングサ属

果実が検出された。灰褐色、倒皮針形で偏平。長さ6㎜、幅2.5㎜程度。頂部の両肩に1個ずつ芒があり、下向きの逆刺が散生する。芒の長さは1～1.5㎜程度。正中線上には細い縦隆条がある。果皮表面には伏毛が密布する。

4　考　　察

竪穴住居跡（SI01-03）のカマドからは、イネやコムギの炭化胚乳が確認された。イネやコムギは、古くから栽培のために持ち込まれた渡来種であり、胚乳が食用とされる。一方、炭化胚乳とともに検出された未炭化の種実遺体分類群は、木本6分類群(針葉樹のスギ、落葉広葉樹のケヤキ、ヤマグワ、キイチゴ属、タラノキ、ムラサキシキブ属)21個、草本19分類群(イネ、イネ科、カヤツリグサ科、ツユクサ、ギシギシ属、タデ属、アカザ科、ナデシコ科、キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属、カタバミ属、エノキグサ、コミカンソウ属、ヤブジラミ、セリ科、イヌコウジュ属、キランソウ属、ナス科、アカネ科、アメリカセンダングサ)1427個の計1448個から成る。木本類は、伐採地や崩壊地などに先駆的に侵入する種類を含むことから、遺跡周辺の森林の林縁部などに生育していたも

のに由来すると考えられる。草本類は、SI03・06カマドからはイネの穎の破片が確認され、SI06からは多量に検出された。この他の草本類の多くは、人里近くに開けた草地を形成する、いわゆる人里植物に属する種類であることから付近の明るく開けた場所に生育していたものに由来すると考えられる。これらの種実遺体は、カマド内やカマドに伴う燃焼部焼土から検出された状況から、栽培植物に由来する炭化種実は当該期に利用された植物質食糧の可能性がある。ただし、未炭化の種実も含まれることから、これらを含む遺構周囲の土壌が混在している、或は、試料採取時に混入した可能性がある。炭化種実の検出が少量であることや、炭化していない種実中に遺存状態が極めて良好なものや北米原産の帰化植物であるアメリカセンダングサが含まれることからも、同様の可能性が示唆される。
ところで、遺跡から出土する種実のうち、低湿地以外から出土した未炭化の種実は後代に混入した可能性があり、炭化物と同様に扱うには課題がある(吉崎,1992など)とされ、遺物包含層の年代観と当土層から出土した種実遺体の年代測定結果が異なる事例（例えば、木下,2003;高宮,2003など）もある。本分析結果では、上述したように未炭化の種実が多量に検出されたことや、帰化植物の種実が含まれることから、試料採取を行った土壌の観察所見や採取時及び採取後の履歴、検出された種実の年代等の検証を行い、慎重に評価することが望まれる。

Ⅱ　樹種同定

1　試　　料

試料は、江戸時代の墓壙（SK45）から出土した棺材とされる木片1点(No.7：SK45RW1)である。

2　分　析　方　法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール,アラビアゴム粉末,グリセリン,蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3　結　　果

木材は、針葉樹のスギに同定された。以下に、解剖学的特徴等を記す。

・スギ(Cryptomeria japonica (L. f.) D. Don)　　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、孔口の長軸方向が水平になるものが多い。1分野に2-4個。放射組織は単列、1-15細胞高。

4　考　　察

棺材とされる木片は、針葉樹のスギであった。スギは木理が通直で割裂性が高く、板材の加工に適しており、明治時代に編纂された「木材ノ工藝的利用」（農商務省山林局編,1912）によれば、木棺の樹種としてヒノキが高級品で、普通はモミやスギが多いとされている。棺材の分析事例では、近世の江戸を中心に樹種同定が行われており、スギやヒノキ、サワラが多く認められている（橋本・辻本,1990;能城,1995;鈴木・能城,2004等)。本遺跡周辺では、当該期の棺材の調査事例がなく不明であるが、前述した事例と比較すると調和的な傾向と言える。

ところで、八丁堀三丁目遺跡（東京都）の調査事例では、方形木棺にスギが多く認められ、円形木棺ではサワラが多く認められといった各形態で異なる木材（樹種）を利用する傾向が認められている。本分析結果では判断することはできないが、今後、資料の蓄積を待って、この点も改めて検討したい。

引用文献

石川　茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
木下　尚子, 2003, 遺物包含層における現代イネ混入の検討. 考古学研究室報告　第38集, 熊本大学文学部考古学研究室, 55-62.
中山　至大・井之口　希秀・南谷　忠志, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.
高宮　広土, 2003, ナガラ原東貝塚出土の植物遺体(2002年度). 考古学研究室報告　第38集, 熊本大学文学部考古学研究室, 49-54.
吉崎　昌一, 1992, 古代雑穀の検出. 月刊考古学ジャーナル, No. 355, 2-14.
橋本　真紀夫・辻本　崇夫, 1990, テフラ分析・木製品の樹種・焼物の胎土分析. 「東叡山寛永寺護国院Ⅰ」, 都立学
校遺跡調査会, 349-368.
能城　修一, 1995, 法光寺跡から出土した木製品の樹種. 「法光寺跡」, 日本電信電話株式会社・新宿区法光寺跡調査団, 25-26.
農商務省山林局（編）, 1912, 木材ノ工藝的利用. 大日本山林會, 1312p.
鈴木　伸哉・能城　修一, 2004, 東京都中央区八丁堀三丁目遺跡より出土した江戸時代の木棺の形態と樹種. 植生史研究, 12(2), 75-86.

編者註

今回の調査では食性・生業復元のための基礎資料蓄積を目的として、カマドの燃焼部焼土の直上５㎝と、焼失住居であったＳＩ06Ａの床面直上約５㎝の土壌を全量採取した。採取した土は乾燥後、水を入れたバケツに入れてかき混ぜ、浮いてきた炭化物・種実を茶こしフルイと１・３・５㎜メッシュを使用して採取した。この採取した炭化物・種実の樹種同定を委託した。結果、コムギ・イネ科の胚乳が検出された遺構もあるが、報告にも記述がある通り、比較的残存状況の不良な遺構のため上位層からの混入の可能性を否定できない。残存状況の良好なＳＩ04カマドから遺跡周辺に生育する雑草類しか確認されていないことも、これを追認することになろう。このような資料を分析委託してしまった責任は筆者にあり、ここで分析された方々に深くお詫び申し上げる次第である。

Ⅶ　まとめ

ここでは、１で奈良時代の遺構、２で近世の遺構、３でその他の遺構、４で縄文時代の遺物、５で奈良時代の土器、６で奈良時代の遺物、７で近世の遺物についてのまとめと若干の検討を行う。
今回の調査で検出した遺構、出土遺物は以下の通りである。
＜遺構＞奈良時代の竪穴住居跡(以下住居と省略)８棟、近世の墓壙18基、時期不明の竪穴状遺構５棟・柱穴列３列・土坑39基・炭窯２基・時期不明の溝跡15条・柱穴状土坑206個を検出した。
＜遺物＞縄文土器大コンテナ１箱(10.28kg)、奈良時代の土師器大コンテナ１箱(11.85kg)、陶磁器９号袋1/2袋(134ｇ)、石器・石製品小コンテナ１箱(1.97kg)、金属製品小コンテナ１箱(2.88kg)、ガラス小袋１袋分(27ｇ)出土した。

１　奈良時代の遺構

(１) 竪 穴 住 居 跡

今回の調査ではＡ区から４棟、Ｂ区から４棟の計８棟検出した。所属時期は奈良時代と思われる。畑造成時による削平が激しく得られた情報は多くない。そのため詳細な検討は行えないが、これまでに分かったことを簡単にまとめる。
＜規模＞２ｍ弱(１棟)、３～４ｍ(５棟)、５ｍ以上(１棟)に分けられ、３～４ｍの規模が主体である。
＜周溝＞規模が４ｍ以上の住居で検出され、カマド以外の住居壁際を全周する傾向がある。幅は20～30cm台である。深さは削平が多く参考にならないが７～20cm程である。

なお、ＳＩ04ではカマド下にも巡っている。燃焼部は板状の花崗閃緑岩で蓋をして暗渠を構築し、袖付近はトンネルを掘り(写真図版８)、両脇の周溝に直結している。周溝の底面レベルは標高67.1～67.3ｍで、カマド付近が最も標高が高く、斜面下方に向かうにつれて低くなっていく。比高差は25cmを測る。また、煙道部が上り勾配で雨水の流入を止める施設がない。以上の状況から、ＳＩ04の周溝は排水溝的性格をもつ可能性が考えられる。
＜柱穴＞２棟(ＳＩ01・04)で検出された。一番規模の大きいＳＩ04では主柱穴が４本確認された。規模の小さい住居ではＳＩ01以外では認められない。
＜カマド＞斜面上位にカマドを設置し、方向は南北方向(４棟)、北西－南東方向(３棟)に分けられる。周辺の地形が北西方向から南東方向に下っているため、その影響が大きいと思われる。燃焼部は残存状況が不良のカマドが多く、様相は判然としない。比較的燃焼部が残存している３基をみる。袖は地山削り出し(ＳＩ01左袖)、暗褐色粘土を用いて作り出し(ＳＩ02)、地山削り出しと暗褐色粘土作り出し(ＳＩ01右袖・ＳＩ04)とバラバラで傾向は認められない。芯材は土器、礫いずれも認められる。ＳＩ04では例外的に板状土製品が天井の芯材に用いられている。これは６の(１)で後述する。支脚は３基で認められ、亜角礫と土器を転用したものが認められる。１個置いたものと、２個置いたものがある。煙道は残存状況が不良で傾向はみいだせないが、長さ１ｍ前後、幅20～30cm程のものが多い。

(２) 炉　　跡

Ｂ区中央から１基検出した。径1.24×1.00ｍの楕円形状を呈する。黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。底面中央付近に径56×45cmの楕円形状を呈する赤褐色焼土があり、厚さは６cmを測

る。埋土に鉄滓・鍛造薄片が含まれず、還元炎焼土・炉壁も確認されていないことから、鍛冶関連の炉跡の可能性は低いと思われる。出土遺物から所属時期は奈良時代であると思われる。

2 近世の遺構

Ｂ区中央、ⅢＣ９ｄ・10ｃ・10ｄグリッドを中心に18基検出した。この区域は地目が墓地だった。元土地所有者の山田氏に伺ったところ、江戸時代から明治初期頃の山田家の墓地で、今回の調査に先立ち、墓標等で場所を認識できた墓に関しては移転を行ったという。また、場所が分からず移転できなかった墓もあるとのことだった。残存状況は不良で、得られた情報は多くないが、これまでに分かったことを簡単にまとめる。

＜平面形＞隅丸方形(４基)、長方形(１基)、円形(２基)、楕円形(11基)がある。

＜規模＞①0.6～0.8m(８基)、②１m前後(６基)、③1.2～1.4m(４基)に分けられる。隅丸方形・長方形・円形は②、楕円形は①③になる傾向がある。深さは①は10～20cmと浅く、②が0.5～1.0m、③は30～50cmを呈する。

＜埋葬姿勢＞①の埋土には多量の灰と被熱した骨片が含まれている。火葬ないし再葬の可能性が想定される。②のうち、平面形が円形のものは蹲葬、方形・長方形のものは座葬の可能性がある。③は骨の残存状況が不良で、はっきりしない。

＜副葬品＞六道銭のみ副葬された墓壙が大半を占める。ＳＫ37で鋏、ＳＫ40Ｂで鋏・毛抜、ＳＫ41・42・47・48Ｅ・50で煙管が副葬されてはいるが、銭貨以外の副葬品の種類・点数は少ない。

＜六道銭＞①は古寛永＋新寛永＋(文銭)、②は古寛永＋新寛永＋鉄銭＋(21波・11波)の組み合わせが多い傾向が認められる。③は遺物が出土しなかった墓壙もあり傾向は見いだせなかった。

＜重複関係からみた新旧関係＞②が①の墓壙を切り、③が②を切る墓壙が多い傾向がある。よって①→②→③という新旧関係が想定される。この新旧関係は六道銭の組み合わせから見た新旧関係と大きく矛盾しない。

＜墓壙と礫の位置関係＞墓壙を検出した際に多量の礫が出土した。この礫は墓壙付近に集中する傾向が認められる(第26図)。理由は不明だが、墓壙の位置を示すために埋葬時に置いたものだろうか？

3 その他の遺構

＜竪穴状遺構＞Ａ区より１棟、Ｂ区より４棟検出した。ここでは一辺２～７m前後の隅丸方形もしくは楕円形状を呈しているが、カマド・炉が検出されず、遺物が全く出土しない遺構を竪穴状遺構として扱った。遺物は埋土から縄文土器が出土しているが、流れ込みの遺物で遺構に伴うものではないと思われる。所属時期は不明である。

＜柱穴列＞Ｂ区より３列検出した。出土遺物が少ないため、所属時期は不明である。

＜炭窯＞Ｂ区より２基検出した。出土遺物が少ないため、所属時期は不明である。

＜土坑＞Ａ区より12基、Ｂ区より27基検出した。平面形は円形・楕円形・方形など様々で、規模は0.54～2.06mを測る。出土遺物が少ないため、用途や時期は不明である。

＜溝跡＞Ａ区から３条、Ｂ区から12条検出した。溝の幅や長さは様々で、規則性は認められない。出土遺物がないため時期不明の溝が大半である。分布は調査区各地に点在しており、規則性はない。方向は西北西－東南東、南南西－北北東、東西方向が主体を占める。これらの溝は等高線に対して平行

で、出土遺物がないものが大半を占める。それ以外の方向を示す溝は若干あるが、前述の溝とは様相が異なる。ＳＤ15は断面形は他の溝と同じであるが、平面形が馬蹄形状を示す点が異なる。出土遺物がないため所属時期は不明である。ＳＤ44は近世墓群の北側に位置する。断面形と規模が他の溝より大きく、土師器片が多く出土している。埋土は遺物が出土しない周辺の溝と異なる。所属時期は奈良時代の可能性がある。ＳＤ48・50はＡ区の比較的平坦な部分から斜面に変わる傾斜変換線付近に位置している。出土遺物は縄文土器・土師器の細片であるため、流れ込みの遺物であると思われる。よって時期は不明である。おそらくは地境等を示す区画溝であった可能性がある。

なお、ＳＤ23の底面には径19～48㎝の円形・楕円形を呈するピットが検出されている。検出状況が塀に類似しているが、出土遺物が無く、埋土の堆積状況が単層かつ周辺の時期不明の溝跡に類似していることから、本報告では底面にピットのある時期不明の溝跡とした。

４　縄文時代の遺物

（１）縄　文　土　器

大コンテナ１箱分、重量にして約10kg出土した。遺構外出土のものが大半を占める。遺構内出土のものも直接遺構に伴うものはなく、周囲から流れ込んだものがほとんどである。遺構外出土のものはＡ区南とＢ区南・東からの出土が多い。

＜貝殻条痕文＞265は貝殻条痕文が施文されている。＜斜縄文ＬＲ＞273・276・287・288・292は斜縄文（ＬＲ）である。275・288・292は口縁部がやや湾曲（外反）して立ち上がる。胎土に繊維含。

＜斜縄文ＲＬ＞261～266・277・279・282・283・285・293～295・299～305・307・309・314は斜縄文（ＲＬ）が施文されている。283・301・300は口縁部直線的に立ち上がり、261～263は胴部は直線的に立ち上がる。277は磨消が施されている。胎土に繊維含。＜附加条縄文＞268は附加条縄文が施文されている。前期（大木２ａ？）＜羽状縄文（ＲＬ＋ＲＬ。非結節）。菱形文＞290・291・287。＜羽状縄文（ＬＲ＋ＲＬ。非結節）。菱形文＞284・286・292・315。＜羽状縄文（ＲＬ＋ＲＬ。結節）。菱形文＞289。＜ループ状縄文＞274・298・311・312・313・296。Ｃ字と逆Ｃ字のいずれも認められる。＜Ｓ字状連鎖文＞275。＜単軸絡条体＞278・310。撚り方は残存状況不良のため不明。

羽状縄文は大木２ａ式、ループ状・Ｓ字状連鎖文は大木２ｂ式、単軸絡条体は大木３式ではないかと思われる。斜縄文が施文された縄文土器は繊維が含まれているので、前述の土器と同時期に位置づけられるものと考えた。今回の調査で出土した縄文土器は概ね大木１～２式を中心とした前期前葉に位置づけられると思われる。ただし、276は胎土に繊維が含まれないこともあり、前期の土器でない可能性がある。

（２）石　　器

＜石鏃＞320は所謂凹基鏃、（321）は所謂平基鏃である。

＜不定形石器＞317～319・322～329は不定形石器として一括した。

５　奈良時代の遺物

土師器、板状土製品、磨石が出土した。土師器は総量で大コンテナ１箱分、重量にして約12kg出土した。器種は坏・甕・球胴甕・甑が認められるが、坏が全体で７点しか出土せず、量が極めて少ない。

板状土製品はＳＩ04カマドから１点、磨石はＳＩ01から３点出土した。

（１）土　　器

土器の分類

坏

坏Ａ：丸底で、内外面に段をもち、口縁部が外反している。内面黒色処理(以下内黒と省略)・ヘラミガキ、外面底部ヘラケズリ、体部ヘラナデ調整が施されている(44)。

坏Ｂ：丸底で、体部中位で屈曲し、口縁部が外反している(31)。調整技法は坏Ａと同じ。

坏Ｃ：丸底で、外面に段を持ち、口縁部が内湾している。内黒・ヘラミガキ、外面ヘラナデ調整(49)。

坏Ｄ：丸底で、体部に段はなく直線的に立ち上がり、口縁部が若干内湾している。内黒・ヘラミガキ、外面ヘラナデ調整が施されている(316)。

坏Ｅ：平底で、体部に段はなく、直線的に立ち上がり口縁部が若干外反する(33)。調整は坏Ａと同じ。

坏Ｆ：平底で、体部に段はなく、内湾して立ち上がる。法量が大きいもの(48)と小さいもの(32)とに細分できる。前者は坏Ａと同じ調整、後者は坏Ｃと同じ調整が施される。

甕

甕Ａ：頸部に段もしくはその名残があり、口縁部は外反し、受け皿状となっている。最大径は口縁部にある。調整は摩滅が著しく、不明なものが多い(16・17・19・21・47)。

甕Ｂ：頸部に段もしくはその名残があり、すぼまっている。口縁部は面取り(２段ナデ)が施され、外反している。内面ヘラナデ、外面はハケメもしくはヘラケズリ調整(38・39)。

甕Ｃ：頸部に段はなく、頸部が屈曲し口縁部が直線的に開く。最大径は体部にある。口縁部は３㎝前後。調整は内面ヘラナデ、外面はハケメとヘラミガキ調整が半々である。ハケメの単位は細かい(９・12・13・18・20・22・46・271)。

甕Ｄ：頸部に段を持ち、口縁部が若干外反し、２段ナデ。外面ヘラケズリ・内面ハケメ調整(10)。

甕Ｅ：頸部に段はなく、体部は内湾して立ち上がり口縁部が外反している。最大径は口縁部にある。外面ヘラナデ調整(40)。

甕Ｆ：頸部に段かその名残がありすぼまっている。口縁部は外反し、２段ナデ(11)と１段ナデ(35・45)がある。前者は外面ハケメ、内面ヘラナデ調整、後者は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ調整。

甕Ｇ：頸部に段があり、口径に対して器高が低い短胴形のもの。最大径は口縁部。体部は内湾して立ち上がり口縁部が外傾する。３は底部が張り出す。外面ヘラミガキ調整が主体(１～３)。

甕Ｈ：頸部に段はなく、口径に対して器高が低い短胴形のもの。最大径は口縁部。体部は内湾して立ち上がり口縁部が外反する。底部は若干張り出す。外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ調整(34)。

甕Ｉ：胴部が球胴を呈する。所謂球胴甕。口縁部が外傾し、受け皿状を呈す。数が少ないので一括した。調整は内面はヘラナデだが、外面はハケメ・ヘラミガキ・ヘラケズリと様々である。胎土が他の甕より密で、金雲母が含まれる傾向が認められる(７・８・23・24・26・41)。

甑Ｊ：単孔式で胴部から口縁部にかけて外傾するもの(36)。内外面ヘラナデ調整が施されている。

その他：残存状況が不良で上記の分類にあてがうことができなかった土師器はその他の甕として一括した。一括した土師器甕の底部破片を見てみると、底部が張り出しているものと（14・27～29・37・51・52)、そうでないもの(42)が認められ、比較的張り出しているものが多い。

各分類の出土状況と共伴関係

土器の分類をもとに遺構毎の出土遺物の共伴関係をみていく。なお、今回の調査で検出された住居

は土器の出土量が少なく、形状が分かるものは概ね掲載したので、掲載遺物のみで検討したことをお断りしておく。

ところで、今回の調査で検出された住居数、遺物の出土量は極めて少ないが、重複関係にある住居（ＳＩ06Ａ、Ｂ）がある。最初にこの２棟の出土遺物の様相を確認する。ＳＩ06Ｂからは坏Ａ、甕Ｃ、中型甕Ｆが出土している。これに対してＳＩ06Ａからは坏Ｂ・Ｅ、甕Ｂ・Ｅ、中型甕Ｆ・Ｈ、球胴甕Ｈ、甑Ｊが出土している。ＳＩ06Ａと06Ｂからは同じ器種が出土してないという状況が読み取れる。また、他の住居出土遺物をみるとこの二つの住居の土器組成と同じパターンを示すものがほとんどであった。よって、本遺跡出土資料は大きく二時期の変遷がたどれると考え、ＳＩ06Ａ・Ｂの新旧関係を縦軸に、両住居出土土器の組成を横軸にして、今回出土した土器のグルーピング化を試みる。

共伴関係を見ていくと、大きく２つのグループに分けられる。

①は甕Ｃを主体として、甕Ａ、中型甕Ｆ、球胴甕Ｉを伴う。一部で坏Ａを伴う（ＳＩ02・04・06Ｂ）。

②甕Ｂ・Ｅ、甑Ｊが主体とするもの。一部で坏Ｂ・Ｅを伴う。①で共伴していた甕Ｆ・Ｉが伴う住居もあるが、坏Ａ・甕Ｃは含まれない（ＳＩ06Ａ）。

なお、①と②の前後関係はＳＩ06Ａ・Ｂの切り合いから、①→②と考える。

土器の年代的位置づけ

本遺跡が所在する沿岸南部地域は、資料数の問題から、古代の土器についての検討がほとんど行われていない。また、内陸地方（北上盆地・大崎平野）とは土器の様相が異なるので、年代観を参考にすることもできない。そこで、距離は離れているが、若干土器の様相が近い松島湾岸の中で一番資料のまとまっている赤井遺跡（矢本町教育委員会2001）の資料を参考にして検討を行う。

①は坏Ａの口縁部の外反具合と法量・形状からみて、仙台市付近の７世紀後半代の土器に類似している。赤井遺跡のⅠ－３期（７世紀後半～末葉）の坏Ｂに類似しているような気もする。共伴している甕Ａは赤井遺跡Ⅱ－１期の甕Ａ、甕Ｈは同じくⅡ－１期の甕Ｈに類似し、Ⅱ－１の年代観は７世紀末～８世紀前葉とされている。本地域の土器様相がはっきりせず、坏Ａが後続時期まで使用されていた可能性もあるため、①の年代は赤井遺跡のⅠ－３～Ⅱ－１期、７世紀後葉～８世紀前葉としておく。

②は坏類が赤井遺跡のⅡ－２～Ⅱ－３期の坏Ｅ類に比較的類似している。また、共伴する甕Ｈは赤井のⅡ－２期甕Ｅに、甑Ⅰは赤井のⅡ－３期の甑Ｃに（そのものではないが）比較的類似している。よって、②の年代は赤井遺跡のⅡ－２～３期、８世紀前葉～中葉としておく。

また、ＳＮ01出土坏は形状から赤井遺跡のⅡ－４期坏Ｅに類似していることから、②に後続する８世紀後半段階に位置づけられる可能性があると思われる。

なお、この年代観は資料数が少ないまま設定している。資料が増加した段階で再検討する必要があろう。

（２）土製品・石製品

＜板状土製品＞30はカマド燃焼部に架構されていたものである。全体的に被熱による摩耗が著しく、調整技法は不明だがヘラナデ・指オサエの痕跡が確認できた。断面形状は角の取れた方形状を呈し、粘土が巻かれている状態が看取される。板状の粘土を巻いて棒状に加工したものと推察される。角はナデで面取りされている。この板状土製品に類似した土製品は八戸市酒美平遺跡ＳＩ８竪穴住居跡で出土している（八戸市教育委員会2001）。同遺跡出土例は長さ約28㎝、幅約５㎝、厚さ約２㎝と本遺跡出土例より一回り小さいが、ナデ→ミガキ調整が施され、カマド袖の芯材として使用している。また、阿武隈川流域の福島県本宮町高木遺跡１号住居跡からは３本の粘土紐を束にして板状に成形した板状

土製品が出土している。この土製品は埋土から出土したものの、他の住居の状況から、カマド構築材に使用した可能性が指摘されている（福島県教育委員会2002）。類例は少ないが、本遺跡出土板状土製品は当初からカマド芯材(構築部材)にするために製作した可能性が想定される。なお、この板状土製品は７～８世紀の新潟県においても分布が認められ、カマド構築材に用いられた可能性が指摘されている(春日2003)。

＜磨石＞４～６は磨石である。ほぼ全面に磨りの痕跡が認められる。石質は４はひん岩、５は凝灰岩、６はハンレイ岩と様々である。

６　近世の遺物

（１）陶器・陶磁器

陶器・陶磁器類は９号袋1/2袋分、重量にして約134ｇ出土した。在地産陶器・陶磁器や肥前産陶磁器等が出土している。このうち、形状・染付が明らかなものを選択し、合計３点を掲載した。

＜擂鉢＞332は近世の擂鉢の口縁部破片である。産地不明。在地の可能性有。

＜碗＞333は肥前産の碗である。時期は19世紀前半である。355は小皿、356は碗である。

（２）金　属　製　品

銭貨以外の金属製品は９号袋１袋分、重量にして約486ｇ出土した。墓壙から出土したものが大半を占め、遺構外出土も墓壙の周辺から出土したものがほとんどである。器種は毛抜、鋏、煙管雁首、煙管吸口、釘が認められる。出土状況から毛抜、鋏、煙管は副葬品として埋葬され、釘は棺桶に使用されたものと思われる。毛抜、鋏、煙管に関しては全点掲載した。釘は形状が明らかなものを中心に18点写真掲載した。

＜毛抜＞１点(84)出土した。84は長さ8.2cm、幅7.5cm、厚さ1.25㎜、重さ11.99ｇを測る。

＜鋏＞２点(59・83)出土した。59は長さ14.4cm、幅2.1cm、厚さ最大３㎜、重さ65.78ｇを測る。83は長さ15.0cm、幅2.4cm、厚さ２㎜、重さ30.57ｇを測る。83は刃部に「盛町」と刻まれている。「盛町」は、現在の大船渡市盛町のことか？

＜煙管雁首＞５点(92・168・239・248・330)掲載した。火皿が①径2.1cm前後と、②1.1～1.2cm前後の大小２種類に分けられるが、基本的に油返しの湾曲が緩やかな点が共通している。92は火皿が大きいもの、168・239・248は火皿が小さいものである。また、168は羅宇との接続部が太くなっている。248は羅宇が残存している。所属時期は①は18世紀後半代、②は19世紀前半代ではないかと思われる。

＜煙管吸口＞５点(169・203・204・240・331)出土した。残存状況が不良なものが多く、判然としない。比較的残存している169・240は口付が玉状に膨らんでいる。203は表面の剥落が著しい。169・204・240は羅宇が残存している。所属時期は比較的残存している169・240から19世紀前半代と思われる。

＜釘＞各墓壙から出土した釘のうち代表的なものを18点選び写真掲載した。長さと重量に規則性は見られなかったが、断面が一辺0.4～0.6cm前後の方形もしくは長方形を呈しているものがほとんどである。65・66はＬ字状に折れ曲がっている。使用（打ち込み・成形)時に曲がった(曲げた)のだろうか？。163～165は錆や棺材の一部と思われる木質が付着している。

（３）銭　　貨

墓壙から約420枚、重量にして約2.4kg出土した。全て寛永通寶である。出土状況から六道銭として

副葬されたと思われる。金属の種類としては銅銭と鉄銭がある。銅銭は古寛永、文銭、新寛永、21波、11波が出土している。鉄銭には差し状のものが多く認められ、最も多いもので約100枚を数えるものが出土した(241)。遺構別の出土状況は大きく①古寛永＋新寛永＋(文銭)と②古寛永＋新寛永＋鉄銭＋(21波・11波)の組み合わせに分けられる。

(4) 木　製　品

近世墓から棺材の一部と思われる木製品が重量にして約100ｇ出土した。そのうち残存状態が比較的良好なものを選び、７点写真掲載した(166・167・179・202・238・246・247)。

大半が墓壙中央の底面直上から出土していることから、棺桶の底板であると思われる。また、202を樹種同定に出したところ、スギとの鑑定結果を得た。他の棺材と思われる木製品も202と同じ形状を呈していることから、スギの可能性が高いと思われる。

7　ま　と　め

今回の調査では奈良時代の集落跡、近世の墓壙が検出され、遺構外から縄文時代前期の土器が出土した。これらを中心に簡単なまとめを行う。

(1) 縄文時代前期の土器

遺構外から出土したもので、大半がＢ区東・南端から出土している。Ｂ区調査区外の斜面上位に概期の集落がある可能性が想定されよう。

(2) 奈良時代の集落跡

＜７世紀後半～８世紀前半＞Ａ区から１棟、Ｂ区から２棟確認した(ＳＩ02・04・06Ｂ)。規模は３～４ｍ前後と５ｍ前後を測る。斜面上にカマドを設置する傾向がある。ＳＩ07は甕Ａの形状から、この時期と判断した。この時期に確認した４棟の住居は調査区内で点在しており、分布に規則性はない。なお、７世紀後半～８世紀前葉と幅を持たせているが、ＳＩ06Ｂは若干古く(７世紀後葉より)、ＳＩ02・04・07は若干新しい(７世紀末～８世紀前葉より)方に位置づけられそうな感じがする。

＜８世紀前葉～中葉＞Ａ区から１棟確認した(ＳＩ06Ａ)。規模は一辺4.1ｍ前後を測る。斜面上にカマドを設置しているが残りが悪く、詳細は不明である。なお、ＳＩ01は甕Ｇの形状から、この時期と判断した。よってこの時期の住居は２棟となるが数が少なく、傾向は見いだせなかった。

＜８世紀後半＞住居は無く、炉跡１基のみ検出した。

(3) 近世の墓壙

＜平面形と副葬品の関係＞Ⅶ－２で分類した、①②③を準拠して記述する。①からは六道銭と鋏・毛抜、②からは六道銭と煙管、③からは寛永通寶が出土する傾向がある。また、①の六道銭は熱を受けたものが多く、③の六道銭は鉄銭が比較的多く認められる。

＜重複関係の整理＞ａ) ＳＫ49→ＳＫ29、ｂ) ＳＫ39→ＳＫ38→ＳＫ45、ｃ) ＳＫ39→ＳＫ40Ｂ→ＳＫ40Ａ、ｄ) ＳＫ41・42→ＳＫ50、ｅ) ＳＫ42→ＳＫ48Ｄ・Ｅ→ＳＫ48Ｃ→ＳＫ48Ｂ→ＳＫ48Ａという重複関係である。ａ・ｂ・ｃが①のみ、ｄが②のみ、ｅが②・③同士の重複関係にある。

＜遺物からみた年代＞①が18世紀代、②が18世紀後半～19世紀前半、③が19世紀代と思われる。

＜墓壙の変遷＞18世紀代に入ると、墓域の北側から埋葬し始める。形状は0.6～0.8ｍの楕円形状が主体である。18世紀後半以降になると南西方向にずれた地点(墓域の中央付近)に埋葬するようになる。形状は一辺１ｍ前後の隅丸方形・円形が主体である。19世紀以降も同じ場所に埋葬され続けるが、部

分的な重複のみである。墓標の影響であろうが、以前に埋葬された地点を避けて埋葬しているのは確かである。19世紀後半(明治期)以降になると新たに埋葬されなくなる。なお、移転した墓石の年号は元文５年(1740)、宝暦10年(1760)、宝暦14年(1764)、安永３年(1774)、文化８年(1811)、文化11年(1814)、慶応元年(1865)、明治11年(1878)等があり、墓壙・遺物の年代観と大きく矛盾しない(移転した墓石の元位置は不明。墓石は地権者山田氏のご教示による。この場を借りて御礼申し上げます。)。

まとめ

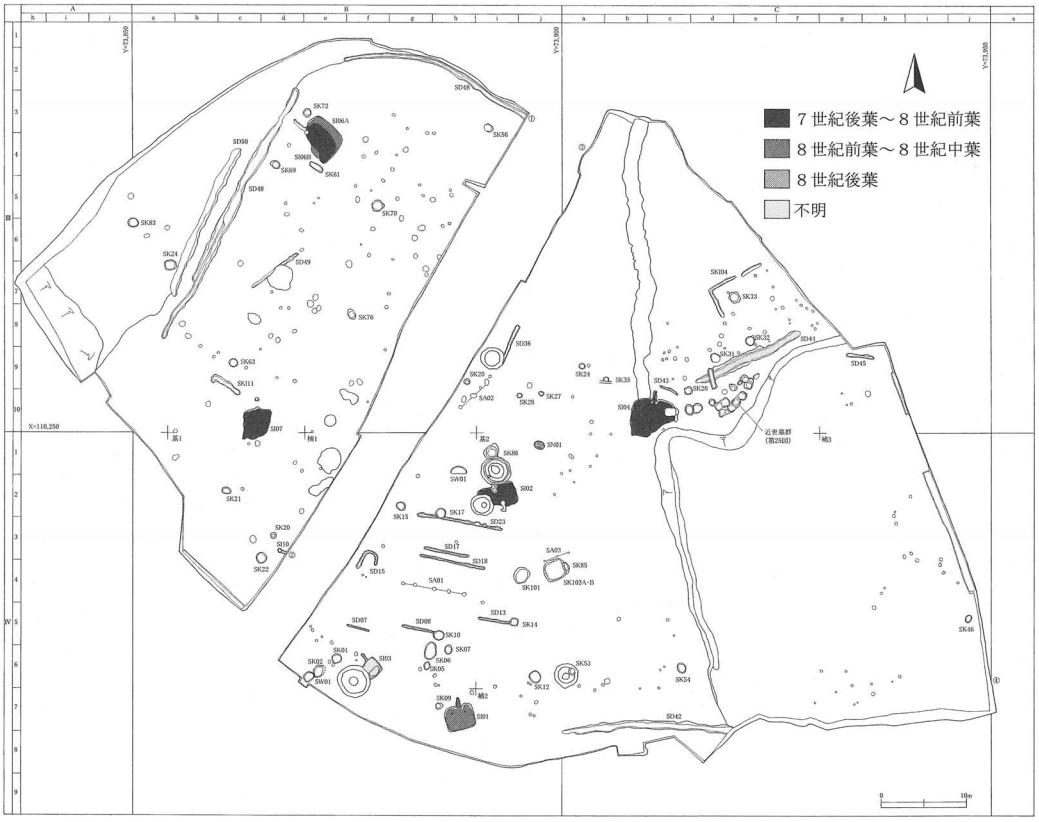
①土師器は仙台湾、板状土製品は八戸・阿武隈川流域に類例があり、寛永通寶には江戸・常陸・摂津で鋳造されたものが含まれている。これらは海に面した本遺跡に陸上だけでなく海上交通からもたらされたといえよう。

②ＳＩ04から出土した板状土製品の類例は、現時点では八戸・阿武隈川流域に認められている。出土例が少なく、現時点での位置付けは困難であるが、その分布には①で述べた海上交通との関連があることが予想される。今後、集成・検討を行うことで本遺跡の位置付け・性格に迫れる可能性がある。別稿で検討したい。

③西側約800ｍに位置する岩井沢Ⅱ遺跡から蕨手刀が出土している。今回の調査では一辺が７ｍを超える大型住居や、蕨手刀などの有力者が所持するような稀少な遺物は出土していない。奈良時代の本遺跡は蕨手刀をもつ有力者を支えるムラの一つであったのではないだろうか？

いずれにせよ、今まで沿岸南部で調査例がほとんど無かった、奈良時代の集落を検出・調査できたことが、本調査の最大の成果である。また、沿岸南部における近世墓壙の資料を得られたことも成果と言える。奈良時代の集落は、住居の数が少なく、詳細な分析を行うことは出来なかった。資料の提示に留まった観は否めないが、周辺の資料が増加した段階に比較検討が行われることに期待したい。

今回の調査では大船渡地方振興局土木部、陸前高田市教育委員会、野外調査・室内整理に従事された作業員・期限付職員の方々に多大なるご協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。



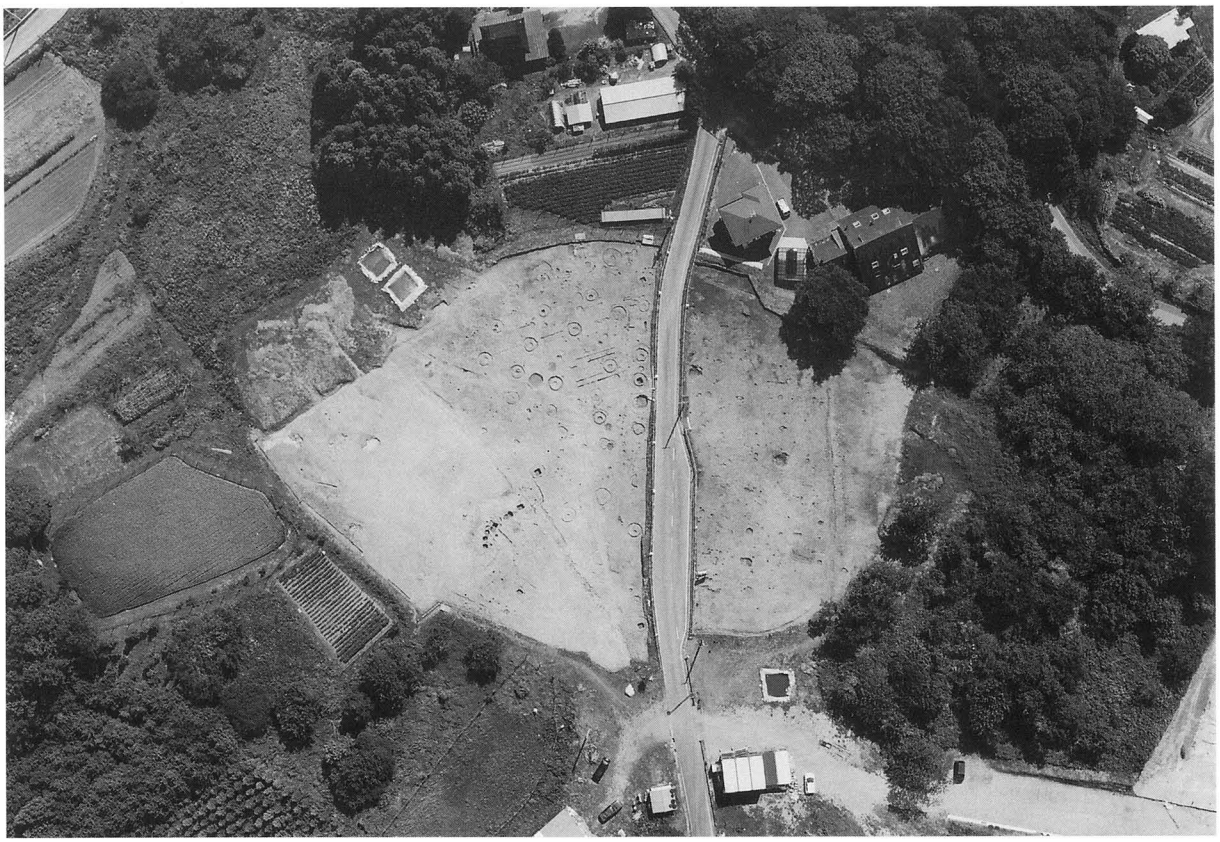
遺構変遷図(奈良時代)

写　真　図　版

南から

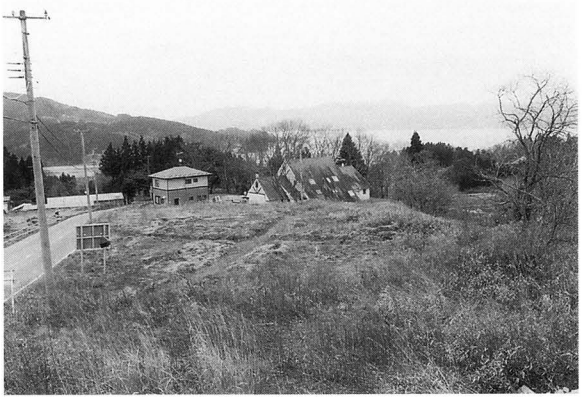
東から

写真図版１　航空写真



調査区全景（N→）

B区調査前風景（NW→）



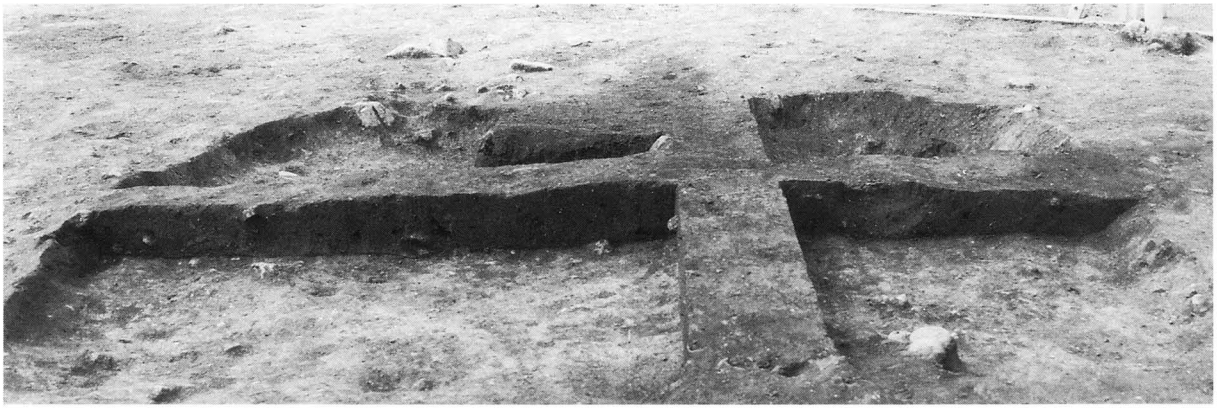
A区調査前風景（N→）

調査区遠景（SE→）

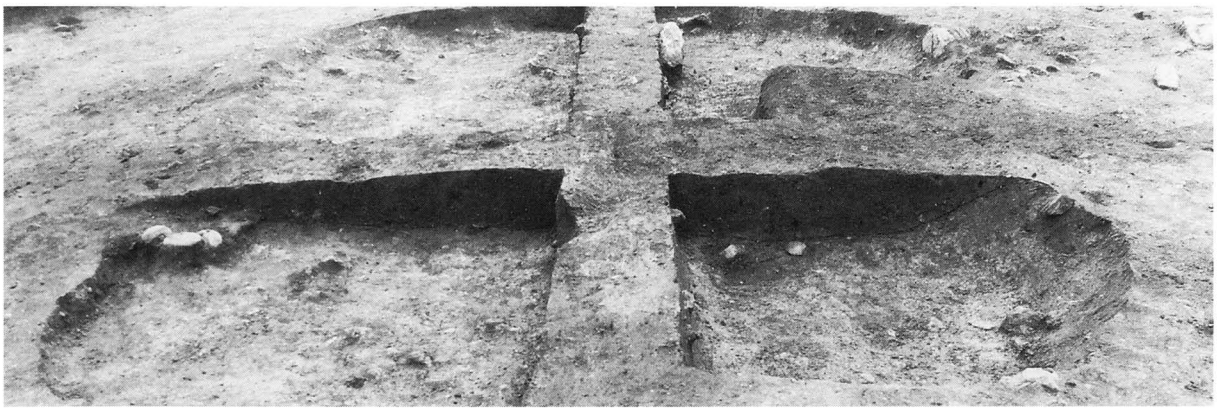
A区調査前風景（NW→）

写真図版２　調査区全景・遠景、調査前風景

完掘（S→）



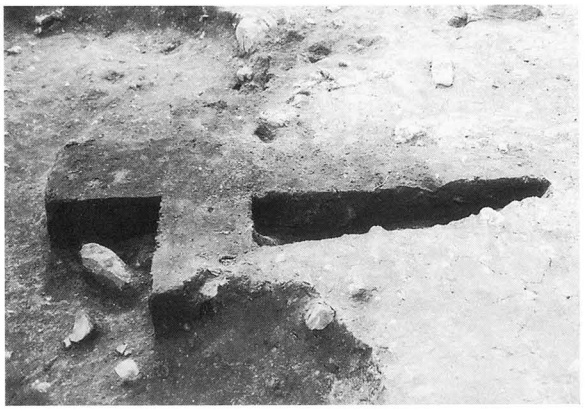
A－A′断面（S→）



B－B′断面（E→）

写真図版３　ＳＩ01竪穴住居跡(1)

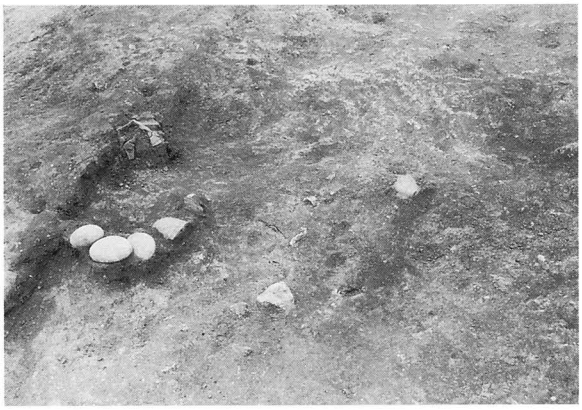
カマド完掘（S→）



カマドA－A′断面（E→）

カマドB－B′断面（S→）

一次完掘（S→）



遺物出土状況（E→）

遺物出土状況（S→）

遺物出土状況（S→）

写真図版４　ＳＩ01竪穴住居跡(2)

完掘（S→）

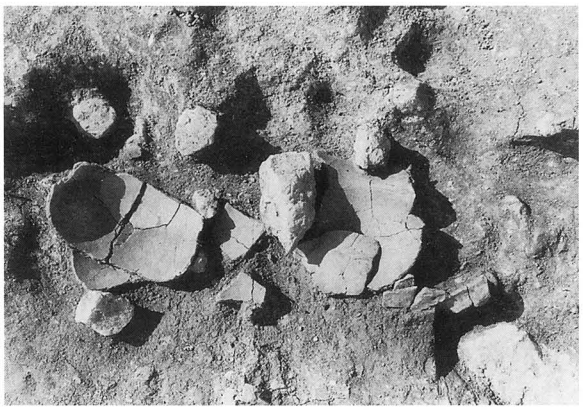
カマド完掘（S→）

一次完掘（S→）

遺物出土状況（S→）

写真図版５　ＳＩ02竪穴住居跡(1)

ＳＩ02　遺物出土状況（Ｓ→）



ＳＩ02　遺物出土状況（Ｓ→）

ＳＩ03　最終完掘（ＳＥ→）

ＳＩ03　カマド検出状況（ＳＥ→）

ＳＩ03　完掘（ＳＥ→）

写真図版６　ＳＩ02(2)・03竪穴住居跡

完掘（S→）

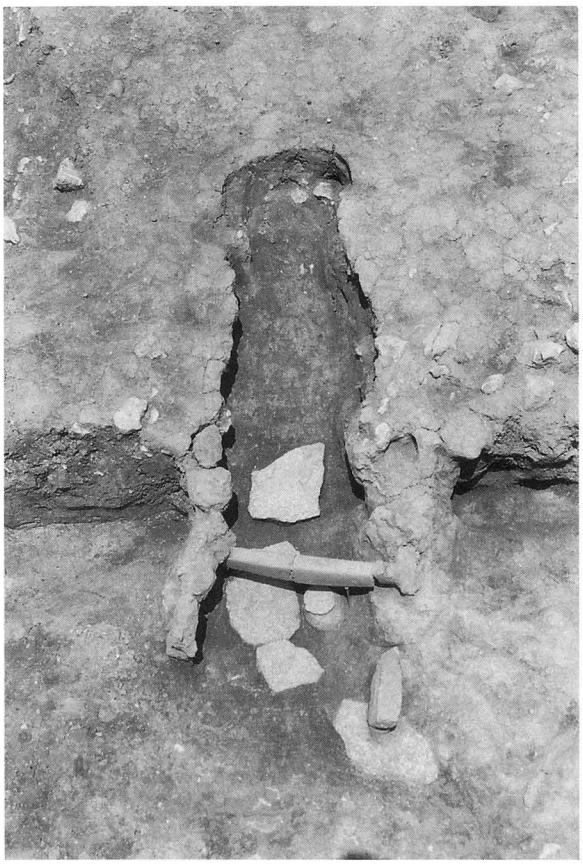
A－A′断面（S→）

B－B′断面（W→）

写真図版７　ＳＩ04竪穴住居跡(1)

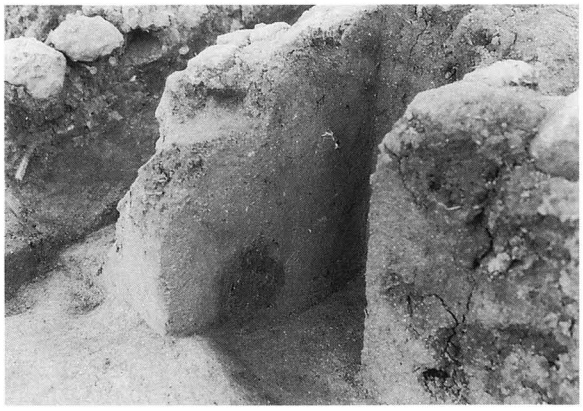
カマド遺物出土状況①（S→）

カマド遺物出土状況②（S→）



カマド完掘（S→）

カマド遺物出土状況③（S→）



袖たちわり断面（SE→）

写真図版８　ＳＩ04竪穴住居跡(2)

完掘（ＳＥ→）

Ａ－Ａ′断面（ＮＷ→）

Ｂ－Ｂ′断面（ＳＥ→）

写真図版９　ＳＩ06Ａ竪穴住居跡(1)

カマド完掘（ＳＥ→）

カマド断面（ＳＷ→）

炭化材検出状況（ＳＥ→）

炭化材検出状況（北東壁中央付近）

炭化材検出状況（北コーナー付近）

炭化材検出状況（北東壁中央付近）

炭化材検出状況（北コーナー付近）

写真図版10　ＳＩ06Ａ竪穴住居跡(2)

炭化材検出状況（北東壁中央付近）

炭化材検出状況（S→）

炭化材検出状況（S→）

炭化材検出状況（S→）

遺物出土状況

遺物出土状況

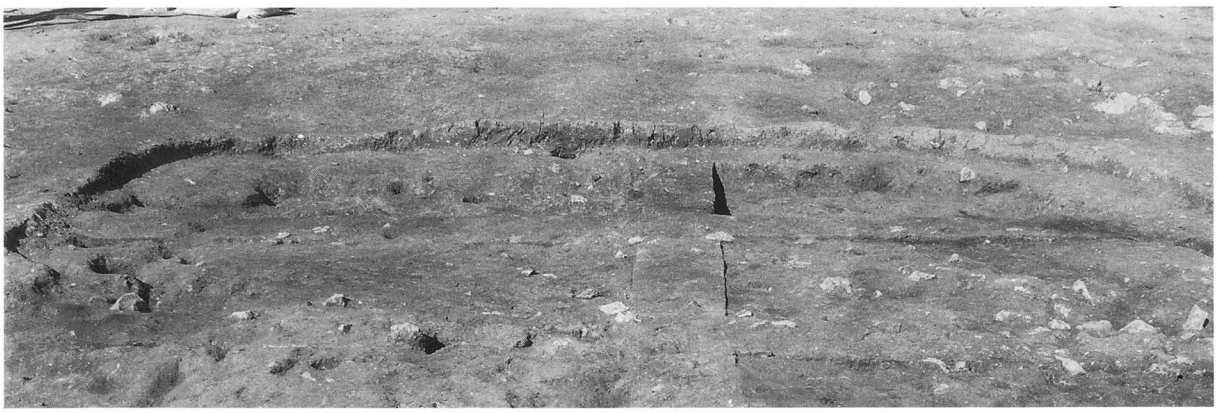
作業風景

ＳＩ06Ｂ掘り方完掘（ＳＥ→）

写真図版11　ＳＩ06Ａ竪穴住居跡(3)

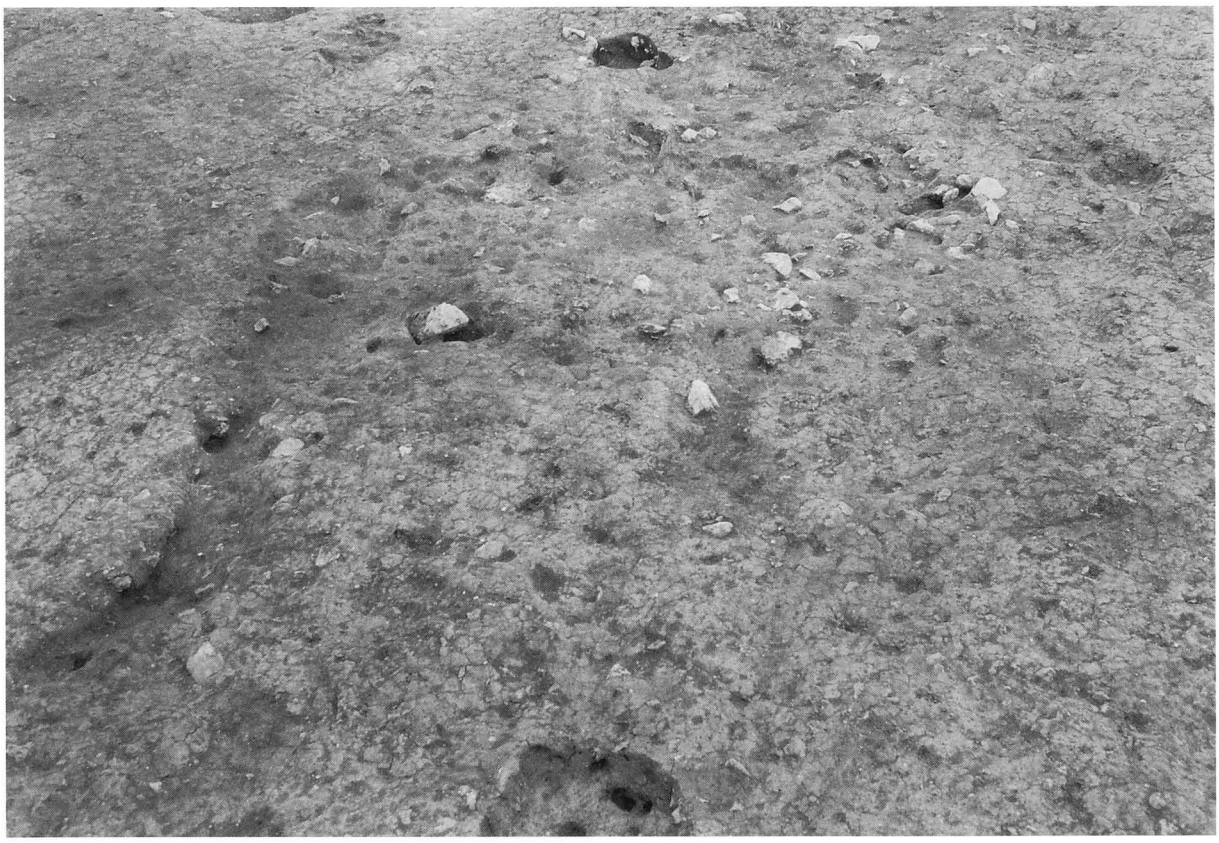
完掘（ＳＥ→）

Ａ－Ａ′断面（ＮＷ→）

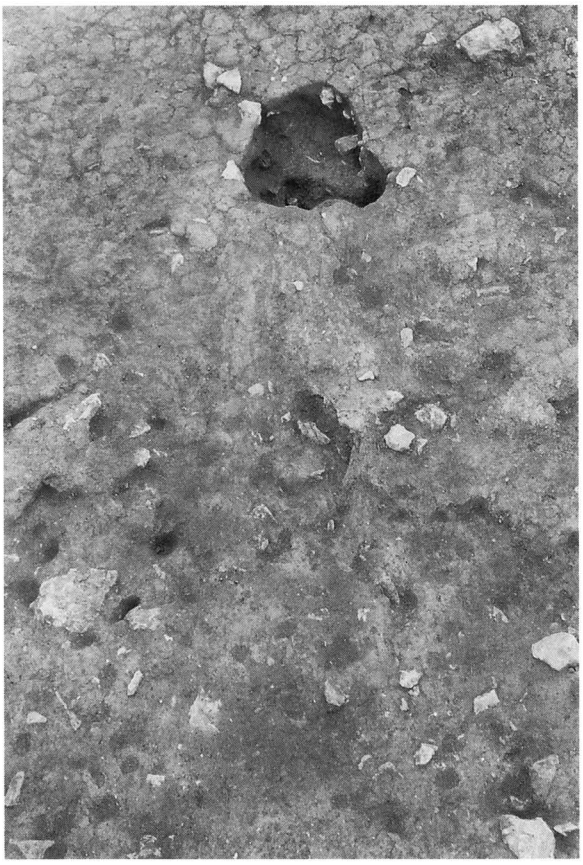


Ｂ－Ｂ′断面（ＳＷ→）

写真図版12　ＳＩ06Ｂ竪穴住居跡



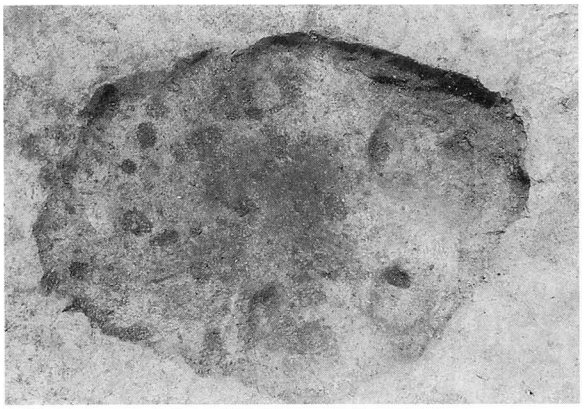
ＳＩ07　完掘（S→）



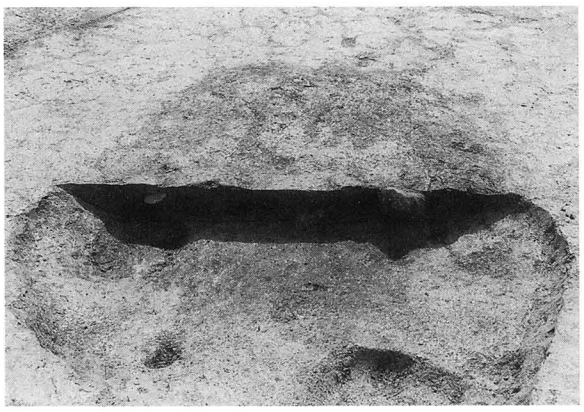
ＳＩ07　カマド完掘（S→）

ＳＩ10　完掘（ＳＥ→）

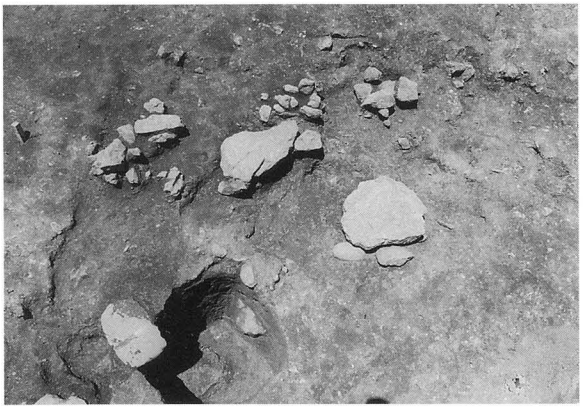
写真図版13　ＳＩ07・10竪穴住居跡



ＳＮ01　完掘（S→）

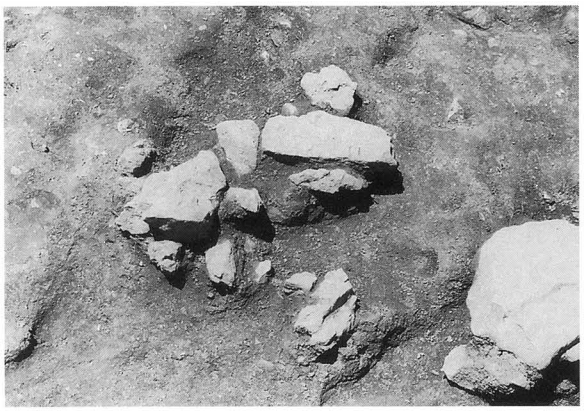


ＳＮ01　断面（S→）

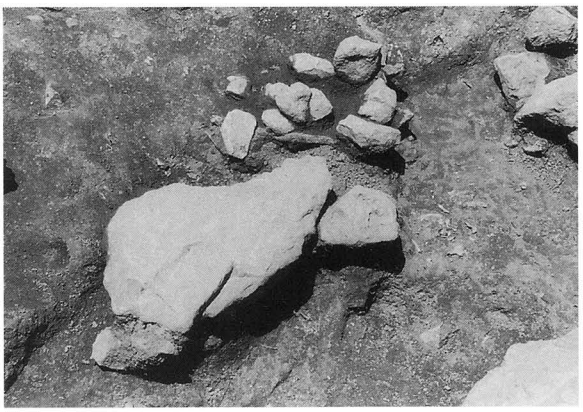


墓壙検出状況（全体）

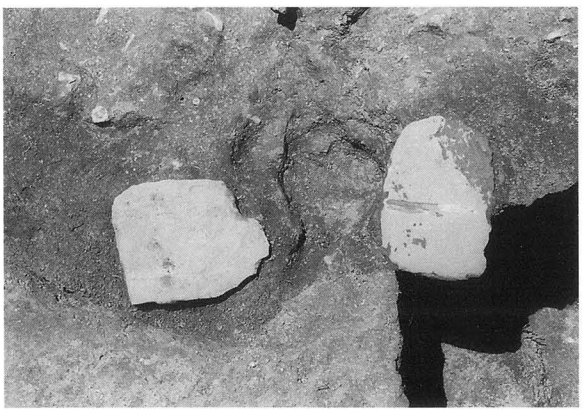
墓壙検出状況（ＳＫ37付近）



墓壙検出状況（ＳＫ43付近）



墓壙検出状況（ＳＫ40付近）



墓壙検出状況（ＳＫ42付近）

墓壙検出状況（ＳＫ45付近）

写真図版14　ＳＮ01炉跡・墓壙(1)

完掘状況（S→）

完掘状況（ＳＫ40付近）

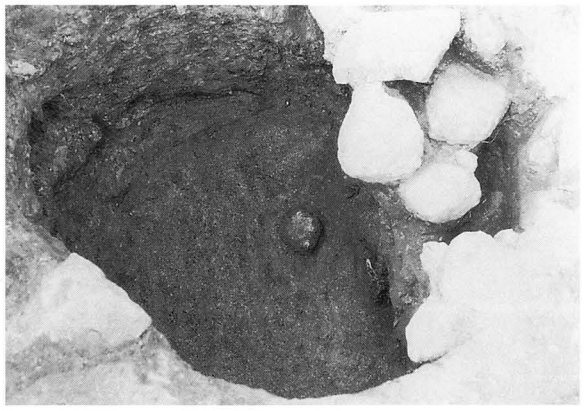
完掘状況（ＳＫ48付近）

完掘状況（ＳＫ41・45付近）

ＳＫ29(左)・ＳＫ49(右)　完掘

ＳＫ29　完掘（N→）

ＳＫ49　完掘（S→）



ＳＫ29　遺物出土状況（S→）

写真図版15　墓壙(2)

ＳＫ37　完掘（Ｓ→）

ＳＫ38　完掘（Ｓ→）

ＳＫ39　完掘（Ｓ→）

ＳＫ40　完掘（Ｓ→）

ＳＫ41　完掘（ＳＥ→）

ＳＫ41　骨検出状況①（ＳＥ→）

ＳＫ41　骨検出状況②（ＳＥ→）

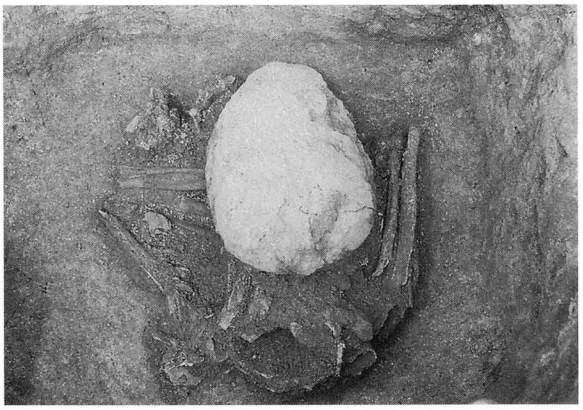
ＳＫ41　骨検出状況③（ＳＥ→）

写真図版16　墓壙(3)

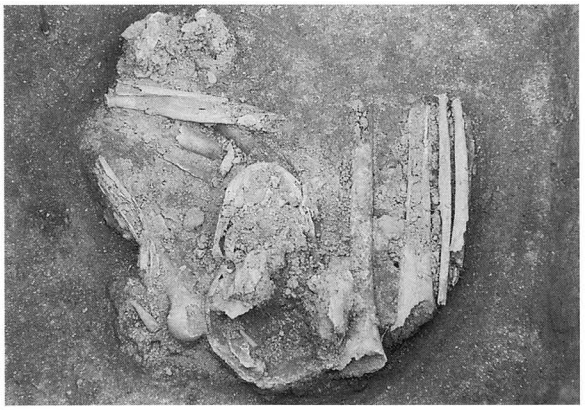
ＳＫ42　完掘（Ｓ→）

ＳＫ42　断面（Ｓ→）

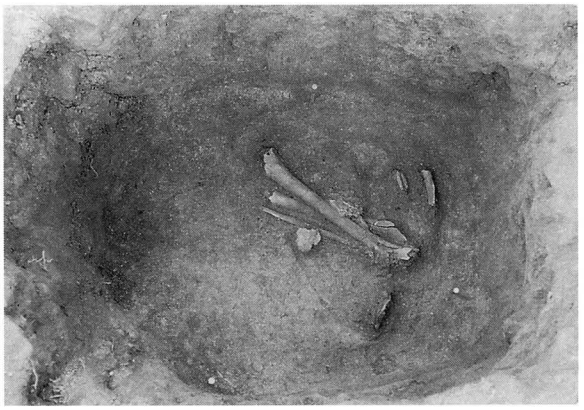
ＳＫ42　骨検出状況①（ＳＥ→）



ＳＫ42　骨検出状況②（ＳＥ→）



ＳＫ42　骨検出状況③（ＳＥ→）



ＳＫ42　骨検出状況④（ＳＥ→）

作業風景（ＳＥ→）

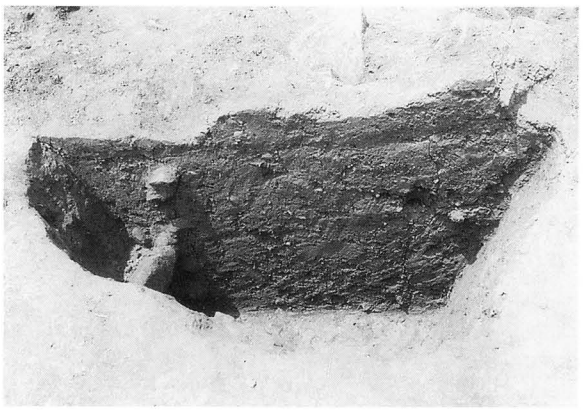
ＳＫ43　骨検出状況①（ＳＥ→）

写真図版17　墓壙(4)

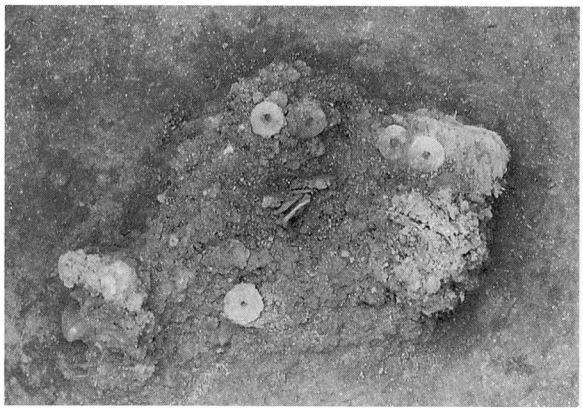
ＳＫ43　骨検出状況

現地説明会風景

ＳＫ45　完掘（S→）

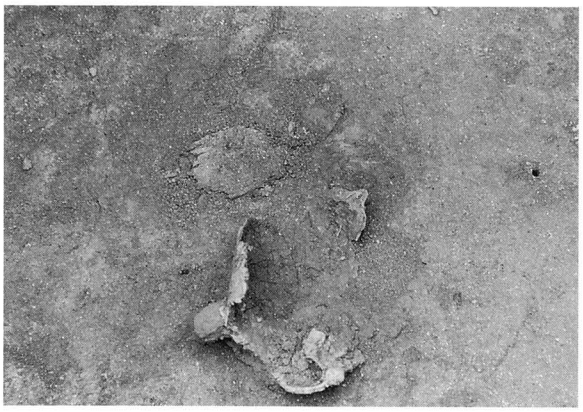


ＳＫ45　断面（W→）

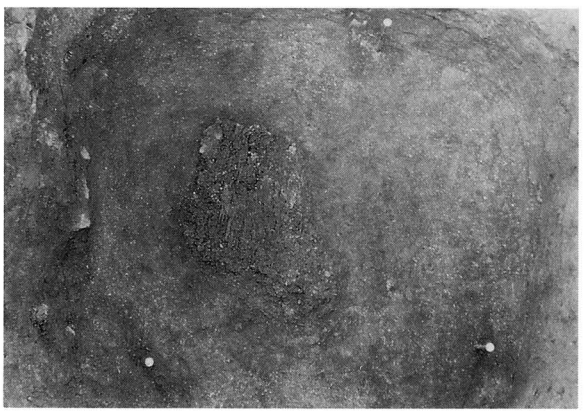


ＳＫ45　骨検出状況①（S→）

ＳＫ45　骨検出状況②（S→）



ＳＫ45　骨検出状況③（S→）



ＳＫ45　棺桶底部検出状況（S→）

写真図版18　墓壙(5)

ＳＫ47　完掘（Ｓ→）

ＳＫ47　骨検出状況（Ｓ→）

ＳＫ48Ａ～Ｅ（Ｓ→）

ＳＫ48Ａ・Ｂ　完掘（Ｗ→）

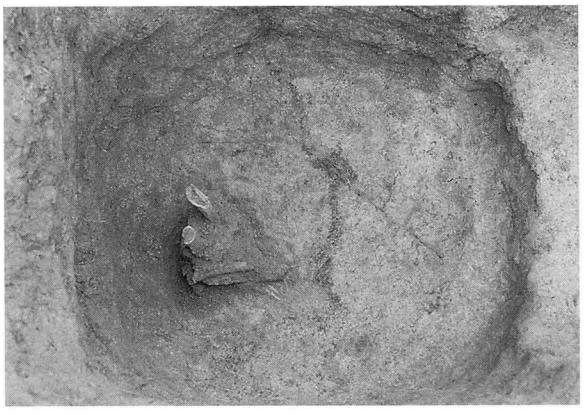
ＳＫ48Ｃ　完掘（Ｓ→）

ＳＫ48Ｃ　断面（Ｓ→）

ＳＫ48Ｄ　完掘（ＳＥ→）

ＳＫ48Ｄ　断面（ＳＥ→）

写真図版19　墓壙(6)



ＳＫ48Ｄ　骨検出状況（Ｓ→）

ＳＫ48Ｄ　骨検出状況（Ｓ→）

ＳＫ48Ｅ　完掘（ＳＥ→）

ＳＫ48Ｅ　断面（ＳＥ→）

ＳＫ48Ｅ　骨検出状況①（ＳＥ→）

ＳＫ48Ｅ　骨検出状況②（ＳＥ→）

ＳＫ48Ｅ　骨検出状況③（ＳＥ→）

ＳＫ42・48Ｅ（Ｓ→）

写真図版20　墓壙(7)

完掘（ＳＥ→）

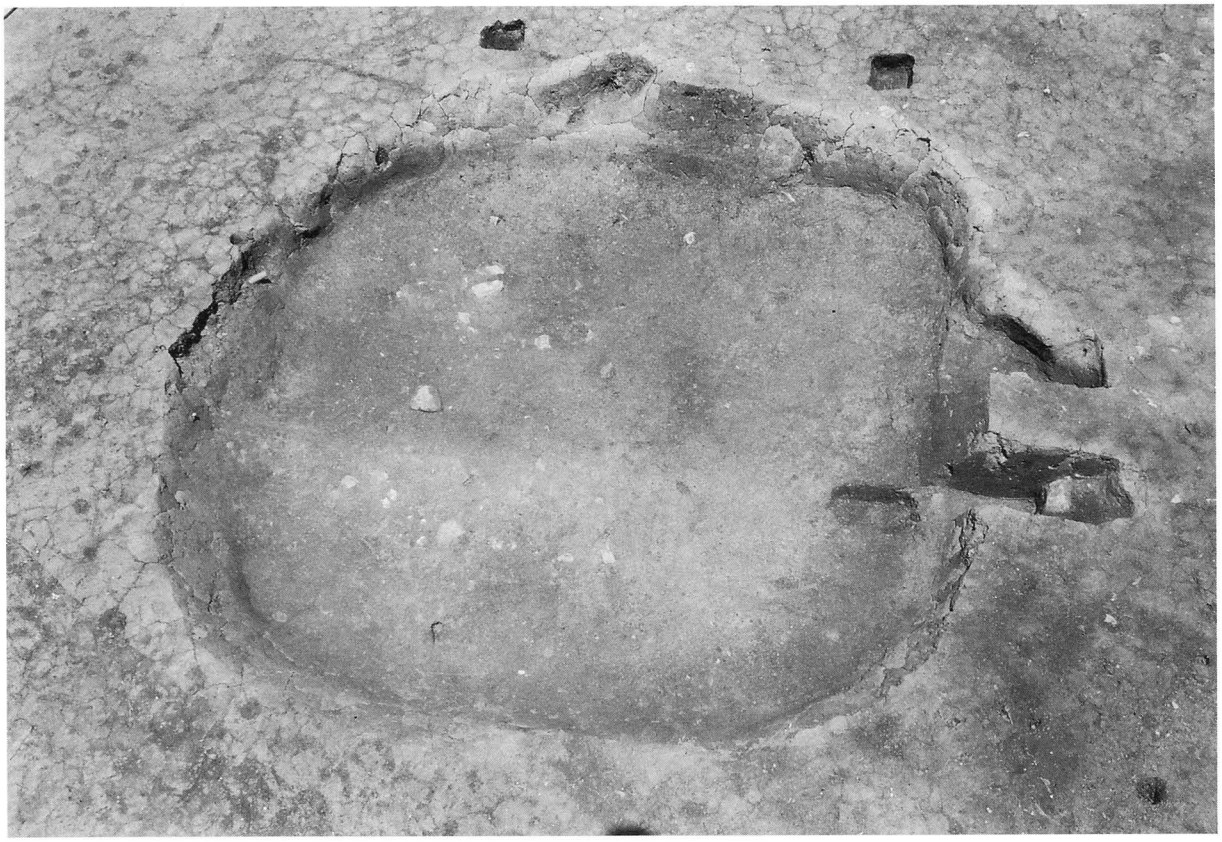
Ａ－Ａ′断面（ＳＥ→）

Ｂ－Ｂ′断面（ＳＷ→）

遺物出土状況（ＳＥ→）

遺物出土状況（ＳＥ→）

写真図版21　ＳＫＩ01竪穴状遺構



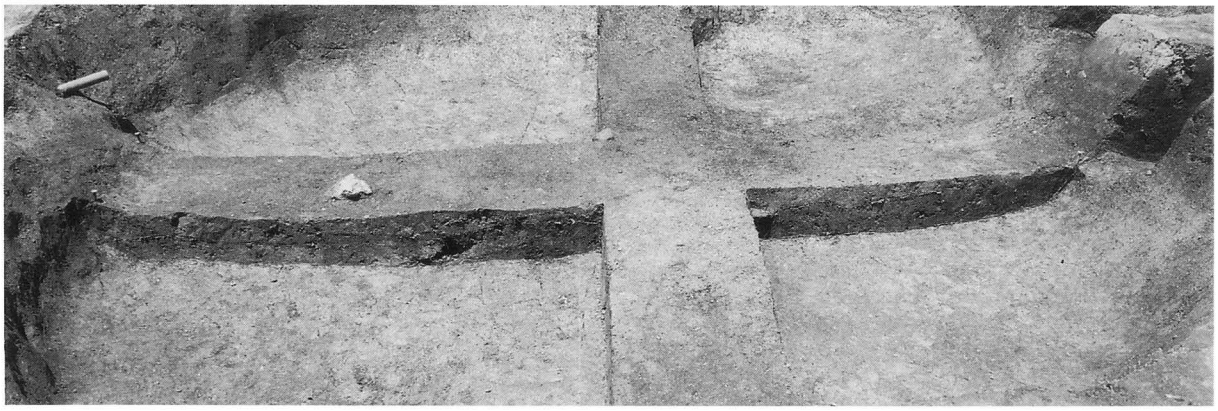
完掘（S→）

A－A′断面

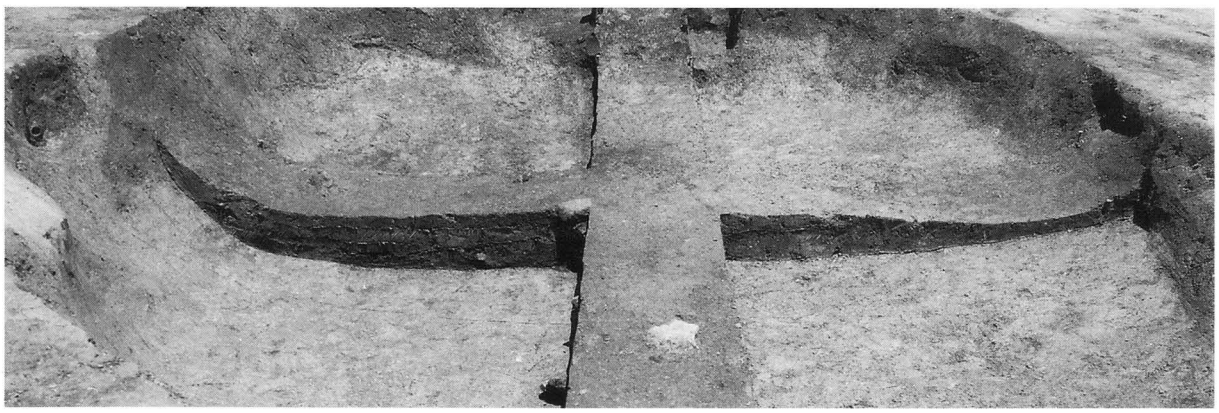
B－B′断面

写真図版22　ＳＫＩ03Ａ竪穴状遺構

完掘（S→）



A－A′断面（S→）



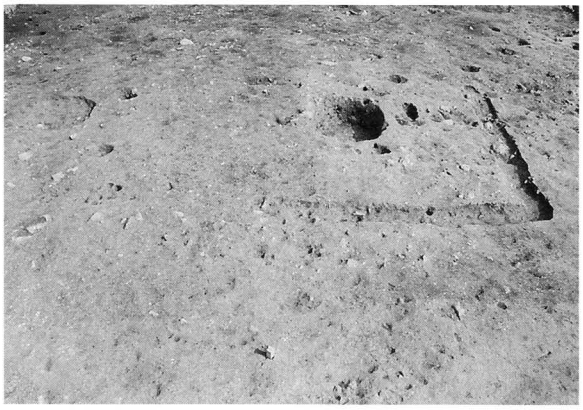
B－B′断面（W→）

写真図版23　ＳＫＩ03Ｂ竪穴状遺構

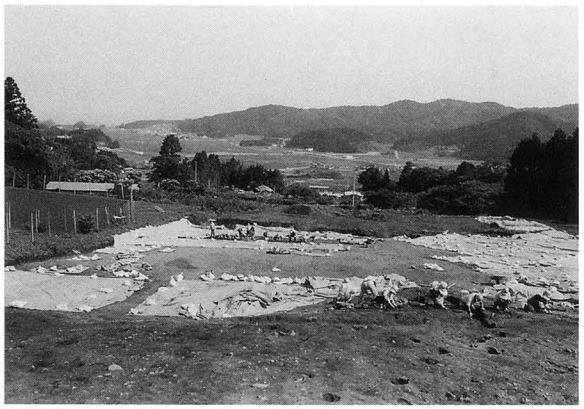
ＳＫＩ04　完掘（NW→）

ＳＫＩ11　完掘（SW→）

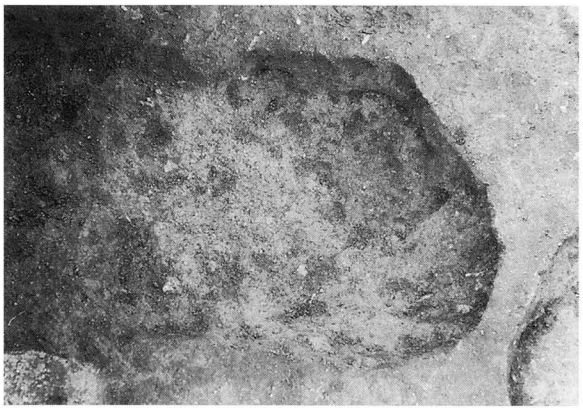
写真図版24　ＳＫＩ04・11竪穴状遺構



ＳＫＩ04　完掘（ＮＷ→）



作業風景



ＳＷ01　完掘（ＳＥ→）

ＳＷ01　断面（Ｓ→）

ＳＷ02　完掘（Ｓ→）

ＳＷ02　断面（Ｗ→）

ＳＷ02　炭検出状況（Ｓ→）

作業風景

写真図版25　炭窯

ＳＫ01　完掘（W→）

ＳＫ01　断面（S→）

ＳＫ02　完掘（W→）

ＳＫ02　断面（S→）

ＳＫ05　完掘（S→）

ＳＫ05　断面（W→）

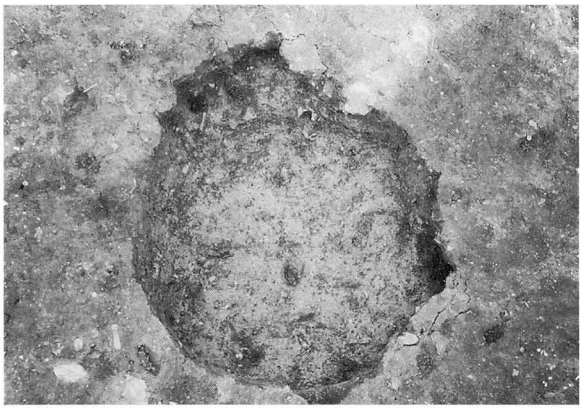
ＳＫ06　完掘（W→）

ＳＫ06　断面（W→）

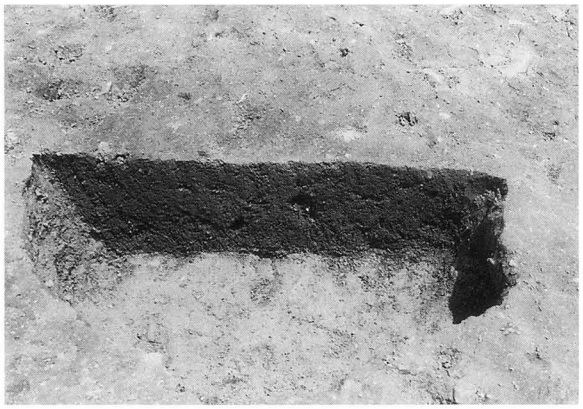
写真図版26　土坑(1)

ＳＫ07　完掘（N→）

ＳＫ10　完掘（E→）

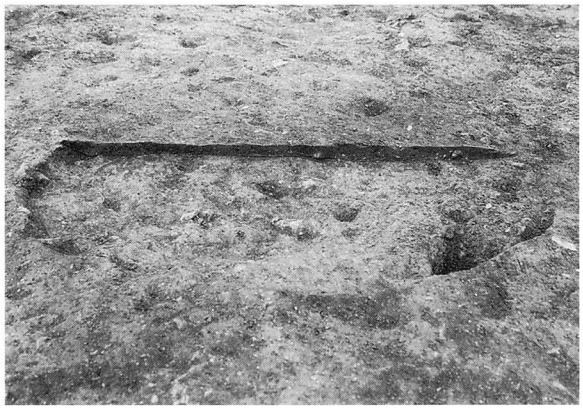


ＳＫ09　完掘（W→）

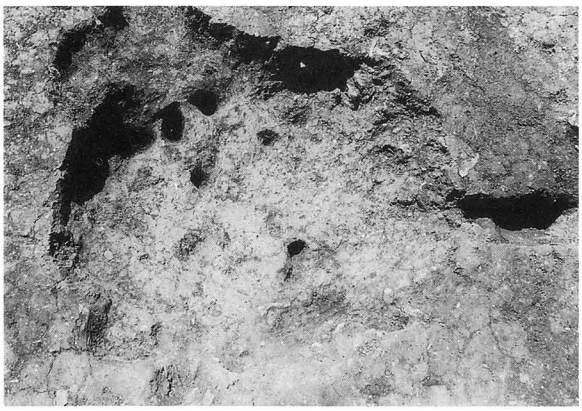


ＳＫ09　断面（W→）

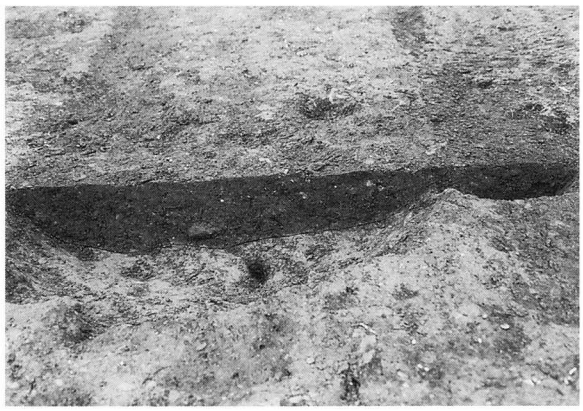
ＳＫ12　完掘（S→）



ＳＫ12　断面（S→）



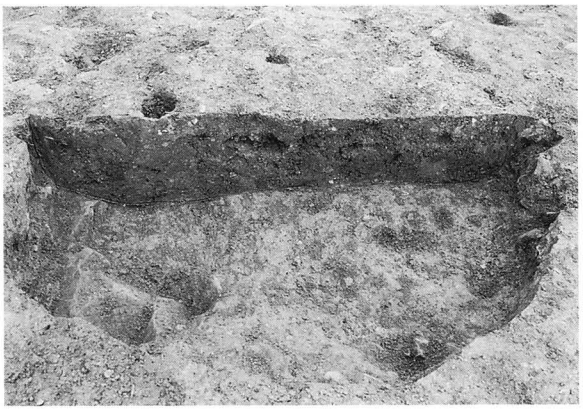
ＳＫ14　完掘（E→）



ＳＫ14　断面（E→）

写真図版27　土坑(2)

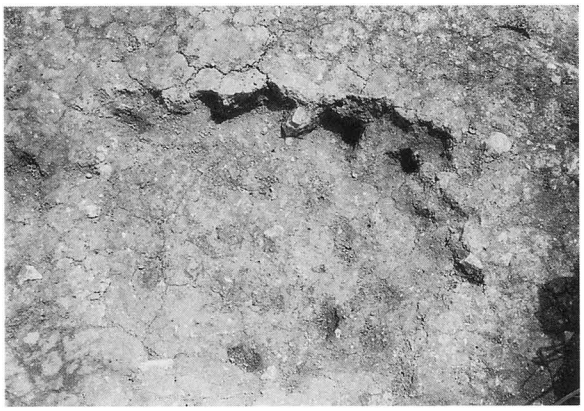
ＳＫ15　完掘（N→）



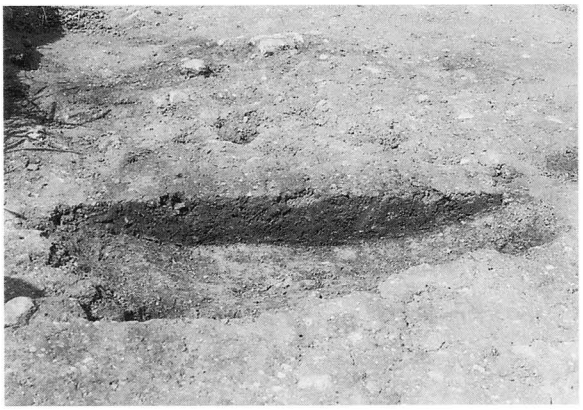
ＳＫ15　断面（S→）

ＳＫ17　完掘（E→）

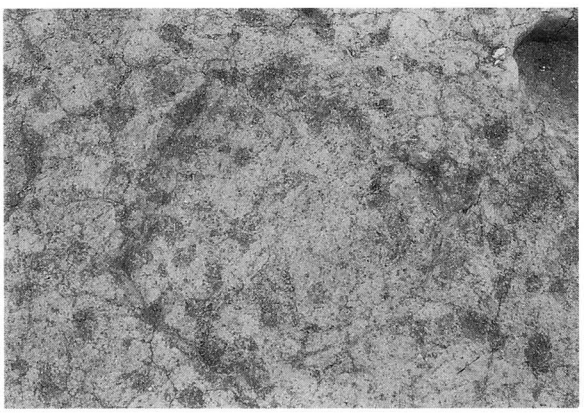
ＳＫ17　断面（W→）



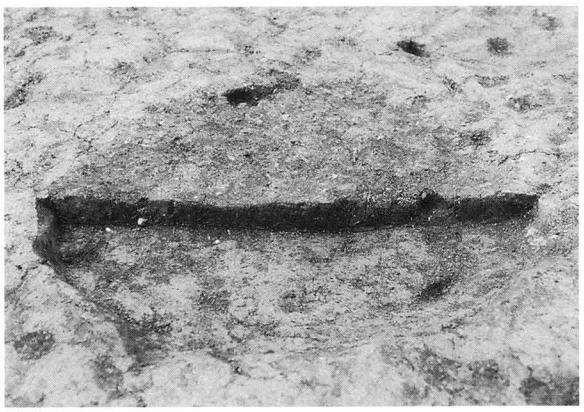
ＳＫ20　完掘（N→）



ＳＫ20　断面（S→）

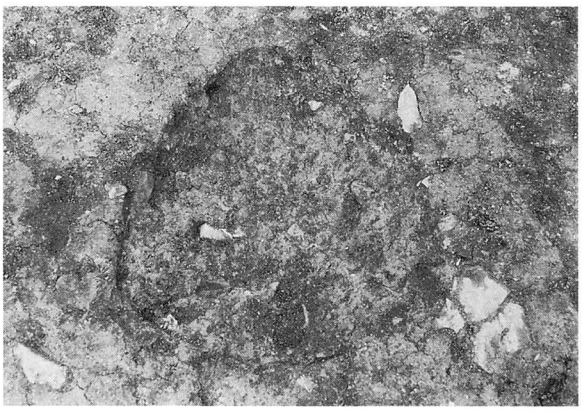


ＳＫ24　完掘（S→）

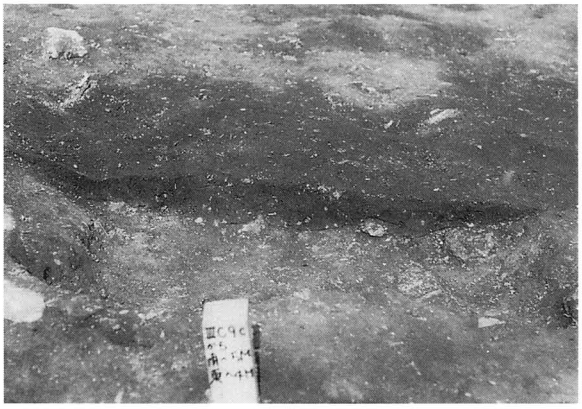


ＳＫ24　断面（S→）

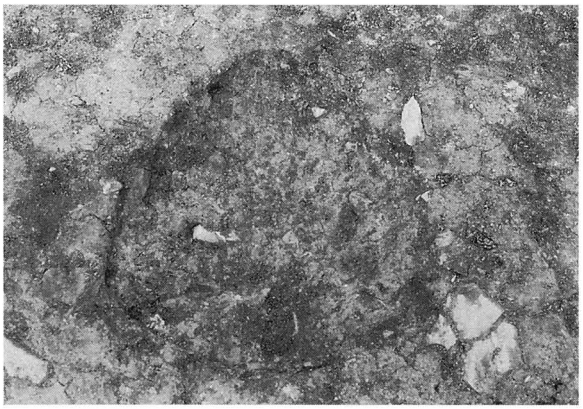
写真図版28　土坑(3)



ＳＫ26　完掘（Ｓ→）



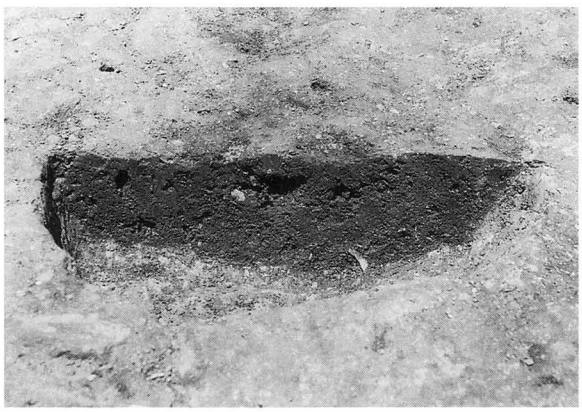
ＳＫ26　断面（Ｗ→）



ＳＫ27　完掘（Ｓ→）

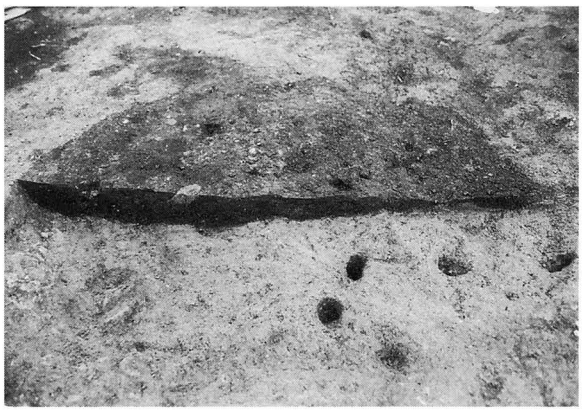
ＳＫ27　断面（Ｓ→）

ＳＫ28　完掘（Ｓ→）



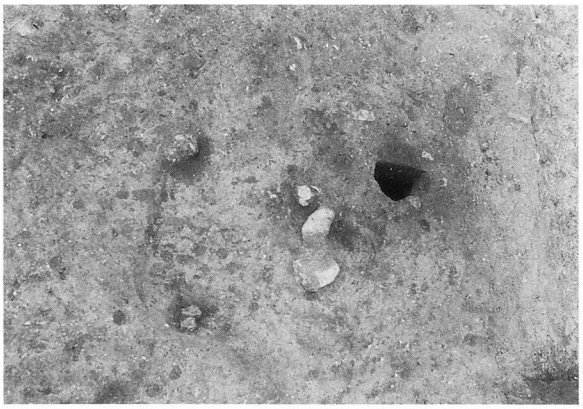
ＳＫ28　断面（Ｓ→）

ＳＫ31　完掘（Ｅ→）

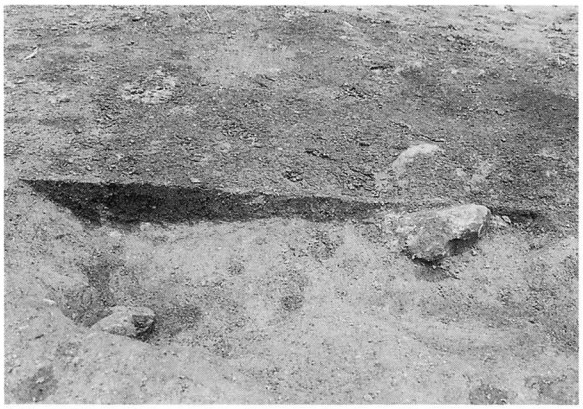


ＳＫ31　断面（Ｓ→）

写真図版29　土坑(4)



ＳＫ32　完掘



ＳＫ32　断面（Ｓ→）

ＳＫ33　完掘（Ｗ→）

ＳＫ33　断面（Ｓ→）

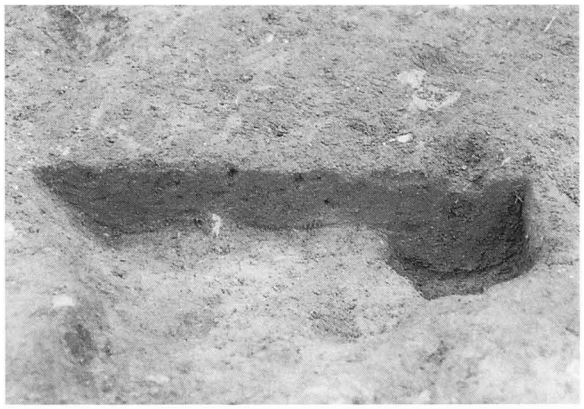
ＳＫ36Ａ・Ｂ　完掘（Ｓ→）

ＳＫ36Ｂ　完掘（Ｓ→）

ＳＫ36Ａ　断面（Ｓ→）

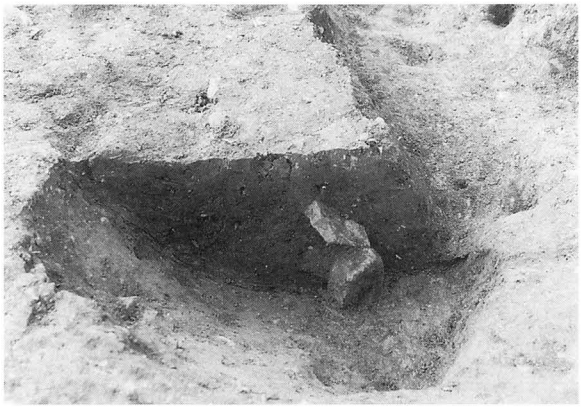
写真図版30　土坑(5)

ＳＫ46　完掘（N→）

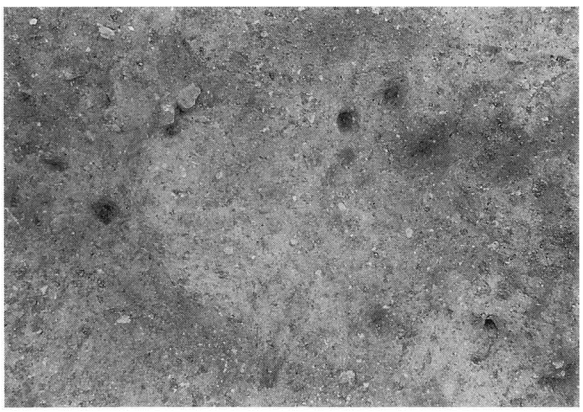


ＳＫ46　断面（W→）

ＳＫ53　完掘（ＳＥ→）

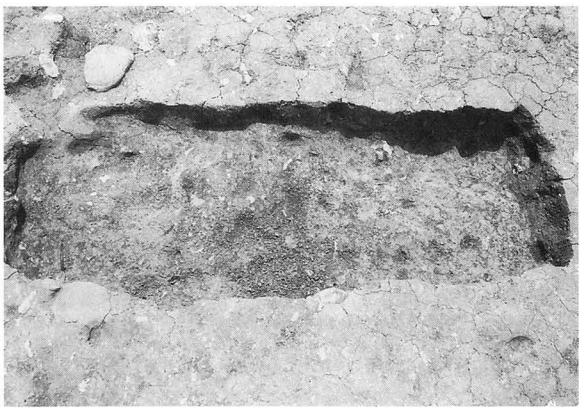


ＳＫ53　断面（S→）

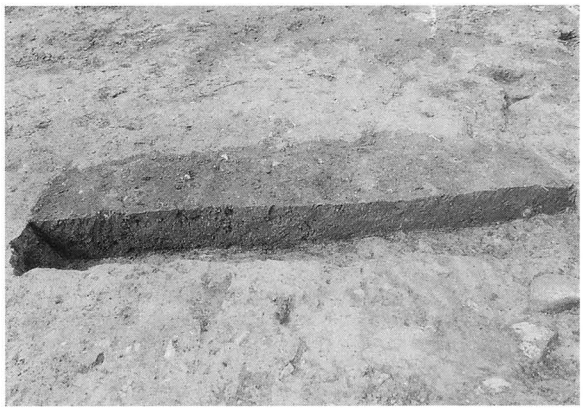


ＳＫ54　完掘（ＳW→）

ＳＫ56　完掘（S→）



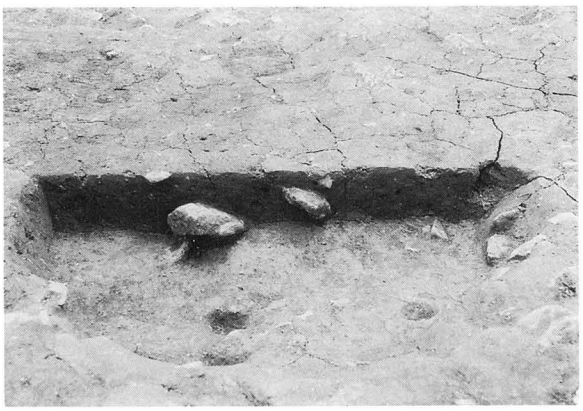
ＳＫ61　完掘（S→）



ＳＫ61　断面（S→）

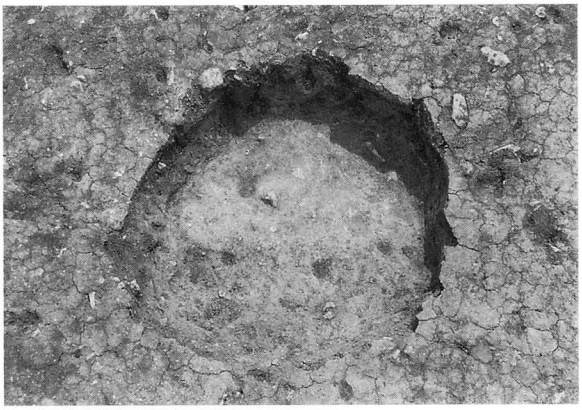
写真図版31　土坑(6)

ＳＫ63　完掘（S→）



ＳＫ63　断面（W→）

ＳＫ69　完掘（N→）



ＳＫ70　完掘（N→）

ＳＫ72　完掘（S→）

ＳＫ80　完掘（N→）

ＳＫ81　完掘（N→）

ＳＫ82　完掘（N→）

写真図版32　土坑(7)

ＳＫ83　完掘（Ｅ→）

ＳＫ84　完掘（Ｓ→）

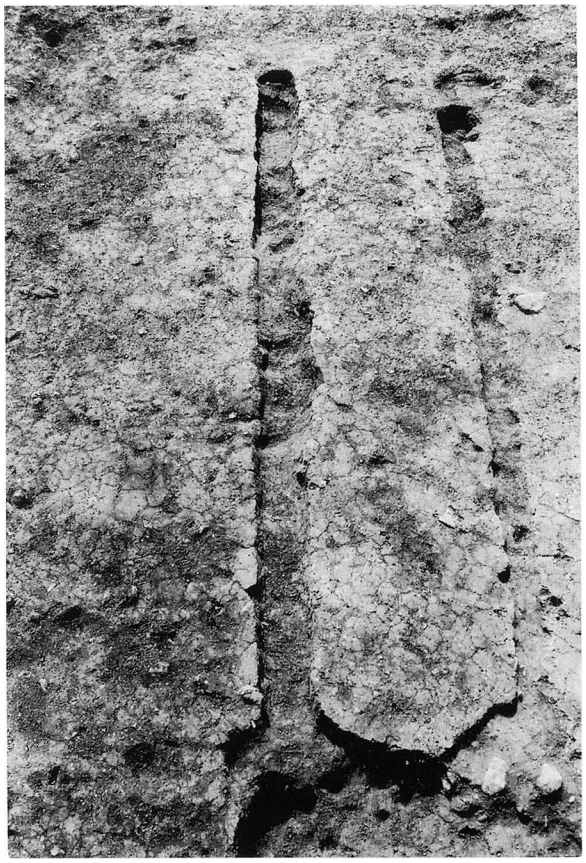
ＳＫ85　完掘（ＳＥ→）

ＳＫ86　完掘（Ｓ→）

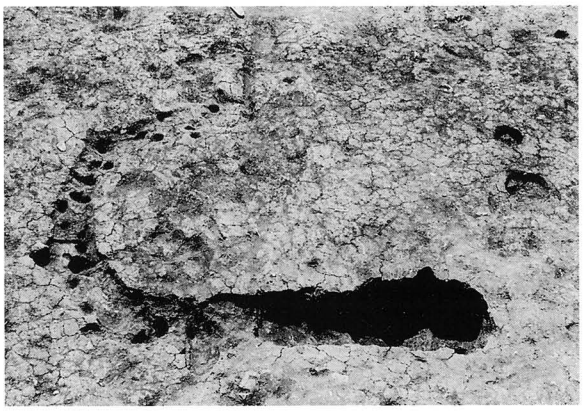
ＳＤ07　完掘（Ｅ→）

ＳＤ08　完掘（Ｅ→）

写真図版33　土坑(8)・溝跡(1)



ＳＤ13　完掘（E→）

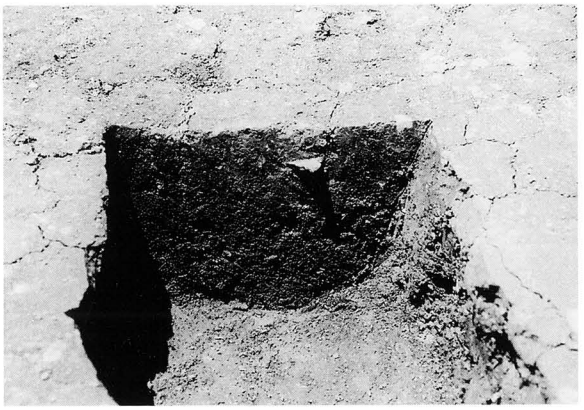


ＳＤ15　完掘（W→）

ＳＤ13　断面（E→）

ＳＤ18(左)・19(右)　完掘（E→）

ＳＤ18(左)・19(右)　断面（E→）



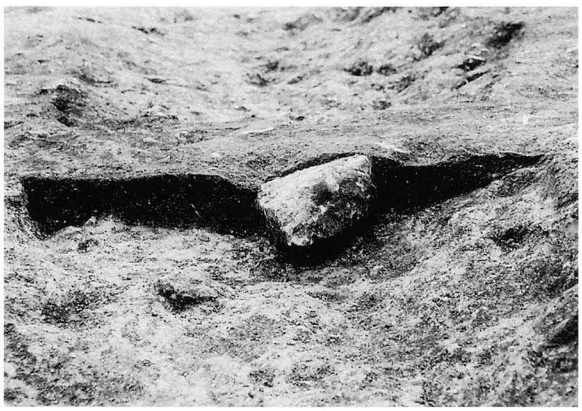
ＳＤ19　断面（E→）

写真図版34　溝跡(2)

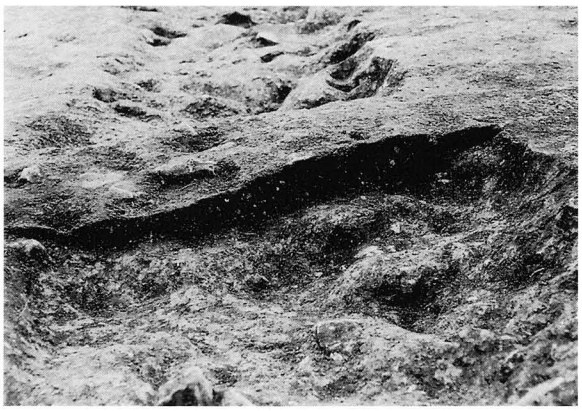
ＳＤ23　完掘（Ｅ→）

ＳＤ36　完掘（Ｓ→）

ＳＤ42　完掘（Ｅ→）



ＳＤ42　Ｊ－Ｊ′断面（Ｅ→）

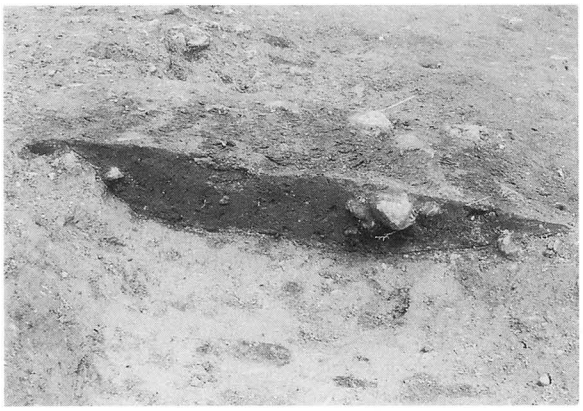


ＳＤ42　Ｋ－Ｋ′断面（Ｅ→）

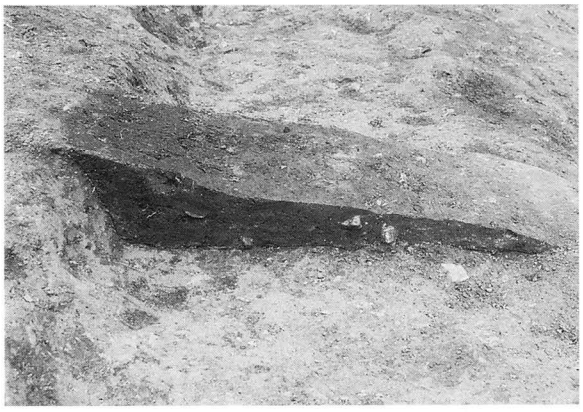
写真図版35　溝跡(3)

ＳＤ43　完掘（W→）

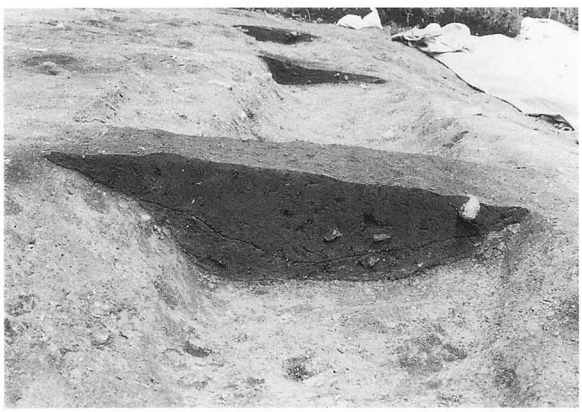
ＳＤ44　完掘（W→）



ＳＤ44　Ｎ－Ｎ′断面（W→）



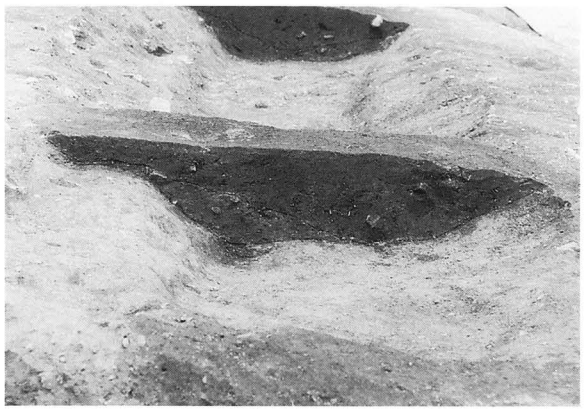
ＳＤ44　Ｏ－Ｏ′断面



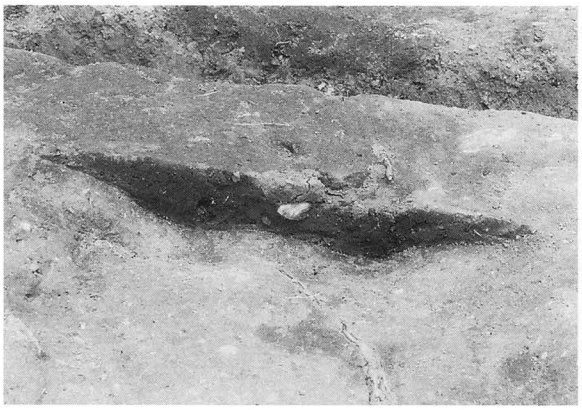
ＳＤ44　Ｐ－Ｐ′断面（W→）

ＳＤ44　断面（W→）

写真図版36　溝跡(4)



ＳＤ44　Ｑ－Ｑ′断面（Ｗ→）



ＳＤ44　Ｒ－Ｒ′断面（Ｗ→）

ＳＤ45　断面（Ｗ→）

ＳＡ02　完掘（ＳＷ→）

ＳＤ45　完掘

ＳＤ49　完掘（Ｓ→）

写真図版37　溝跡(5)・柱穴列

ＳＤ50(左)・48南(右) 完掘（S→）

ＳＤ48 北　完掘（E→）

ＳＤ48 南　断面①（S→）

ＳＤ48 北　断面①（W→）

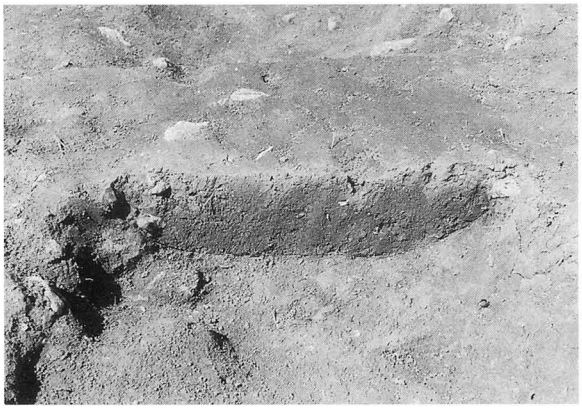
ＳＤ48 北　断面②（SW→）

写真図版38　溝跡(6)

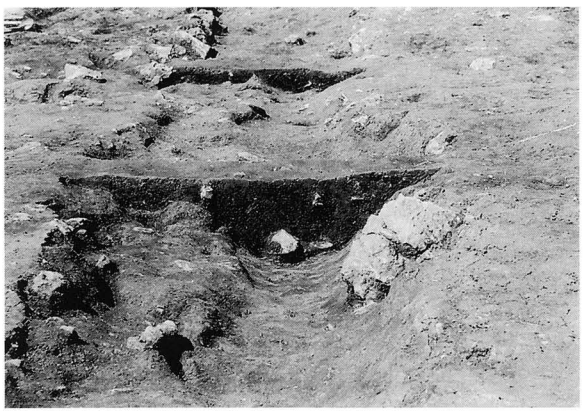
ＳＤ48　Ａ－Ａ′断面（W→）

ＳＤ48　Ｋ－Ｋ′断面（Ｓ→）

ＳＤ48　Ｌ－Ｌ′断面（Ｓ→）



ＳＤ48　Ｎ－Ｎ′断面（Ｓ→）



ＳＤ48　Ｍ－Ｍ′断面（Ｓ→）

ＳＤ48 南　断面②（Ｓ→）

ＳＤ50　Ｐ－Ｐ′断面（Ｓ→）

ＳＤ50　Ｔ－Ｔ′断面（Ｓ→）

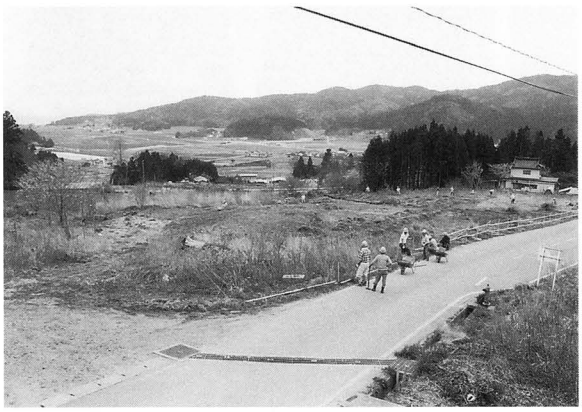
写真図版39　溝跡(7)

現地説明会①

現地説明会②

現地説明会③

A区西端　検出状況



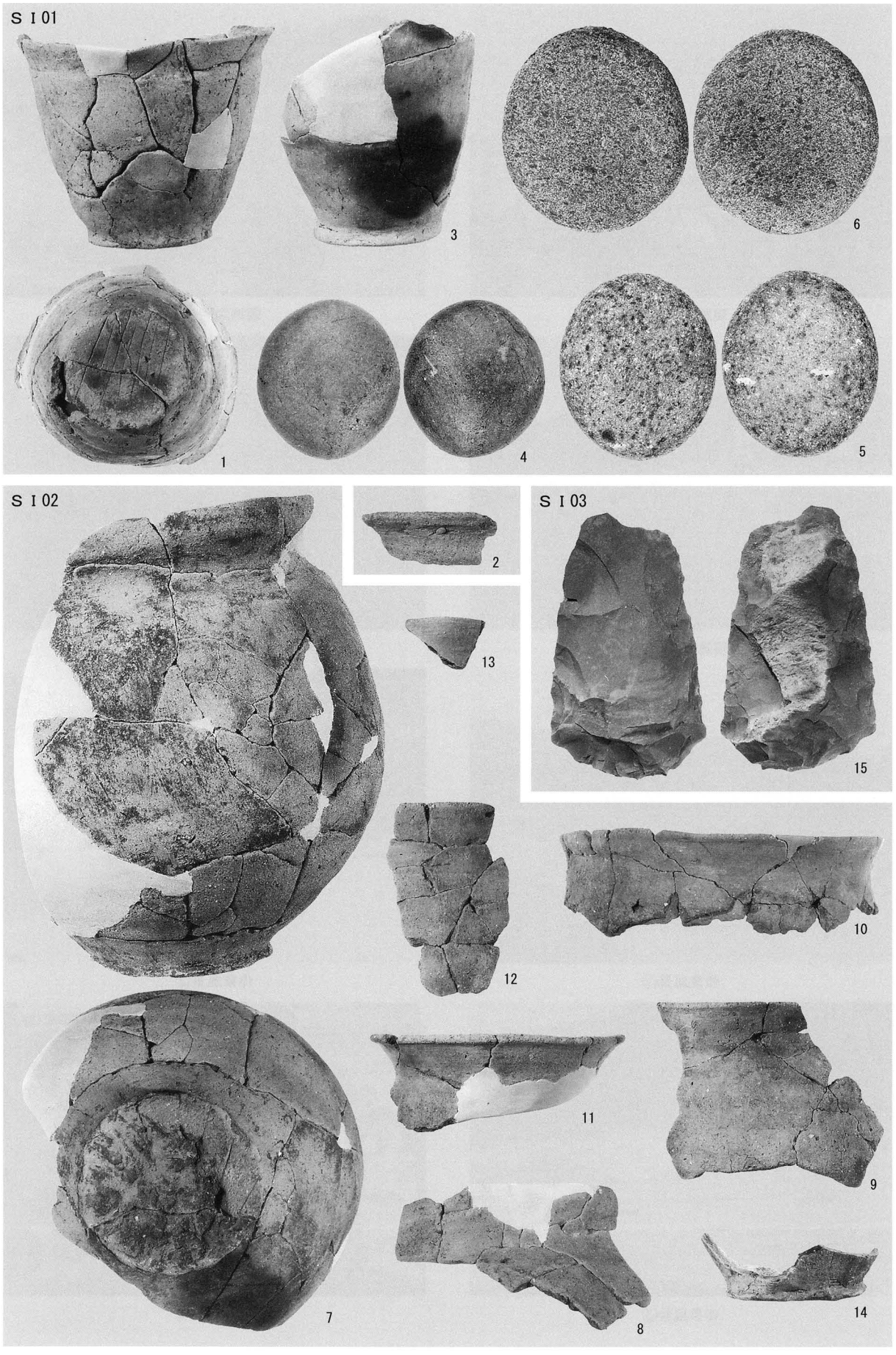
作業風景①

作業風景②

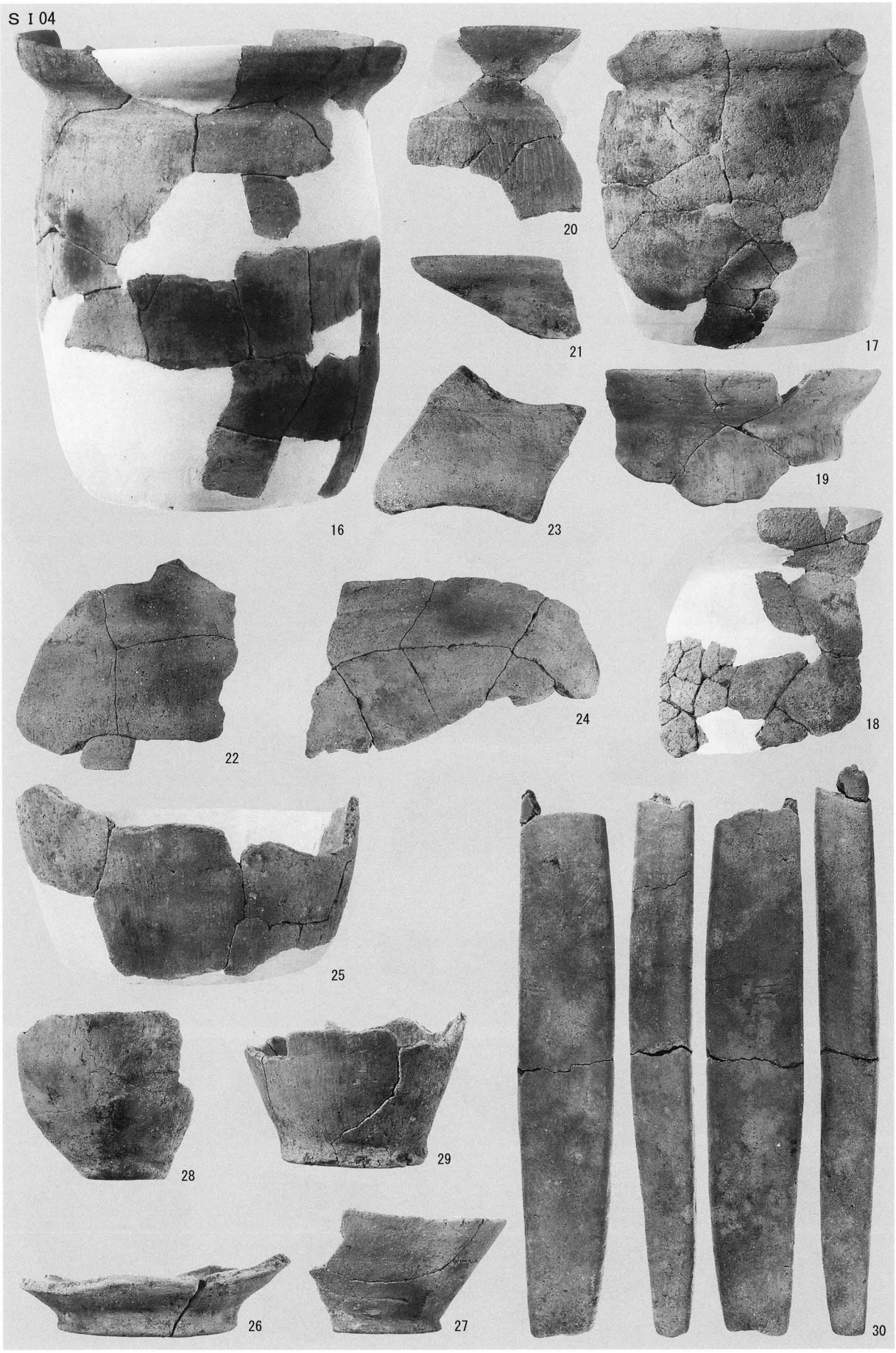
作業風景③

調査参加者

写真図版40　現地説明会・作業風景

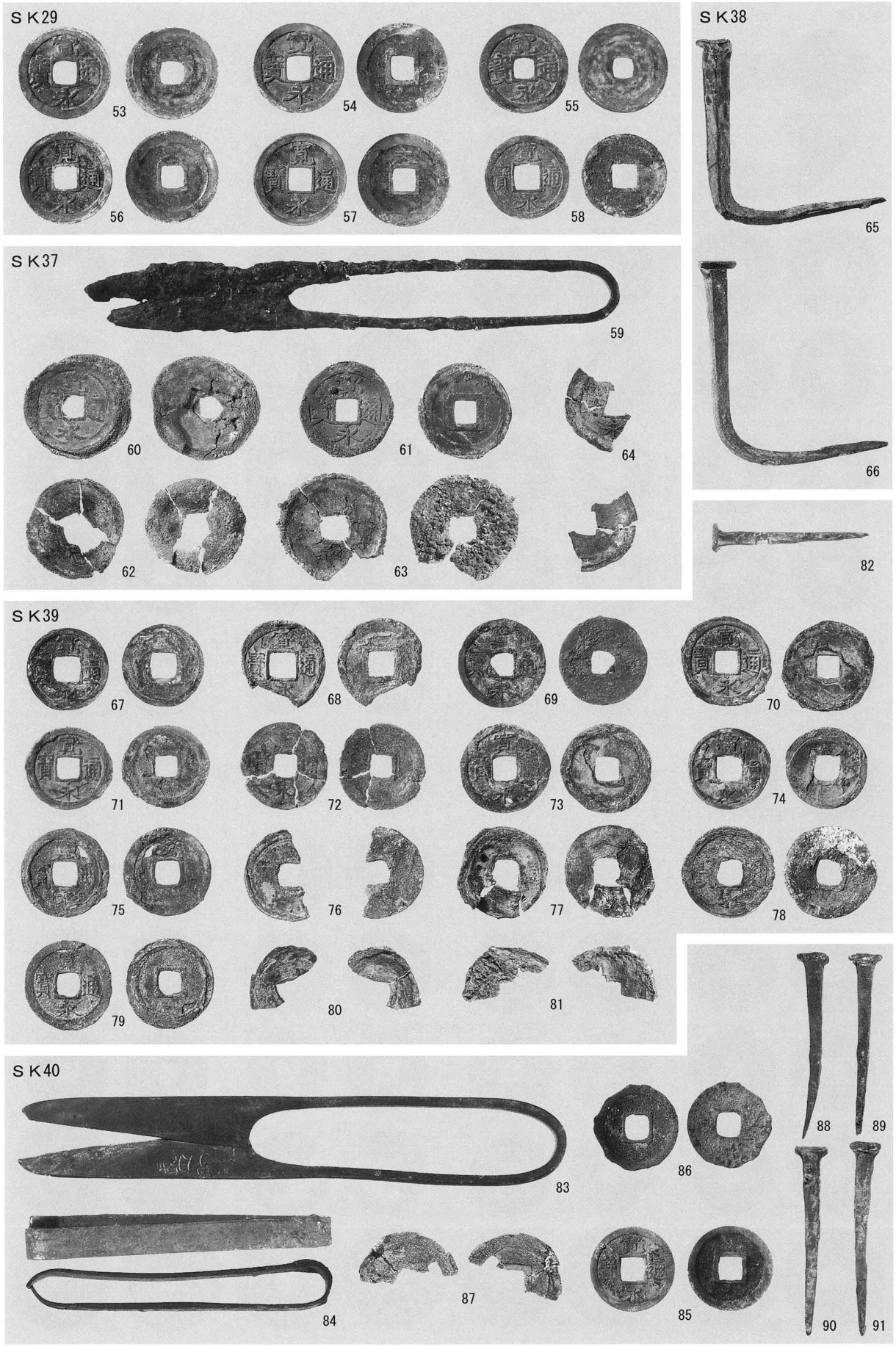


写真図版41　S I 01～03竪穴住居跡出土遺物

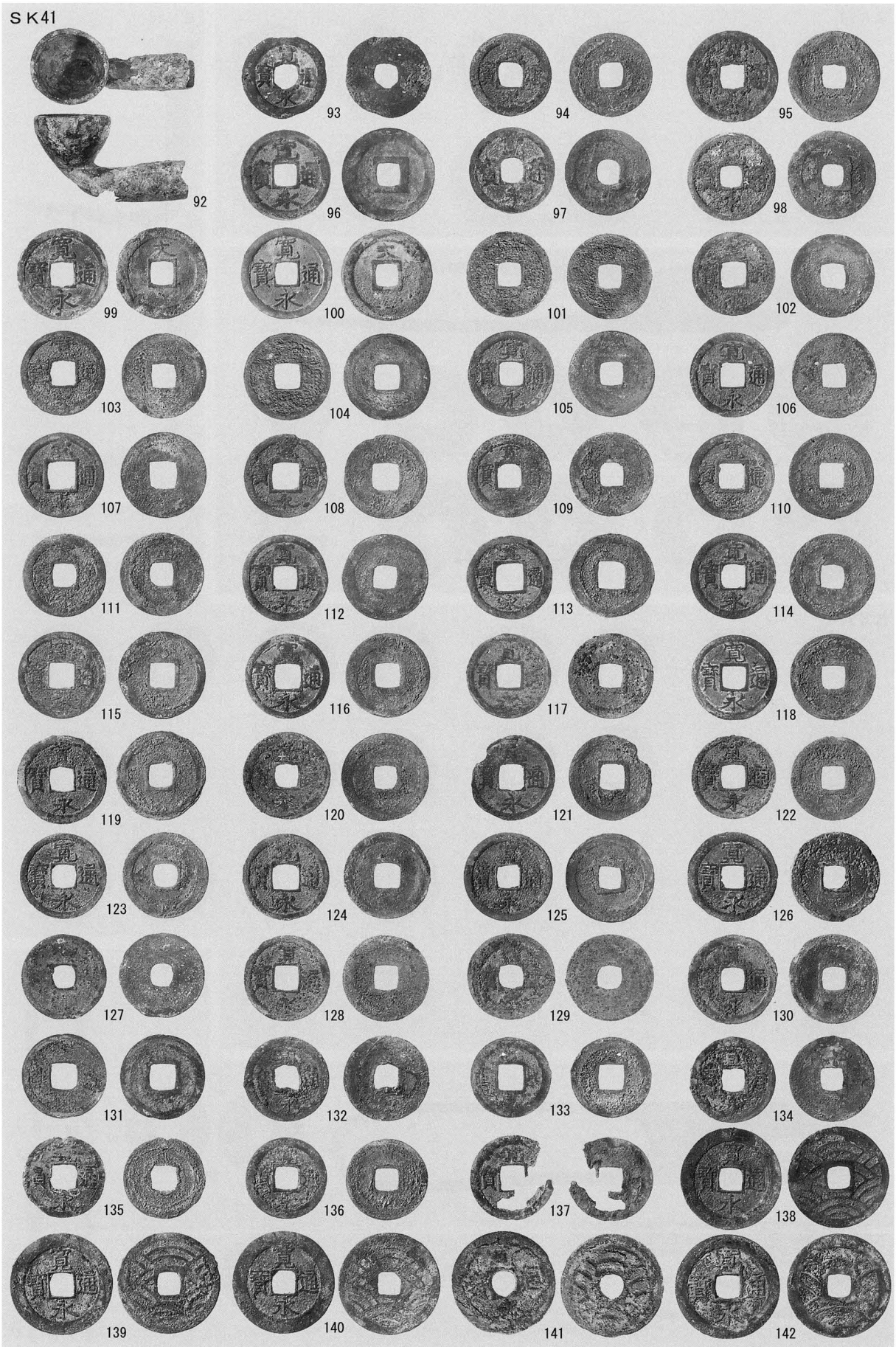


写真図版42　ＳＩ04竪穴住居跡出土遺物

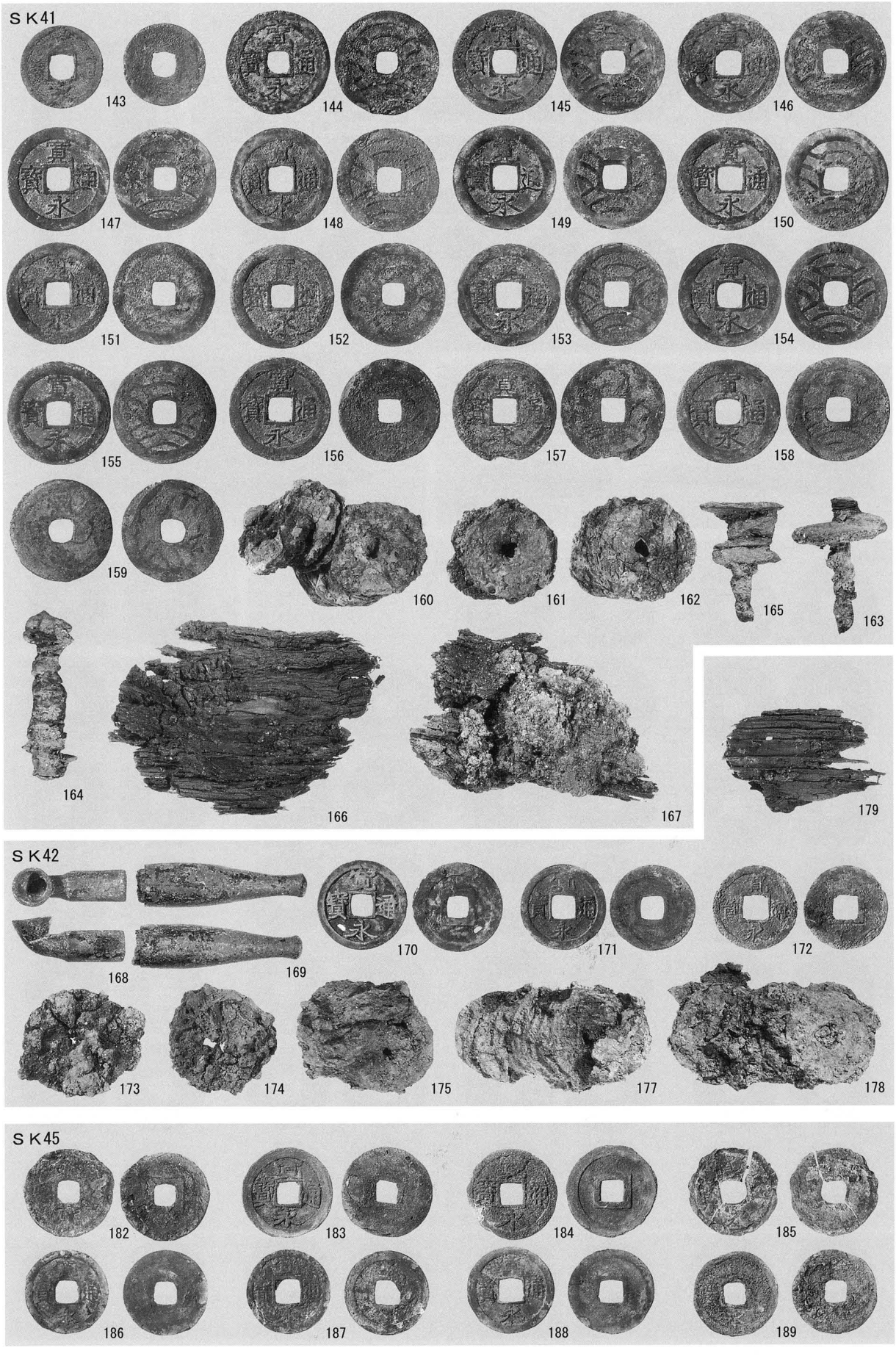
写真図版43　ＳＩ06Ａ・Ｂ・07竪穴住居跡・ＳＮ01炉跡出土遺物



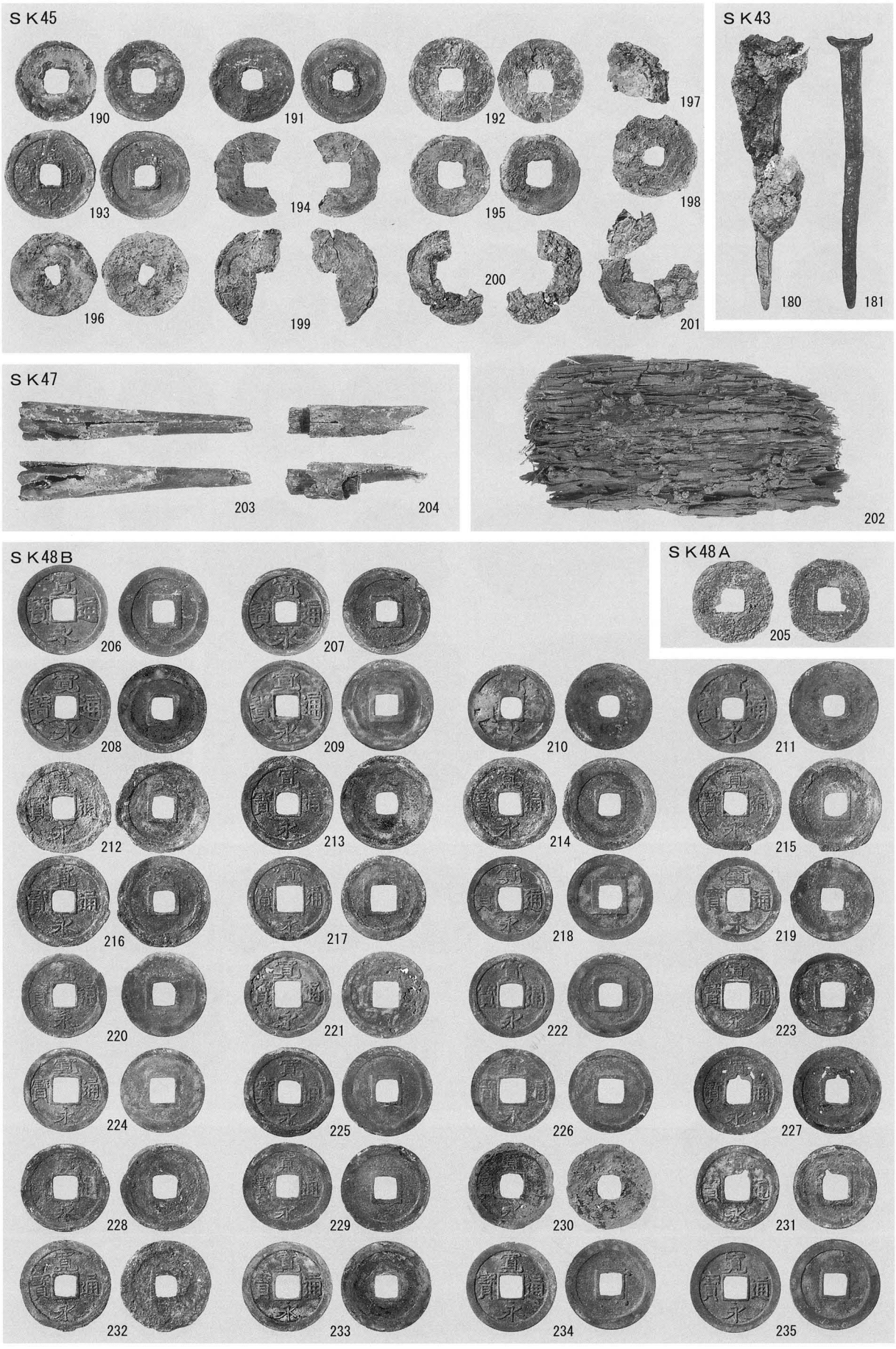
写真図版44　ＳＫ29・37～40墓壙出土遺物



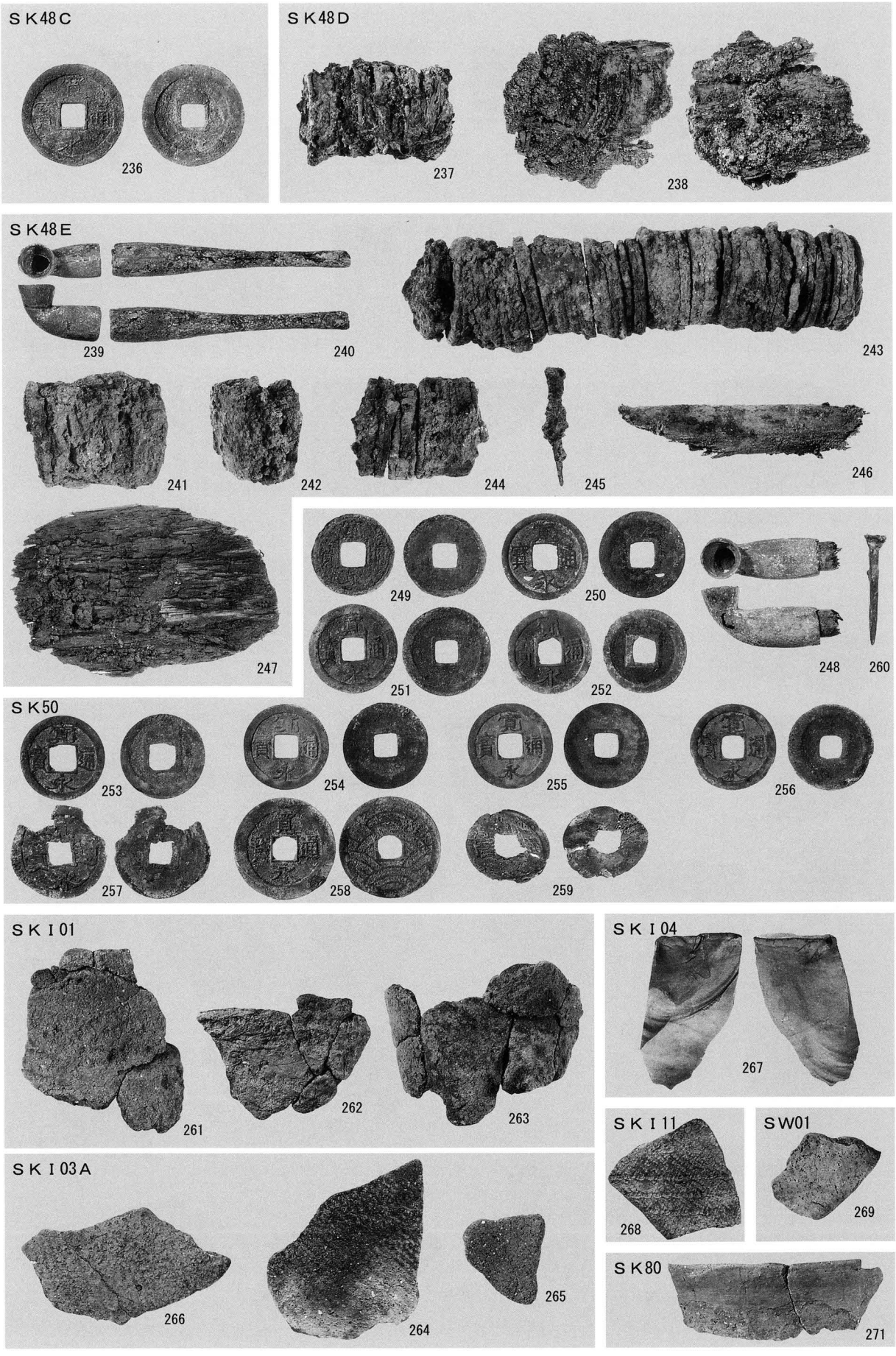
写真図版45　ＳＫ41墓壙(1)出土遺物



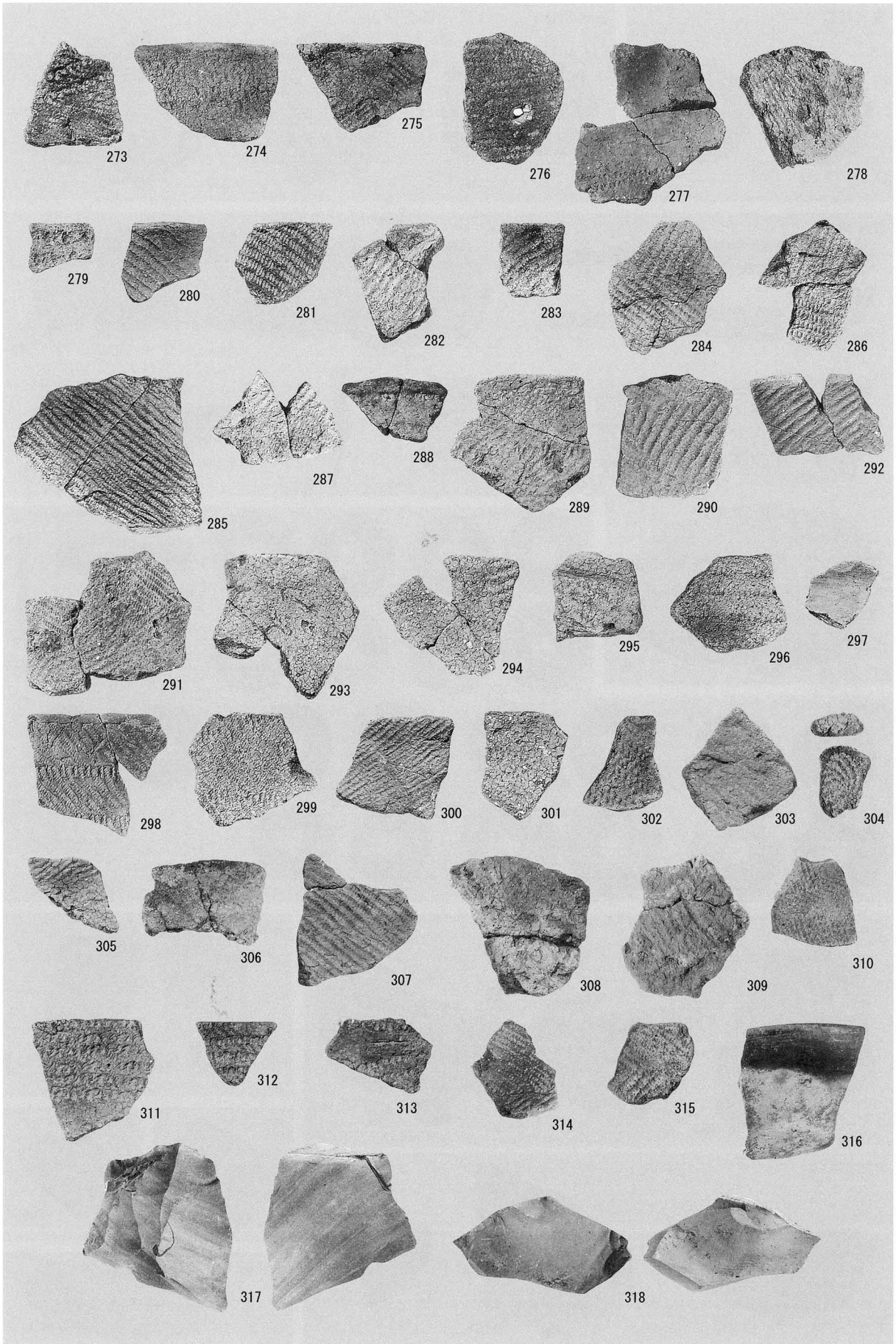
写真図版46　SK41(1)・42・45(1)墓壙出土遺物



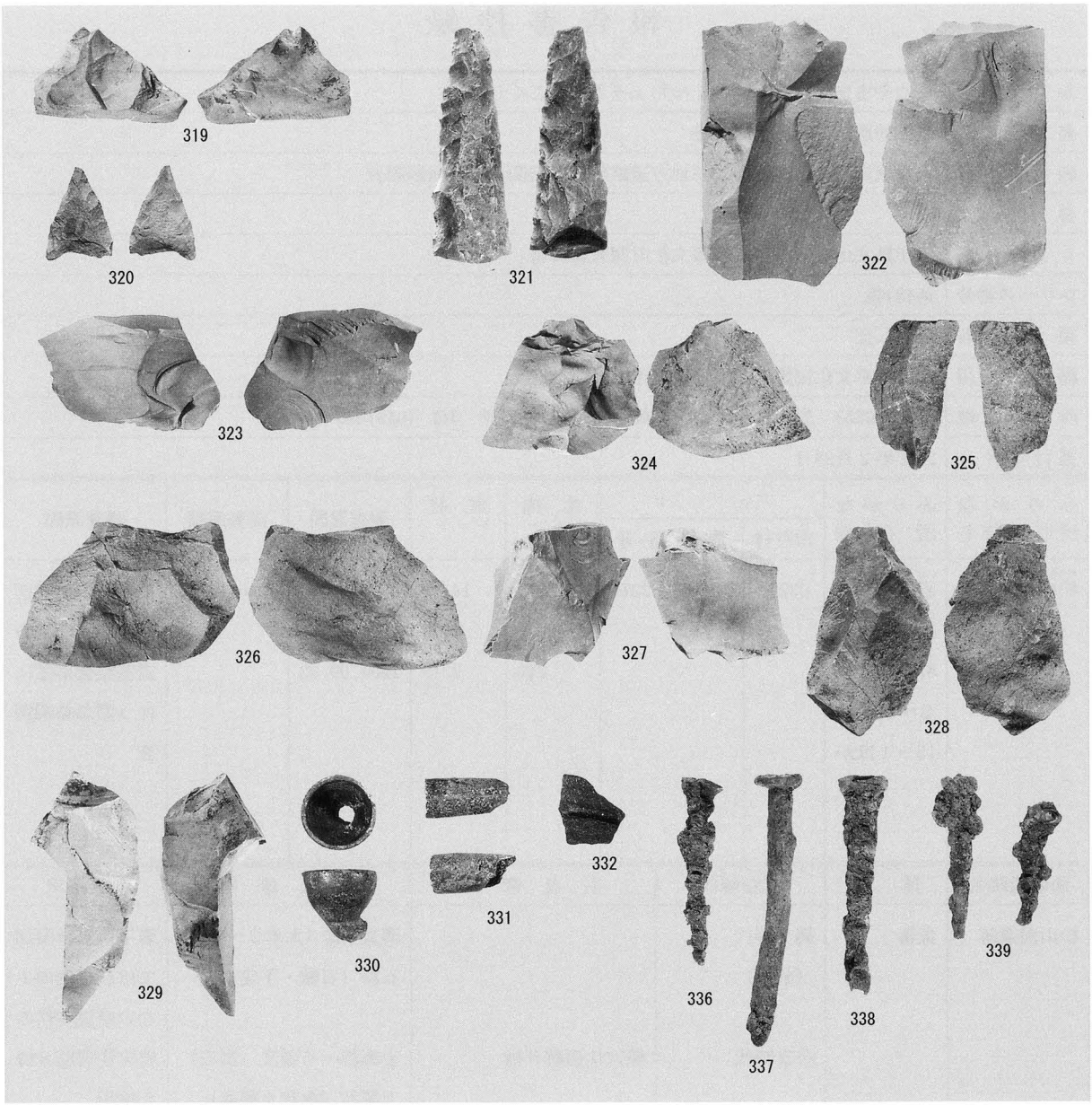
写真図版47　SK43・45(2)・47・48A・48B墓壙出土遺物



写真図版48　SK48C・48D・48E・50墓壙、竪穴状遺構、土坑出土遺物



写真図版49　遺構外出土遺物(1)



写真図版50　遺構外出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	まつやままえいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	松山前遺跡発掘調査報告書
副書名	大船渡広田陸前高田線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第484集
編著者名	島原弘征
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地　TEL (019)638-9001
発行年月日	2006年２月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
松山前遺跡 (まつやままえいせき)	岩手県陸前高田市小友町茗荷128－２～西ノ坊12－１ほか (いわてけんりくぜんたかだしおともまちみょうがにしのぼう)	03210	ＮＦ68－2270	39度 00分 2秒	141度 41分 23秒	2004.04.13 ～ 2004.09.03	6,640㎡	大船渡広田陸前高田線緊急地方道路整備事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松山前遺跡	集落	縄文時代 （前期）		縄文土器（大木２～３式） 石器（石鏃・不定形）	岩手県沿岸南部では調査例の少ない奈良時代の竪穴住居跡８棟を検出 板状土製品の出土（ＳＩ04カマド芯材に使用）
		奈良時代	竪穴住居跡８棟	土師器・石製品（磨石） 土製品（板状土製品）	
		近世	墓壙18基	金属製品 （鋏・毛抜・煙筒・釘） 銭貨（寛永通寶） 棺桶	
		不明	竪穴状遺構５棟 柱穴列３列 炭窯２基 土坑39基 溝跡15状 柱穴状土坑206個	陶磁器 ガラス	

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第484集

松山前遺跡発掘調査報告書

大船渡広田陸前高田線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

印刷　平成18年２月20日
発行　平成18年２月28日

発　行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185
電話（019）638-9001
FAX（019）638-8563

印　刷　(有)小松茂印刷所
〒020-0025　岩手県盛岡市大沢川原二丁目5-37
電話（019）623-6073

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2006